

郭松齡の叛乱と張学良の軍事思想

—「東北易幟」への道—

2016年3月

北九州市立大学社会システム研究科

博士（学術）学位請求論文

張 亮

要旨

まず、本論文の研究目的を明らかにする。従来の張学良に関する先行研究には、次のような欠陥がある。すなわち、張学良が青年期に学び、身に着けた軍事思想が、その後の張学良の人生に、どのような影響を与えたかについて、あまり、研究されていなかった、ということである。すなわち初期の青年張学良が学び、自己のもとで確立された軍事思想は、その後に東北の覇者となって対応した中東路事件、中原大戦、満州事変、西安事変に、どのような影響を与えたのか、ということである。ここにあるのは、張学良の青年期に形成された軍事思想は、彼が実行した歴史的偉業とされる「東北易幟」（1928年）と「西安事変」（1936年）の原因となるのか否か、という問題意識である。

青年期における張学良の軍事思想形成に大きな影響を与えたのは、張作霖、郭松齡、楊宇霆の三人である。

張学良の父親である張作霖は、地方に割拠する小さな馬賊から抬頭し、中国北方において最も実力を誇る大軍閥に上り詰めた伝説の人物であった。そして、北京を支配する北洋政府の最後の支配者になったことから分かるように、張作霖には有能な政治力と軍事的才能を有していた。この張作霖からは、その考え方、行動様式及び軍閥としての存在感を学ぶことができた。

だが同時に、張学良は軍事学校の恩師であった郭松齡の影響を受けて、張作霖死後に東北の覇権を受け継ぐと、伝統的軍閥としての張作霖政治を反面教師的に捉え、新たな民族英雄として讃えられる道を歩むこととなった。

張学良に多大な思想的影響を与えた郭松齡は、奉天軍閥が設置した軍事学校（奉天講武堂）で張学良と出会った。その時は、郭松齡が教師であり、張学良は学生であった。張学良は軍事学校で郭松齡と出会って以後、郭松齡から多くの軍事知識を得ることができた。張学良が郭松齡から学んだ核心は、次の点である。すなわち、多くの兵力を抱えたとしても、もしその兵士の素質がよくなければ、戦闘にあたって勝利を収められないことを、教え込まれた。兵士の数より質が肝腎であるという郭松齡の教えを学習することによって、張学良の軍事思想の中心に、郭松齡譲りの「精兵主義」が形成された。

郭松齡は奉天軍閥の高級士官であったが、清末には革命派の同盟会員であり、四川で辛亥革命の洗礼を受け、広東では孫文の護法政府に合流していた。列強の中国侵略に対する危機感が、彼を軍人の道へ歩ませ、「救国」意識が彼の軍事思想の中核であった。「精兵主義」は「救国」のための軍事的強兵政策でもあった。

張学良は同時に、日本の士官学校で学んだ楊宇霆からも、日本で教えられた近代的な軍事思想を勉強することができた。楊宇霆は奉天軍の重要幹部であるが、同時に郭松齡のライバルでもあった。

第一章は、郭松齡の軍事思想とその形成である。軍事学校の教官として培われた郭松齡の軍事思想について、詳しく研究した。そして、その軍事思想の形成過程も明らかにした。

郭松齡が若い時代から軍事学校での修学を始め、小さな軍事小学堂から、陸軍大学まで、さまざまな機関で自らを磨いた。郭松齡は辛亥革命（四川と奉天）を経験した。こうした波乱の人生が、その後の張作霖への叛乱事件に大きな影響を与えた。

第二章は、奉天軍での郭松齡の活動である。郭松齡は奉天講武堂で張学良と出会ってから、自分が得た軍事思想を張学良に教え込んだ。郭松齡の軍事思想が張学良の軍事思想の形成に多大な影響を与えた。同時に張学良と郭松齡の軍事思想との違いと共通点を明らかにした。

第三章は、張作霖の軍事戦略の検討である。張作霖が北洋政府の最高の統治者になるまでの経緯を示した。すなわち張作霖の奉天軍閥の形成過程を明らかにせんとしたのである。張作霖の奉天軍閥が万里長城の山海関を越えて、たびたび入関して天下を争った目的を検討した。それは、張作霖の軍事思想を明らかにすることになるからである。

第四章は、郭松齡の叛乱である。郭松齡事件の原因を明らかにするため、郭松齡と張作霖との違いを検証した。日本軍の軍事干渉が行われたが、それが叛乱事件の敗因になるか否かについても論じた。そして衝撃的な郭松齡事件が張学良の生涯及びその後の日中関係に影響を与えたことを考察した。

第五章は、張作霖爆殺事件と国民党政府に合流した東北易幟である。父親が関東軍に殺害された張作霖爆殺事件が張学良の東北易幟を促進した。張学良が東北易幟を断行した原因、そして東北易幟が当時の中国に影響を与えた意義を明らかにした。

終章は、張学良の東北改革である。張学良は東北の政権を握った以後、満州事変で東北から追われるまでの短い期間であったが、東北三省を改革した。そこで郭松齡の東北改革の考え方が張学良の東北改革に影響を与えたことを見出した。郭松齡の影響は軍事思想だけではなく、東北近代化を支える改革全般に及んでいた。張学良の東北改革志向は当時の東北にとどまらず、全中国にまで大きな影響を与えた。

introduction

Firstly, the purpose of this dissertation needs to be specified. Most of the research done into General Zhang Xueliang up until now has been flawed in that it tends not to have considered the impact that the military studies he undertook during his youth then went on to have on his later life. In other words how this early education shaped Zhang's thinking and consequently had a direct impact on the Middle East Railway Incident, the Central Plains war, the September 18th Incident and the Xi'an Incident which all occurred during his period in charge of North East China. This research focuses on discussing whether Zhang's military thinking was the main factor leading to the Northeast Flag Replacement and The Xi'an Incident.

There are three key figures who had a significant influence on Zhang Xueliang's military education during his early life, namely Zhang Zuolin, Guo Songling and Yang Yuting.

Zhang Zuolin, who was Zhang Xueliang's father, was a legendary figure. He has risen from being a small-time local thief, to being a warlord who dominated Northern China and was also the last leader of The Beiyang Government. Such achievements illustrate his great political and military ability. Zhang Zuolin's values and military prowess had a deep influence in shaping Zhang Xueliang as a future military leader.

Guo Songling was a senior officer in the Manchurian Warlord Organization and a League member. He experienced the Revolution of 1911 and took part in Sun Zhongshan's Reorganization of Military Government. Upon the invasion of China by the "big powers", Guo Songling realised that his nation was facing ruin, both as a state and as a race. This was the key motivation to Guo dedicating his life to the army; to save the nation. He believed that the nation could be saved through the creation of an elite military force, following the so called "Elite Doctrine".

Zhang Xueliang met Guo Songlin in Mukden Military Academy which was established by the Manchurian Warlord Organization. Zhang studied under Guo, who was a professor in the Academy and who instructed Zhang in military knowledge. Zhang Xueliang deeply understood that the Elite Doctrine was the most important element to achieve victory. The idea that the quality of one's troops was more important than the quantity. The Elite Doctrine is also the central idea of Zhang Xueliang's military approach.

Yang Yuting was graduated from Japanese Army Sergeant Helped School. He was a major senior officer in Manchurian Warlord Organization and was a competitor to Guo Songling. Zhang Xueliang learned advanced Modern military though from him.

Whilst at the Academy, Zhang Xueliang also studied under Yang Yuting, a graduate from the Imperial Japanese Army Academy, who was also a major senior officer in Manchurian Warlord Organization and a competitor to Guo Songling.

The first chapter introduces Guo Songling's military philosophy and how it was formed. To shed light onto how Guo Songling arrived at his military philosophy, detailed research has been undertaken into this process. Guo Songling studied military knowledge from a young age, step by step from Army primary school right through to his education in the Chinese Military Academy. He had experienced the Revolution of 1911 and served in different organizations. His bitter experiences had a great impact and led him to create the Anti Manchurian Warlord organization event.

The second chapter describes Guo Songling's activities in the Manchurian Warlord organization. Guo Songling had instructed Zhang Xueliang in Military studies since their meeting in Mukden Military Academy. As a result, Zhang Xueliang's military philosophy was significantly influenced by his teacher, Guo Songling. Moreover, this chapter presents the similarities and differences between Zhang Xueliang's military philosophy and that of Guo Songling.

The third chapter discusses Guo Songling's military philosophy. It presents how Zhang Zuolin became the supreme ruler of The Beiyang Government and in turn charts how Zhang Zuolin became the leading Manchurian Warlord. To introduce Zhang Zuolin's military philosophy, this chapter also focuses on the reasons why Zhang Zuolin crossed the Great Wall and attempted to capture the world.

The fourth chapter discusses how Guo Songling rose up in rebellion. Through analysing the similarities and differences in the military philosophies between Zhang Xueliang and Guo Songling, the reason for the Guo Songling rebellion is made clear. Moreover, a question is raised as to whether Japanese military intervention was the reason for the failure of the Guo Songling rebellion. The impact of the Guo Songling rebellion on Zhang Xueliang's life as well as on Sino-Japanese relations is also looked at.

The fifth chapter is about Zhang Zuolin's assassination by Japan's Kwantung Army and the consequent Northeast Flag Replacement. Moreover, it addresses the significance of the Northeast Flag Replacement and its impact on China.

The final chapter centres on Zhang Xueliang's revolution in Northeast China. Even though Zhang Xueliang held the leadership of the Northeast for a short time, he made efforts to reform the party in China's three Northeastern Provinces, up until the September 18th Incident. It shows that both Guo Songling's military philosophy and his ideas for reform of the three Northeastern Provinces had a significant impact on Zhang Xueliang's revolution in Northeast China. Zhang Xueliang's revolution was not limited to the Northeast, his ambition was directed towards the whole nation.

【目次】

序論.....	1
第一節 研究目的と意義.....	1
研究目的.....	1
研究意義.....	2
第二節 先行研究の検討.....	3
第一章 郭松齡の軍事思想とその形成.....	8
第一節 軍人への道.....	8
第二節 軍事思想の形成過程.....	13
第二章 奉天軍での郭松齡の活動.....	20
第一節 張学良の教育.....	20
第二節 郭松齡の軍事思想.....	27
第三章 張作霖の軍事戦略.....	40
第一節 緑林出身の張作霖奉天軍閥の形成.....	40
第二節 東北の軍事的改革.....	53
第三節 北洋政府制覇への道.....	62
第四章 郭松齡の叛乱.....	67
第一節 叛乱の原因——張作霖との違い.....	67
第二節 軍事面から見る郭松齡叛乱事件.....	72
第三節 郭松齡叛乱事件の敗因.....	85
第四節 郭松齡叛乱事件と張学良.....	91
第五節 郭松齡の叛乱事件と日本干渉.....	95
第五章 張作霖爆殺事件と東北易幟.....	99
第一節 張作霖の死.....	99
第二節 東北易幟.....	105

終章.....	117
第一節 東北の再建.....	117
第二節 東北軍の軍事近代化教育.....	120
第三節 東北教育の発展.....	124
第四節 東北の金融と財政の整理.....	127
第五節 民族企業の振興.....	128
まとめとしての包括的結論.....	132
参考文献.....	136

序論

第一節 研究目的と意義

研究目的

先ず、本論文の研究目的を明らかにする。従来の張学良に関する先行研究には、次のような欠陥がある。すなわち、張学良が青年期に学び、身に着けた軍事思想が、その後の張学良の人生に、どのような影響を与えたかについて、これまであまり、研究されていなかった、ということである。すなわち初期の青年張学良が学び、自己のもとで確立された軍事思想は、その後に東北の覇者となって対応した中東路事件、中原大戦、満州事変、西安事変に、どのような影響を与えたのか、ということである。ここにあるのは、張学良の青年期に形成された軍事思想は、彼が実行した歴史的偉業とされる「東北易幟」（1928年）と「西安事変」（1936年）の原因となるのか否か、という問題意識である。

青年期における張学良の軍事思想形成に大きな影響を与えたのは、張作霖、郭松齡、楊宇霆の三人である。

張学良の父親である張作霖は、地方に割拠する小さな馬賊から抬頭し、中国北方において最も実力を誇る大軍閥に上り詰めた伝説の人物であった。そして、北京を支配する北洋政府の最後の支配者になったことから分かるように、張作霖には有能な政治力と軍事的才能を有していた。この張作霖からは、その考え方、行動様式及び軍閥としての存在感を学ぶことができた。

だが同時に、張学良は軍事学校の恩師であった郭松齡の影響を受けて、張作霖死後に東北の覇権を受け継ぐと、伝統的軍閥としての張作霖政治を反面教師的に捉え、新たな民族英雄として讃えられる道を歩むこととなった。

張学良に多大な思想的影響を与えた郭松齡は、奉天軍閥が設置した軍事学校（奉天講武堂）で張学良と出会った。その時は、郭松齡が教師であり、張学良は学生であった。張学良は軍事学校で郭松齡と出会って以後、郭松齡から多くの軍事知識を得ることができた。張学良が郭松齡から学んだ核心は、次の点である。すなわち、多くの兵力を抱えたとしても、もしその兵士の素質がよくなければ、戦闘にあたって勝利を収められないことを、教え込まれた。兵士の数より質が肝腎であるという郭松齡の教えを学習することによって、張学良の軍事思想の中心に、郭松齡譲りの「精兵主義」が形成された。

郭松齡は奉天軍閥の高級士官であったが、清末には革命派の同盟会員であり、四川で辛亥革命の洗礼を受け、広東では孫文の護法政府に合流していた。列強の中国侵略に対する危機感が、彼を軍人の道へ歩ませ、「救国」意識が彼の軍事思想の中核であった。「精兵主義」は「救国」のための軍事的強兵政策でもあった。

張学良は同時に、日本の士官学校で学んだ楊宇霆からも、日本で教えられた近代的な軍事思想を勉強することができた。楊宇霆は奉天軍の重要幹部であるが、同時に郭松齡のライバルでもあった。

青年期における張学良の学習過程からして、この三人が、張学良の軍事思想に大きな影響を与えたという結論を得ることができる。そこでまず、この三人の軍事思想を明らかにし、張学良の軍事思想の形成に、どの程度の影響を与えたのか。この点について、論文の中で明らかにしたい。

この三人は、張学良に大きな思想的影響を与えたものの、それぞれ異質な出自であった。同じ軍人といえども、その軍事思想は同質ではなかった。日本で教育を受けた楊宇霆。それとは違って中国の軍事学校で学んだ郭松齡。郭松齡は、最後には張作霖に歯向かった郭松齡叛乱を企てるという劇的なドラマを演じた。

そして、先ず奉天の内部に形成された三つの派の間の矛盾、対立関係を明らかにする作業から、論文作成に入りたい。なぜなら、この三つの派の矛盾が、郭松齡の反奉叛乱の原因になると思われるからである。

以上の課題を掲げて、当時の東北が抱えていた軍事、経済、政治について、総合的に研究を進める。

研究意義

張学良の軍事思想は、中国近現代史に重大な影響を及ぼした。なぜなら、中国近代史は、革命史であると同時に、絶え間なく戦争が繰り返された軍事闘争史でもあるからだ。いかにして、日本に対抗できる強力な軍事体制を確立するか、これが中国近代史の重要なテーマであったからだ。

このテーマの研究を通して、張学良の生涯と思想もより深く研究できるようになる。そして、彼の軍事思想は、いかにして外敵（主として、東北地方に圧倒的な影響力を持ってきた日本）に勝つかという可能性を模索することであるが、同時に古い中国的軍事思想を克服し、近代的な軍事思想の確立を目指していた。いわば民族の自立である。その観点から、張学良が直接に関わった郭松齡叛乱、東北易幟、中東路戦争、中原大戦、満州事変、西安事変を考察する必要がある。

ただ、本論文では、張学良の総合的研究の一環として、恩師が父親の張作霖打倒に決起した「郭松齡叛乱」、日本の関東軍による「張作霖爆殺」と、国民党の全国統一に直面した張学良が国民党に合流する「東北易幟」までにとどめる。ソ連軍と戦った中東路戦争から、蒋介石を支援した中原大戦、郷里を奪われた満州事変、中国の運命を変えたといわれる西安事変までは、今後の研究課題とする。

また、日本の軍事力をバックとした軍閥張作霖であったが、その息子張学良は父に叛逆した郭松齡の影響もあって、張作霖路線の超克を目指した。脱軍閥志向である。張学良は父親の支配版図と権力構造、軍事力をそのまま受け継いだ軍閥二世であって、完全には軍閥態勢から脱皮できたわけではないが、少なくとも、従来からの軍閥からの脱皮を志向していたことは間違いない。それは郭松齡の薫陶のお蔭であるが、蒋介石の「安内攘外」政策に叛旗を翻し、「兵諫」という強硬政策で、「内戦中止、一致抗日」へ向けて舵を切った西安事変で、自らの思想を貫くことができ、東北の軍閥は、一気に「民族の英雄」になれたのである。

だから、どのような軍事思想と政治思想によって、張作霖とは異なった道を選択したのか、この点を明らかにすることによって、近代日中関係史研究にも新しい視野を開くことができるのではないかと考えられる。

第二節 先行研究の検討

張学良に関する研究は、中華人民共和国が成立する以前においても、既に存在していた。もともと張学良は蒋介石に兵諫した西安事変を起こして、民族英雄として讃えられたが、上官である蒋介石に叛いた罪で幽閉された危険人物であったから、蒋介石政権のもとでは、張学良に関する研究は禁止されていた。それでも、西安事変の翌年に王卓然が『張学良到底是個怎樣的人』（北京東方書店、1937年）を完成した。これは、張学良に関する最初の研究であろう。民国時期において、最も張学良に関する著名な著作であった。中華人民共和国成立以後になって、中国共産党の歴史観のもとでも、張学良は第二次国共合作を樹立させた民族英雄として評価された。しかし、張学良は台湾に監禁されていたために、中国における張学良に関する研究はあまり進んでいなかった。

「改革開放」政策が始まると、事態は大きく変化した。本格的な張学良研究が積み重ねられ、百家争鳴の様相を見せるようになった。

武育文、潘喜庭「張学良与東北易幟」（『社会科学暨刊』、1979年、第一期）。

これは、初めての張学良に関する本格的な研究論文であった。これを口火に、1980年代から、張学良に関する研究は次第に進んだ。

武育文 王維遠 楊玉芝『張学良將軍伝略』遼寧大学出版社、1988年。

これは、張学良の生涯に関する本格的な伝記研究であるが、初めて中国内陸研究者によって書かれたものである。この文献は書かれた時期が早かったために、原史料があまり利用されていなかった。殆ど、関係者の記憶、回想に基づいて書かれた。この文献は主に中東路事件について、詳しく紹介し点がユニークである。

張徳良、周毅『東北軍史』遼寧大学出版社、1987年。

これは、主に軍事史に関する研究であったが、初めて明らかにされた東北軍全史であった。

傅虹霖（アメリカ）、（王海晨 胥波訳）『張学良的政治生涯——一位民族英雄的悲劇』遼寧大学出版社、1988年。

これはアメリカで出版された英語版を中国語に翻訳したもので、初めて、海外での張学良研究が中国で紹介、出版された文献であった。この文献は主に西安事変以後の張学良についてページを割いている。

この他、張学良の研究について、多くの参考文献があるが、それらは注に列挙した¹。

1980年代以後、多くの文献が出版されたが、その多くは関係者の記憶に基

¹鄭重、程世栄『西安事変』陝西人民出版社、1979年；楊中州『西安事変』上海人民出版社、1979年；易顯石『“九一八”事変史』遼寧大学出版社、1981年；李雲漢『西安事変始末之研究』台北近代中国出版社、1985年；司馬春秋『張学良伝記：少帥張学良的悲壯歲月』台北群論出版社、1987年；陳崇橋、胡玉海『張学良外伝』江西人民出版社、1988年；劉恩名『張学良將軍』中国文聯出版社、1988年；李敖『張学良研究』台北李敖出版社、1988年；王益知『張学良外記』香港南粵出版社、1989年；司馬桑敦『張学良伝評』台北伝記文学出版社、1989年；張魁堂『張学良伝』東北出版社、1991年；孫景悦『張学良与遼寧研究』香港同澤出版社、1993年；楊奎松『西安事変新探——張学良与中共關係之研究』、1995年；王貴忠『張学良与東北鉄道建設——二十世紀初葉東北鐵路実録』香港同澤出版社、1996年；方慶英『对張学良評論——還他一个公道』香港同澤出版社、1996年。

づいて書かれた文献と関係者の口述記録に基づいて書かれたものである²。その中でも、一番有名な参考文献は、自らアメリカに行って張学良に直接インタビューしたのが唐徳剛の著書である³。

また日本では、張学良へのインタビュー番組であるNHKスペシャル「張学良がいま語る一日中戦争への道——」が1990年12月9日に放映され、大きな衝撃を与えた。その内容が翌年に活字となって出版された⁴。

張学良研究は多岐にわたり、主に張学良が主役となった東北易幟、中東路事件、中原大戦、満州事変及び西安事変をめぐって研究されている。

さて、東北易幟をどのように見なすべきか。従来、東北易幟に関する研究では、相対立する二つの見方があった。一つは、東北易幟によって、張学良は親日派から親英米派に変わって蒋介石と提携したものの、それ以後も張学良は依然として軍閥であり続けたという観点である。東北易幟以後、張学良は蒋介石と反共の観点から同盟関係を持ち、共産党党員を虐殺した。1990年代以後においても、中国の研究にはまだこのような見解が存在し続けている。実は東北易幟以後、張学良の合流で国民党の実力が増大し、山岳地に割拠する共産党にとってそれは脅威であった⁵。この説に賛成する研究論文は少なくない⁶。

もう一つの説は、東北易幟を通じて張学良が愛国者になったとするものである。(『国聞周報』第十三卷、十三期、1937年。)からも明らかのように、張学良の東北易幟は国家統一を維せんとする愛国主義を持っていると見なす研究論文も多い⁷。

²申伯純『西安事変記実』人民出版社、1979年；応徳田 岳龍 王秦『張学良与西安事変』中華書局、1980年；全国政協文史資料研究会『中国現代革命史料叢刊—西安事変資料』（第1輯、第2輯）、1980年、1981年；何柱国『張学良の往事和近事』岳麗出版社、1986年。『張学良囚生涯』河北人民出版社、1986年；『西安事変与第二次国共合作』陝西旅游出版社、1986年；吳福章『西安事変親歴記』中国文史出版社、1986年；『遼寧文史資料』第18輯、遼寧人民出版社、1986年；『瀋陽文史資料』第11輯、政協瀋陽市委員会文史資料研究委員会、1986年；「在同張学良相处的日子里」、『遼寧文史資料』第17輯、遼寧人民出版社、1986年；中国第二歴史档案馆『西安事変档案史料選編』档案出版社、1986年；『西安事変資料選編』第3輯、の中国文史資料出版社、1987年；孟凡『民族功臣張学良』遼寧人民出版社、1988年；漠笛『張学良生涯論集』光明日報出版社、1991年；「九一八記実」、『遼寧文史資料』第31輯、遼寧人民出版社、1991年；「九一八前学校憶顧」、『遼寧文史資料』第33輯、遼寧人民出版社、1991年；遠方『張学良在一九三六一西安事変内幕記実』光明日報出版社、1991年；大風『張学良的東北歲月—少帥伝奇生涯記実』光明日報出版社、1991年；畢万聞『張学良文集』（上、下）新華出版社、1992年；張友坤、錢進『張学良年譜』（上、下）社会科学文献出版社、1996年；董慧云、張秀春『張学良与東北建設資料選』香港同澤出版社、1998年。

³唐徳剛著録『張学良世紀伝奇：口述実録』（上、下）、山東友誼出版社、2002年。

⁴NHK取材班、臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店、1991年。文庫版、1995年。

⁵1928年12月29日『東北易幟通電』、1929年1月10日『関与軍政党務問題的談話』など原資料があった畢万聞『張学良文集』（上）新華出版社、1992年、35頁と42頁。

⁶常城「略論張学良將軍」、『東北師大学報』、第6期、1986年；広玉、倪廉潔「張学良“東北易幟”辯析」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年、104頁。

錢進「張学良与東北易幟新釈」、『民国档案』、第4期、2000年。

⁷「東北“易幟”探析」、『江海学刊』、第1期、1986年；韓信夫「二次北伐与東北易幟」（下）、『東北地方歴史研究』、第2期、1990年；張魁堂『張学良伝』東北出版社、1991年、31—

問題は、張学良の愛国思想、愛国主義をどのように理解するかであった。これについても、様々な見解があった。一つは張学良の東北易幟は、彼の抗日思想に基づいて決断されたとするものである⁸。張学良は日本側の圧力を恐れず、東北易幟を通して、中国を統一させた。これを愛国主義の観点からとらえたものである。

もう一つは張学良の復讐的視点である。父親張作霖を殺害された日本への仇討、復讐から国民党と合流を決めただけでなく、日本の侵略者と戦うためには、内戦に反対して、国民を苦しい生活から救い出す必要があり、そのためには何よりも国家統一で国力を強化することが重要であると認識し、すでに東北易幟の前から、張学良は国家統一することを考えていたとする説がある⁹。

東北易幟と張学良の国家統一との関連についての論文も少なくない¹⁰。また、張学良は日本からの脅威と勧誘を拒否したとする見解もある¹¹。そこではおおむね張学良の東北易幟は高く評価された。しかし、傅虹霖によれば、東北易幟は条件付き愛国主義だと主張している。実は易幟以後も東北の主権は依然として「独裁者張学良」の手に握られていたからだ。この説に賛成する文献は多い¹²。

郭松齡叛乱事件に関する研究については、主に郭松齡が叛乱した反奉の原因と、郭松齡の反奉失敗の原因をめぐって研究されてきた。

① 徐徹、徐悦『張作霖』 中国文史出版社、2011年。

ここでは、郭松齡の反奉の原因について、以下のように述べている。一、地方割拠の軍閥を打倒して、全国を統一するため。二、奉天軍閥における内部の闘争の影響があったこと。三、張作霖と郭松齡との戦略思想が異なっていたため。四、張作霖の賞罰に対する不満がたまっていたこと。また郭松齡の敗因については、以下のように述べている。一、思想認識がはっきりしていないため。二、政治、軍事、外交において、闘争経験が足らなかったため。三、郭、馮、李の三角連盟が分裂したため。四、日本の武力干渉にあったため。

② 徐徹、徐忱『張学良』 中国文史出版社、2011年。

ここでは、郭松齡の反奉の原因について、三つに纏めている。一、張作霖の

32 頁；陸錦華「論東北易幟」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年、753頁。

周毅「東北易幟—中国平和統一的創舉」、『東北易幟暨東北新建設國際學術検討會論集』、15頁；畢万聞「張学良、蔣介石和東北易幟」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年、143頁。

⁸王維遠「簡論張学良抗日思想的形成」、『東北地方史研究』、第4期、1991年。

⁹李仲明、劉麗「試論張学良東北易幟的思想基礎」、相從智『中外學者論張学良楊虎城与閻錫山』人民出版社、1995年、45頁。

¹⁰劉鳴九「我所知道的常楊事件」、『遼寧文史資料』第15輯、遼寧人民出版社、1986年。

¹¹1928年12月29日「東北易幟通電」、畢万聞『張学良文集』(上)新華出版社、1992年35頁。

¹²荊有岩『張学良執政時期東北、華北財政狀況』遼寧省文史研究館与遼寧省遼寧省人民政府參事室(文史資料)、1982年；傅虹霖(米)、(王海晨、胥波)訳『張学良的政治生涯—一位民族英雄的悲劇』遼寧大学出版社、1988年；張梅玲「張学良从東北易幟到西安事變的思想轉變」『遼寧大學學報』、第5期、1988年。；郭正秋「東北地域国民党組織的建立与蔣張關係」『史學月刊』、第3期、2000年。

賞罰に不満を持っていたため。二、張作霖が日本帝国主義と手を結びことに反対したため。三、人事異動に不満を抱いていたこと。

③ 陳崇橋 胡玉海『張作霖』遼寧人民出版社、1991年。

郭松齡の反奉の原因について、徐徹、徐悦研究とほぼ同じ意見をあげている。郭松齡の敗因については、日本の武装干渉によって、敗北したことを強調している。

④ 任松、武育文『郭松齡將軍』遼寧人民出版社 1985年。

郭松齡の敗因について、郭松齡、李景林、馮玉祥三角連盟が潰れたことを重視している。李景林は張作霖に降伏した。なぜなら、李景林の妻と子供及び母親が、張作霖に逮捕されたからである。馮玉祥が郭松齡を支援しないため、郭松齡は単独で張作霖と戦うことになったが、結局、力が足らず、敗北した。

⑤ 劉建忠、崔毅軍「試析馮玉祥与郭松齡反奉的失敗」『河北建築科技学院学報』第22卷第一期、2005年。

郭松齡の反奉失敗の原因として、馮玉祥が李景林の支配領域を奪おうとして、お互いに戦うことになったために、郭、馮、李の反奉三角連盟が分裂することになったことを挙げる。これが郭松齡の反奉失敗の主要原因であると見なす。

⑥ 武育文「郭松齡的歴史評価」『近代中国人物』第3輯、重慶出版社、1986年。

ここでは、郭松齡は東北三省を改革しようという思想を抱き、その観点から張作霖の軍事拡張政策及び張作霖と日本帝国主義と手を結ぶことに反対し、張作霖打倒を目指すようになったと結論付けている。このような評価を下す研究者が多い。

日本における研究は、次のような状況である。

⑦ 渋谷由里『馬賊で見る「満州」—張作霖の歩んだ道』講談社、2004年。

郭松齡の反奉叛乱について、郭松齡は張作霖の軍備拡張策を批判して、東三省行財政の重視という方針を主張したと、その違いをあげている。当時の奉天省の省長王永江も張作霖側の不利を見て、郭松齡との連携を構想したと指摘している。

⑧ 江口圭一「郭松齡事件と日本帝国主義」(『日本帝国主義史論』所収、青木書店、1975年)

郭松齡の敗因については、郭松齡が勝利することを満蒙権益への脅威とみなした日本の干渉により敗北した、と見なす。

⑨ 関静雄「幣原外交と郭松齡事件」『帝塚山大学教養学部紀要』1997年巻54。

この郭松齡叛乱事件は、日本の張作霖支持派である田中義一首相などにとっては、張作霖への懐柔・操縦の条件と見なされ、逆に張作霖打倒派にとっては、張作霖を「忘恩の徒」として批判するさいの論拠とされた。また、張作霖政権内部においても、「保境安民」論を提唱し、軍事費の削減を主張していた実力者王永江の辞任をもたらし、張政権全体に弱化の兆が見え始めた、と論じている。

これら先行研究を踏まえながらも、本論文においては、郭松齡叛乱敗北の原因について、主に軍事の面を中心検討した。これまで議論されてきた主な原因は、なんといっても張作霖、張学良父子が団結し、最後まで郭松齡軍と戦ったことである。もう一つ、重要な原因は、張学良を叛乱陣営に組み込めなかった

ため、自分の歩兵が最前線に於いて張親子の奉天軍に投降することが危惧されたことである。この原因論は主に日本軍の視点であるから、郭松齡の叛乱を革命的決起とは見なさず、軍閥同士の権勢争いと見なしていたことからくる原因論になるのであろう。

盟主張学良の離脱で、郭松齡の叛乱は「大義なき叛乱」の汚名を被されることとなった。もう一つ、重要な原因は、張学良を叛乱陣営に組み込めなかったため、自分の歩兵が最前線に於いて敵に投降することが危惧されたことである。郭松齡の部隊といえども、もともとは張学良の部隊であった。だから叛乱当初、郭松齡は張学良の名義を利用した。ところが、張学良は連山戦役から早くも郭松齡打倒の立場を鮮明にした。この結果、郭松齡は「錦の御旗」として、張学良の名義を利用できなくなった。郭松齡は大義を掲げて叛乱し、その大義は張学良も共有しているはずであったが、張学良と連合できなかつた。そうすると、大義の争いではなく、単なる権力争いに陥ることとなってしまふ。そうなれば、張学良にも刃を向けることとなり、自分の部隊が依然として、自分の命令に従うであろうという自信もなくなった。即ち、張学良の応援を貰えなかつたことが致命傷であった。

作戦上の問題としては、戦闘力が強くて、局部戦場で優勢を獲得していた第四軍の兵力を利用して、奉天軍に強襲を断行すれば、勝敗を逆転させる可能性があった、と見なされている。このため郭松齡の優柔不断と陣頭指揮のミスが敗戦に繋がったと指摘されている。

また、奉天軍の参謀の連繋及び部隊の後方態勢の整備も、奉天軍の勝利を収めた原因であるとされている。軍需生産と補給の面でも、奉天軍は優れていた。騎兵隊の扱いも一つの焦点であり、郭松齡は騎兵隊編成を軽視したという指摘がある。

以上が、日本軍の視点から見た敗戦原因である。これらを踏まえて総合的に張郭戦を見れば、張軍（奉天軍）の戦術と兵力の活用は叛乱軍の郭軍より、やや優れていた。両方の目標とも省都・奉天の支配であった。しかし、郭松齡叛乱軍の決起は、関内の灤州であつて、関外の奉天まで遠く、そこに至る戦闘で、叛乱の大義を堅持し続けなければならなかつた。郭松齡叛乱は大義を掲げた決起であつたが、それに応える兵士の戦意が奉天までの戦闘で堅持し続けることができるまで堅固ではなかつた。しかも肝腎な張学良が叛乱の後ろ盾とならず、加えて厳冬で、叛乱兵士の戦意低下は明らかであつた。残してきた後方部隊の安全も心配しなければならなかつた。

最後であるが、本論文の関心事である張学良の「軍事思想」に関する先行研究については、とても少ない。東北軍に関する総合的研究として代表的なものが張徳良、周毅『東北軍史』¹³である。ただし、ここでは主に張作霖時代の奉天軍の形成と構造及び張学良時代の東北軍の発展を紹介されているだけであつて、張学良が形成してきた軍事思想については詳しくはふれられていない。これからも分かるように、軍事思想の観点から進められている先行研究は少ないといわざるを得ない。日本における張作霖、張学良研究の第一人者は西村成雄である。『張学良一日中の覇権と満州』¹⁴が良く知られているが、それは張学

¹³張徳良、周毅『東北軍史』遼寧大学出版社、1987年。

¹⁴西村成雄『張学良一日中の覇権と満州』岩波書店、1996年。

良の評伝という形で書かれており、張学良の軍事思想と軍事才能については詳しく分析されてはいない。

第一章 郭松齡の軍事思想とその形成

第一節 軍人への道

郭松齡の少青年期についてはあまり知られておらず、史料的な限界がある。郭松齡の本格的伝記である任松、武育文の『郭松齡將軍』¹⁵に多くを依存する。

郭松齡の幼年、少年時代は、とても貧しかったといわれている。

「郭松齡は、1883年、奉天（瀋陽）の東郊にある漁樵寨村で生まれた。字は茂宸。幼いころの生活は貧しかった。9歳から塾で勉強し始めたが、11歳の時に塾が解散したために、自宅で勉強した。家庭が貧乏だったために、13歳から19歳まで、学校に行くことができず、農業に従事していた」¹⁶。

『郭松齡將軍』は、次のようにその出自を明らかにしている。

「郭松齡の祖籍は山西省汾陽県であった。郭一門は、唐朝中興の名將軍であった汾陽王郭子儀の末裔である。明の時代になって、東北に移って辺疆の防衛に当たった。清の初め、動乱と戦禍によって財を失った。……祖父の時代になって漁樵寨にやってきた。……郭松齡の祖父は比較的学のある農民であった。幼い時から書を読み、粗削りながら物事が分かって、よく働いた。能力はあったが奉天郊外の貧困農民の悲惨な運命から脱することができなかった。賦税と借金で土地を売らざるを得なくなり農村の貧乏暮らしに陥った。……

郭松齡の父親は……少年時代から孔子と孟子の本を読んでいたが、家庭が貧しく、官途を諦めて、塾で教師をやっていた」¹⁷。

郭松齡の父親の勤勉な仕事、真面目な勉強のこと及び母親の勤勉で節約の暮らし方が郭松齡に大きな影響をあたえた。

父親の薫陶を受け、郭松齡は9歳から、父親の塾で勉強を開始した。郭松齡の啓蒙的教育方針は、父親から学んだものである。郭松齡は塾で3年間、《論語》、《孟子》、《大学》、《中庸》などの儒家四書を勉強した。それ以外、古文、詩歌と歴史伝記を学んだ。そして、父親から岳飛、文天祥の英雄物語を教え込まれ、岳飛の《滿江紅》、文天祥の《正氣歌》を暗記した。この二人の愛国英雄の軌跡は少年時代の郭松齡に大きな影響をもたらした。さらに父親は唐朝を中興させた先祖郭子儀のことを郭松齡に語り伝えたという。父親から聞いた、多くの英雄と先祖の活躍は、郭松齡の生涯に大きな影響を与えたと見なされるであろう。

1903年春、郭松齡は奉天東南王寨の董漢儒が創立した“書院”で学んだ。書院はさらにレベルの高い塾であった。

「董漢儒先生は清末の挙人出身であった。盛京將軍衙門の小役人を務めたことがある。素直で、清廉であった。清政府の腐敗現象に不満を抱き、官僚をやめて郷里に戻った。……常に生徒に遠大な志を掲げて、『致用之学』を学習し、『真正之才』を鍛えるように勧めた。国家民族のために功績を挙げるべきで、

¹⁵任松、武育文『郭松齡將軍』遼寧人民出版社、1985年。

¹⁶武育文「郭松齡的歴史評価」、『近代中国人物』第3輯、重慶出版社、1986年、347頁。

¹⁷任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、1～3頁。

何にも考えずに暗記するばかりという勉強方法に反対した。……董漢儒先生の教育思想と学習方法は、郭松齡に大きな影響を与えた。後の郭松齡も先生の教え方を尊重し、それを真似た。……董漢儒は生徒に儒家の“四書”、“五経”以外、諸子百家典籍及び《史記》、《通鑑》諸史を教えた。……常に当時の内憂外患と新政府の腐敗悪政に対峙するため、昔の有名な文臣、愛国武将の英雄物語を生徒に話した。……昔に發揮された憂国、憂民の思いを講義することで、青年たちが奮起して『振興中華』の歴史的代人を果たすように励ました¹⁸。

郭松齡は董漢儒の下で2年間の教育を受けた。この2年間で、豊富な中国古典の文化知識を学んだだけでなく、伝統的な愛国教育も受けた。

特に漢朝の名将趙充国が匈奴の侵攻に抵抗して、疆境防衛に努めた故事を崇敬していた。趙充国は西漢の名将で、長年疆境に駐在し、朝廷の反対を顧みることなく、屯田して匈奴に抵抗した英雄である。愛国心、勇気と智慧が満ち溢れていたと評価されている。自己の見解を堅持し、屈しなかった。郭松齡の人生も、それに近く、趙充国を自己に投影していた。その後、軍事学校で教官になり、軍隊を率いる時には、常に趙充国のことを生徒や部下の兵卒に語っていたという。

「郭松齡は張作霖に叛乱を始めたときに開いた『灤州の誓い大会』でも、“趙充文の屯田を見習う”という意見を披露した。この意見は郭松齡の“東北を開発して、国防を強行する”という考え方のモデルであった¹⁹。

郭松齡の思想形成の中でも、董漢儒から受けた影響が巨大であったと思われる。

少年時代に経験した1900年の義和団事件と1904年の日露戦争が郭松齡の心に傷をつけた、といわれている²⁰。1900年、八カ国の連合軍は義和団運動を鎮圧するために、中国に出兵することになった。帝政ロシアは中国の東北に出兵した。清政府が不抵抗政策を取ったために、やがて、中国の東北全域が帝政ロシア軍に占拠された。占拠されただけにとどまらず、「帝政ロシアの軍隊は中国のハルビン、海城、牛莊などの多くの城を占領してから、虐殺事件を引き起こした²¹」のである。

郭松齡が住んでいた付近も帝政ロシアの軍隊に襲撃された。帝政ロシアの軍隊の暴行に直面してから、復讐の種が郭松齡の心の中に植えられた。

当時の東北地域には多くの民間武装部隊があった。一番有名な武装部隊は忠義軍であった。「忠義軍は劉永和という人物が率いた。義和団団員、農民、工員及び一部の清国正式の軍隊によって構成されていた。人数が一番多い時には二十万にもものぼった。忠義軍は“御俄寇、復国土”（帝政ロシアの軍隊と戦って、国土を回復する）という旗を掲げて、自ら造った武器を使って、奉天省と吉林省を駆け巡り、帝政ロシアの軍隊と戦っていた。帝政ロシアの軍隊は大きな損失を被った²²。

「郭松齡は忠義軍のことを聞くことで、元気を奮い立たせた。両親に隠して、

¹⁸任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、11～12頁。

¹⁹魯穆庭「郭松齡反奉的片断回憶」、『遼寧文史資料』第1輯、遼寧文史出版社、1988年、19頁。

²⁰任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、13頁。

²¹遼寧社会科学院歴史研究所『東北義和団档案史料』遼寧省档案館、1981年、345頁。

²²海竜県誌編集委員会『海竜県誌』、兵事篇、1937年。

忠義軍へ加入しようと思った」²³。郭松齡はこの時になって初めて、軍隊に入って、列強と戦うという考え方が芽生えてきた。

やがて、忠義軍は兵力の分散と指揮の不統一のために、帝政ロシアの軍隊に消滅させられた。このため、郭松齡は忠義軍に加入することができなかった。

その当時、東北の地域には他にも民間武装部隊があった。当時の報道によれば、次のような状況であった。

「満州の“馬賊”は両党に分かれていた。一つは遠東愛国義勇軍と言われた。もう一つは満州忠君愛国党と言われた。両党とも武器を持っていた。兵士は6000余人をかかえていた。何度も帝政ロシア軍と戦った。帝政ロシア軍の交通線を切断して、哨兵を殺して、鉄道を潰すなどのことをやった。

いわゆる、帝政ロシア兵を妨害するという目的で活動していたのである。帝政ロシアに買収され、地元の住民に迷惑を掛けていた“馬賊”とは違っていた。その故に、住民は両党と関係をつなぎたがっていた。両党は愛国義士と呼ばれていた」²⁴。

1904年、その帝政ロシア軍と日本軍が衝突した日露戦争が勃発した。日露戦争では、日本軍は旅順攻略・奉天会戦・日本海海戦で勝利を収めたが、軍事的・財政的に限界に達していた。ロシアでは革命運動の激化などで早期戦争終結を望み、両国はアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトの勧告を受け入れて、1905年9月に、アメリカのポーツマスで講和条約を締結した。

ポーツマス講和条約によって、日本は朝鮮における優越権、遼東半島租借権、東清鉄道南滿支線、南樺太、沿海州の漁業権を得ることとなった。1907年、日露協約によって、満州鉄道の以北はロシアの勢力範囲になった。満州鉄道の以南（長春—大連）は日本の勢力範囲となった。中国の東北地域は、日露両国によって分割された。

中国の東北地域が日露戦争の戦場となった。このため、東北地域の中国国民は大きな損失を受けた。当時の『盛京時報』によれば、「多くの国民は砲煙弾雨に陥った。多くの国民は戦火の中で死んだ。血肉が飛び散った。多くの住居が焼かれた。憎しみは大きく、悲惨し過ぎて、目も当てられない」²⁵という有様であった。

郭松齡の住む漁樵寨村付近にも災いが及んだ。日露両軍が撃ちあった多くの大砲の弾が漁樵寨村の付近に落ちたからである。そのため多くの犠牲者が出てしまった。当時、郭松齡が勉強していた塾も被弾し、倒壊した。郭松齡は再び、学業を中断せざるを得なかった。

日露戦争であったが、戦場となった中国は大きな損失を受けた。本来、日露両国から賠償を得るべきだった。しかし、無能な清政府は、賠償を要求しなかった。逆に、中国東北の主権を日露両国に売り渡したのである。

日本とは《中日会議東三省事宜条約》を結んだ。旅順、大連の租借地及び大連から長春までの鉄道を日本に譲渡した。つまり、満州鉄道の長春以北はロシアの勢力範囲になり、満州鉄道（長春—大連）の南部分は日本の勢力範囲とな

²³任松、武育文『郭松齡將軍』、前掲、15頁。

²⁴『大陸』第二年第七号（1904年8月30日）楊天石、王学庄『拒俄運動1901—1905』中国社会科学出版社、1979年、242頁。

²⁵『盛京時報』、1906年10月18日。

ったのである。こうして中国の東北地域は日露両国によって分割されることとなった²⁶。

『郭松齡將軍』によれば、この時の郭松齡は次のようであったという。

「義和団事件と日露戦争を経験した郭松齡は、日露両軍の暴行と無能な清政府の売国政策を見るにつれ、亡国の危機を感じていた。このままに行けば、中国は列強に分割されると郭松齡が考えていたからである。郭松齡は“国家興亡、匹夫有責”（国家の興亡は、民にもその責任がある）という祖先の教誨を嘯みしめ、科挙試験を諦めて、救国事業に立ち上がることを決意した。

日露戦争以後、中国では“修武備、御外侮”（軍備を強化し、列強からの侮りに立ち向かう）という声が上がっていた。こうして多くの若者が軍隊に入った。あるいは留学した。“尚武”という風潮が形成された。郭松齡もこの風潮に影響された。その時、中国が列強に侵略された原因は、強い軍隊を持っていないためだと、郭松齡は考えるようになっていた²⁷。

帝政ロシアの東北占拠、日露戦争による悲惨な現状に直面することで、郭松齡は救国の志をもって、軍人となることを決めた。

軍人生涯の始まりについて、郭松齡本人が以下のように述べたといわれる。

「当時、奉天故宮が歩哨を募集していた。私は試験を受けて、合格した。自分の名前と住所を書けば、合格できるというものだった。その後、陸軍武備学堂（奉天陸軍速成小学校）が生徒を募集していた。私も試験を受けて、合格した。私は陸軍武備学堂に入るまでは学校で勉強しておらず、殆ど、自分自身での独学であった。その後（辛亥革命後の1913年）、独学で力を付けたおかげで陸軍大学に入学できた。人間は勉強しなくてはいけない²⁸。

この言葉から見ると、郭松齡は教育の可能性を非常に重視していたことがうかがえる。郭松齡は、普通の間でも、軍人でも、十分な教育を受けなければいけないと考えていた。少年時代、正規の学校教育を受けることができなかった負い目が、教育の重要性を感じさせたのであろう。

郭松齡は最初から張作霖のもとで軍人として育ったわけではない。

入学した奉天陸軍小学堂は、奉天で盛京將軍に就任した趙爾巽が軍事人材を育成するために、陸軍部の軍事学校の成立計画によって、1905年に創立したものである。趙爾巽（1844-1927）は、「字を子珊といい、漢軍正藍旗の出身である。翰林院の編修、按察使、布政使、巡撫、戸部尚書などの職を務めていた。1905年盛京將軍に任命された²⁹。

奉天陸軍小学堂については、次のような内容であった。

「奉天陸軍小学堂は陸軍基礎軍事人材を育成する新式軍事学校であった。学制は三年間であった。講義の内容は保定士官学校予備班の講義内容に準じて編成された。中国式と欧米式とが組み合わせられ、内容が実用的であった。基礎課と軍事課の二種類に分けられていた。基礎課は国文、修身（四書、経史、賢哲

²⁶王夔生『六十年来中国与日本』、三連書店、第4巻、1979年、220-224頁。

²⁷任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、17頁。

²⁸彭景文「対郭松齡將軍的一些回憶」、『瀋陽文史資料』第1輯、遼寧社会科学院歴史研究所、1981年、216頁。

²⁹王鴻賓、孫宝君、袁占先、徐徹、曹夫興『東北人物大辞典』第2巻（上）、遼寧古籍出版社、1996年、879頁。

言行)、歴史(中国国朝史、近代制乱興衰史、東西洋史)、外国語(日本語、ドイツ語)などの授業があった。これ以外、算学、物理、生物、地理、測繪(測量と製図)などの近代科学基礎知識があった。軍事課は歩兵操典、射撃教程、兵器学、地形学、築城学、戦術学などの授業があった。学堂の総弁は日本士官学校を卒業した蔣方震が務めた。教官は国内の軍事学校、日本の軍事学校及びドイツの軍事学校を卒業した連中が担任した」³⁰。蔣方震は字を百里といい、浙江寧海人であった。1901年日本へ留学して、士官学校に入学した。1905年卒業した後、ドイツにも留学し、奉天將軍署参議、陸軍小学堂総弁などの職を務めていた。その後、趙爾巽、段祺瑞、袁世凱、黎元洪、呉佩孚、孫伝芳、唐生智、蔣介石などに招聘された異色の高級幕僚であった。

この時、すでに22歳になっていた郭松齡であったが、早速その試験を受けて、合格した。受験、入学には少なからずの困難があった。その困難な状況は、次のようであった。

「当時、陸軍小学堂は奉天において唯一の軍事学校であった。郭松齡は軍事手段で国を救うという宿縁を実現するために、小学堂、中学堂を問わなかった。郭松齡は入学試験を心配していなかった。しかし保証人の推薦と年齢という条件には、不安があった。当時の郭松齡は二十二歳になっており、入学の年齢を超えていたからである。彼は諦めたくなく、受験を希望した。また陸軍小学堂の規定によると、応募の受験生には現職の士官あるいは官僚が保証する必要がある。郭松齡には將軍衙門に勤務している賓英という親戚がいた。そこで、郭松齡は賓英へ保証人になってくれるように依頼した。賓英は郭松齡の年齢を知っていたから、困難を感じた。賓英は受験を諦めるようにと郭松齡に進言した。しかし、郭松齡は諦めなかった。仕方なく、賓英は郭松齡の要求を承諾した。賓英は郭松齡の年齢を隠し、郭松齡を連れて入学試験を受験させた。受付の係員は郭松齡の顔を見てから、郭松齡の年齢に疑問を抱いた。しかし、受付所の責任者は郭松齡に幾つの質問を問いかけたところ、郭松齡がある程度の豊かな文化知識を持っていると感じた。だから、郭松齡の応募票を受け取った。その後、郭松齡は各学科の試験を受けたが、最優秀の成績を収めたため、入学が許された」³¹。

最初に教育を受けた陸軍小学堂は、教育環境が悪く、設備も完備していなかった。しかし、ここには、専門的な軍事訓練を受けおり、豊かな近代科学文化知識を持っている教官たちが揃っていた。学堂にも沢山の新書、新聞と雑誌が備えられ、学生たちは閲覧できた。このような点が郭松齡に新しい世界へ入る絶好の機会を提供した。

郭松齡はこのチャンスを大事にして、毎日、食事と寝る時間以外、すべての時間を勉強に費やした。国文、歴史、経典などの授業は彼にとって、さほどの苦労はなかった。そのゆえに、彼には余裕の時間があつて、教科書以外の書籍、新書、新書と雑誌及び名人の伝記を読むことができた。郭松齡の努力によって、学内の定期試験で、各学科の成績は最優をとることができた。作文も得意であった。作文の内容が充実しており、文体も流暢で、学堂の総弁に褒められた、

³⁰徐徹、徐悦『張作霖』中国文史出版社、2012年、214頁。

³¹任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、19頁。

という³²。

第二節 軍事思想の形成過程

1906年、趙爾巽は奉天陸軍小学堂をベースに、奉天陸軍速成学堂を創設した。この学堂は、新たに設立された清朝の新軍と巡防營の下級士官を育成するために創設されたものである。学生は新軍と巡防營の兵士の中から選ばれた。しかし入学者が少ない場合、陸軍小学堂から、優秀な生徒を選んで補充した。陸軍速成学堂での学習期間は一年間であった。郭松齡は、陸軍小学堂から優秀な成績で陸軍速成学堂に進学した組である。

陸軍速成学堂は新しいスタイルの中等軍事学校であった。教官、設備、図書などの教育条件は陸軍小学堂より優れていた。もともと速成学堂は清政府の方針で創られた機関であった。教育や訓練は厳しかった。しかし、思想は比較的に自由で活発だった。西欧啓蒙思想を学んだ改良派や民族主義を唱える革命派の思想を学堂内部にも広げることができた。

速成教官の中に、方声濤という日本に留学した青年教官がいた。彼は革命派の同盟会会員であり、進歩思想を持っていた。方は授業の中で、いつも愛国思想を宣伝していた。学生たちに革命の啓蒙教育を行ったのである。方は郭松齡に目を付け、密接な関係を結んだ。方は郭松齡に対し、孫文が日本で進めている革命活動を紹介した。そして、革命派の論客である鄒容と陳天華が書いた革命本（『革命軍』など）を郭松齡に紹介した。郭松齡はこれらの革命思想を学ぶことで、思想が明確となっていった。帝国主義を排除するためには、先ずは清政府を倒す必要があると教えられた。このため、清政府にたいする幻想を捨てて、反清革命に傾いていった。

1907年夏、郭松齡は陸軍速成学堂を卒業した。成績優秀であったから、優等生として、奉天の北洋第二鎮に派遣され、そこで一年間の見習いとして修業した。その後、奉天に戻って、総督衙門衛隊哨長（中隊長）に任命された。やがて、奉天巡防營統領（連隊長）朱慶瀾の下で哨長を務めることとなった。ここで、その後の人生を左右する朱慶瀾と出会ったのである。

辛亥革命直前の1909年、朱慶瀾は清朝政府の命令によって、奉天を離れ、四川に駐在することになった。これにともない、郭松齡も一緒に四川に移動した。1910年冬、四川の成都に清朝の陸軍第十七鎮が設置された。そこで朱慶瀾は陸軍第十七鎮統制（師団長）に任命された。朱慶瀾の部下となった郭松齡は、朱慶瀾の影響を色濃く受けた。そして四川で、清朝打倒の革命結社・中国同盟会へ秘かに加盟したのである。

同盟会の重要幹部であった程潜の回想によれば、朱慶瀾と郭松齡の関係は次の通りであった。

「朱慶瀾は愛国思想を抱いて革命に同情を示していた。だから彼の回りには、同盟会会員が集まっていた。しかも、彼らは重要なポストを占める中級士官であった。例えば、程潜、方声濤、葉荃、姜登選などといった人物がいた。郭松

³²同上、20頁。

齡は革命情勢の影響を受け、かつ同盟会会員の啓発によって、民主革命への覚悟が益々高まっていった。清政府の腐敗的な統治の下では、“国是日非、清政不綱”（国力は益々弱くなって、清朝政府の政策も良くない）と意識した郭松齡は国民を苦しい生活から救うために、清政府を倒さなければいけないと認識したのである。……こうして郭松齡は方声濤、葉荃の紹介によって、同盟会四川会に加入した」³³。

辛亥革命が勃発する前年の1910年、郭松齡は正式に同盟会に加入した。正式な革命派・郭松齡の誕生である。

1911年春、郭松齡は第六十八標（大隊）第二營營長（中隊長）に任命された。ここで辛亥革命の引き金となった四川での保路運動に直面したのである。保路運動とは何か。当時の『申報』の説明によれば、次のように記されている。

「1911年の清朝の鉄道国有令によって、商辦（民間経営）の川漢鉄道、粵漢鉄道を国有化した。鉄道国有化により、列強から600万ポンドの借款を獲得しようとした清朝に対し、湖南・湖北・広東・四川などの民衆は保路同志会を結成して、戦った」³⁴。

清政府は“鉄道国有”を宣布してから、列強四カ国と“湖広鉄道借款合同”を結んだ。湘（湖南）、鄂（湖北）、粵（広東）、川（四川）四省の商民が反対運動を引き起こした。粵漢、川漢鉄道を民間経営とし、“四国借款合同”を廃除するようにと、要求した。湖南の長沙では、数万人が反対の集会を開いた。多くの鉄道労働者が長沙でデモ行進を行った。湘、鄂の議会である咨議局は中央政府の国有化方針を非難した。保路運動の広がり の概要は次の通りである。

「宜昌の労働者はストライキを実行した。日本への留学生も国内の闘争を応援した。広東鉄道会社は株主大会を開催した。香港でも、保路会が成立した。四川省の闘争規模が、四省の中でも最大であって、長期間続いた。6月中旬、保路同志会が成立された。多くの府、州、県にも分会が成立された。同盟会、哥老会は秘密裏に保路同志軍を組織した。8月の初、四川鉄道会社は特別株主大会を開いて、四川鉄道の将来を議論した。結果、商辦を決めた。8月下旬、成都の商人と学生はストライキを開始した。9月の初、政府に穀物と税金の納入を拒むまでになってきた」³⁵。

清政府は鉄道の建設を改進するために、“鉄道国有”を実行したが、“湖広借款合同”は専制清朝を堅持するためのものであった。そこでは民間商民の利益が奪われ、清末社会の矛盾が激化された。

この四川における保路運動に直面したのが、趙爾豊であり、郭松齡であった。

清朝政府によって四川総督に任命された趙爾豊は、保路運動に立ち上がった抗議行動に対し、武力鎮圧に乗り出した。郭松齡は趙爾豊の命を受けて成都の北門を守っていた。当時、北門以外の三面の城門では、抗議行動に立ち上がった民衆に砲火を浴びせた。しかし、郭松齡が守っている北門では、武力を使用しなかった。何故か。その理由は、次のようであるという。

「郭松齡は民衆の活動が愛国行為であると思った。部下を説得して、民衆に

³³郭大名「先兄郭松齡伝略」、『伝記文学』第4期、1962年。

³⁴『申報』1911年9月28日。

³⁵李占才『中国鉄道史 1876-1949』汕頭大学出版社、1994年、149頁。

武力を使わせなかった。結局、北門で戦うことなく、包囲を解いた」³⁶。

「その後、郭松齡は成都西草堂に向かって、郷団を解散させるようにという命令を受けた。(郷団を解散するということは民間武装を鎮圧することである。) 郭松齡は民衆に武力を使用することに反対した。平和的手段で事件を解決したかった。こうして一般庶民の命を守った。趙爾豊は、郭松齡が民間武装と結託するのではないかと疑った」³⁷。

当然ながら、郭松齡は趙爾豊によって免職された。しかしその後、直属の上司である朱慶瀾が趙爾豊に対して郭松齡の復職を要請した。その結果として復職することができた。

1911年、辛亥革命の口火を切った武昌起義が発生した。それに続いて、清朝からの独立を宣言する省が増えた。四川の各地でも独立が宣布された。このため、清朝側の四川総督であった趙爾豊は下野した。四川総督府に代わって、1911年11月27日、“大漢四川軍政府”が誕生した。四川での辛亥革命である。

四川省咨議局議長の蒲殿俊が四川都督に選ばれ、郭松齡の上司であった朱慶瀾が副都督として任命された。しかし、四川の地元軍人と、中央から派遣されていた朱慶瀾や郭松齡らの外来軍人との関係は最悪となり、1911年12月8日には、尹昌衡をはじめとする四川地元軍人の軍事暴動を招いた。このため、朱慶瀾などの外来の軍人は四川から退出することになった。こうして郭松齡も四川を離れ、再び古巣の奉天に戻ったのである。

辛亥革命後の奉天では、革命党員である張榕、張根仁、柳大年などが奉天連合急進会を成立させていた。帰郷した郭松齡は、同盟会の誼で、その張榕と親密になった。急進会の中心となった張榕とは、次のような人物である。

「字は蔭華、原籍は山東済南、その後、奉天省撫順に移った。張榕は1884年撫順で生まれた。1903年北京訳学館に入学して、ロシア語を勉強した。1905年秘密刊物を創って、革命を宣伝した。その後、清政府の大臣を刺殺未遂によって、逮捕された。1908年、脱獄した以後、日本に行った。日本で同盟会に加入して、革命党の黄興と一緒に革命活動に従事していた。1911年、武昌蜂起が発生すると、奉天に戻った」³⁸。

奉天連合急進会の活動は何か。「この会は勢力をためて、身近では趙爾巽(当時の東三省総督)を抑止し、北京を見据えて共和国を促進する、と唱えていた。張榕たちは武力で奉天を占領することを企んでいたのである。……郭松齡は奉天に戻った以後、韓淑秀の紹介によって、張榕と連絡を取った」³⁹という。

韓淑秀(1891-1925)は、郭松齡の妻であり、奉天女子師範学堂を卒業した同盟会会員であった。張榕ら奉天の同盟会の連中は、武装蜂起の準備を進めたが、計画が清朝側に漏れてしまった。このため、悲劇が発生した。

「韓淑秀は1907年奉天女子師範学堂に入学した。この学校には呂清揚という教師がいた。この人は中国では有名な女性革命家である秋瑾の日本時代のクラスメートである。授業では常に学生たちへ愛国教育を行っていた。学生の中

³⁶武育文「郭松齡的歴史評価」、『近代中国人物』第3輯、前掲、349頁。

³⁷任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、26頁。

³⁸遼寧省档案馆編『辛亥革命在遼寧档案資料』、遼寧省档案馆、1981年、143頁。

³⁹李堅白「郭松齡反奉天起因」、『瀋陽文史資料』第3輯、政協瀋陽市委員会文史資料研究委員会、1982年、62頁。

では人気があった。韓淑秀は呂清揚と親しくなり、常に呂清揚から陳天華、秋瑾などの革命者が日本で革命活動をやっていたことを聞いた。特に秋瑾は革命のために、犠牲になったことが韓淑秀に大きな影響をあたえた。韓淑秀は常に学校で男女平等を訴え、“国家興亡、婦女有責”というスローガンを唱えた⁴⁰。

ところが、悲劇が発生した。1912年1月23日夜、奉天諮議局副議長袁金鎧と奉天巡防軍統領張作霖は、一緒に食事をするという口実で、張榕を奉天西関平康裏にある徳義楼に誘った。張作霖は途中で待ち伏せをして、張榕を銃殺した⁴¹。

さらに張作霖は多くの兵士を動員して、革命党を捜索した。郭松齡も逃れることができなかった。郭松齡は革命軍である「民証明書」を持っていたため、奉天西関で張作霖の部下に逮捕された⁴²。この時、すでに南京には、中華民国臨時政府が孫文臨時大総統のもとで成立していたが、東北三省はまだ清朝政権の支配下にあった。そのもとで郭松齡は逮捕されたが、直後の2月には最後の皇帝となった溥儀が退位し、清朝政府は消滅した。孫文から臨時大総統の職を受け継いだ袁世凱政権のもとで、東北三省も中華民国に組み込まれた。この中華民国による全国統一で、逮捕されていた郭松齡も釈放された。

張作霖に逮捕された郭松齡は、次のような言葉を吐いたといわれる。

「張作霖にたいする仇を一生忘れることができない」⁴³。

のちに郭松齡は張作霖にたいする叛乱事件を起こすが、この10年以上前の逮捕事件がその遠因であったとも考えられる。

郭松齡は保釈された後、奉天を離れて北京に現れ、北京将校研究所に入所した。北京将校研究所は、また陸軍将校研究所ともいわれ、陸軍の出身士官を集めていた。活動の内容は主に高等な軍事学術と軍政改良の研究であった。「高等軍事学術を持つ士官を育てるために、成立された」⁴⁴軍事研究機関であった。郭松齡はさらに軍事学術を磨こうと考え、入所したのである。

1913年春にそこを卒業した後、友人の紹介で、奉天都督府の上校（大佐）参謀に任命された。さらに軍事技術への向学心は強く、1913年秋、中国陸軍大学が生徒を募集したので、郭松齡は試験を受けて、合格した。この中国陸軍大学では、日本人教官も教えていた。

この中国陸軍大学は、もともと清光緒三十二年（1906）、陸軍行營軍官学堂という名で建学されたものである。清朝政府の軍諮府に属した。督弁、監督、提調等のポストが設けられ、速成、深造の二つの科に分けられていた。教官は日本人の士官が担任した。1910年年7月、陸軍予備大学堂という名に変わった。1912年に中華民国が誕生すると、陸軍参謀本部に属した。翌年に陸軍大学と改称した。その後、各科の教官は陸軍大学の卒業生が担任したが、日本人の教官もまだ3人が残っていた。高等兵学と馬術を教えていた⁴⁵。

⁴⁰富香海「創立時期的奉天女子師範学堂」、『遼寧文史資料』第5輯、1981年、148～149頁。

⁴¹『吉林文史資料選輯』第4輯、吉林人民出版社、1983年、53頁。

⁴²「郭松齡氏此次倒戈反奉之真因」、『滿州報』、1925年12月1日、第2版。

⁴³王之佑「張作霖擊敗郭松齡的經過」、『文史資料選輯』第35輯、中国文史出版社、1997年、130頁。

⁴⁴張俠、孫宝銘、陳長河『北洋陸軍資料—1912—1916』天津人民出版社、1987年、323頁。

⁴⁵同上、325頁。

郭松齡は陸軍大学の第四期であった。第四期の学生は各省の軍事教育機関、講武堂、将校講習所、軍官研究所などの機関を卒業してから、入学試験を受けて、入学した。だから文化的素養がしっかりとしており、レベルが高かった。第四期では多くの有能な青年軍官が育った。

郭松齡は先進的な軍事科学であったドイツや日本の近代軍事科学を学ぶだけでなく、さらに、中国や外国の政治、法律などの科学知識を勉強した。学習意欲が強かったのだろう。叛乱後に出された新聞報道によれば、「郭松齡は勉強したいと心から思っていた。毎晩、北京法政大学夜班にも参加し、そこでも勉強していた。彼の妻は燕京大学に入学した」⁴⁶。

郭松齡は陸軍大学で、有意な四年間を過ごした。豊かな軍事知識を獲得したばかりではなく、社会改造の政治思想も身に着けることができた。『満州報』によれば、「世界大局、社会潮流を深く理解してから、国民と国家を守って、民国を改造したいという政治思想を抱くようになってきた」⁴⁷。

1916年、郭松齡は陸軍大学を卒業した後、袁世凱の北洋政府に仕官し、北京講武堂教官に任命された。しかし、北京での仕官は短かった。孫文が南方の広州に、護法政府を樹立すると、郭松齡は北京を離れて、それに合流したからである。

郭松齡は、袁世凱や、その跡を継いだ段祺瑞の北洋政府には、希望を持ってなかったのであろう。袁世凱は帝制を復活させ、自ら皇帝に即位した。袁世凱の死後に後継者となった段祺瑞は、自己の軍事勢力を拡大するために、日本と手を結んで、西原借款を受けた。

この時、孫文は護法運動を唱えて、反段祺瑞の地方政権である広州護法軍政府を樹立した。袁世凱が死ぬと、広州には護法政権が誕生して南北対峙が鮮明となり、北京政府をめぐる軍閥同士の権力争いが絶えなかった。こうしたなか、郭松齡は北京を離れ、広州に南下することを決めた。孫文の陣営に走ったのである。

袁世凱が帝制復活を宣誓すると、その暴挙に反対する軍閥が護国軍を組織して、袁世凱打倒の護国戦争を開始した。1916年6月に袁世凱が死亡したことで護国戦争は終結したが、袁世凱死後の北京政権は引き続き軍閥政権が続き、後継者として黎元洪が総統に任命された。そして実力者の安徽軍閥である段祺瑞が國務院総理に任命された。実質的に段祺瑞の安徽軍閥政権であった。

広州の護法軍政府は、民国設立期につくられた「臨時約法」を回復すること及び解散されていた国会を再開するように要求した。約法を破る北京、約法を護る広州と、その違いを鮮明にしようとした。それが北京の軍閥政権を打倒しようとする護法戦争の大義名分であった。

孫文は広州護法軍政府を樹立し、その傘下に集まった旧国会議員によって開かれた国会非常会議で、陸海軍大元帥に選ばれた。その軍事力で北京軍閥政権打倒の北伐戦争を画策していた。

郭松齡はその護法運動に合流したのである。北京を離れ、広州に合流した経緯について、「この時の郭松齡は北京講武堂で教官を務めていた。収入が高く、生活が安定した。しかし、孫文が広州で“護法運動”を行うと聞いて、南

⁴⁶ 「郭松齡氏此次倒戈反奉之真因」、『満州報』前掲、第4版。

⁴⁷ 同上。

下して孫文の応援に行った」⁴⁸という指摘がある。しかし、護法運動に高く共鳴した言動や事実を確認できない。

広州に着いてからの郭松齡は、粵、贛、湘辺務署弁公署参謀、広東省警衛軍営長などの職位を務めていた。郭松齡は広州の活動を通して、かつての同盟会四川分会の仲間であった方声濤、葉荃と出会った。さらに、その後の叛乱につながる人物である李堅白と知り合った。李堅白は、東北出身の国会非常会議議員である。彼はその後、郭松齡の叛乱に協力した人物である。

李堅白（1882－1937）は特異な人物であった。

「号は愈三、字は紹白、遼寧省遼陽県の人である。国会議員に当選し、1917年広州の非常国会に参加して、孫文を護法軍政府大元帥に指名した。郭松齡と出会って、親密な友人になった。1925年郭松齡の反奉事件に参加して、郭松齡を応援した」⁴⁹という人物である。

広州における郭松齡のポストはあまり高くなかった。しかし広州で孫文に接見することができたようだ。記録は『孫中山全集』などから確認できないが、郭松齡は孫文に「本当の共和を図るならば、軍人を参加させることが必要だ。軍閥は軍人を利用して、特別の勢力になって、共和の邪魔となっている。従って、我々軍人も革命を応援する必要がある」⁵⁰と進言した、という。これ以外、郭松齡と孫文を結びつける資料は確認できない。そのことは、広州に移ったものの、積極的に護法軍政府に関わったのではない可能性が強い。むしろ東北出身の李堅白らと交流を重ね、遠く東北三省改造の方法に関する議論を深めていた可能性の方が強い。

広州に広東講武堂が成立すると、郭松齡はその教官となった。だが、広東講武堂時代の活動内容は詳細には確認できていない。

1918年5月、孫文の護法軍政府は改組され、孫文は政権内部の権力争いに敗れた。大元帥のポストを外された孫文は広州を離れて上海に戻った。孫文は革命軍隊の支持がなかったために、護法政権を牛耳る雲南と広西の軍閥の圧力を受けて、自己の政治理念を実現できなかった。孫文は自己の理想に忠実な革命軍の必要性を感じ取ったが、郭松齡も同じ思いであったかもしれない。

孫文の護法軍政府が崩壊すると、広東省長の朱慶瀾は孫文を応援したために、雲南と広西の軍閥から排斥され、香港に去った。こうしてわずか1年で、護法運動が失敗したのである。

孫中山と朱慶瀾が広州を離れた以上、郭松齡も広州に滞在する意味がなくなった。郭松齡は一部の同盟会と一緒に東北に戻って、改めて、革命の継続を図ることとなったのである。李堅白によれば、奉天への帰還に際して、郭松齡は次のように述べたという。

「東北三省を徹底的に改造しようとするれば、必ず、軍閥を倒さなければならない。軍閥を倒すためには、大きな犠牲をとらなう決意が必要である。私は奉天に戻るならば、軍隊に入って、軍権を取る必要があると考えている」⁵¹。

ここでいう軍閥とは、軍閥一般を指すのか、具体的に東北三省の軍閥、すな

⁴⁸任松、武育文『郭松齡將軍』前掲、39頁。

⁴⁹武育文「郭松齡的歴史評価」、『近代中国人物』第3輯、前掲、352頁。

⁵⁰郭任生『郭松齡事略』全国政協文史編委會、1961年、7頁。

⁵¹李堅白「東北革命軍司總令郭松齡事略」、『瀋陽文史資料』第3輯、前掲、45頁。

わち張作霖を指すのか、不明である。もし具体的に張作霖を指すのであれば、そしてもし、この言葉が真実であれば、郭松齡は奉天軍に参加する以前に、すでに張作霖を倒すつもりがあった、と見なすことができる。そうであれば、護法政權に参加し、軍閥打倒を目指す革命軍創設の必要性を痛感したことも、郭松齡が叛乱事件を起こした原因の一つに数えることができるだろう。

第二章 奉天軍での郭松齡の活動

第一節 張学良の教育

奉天に戻った郭松齡は、張作霖の息子である張学良と出会い、彼の教師となつて、張学良の思想形成に大きな影響を与えることとなつた。

張学良の経歴紹介にあたって、最も信頼がおける『張学良年譜』によれば、その出生は次の通りであつた。

「張学良は1901年6月3日、遼寧省海城縣桑林子詹家窩棚（現在台安市に属する）に生まれた。字は漢卿であつた。号は毅庵であつた。乳名は双喜であつたが、後に“小六子”に改名された。李毅、あるいは李宜の名前も使用した。筆名は曾顯華であつた」⁵²。

張学良は、いうまでもなく東北の霸王となつた張作霖の長子として生まれた。

「張学良は、張作霖の最初の妻である趙氏との間に生まれた。姉は1人で、名前は冠英、字は首芳であつた。弟は7人（学銘、学曾、曾思、学森、学俊、学英、学銓）。妹は5人（懷英、懷卿、懷敏、懷瞳、懷曦）ほどいた」⁵³。

張学良が生まれた1901年時の東北地区は、義和団鎮圧で進軍した帝政ロシア軍によって占拠されるという戦乱の時代であつた。張学良の母親である趙氏は八角台（現在台安市に属する）に向かう途中で、張学良を出産したという。少年時代の張学良の生活は苦しかった。父親の張作霖はまだ身分は低く、保険隊長に過ぎず、張学良の面倒を見られなかつた。

晩年、ハワイで聞き取りインタビューを受けた張学良は、次のように幼年時を語っている。

「私が生まれた地名は八角台と言う。しかし実際は、ここで生まれたというよりは、移動の車のなかで生まれたのであつた。……あの時は避難の途中であつた。母親は車のなかで私を生んだのである。私は小さい時から病気がちであり、体が強くなく、よく血を吐くことがあつた。私が今まで生きているのも不思議なことであると思つている。あの時、母親も病に侵され、母乳も出なかつた。何を食べたかといえば、高粱や米飯を噛み砕いて、私の口に入れたのだ。だから、私はこんな高齢な歳まで生きると思わなかつた」⁵⁴。

張作霖は自分が正式な教育を受けることができなかつたから、張学良の学業については、非常に重視してゐた。1906年、すなわち張学良が6歳の時に張作霖は新民府に駐在した。そこで、当時、非常に有名な儒学者であつた崔名耀を招聘して、張学良と張学良の姉張冠英の教師とした。

「張学良の幼年教育は《三字經》、《百家姓》から始まり、《論語》、《孟子》などを学んで、《史記》にまで到つた。張学良は聡明であり、勉強を好んだ。家庭教師の熱心な指導に答えて、張学良も一心不乱に学んだ。極めて進取の気概を持つてゐた。張作霖と家庭教師は非常にこれを喜び、その故に“学良”と命名した」⁵⁵。

⁵²張友坤、錢進『張学良年譜』（上）社会科学文献出版社、1996年、1頁。

⁵³同上。

⁵⁴王書君、唐徳剛『張学良世紀伝奇—口述実録』上巻、山東友誼出版社、2002年、15頁。

⁵⁵王海晨、胡玉海『世紀情懷—張学良全伝』（上）人民出版社、2011年、10頁。

張学良が8歳になると、張作霖は崔名耀に代わって楊景鎮を招聘して、張学良の教師にした。楊景鎮は昔、塾で張作霖が学んだ教師であった。しかし、張学良は楊景鎮の教え方に納得できなかった。楊景鎮の旧式な伝統的な教え方に不満を持ったからである。あるいは、当時の張学良が、同じ年の子供と同じように腕白坊主であったからかもしれない。

張学良は口述で次のように述べている。

「私の性格は、生まれつきの腕白であった。常に私の先生をからかって喜んだ。……彼の教え方は文章を暗記すること以外、夏や楚のやり方であった。どうしたことだといえ、旧時代の書館の学生は師道を違反すれば、懲罰を受ける、ということだ。私はこの読書方法に対して、非常にいやになった」⁵⁶。

とはいえ、張学良は12歳まで、中国の古文を学んで育った。この修学を通して、張学良は高い古文基礎を身に着けることができたのである。

張学良が15歳の時に、張氏一族は奉天府に転居した。中華民国の時代に入っており、張学良の生活も大きく変わり始めたが、張学良は奉天に転居した後、相変わらず学校には通わず、自宅に教師を招いて、そのもとで勉強していた。新しい教師は、奉天省議会会長、国立瀋陽高等師範学校国文教授白永貞であり、当時研究者として有名な金梁であった。二人は張学良に、文学、歴史、書道を教授した。確かに張学良は学校に通った事はなかったが、彼の家庭教師はいずれも一流の学者であった。こうして御曹司・張学良の学業基礎はしっかりと身についたものとなっていった。その後、軍隊の生活に入るが、学識において、一般の軍人で張学良にかなうものはいなかったという。

張学良は15歳までは伝統的な儒学と道学を勉強していた。ところが15歳以後になると、西方のキリスト教思想と近代啓蒙思想や民族民主的的革命思想に接触し始めた。

張学良は15歳から、交渉署英語課長徐啓東とキリスト教青年会（YMCA）総幹事ジョセフ・プラット（Joseph Platt）から英語を学び始めたからである。J・プラットは、アメリカから来た宣教師であった。1886年ペンシルベニア州で生まれ、1913年中国に来た。奉天で布教活動し、キリスト教青年会（YMCA）を組織した。1924年、アメリカに戻った⁵⁷。

英語だけでなく、ドイツ語についても東三省軍事測量局局長陳英から教育を受けた。新たに外国語を学ぶことと外国人と交流するようになったことは、当然ながら張学良の人生に大きな影響を及ぼした。

張学良を取り巻く良好な学習環境と有利な地位は、張学良の見聞を広げ、上流社会の人々と交流するためにとって好条件となった。張学良は奉天に転居した後、交流の幅を広げることができた。彼の英語教師プラットは張学良が初めて親しくなった外国人の友人であった。J・プラットは素直で進歩的な思想を持っていた。反戦思想のために、アメリカで投獄されたことがあるほど信念が強かった。この二人は教師と生徒という師弟関係にあったが、同時に心友でもあった。

J・プラットはキリスト教青年会の総幹事であったために、張学良も常にYMCAの活動に参加した。例えば、徳育講演、科学講演、弁論講演及び多種

⁵⁶王書君、唐徳剛『張学良世紀伝奇—口述実録』上巻、前掲、35頁。

⁵⁷竇応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』作家出版社、2005年、39～40頁。

球技大会などの活動があった。交流した欧米人の生活と思想は、青年時代の張学良に大きな影響を与えた。YMCAの活動に参加したことをきっかけにして、張学良は全面的に欧米の先進的な思想に接することとなった。欧米の先進的な思想との触れ合いは、張学良が抱くようになった理想国家の形成に大きな影響をした。とくにYMCAとの出会いは張学良にとって計り知れないものがあった。西安事件後の幽門中に語った張学良の口述によれば、この出会いによって国家と国民のために、力を尽くそうと決めたという。

「奉天青年会の事務所建設に対する義援金募集があったが、私は個人で7万余元義援金を援助したことがある。青年会が集めた中国での義援金の最高数字を記録した。この宗教的行為を通して、さまざまな中外人士から激励と教誨を賜り、私は一つの信念を啓発された。私にはできることがあり、それは一般人に比べれば容易にできることであった。それは私の能力が他人よりまさっているからではなく、私は恵まれた環境にあったためである。他人は二歩または数歩かかっている到達できるところに、私は一歩でたどり着けた。これは私の父親の富貴と権勢を笠に着ていたからである。私はなぜこれを使って社会国家に貢献しなかったのだろうか。こうして私は決心した。これからは安寧な貴公子の生活をかなぐり捨て、人びとのために力を尽くす道に身を捧げよう」と⁵⁸。

ここでいう「青年会」とはYMCAのことである。これは西安事件後の幽門中に語った回想であるから、額面通りに受け取ることはできないであろうが、当時の中国上流社会をにおけるYMCAやYWCAの影響力を勘案すれば、J・プラットとの出会いは、張学良の眼を狭い東北地域から外国に広がる世界へ向けることに大きな影響を与えたであろうことは、想像に難くない。

当時は第一次世界大戦の時期でもあり、その1915年、中国でも大きな事件が起こった。日本による「対華二十一箇条要求」をめぐる争いである。当時の袁世凱北洋政府は日本により提出された「対華二十一箇条要求」を受諾した。これによって、とくに満州と呼ばれるようになる東北における権益が、日本によって占有される事態に陥った。

奉天で反「二十一箇条」運動が起こった。(具体的の内容は後で補充する)青年期の張学良もこの運動に参加した。張学良は「二十一箇条」でかなりショックを受けた。中国の将来に危機感を抱いたと思われる。なぜならその「二十一箇条」における東北権益が剥奪された部分は以下の通りであるからだ。

「第二項 支那ガ従来認メ来レル南満州及ビ東部内蒙古ニ於ケル日本ノ特殊ノ地位ニ関スル件。第一條 両締盟国ハ、旅順大連ノ租借地限ヲ、南満州鉄道及安奉線ト共ニ、九十九箇年ニ延長スルコトヲ約スベシ。第二條 南満州及ビ東部内蒙古ニ於ケル日本臣民ハ、貿易及ビ製造工業ノ目的ヲ以テ建物ノ建設、若クハ農業ノ為メニ土地ノ租借又ハ所有ノ特権ヲ許容セラルベシ。第三條 日本臣民ハ南満州及ビ東部内蒙古ニ於テ、旅行及ビ居住ノ自由ヲ有シ、如何ナル種類ヲ問ハズ、商業及ビ製造業ニ従事スルノ権利ヲ許容セラルベシ。第四條 支那政府ハ南満州及ビ東部内蒙古ニ於テ、日本臣民ニ鑛山採掘権ヲ許容スベシ。但シ是等ノ鑛山ニ就テハ、両国政府共同シテ決定スベシ。第五條 支那政府ハ左記ノ二項ニ就テハ、其ノ實行ニチテ先ズ日本ノ同意ヲ受クル事ヲ約ス可シ。

(イ) 南満州及ビ東部内蒙古ニ於テ、鉄道敷設ノ目的ヲ以テ、第三国ヨリ借款

⁵⁸ 寶応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、43～44頁。

ヲ行ハントシ、若クハ第三国ニ鉄道敷設ヲ許サントスル場合。(ロ) 南満州及ビ東部内蒙古ノ地方税ヲ擔保トシテ借款ヲ起サントスル場合。第六條 支那政府ハ南満州及ビ東部内蒙古ノ行政、財政及ビ軍事ノ目的ヲ以テ顧問若クハ教習ヲ雇傭セントスル時ニハ、先ズ第一日本ト協議スベシ。第七條 支那政府ハ、本協議調印ノ日ヨリ今後九十九箇年間吉長鉄道ノ管理行政權ヲ日本ニ引渡スベシ」⁵⁹。

すなわち、南満州と内モンゴルで住居、商業を営み、鉱物を採掘するなどの権利を日本に譲ったのである。そして、大連、旅順の租借期限と南満、安奉鉄道を扱う期限も 99 年間に延びることになった。

この国権喪失で、張学良はどのようなショックを受けたのか。幽門中に語った口述によれば、次のような思いを抱いたという。

「若い時の私は、体が弱かった。肺病を患っており、血を吐いたこともある。その原因の一つは、自己の学習と生活環境が意のままにならなかったためである。その二つ目は、二十一箇条以降、常に国事に悲観したためである。東北人はすでに亡国の民の道を歩んでいると思った。……国家の前途には希望がなかった。将来いずれ、他人の奴隷になって、第二の朝鮮人になるにすぎなかったからだ」⁶⁰。

この前途に絶望していた張学良の人生に、大きな影響を与えた人がいた。張伯苓という人物である。1916 年当時、天津の南開中学校の校長であった。1919 年には南開大学を設立し、自ら校長に就任した。1923 年には南開女子中学校を造った。教育者であったが、抗戦時期には、国民参政会副議長に就任し、同年、国民党に加入した人物である⁶¹。

張伯苓は 1916 年、奉天で講演を行った。テーマは「中国之希望」であった。張学良はその講演を聴きに行った。講演の中心思想は一人一人の中国人が一生懸命になって中国を救うべきだとするものであった。傷心していた張学良はこの講演を聴き、勇気が湧いたのである。張学良は可能な限り、自分の力を尽くして、中国を救うと決意した。その心境を、後世に南開大学で次のように語っている。

「悲観すべきではないと悟った。そこで、自分個人の良心に基づき、個人の能力を尽くし、努力して、国家を救うと誓った」⁶²。

この「二十一箇条」を突きつけられるという国難に遭遇した時から、張学良の心に国家という意識及び民族という意識が形成されてきたということができよう。

当時の張学良は中国を救うと決意したが、どうすれば、中国を救うことができるか、まだ分からなかった。その張学良の迷いに、一つの光を照らしたのが、キリスト教青年会の活動で知り合った閻宝航であった。この人物は、その後も張学良とは深い関わりを堅持していた。

『東北人物大辞典』や『民国人物伝』によれば、閻宝航（1895 年－1968 年）

⁵⁹ 「対華要求に関する外相訓令一大正三年十二月三日附機密號外一加藤大臣」、『日本外交年表並主要文書 1840－1945』原書房（上巻）、1965 年、381 頁～384 頁。

⁶⁰ 寶応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、41～42 頁。

⁶¹ 張錫祚「張伯苓与南開大学」、『文史集萃』第 1 輯、文史資料出版社、1983 年、135 頁。

⁶² 王海晨、胡玉海『世紀情懷—張学良全伝』（上）前掲、15 頁。

は次のような経歴を歩んだ⁶³。

閻宝航は奉天省（遼寧省）海城人であった。1913年、奉天両級師範学校予科に入学した。この学生時代、キリスト教に入信した。1918年4月には奉天貧児学校を創設した。同年年末、奉天キリスト教青年会（YMCA）の学生部幹事となった。同時にマルクス主義にも関心を高め、1924年、奉天における初の“社会主義研究グループ”が成立した。1925年、上海や広州で“五・三〇”運動が高まると、奉天で「奉天学生联合会」を組織して、デモ行進を指導した。同年末、郭松齡叛乱が発生すると、郭松齡の叛乱を支援する「助郭反奉」活動に合流することを嫌い、イギリスへ遊学した。帰国後、「東北国民外交協会」に参加し、日本軍のアヘン政策に抵抗するなど社会運動の指導者となった。1929年には、奉天青年会の総幹事に就任した。奉天におけるYMCA活動の中心的指導者となったのである。

閻宝航は満州事変が勃発すると「東北民衆抗日救国会」を組織し、国民党政府に出兵を要請し、日本軍に抗戦する東北義勇軍に物資支援した。

1935年10月9日、国民軍事委員会委員長行營参議に任命された。閻宝航らは張学良に上申して、「剿共」作戦の停止を求めた。西安事件が発生すると、張学良救済活動に尽力した。幽閉されていた奉化県溪口で蒋介石に会見し、その釈放を要請したが成就しなかった。その一環として、1937年には“東北抗日救亡総会”執行委員に就任した。同年9月、周恩来の紹介によって、共産党に加入した。1941年“中国民主革命同盟”を成立した以後、重要な指導者の一人であった。東北が解放された以後、東北行政委員会委員に就任した。最後は遼寧省政府主席まで昇り詰めた。

このような進歩的な思想を持った閻宝航であったが、当時の若き張学良にとって、多くの教えを受ける教師でもあった。張学良は閻宝航から、自己の主張する国強民富の鍵を示唆された。閻宝航は次のように主張した。

「私が思うに、国強民富の鍵は、まず、搾取制度を取り消し、貧と富の格差という社会現象をなくしていくことだ。科学を信じて、知識、教育及び人材育成を重視して、全国国民の積極性を引き起こすことだ。一人一人が幸福で素晴らしい生活を過ごすことができるという共同目標に向かって、努力し、奮闘することだ」⁶⁴。

張学良はこの話を聞いた後、非常に確信を強めたという。張学良は東北の政権を握って以後においても、東北の建設の具体策については閻宝航に意見を求めた。そして閻宝航の具申に基づいて、実行された。張学良が理想国家とみなす国家建設構想の基礎は、閻宝航の意見に強く影響されているといえるであろう。

張学良と陳蕙生の関係も注目すべきである。もともと青年時代の張学良は医学を学ぶことを望んでいた。病気を治して人を救うことを考えていたからである。しかし後継者として期待する張作霖の反対によって、夢は実現できなかった。そこで軍人教育を受けると称して海外に渡り、海外で医学を学習しようと

⁶³王鴻賓、孫宝君、袁占先、徐徹、曹夫興『東北人物大辞典』第2巻（上）、前掲、1562～1563頁。姜克夫、李侃「閻宝航」『民国人物伝』第4巻、中華書局、1984年、39～44頁。

⁶⁴王海晨、胡玉海『世紀情懷-張学良全伝』前掲、16頁。

画策し、その第一歩として軍人の道に歩んだ。その時、陳蕙生という人物が大きな影響を与えた。

陳蕙生とはいかなる人物か。

張学良の口述では、J・プラットと並んで、陳蕙生が語られている。張学良の口述は何種類かあるが、これは幽門中に語ったものである。

「私の父親は私に何をするつもりかと聞いた。私は医学を勉強したいと答えた。父親は賛成しなかった。父親はかつて私を日本へ留学させたいと考え、日本方面も学習院への入学を歓迎していた。私は日本が嫌いだったから、日本へは行きたくなかった。私はアメリカまたはイギリスに行きたかった。英語を勉強しており、知り合いにアメリカとイギリス人が多かったからである。父親も認めてくれなかったが、私は自らアメリカに留学することを決めた。……

キリスト教青年会のジョセフ・プラットはアメリカ朋友会（American Friends Service Committee）のキリスト教徒であり、アメリカ留学を激励してくれた。彼は私の自立の観念（すなわち、父親の反対を顧みないこと、家族の資金に頼らないこと、潜行してアメリカに渡り、自力で学問を求めたこと）に賛成してくれた。ジョセフからは、人を救う、世を救うという考え方を啓発された。……

陳蕙生は浙江青田人であった。ドイツへ留学して、軍事を学んできた。彼は私が軍事を学ぶことを賛成した。しかし、あの時、私は軍人になりたくなかった。彼は巧妙なやり方で、私が軍人の道に歩むことに尽力した。彼は私に語った。……私は体がすぐれないから、アメリカ留学は好ましくない。まずはどこか国内の軍事学校に入学し、一年間を過ごす。それで老人を安心させ、体も鍛錬できる。卒業したら、今度はアメリカとイギリスへ軍事学習に行きたいと願えば、老人たちは必ず喜んで認めてくれるであろう。海外に着いたら、改めて何を学ぶか、自分で決めれば、いいじゃないか。……私は陳蕙生の言うことを聞いた。……私は保定陸軍軍官学校に入学したいと父親に請求した。陳蕙生の言った通り、父親は非常に喜んだ。……試験に受かったので、奉天で入営することになった。入営期中、奉天軍閥は在職士官を訓練するために、奉天講武堂を再開した。……陳蕙生は私にわざわざ保定の軍事学校に行く必要がない、奉天講武堂に入学すればいいじゃないかと説得した。……このように、彼はずっと、私を軍隊の門に押し進めてくれた。……陳蕙生の話は筋が通っていると思った。父親に講武堂に入学したいと示した。父親は非常に喜んだ……父親は私にもし、私は終始一貫勉強して、卒業できれば、高級士官の職務を与えてくれると約束した。そして、私は大隊長の身分として、講武堂に入学した。第一期の同級生の中には雑多な出自の士官が多いから、私は僥倖で何度も優秀な成績を収めた。父親が非常に喜んだだけではなく、当時、父親の周りにいた高級将校の目も引いた」⁶⁵。

これが、陳蕙生の献策で軍人の道を選択した理由であった。このようにして張学良の軍人としての生涯が始まったのである。

張学良は講武堂で勉強をはじめたが、その時は全く無名の学生であった。張学良は講武堂に入学する前に学校での学習経験がなかった。しかし、張学良は小さいころから、家庭教師の指導で勉強してきたから、基礎学力はしっかりと

⁶⁵ 竇応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、36～38頁。

身に着けていた。その甲斐もあって、優秀な成績を収めた。

1919年3月、張学良は父親張作霖が奉天に建学した軍幹部養成学校である東三省（東北）講武堂に第一期生として入学し、軍人としての第一歩を歩み始めることになった。19歳で講武堂に入学した張学良は、そこで戦術教官をしていた郭松齡と出会った。張学良に決定的な影響を与え、恩師と崇められた郭松齡に出会ったのである。

郭松齡については、張学良は次のように語っている。

「私は十九歳で東北講武堂に入学し、第一期生として卒業した。在学期間、教育長の熙格民及び本班戦術教官の郭茂唇（松齡）に認められた。特に郭松齡については、私たちは師弟関係から始まったが、さらに関係は深まって、親友として結びついた。彼は常に私に説いてくれた。東北の軍事が旧式で腐敗で、改革すべきだと。私は救国の志を持っていたけれど、まず東北を救うという志を立つべきだと。東北の軍事を改革させて、その軍事を強化すべきだと。それら是对内的にも、対外的にも均しく重大な意義を持っていると。私の父親はすでに私に重要な軍事職務を与えてくれていた。私は精神を奮い立たせ、一心一意、本物の軍人になるべきであって、私の父親の軍隊を改造することに専念すべきと。これはなによりも重大な仕事であった。しかも、私は誰よりもチャンスに恵まれていた。また誰よりも容易に成功しよう」と⁶⁶。

1920年2月、張学良は東北講武堂を卒業した。近衛旅団の旅団長であった張作相は、講武堂における優秀な張学良の評判を聞き、卒業した張学良を抜擢した。張作相は張学良が張作霖の長子であることから、その縁で丁重に迎える準備をしたとはいえ、やはり東北講武堂での優秀さに目を付けた側面も否定できない。

張学良は講武堂に入学した時、すでに父親の衛兵隊長（前文に書いた大隊長の名義で入学した）の肩書を有していた。しかし当時はまだ19歳であったし、講武堂の学生でもあったから、近衛旅団の旅団長というのは、ほんの肩書にすぎなかった。ところが張作相は、張学良が講武堂をまだ卒業していない段階で近衛旅団（第三混成旅団）の第二団の団長（連隊長）に任命してしまったのである。

張学良が講武堂を卒業すると、張作相は近衛旅団（第三混成旅団）の団長から旅団長に昇格させ、任命した。旅団長となった張学良は、そこで講武堂の教官であった郭松齡を引き抜いて、自分の参謀長に任じた。

張作相は張作霖の忠実な部下として、奉天軍閥の正統な継承者である張学良を育てようとしていたのである。それは張作霖の意を受けて、張学良に対する帝王教育を引き受けたのであろう。張作相は張作霖に対する最も忠誠な部下であったからだ。このことはその後、東北易幟の時に証明された。

やはり幽門中における張学良の口述では、張作相との関係を、次のように語っている。

「在学期間、私は既に第三旅団第二連隊連隊長（第二団団長）に昇任した。張輔忱（張作相）の抜擢であった。張輔忱は父親の最も重要な幹部の一人であった。片腕と称してもよかった。……彼は人となりが正直であった。能力が高くないが、彼の忠義は、これまで彼以外に見たことはないほどであった。……

⁶⁶ 寶応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、46頁。

彼による抜擢には、ある計画があった。当時、彼は東北三省巡閱使総参謀長兼第三旅の旅長であった。その後、彼は二十七師団の師団長に昇任した。しかし彼は第三旅団の旅団長を辞めずに、私を第三旅団第二連隊の連隊長に任命した。そして私に第三旅団参謀長の推薦を任せてくれた。私は郭松齡を推薦したのである。その後、軍隊の中の重大事件及び人事などの問題については、彼は郭松齡と私との協議に任せるとした。私は連隊長に就任した一年間以後、私が彼の旅団長ポストを代行するようにと命令した。その後、彼は旅団長の兼任を辞めて、そのポストに私を推薦した。私はとんとんと昇進していったが、殆ど彼が推薦してくれたおかげであった。民国十三年（1924年）、彼は吉林督軍に昇任した。私は彼の二十七師団の師団長を引き継ぐこととなった」⁶⁷。

団長（連隊長）から、旅団長、師団長へと昇進したのは、父親である張作霖のお蔭であるとはせず、張作相のお蔭であるとしている。様々な人物的配慮に気を配っていたのであろう。

第二節 郭松齡の軍事思想

ここでは、奉天に戻った郭松齡が、講武堂で張学良と出会った契機と、その後の過程を明らかにする。

1918年、広東の護法政権崩壊にともなって、郭松齡は古巣の奉天に戻ってきた。奉天督軍参謀長秦華の推薦によって、奉天督軍署参謀に任命された。秦華は陸軍大学時代のクラスメートであった。その縁で、奉天軍に仕えることとなったのである。しかし、広州の護法政権は、もともと北方の軍閥勢力に対しては、対抗的であった。だから、奉天軍閥から見れば、護法政権に身を投じた郭松齡が、奉天軍に復帰することは、それほど簡単ではなかったはずである。

袁世凱が死去した後、張作霖は奉天省を統率する奉天督軍兼省長に任命された。1919年2月、張作霖はさらに勢力範囲を黒龍江省と吉林省に伸ばした。急速な勢力拡大によって奉天軍の兵力は増大し、それに対応するためには多くの軍事に秀でた人材と指揮官の確保が必要であった。その軍備強化を目指して東北講武堂を再開することとなり、新たに“東三省陸軍講武堂”と命名した。こうした拡大路線のなかで、郭松齡は奉天軍に参加することができ、再開された講武堂の戦術教官に任命されたのである。

当然ながら、郭松齡が奉天に戻った目的に疑いの目を向ける人がいた。その疑いは、次のようなものであったという。

「彼は同盟員であったから、奉天軍に潜入して力を蓄え、中核部隊の幹部を養成し、奉天軍閥を打倒する機会を窺うのではないか」⁶⁸。

郭松齡は広東の護法政権から戻って来たために、張作霖からも疑われた。当然、孫文の革命党と思われたのである。東三省陸軍講武堂の入学式において、張作霖は皆の前で郭松齡を詰問した。その時の状況は次のようであった。

「張作霖は講武堂で、（郭松齡に対し）声を荒げて言った。汝はかつて革命党であった。今日は何しに来たのだ？ 郭松齡は何も答えなかったが、張作霖

⁶⁷ 寶応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、46～47頁。

⁶⁸ 彭景文「対郭松齡將軍的一些回憶」、『瀋陽文史資料』第3輯、前掲、43頁。

もそれ以上は詰問しなかった」⁶⁹。

郭松齡は何ら弁明もせず、さりとて張作霖もそれ以上の怒りは見せなかった。張作霖は、郭松齡を全面的に信頼していないことを表明したが、同時に郭松齡の軍人的技量に対し、一定の評価を下していたのであろう。

そして1919年3月、張作霖の長子張学良が、郭松齡が教官として着任した東三省陸軍講武堂砲兵科に、その第一期生として入学してきたのである。

張学良は特別な身分であったから、多くの教官が張学良に胡麻をすり、甘い態度で接した。ところが郭松齡だけが、教官としての本分を守っていた。

張学良は軍閥の家庭で育っていたが、郭松齡は張学良の思想が父親とは異なることに気づいた。外国人宣教師などとの交流を通して、張学良は正義感にあふれ、積極的にさまざまなものを取り入れる進取心を持っていると映ったのであろう。張学良は国家に有用な人材に育て上げることができると、郭松齡には思われた。だから、同盟会や護法政権を経験した郭松齡は、常に張学良に“強兵救国、抵御外侮”（強い軍事力を持って、国家を救う。外国の侮りに抵抗する）という思想を注ぎ込む教育を施すこととなった。

張学良は張作霖の太子としての特別扱いを嫌い、講武堂で一学徒として熱心に兵法の勉強に励んだ。砲兵の射撃原理は非常に難しく、当時の大学一年生レベル以上の数学と物理学の学力を身に着けていなければ、うまく理解することできない。張学良は正式の学校教育を受けていなかったが、郭松齡の細心な指導によって張学良は砲兵の射撃原理を含めて、さまざまな軍事知識もマスターすることができた。

教育した内容は近代兵法だけではなく、近代国家における軍事力整備の意義をも叩き込んだ。この時の郭松齡と出会いが、張学良の思想と、その後の運命に大きな影響を与えることになった。

奉天軍復帰の意図を疑われながらも、その手腕が高く評価され、徐々に高いポストに抜擢されることとなった。郭松齡は近衛旅団に転勤し、参謀長に任命された。第二团团長も兼任した。郭松齡にとって、手腕をさらに発揮する千載一遇の機会となった。

彼は張学良のもとで近衛旅団参謀長に就任すると、軍隊に近代訓練を一意専心にほどこして、軍紀を整えた。もともと封建的軍閥であった奉天軍は古い体質であって、近代軍隊としての規律が機能していなかった。その弊害を取り除いて、素質と軍紀が悪い兵士を淘汰した。具体的には、講武堂で近代兵法を学んで高い軍事素質を持っている卒業生を選んで、近衛旅団の下級士官に登用したのである。近衛旅団でも、郭松齡は自ら教官を担当して、学科と術科の訓練を教えていた。軍事訓練と軍隊管理について郭松齡を信用し、張学良はすべての権利を講武堂での恩師である郭松齡に委ねた。郭松齡から薫陶を受けた張学良は、その才能を信じて郭松齡を任用したのである。

郭松齡が手を付けた改革は、以下のような改革であった。

一、全旅団の兵士の数を月内まで、300名削除する目標を設定し、その一環として、全旅団のすべての炊事兵をなくした。そこで浮いた給料は各軍に分配して、団結を期した。軍隊の苦勞に耐える習慣を育成するために、炊事兵なき後、すべての兵士は順番に従って、食事作りを担当した。炊事兵の給料

⁶⁹李堅白「郭松齡反奉天起因」、同上、62頁。

は各兵士に配分され、これは一挙両得であった。

二、近衛旅団の指揮部に 8 名の憲兵を増加した。不法な下士官を取り締まった。

三、近衛隊旅団第二連隊に下士官小隊を設立して、各中隊から兵士を選んで、五カ月で訓練を終え、卒業できるようにした。この旅団の旅団長張学良及び代理旅団長郭松齡は卒業式で自ら卒証書を授与して、記念写真を撮った。

四、27 師団の師団長張作相と張学良は、端午祭の時に、下士官をねぎらって賞与を出したが、公費が不足していたため、私費から出費し、率いる部隊の下士官をねぎらった。その時、張作相師団長は 5000 元を出し、張学良旅団長は 3000 元を出し、率いる部隊の下士官一人一人に約大洋 5 角を支給した。しかし射撃練習の成績が優秀な士官と兵士のなかには、奨励金が支給されないとの不満があった。そこで旅団参謀副官二処に対し、射撃練習の成績が 30 点以上を取ったならば、士官と兵士問わず、功績として勤務評定に記録するとした。そして、個人的に功労金を支出して、小麦粉などを贈与し、激励するという目的を達した⁷⁰。

つまり、そこには四つの改革措置があった。一つ目は使えない人員を削除したこと。二つ目は軍隊規律を整えたこと。三つ目は軍隊をさらに訓練させたこと。四つ目は賞罰制度を作ったこと。四つ目は郭松齡が直接にはかかわっていなかったが、郭松齡が張学良に進言した案件であった。こうして一年も経たないうちに、近衛旅団は軍紀が厳正に保たれ、戦闘力も奉天軍の中で一番優れた旅団になった。

郭松齡の基本方針は精兵主義の確立であった。兵士の資質を高めるというこの精兵主義は張学良に引き継がれ、彼の軍事思想の中心になった。しかし当時の中国の軍閥は、兵士の素質についてはあまり重視しなかった。兵士の数が多いほど、戦闘で勝利を収めると考えられていたからである。張作霖も同じ考え方を持っていた。

近衛旅団を創設した時、ほとんどの兵士は張作霖に従ってきた“緑林”の仲間によって構成されていた。彼たちは戦闘に手柄をあげることに誇りを抱いていた。高度な学科と術科に関しては、全く理解していなかった。学科と術科の学習と訓練には興味がなかった。だから特に郭松齡が進めた厳しい軍事訓練と軍隊整備の政策に不満が満ちていた。張学良はこうした不満を強引に退けた。張学良は常々皆に語りかけていた。

「私は郭松齡である。郭松齡は私である」⁷¹。

この説得によって、郭松齡のやり方に反対する人は出てこなかった。こうして、郭松齡の方針に従って、近衛旅団の軍事訓練は成果をあげていた。張学良の全力的な支援と郭松齡の軍隊訓練で軍紀を整えることに成功し、そのおかげで近衛旅団の戦闘力が非常に高くなった。

張作霖は、張学良と郭松齡の努力によって、近衛旅団がよい成果をあげたことを知っていたが、表面だってその成果を高く評価することはなかった。

1920 年秋、張学良と郭松齡は張作霖の命令に従って、吉林省の佳木斯で勢

⁷⁰張友坤、錢進『張学良年譜』(上) 前掲、32~34 頁。

⁷¹遼寧省委員会文史資料研究委員会『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第 16 輯、遼寧人民出版社、1986 年、27 頁。

力を持っていた馬賊を攻撃して、佳木斯を占領した。この戦闘は張学良にとって、非常に重要であった。なぜなら、張学良の生涯で初めて指揮官として、戦闘に参加した初陣であったからだ。そこで張学良は、討伐と宣撫の両面政策を採っていた。

この作戦は、『張学良年譜』によれば、次のような有様であった。「1920年10月30日の『盛京時報』によれば、近衛旅団第一連隊第二大隊は大砲を使用して、馬賊と交戦した。戦闘は一昼夜かかった。80余名の馬賊の頭領を捕えた。その場で処刑した。しかも、30匹の兵馬を獲得した。……また、300名の馬賊を殲滅した。現在、残っている馬賊は逃げた。張学良が言うところでは、吉林での馬賊討伐は初めての戦闘であり、これは“剿撫並用”であって、戦闘と講和の始まりである」⁷²。

この結果については、次のような会議がもたれた。

「1921年1月28日、張作霖は軍署で軍界要員及び参謀長、参議などを召集して、会議を開いた。張学良から佳木斯で馬賊を討伐した経過と馬賊対策の方法研究の報告を受けた。また佳木斯では、説得によって1000名の馬賊が降伏した」⁷³。

肝腎な点は、戦闘だけでなく説得による投降（撫降）という成果を上げたことが強調されていることだ。張学良は初めて、“剿撫並用”という方法を実行し、成果を上げることができたのである。

郭松齡の第二団は一つの部隊に統合された。“郭松齡支隊”と呼ばれるようになった。この部隊は厳正なる軍紀を貫いた。部隊が滞在、通過した地点の住民に迷惑をかけることもなかった。通常の軍閥軍は地元民からの略奪などが頻繁に発生し、嫌われていたが、郭松齡支隊は、そうした略奪もなく、高く評価されたのである。その一例が次のことから明らかである。従来の軍閥軍では考えられない軍紀厳しい有様が描かれている。

「同賓県商会は“奉天巡悦使衛隊”を褒め称えた。大意は以下の通りであった。混成旅団参謀長兼第二連隊連隊長郭松齡が率いる部隊は樺川県佳木斯へ馬賊を討伐して行く途中で同賓県を經由した。ここで戦闘用に車輛を購入したが、当時の正常価格通りにお金を払ってくれた。県城に入城してから店舗に宿泊したが、各自が炊飯した。使用された食べ物の野菜や燃料についても当時の正常価格通りお金を払ってくれた。公平な取引であった。街で一泊したが、市街で三、五人肩を抱きあつて暴れるような狼藉者も見かけなかった。次の日、号令一下、肅々と迅速に出発した。……その故に、感動して、褒め称えた」⁷⁴。

郭松齡の厳しい訓練が日々繰り返されていたおかげで、戦闘の勝利と地元民の称賛を収めた。今回の戦闘を通して、張学良と郭松齡による近衛旅団の改革と整理が成功した事実を証明した。成果はたちまち現れたのである。

1921年2月16日、郭松齡からの電報が届いた。それによれば、1000余人の馬賊が正月の時に武装蜂起をしようと企んでいた。郭松齡の旅団は即刻部隊を整えて、猛烈なスピードで進んだ。馬賊を四面から包囲して、10余時間の交

⁷²張友坤、錢進『張学良年譜』前掲、36～37頁。

⁷³同上、39頁。

⁷⁴同上、38頁。

戦の末、馬賊は死傷 700 余人におよんだ⁷⁵。

張学良や郭松齡の部隊は、軍紀と風紀を重視した。とくに愛国愛民の文明軍人であることが強調された。彼は旧軍閥が庶民に迷惑にかけることを非常に嫌った。軍紀を乱して住民に迷惑をかけた兵士については、厳刑で対処した。

郭松齡に所属する一連隊の副中隊長王奎は、坡東一道地方へ馬賊の討伐に向かった。軍事チャンスを逃して退却する際に、率いる警備隊小隊長の傅景山は東路一帯で婦女を強姦した。敗走中にはよく見かけられた蛮行であったが、憤った商民に告訴された。張学良はこの規律を違反した行為を許さなかった。王と傅を即日、銃殺に処した⁷⁶。

規律違反と見なして、断乎とした処分を実行することによって、以後は張学良の軍隊の中で庶民に迷惑をかける兵は出なくなり、張学良も庶民に敬愛されたという。

そして、その年の秋には更に吉林、黒龍江の馬賊の討伐で戦功をあげ、張学良は 1921 年 11 月には奉天軍第三混成旅団の旅団長となって、陸軍少将に昇進した。

吉林、黒龍江の馬賊の討伐では、郭松齡の優秀な軍事才能が十分に発揮された。張学良は張作霖に対し、郭松齡が吉林、黒龍江の馬賊の討伐で戦功をあげたことを訴えた。こうして張作霖も、次第に郭松齡を重視するようになった。

1921 年、張作霖が東三省巡閱使兼モンゴル経略使になった。勢力範囲は東北三省だけではなく、熱河、チャハル、綏遠までに伸ばしたのである。張作霖はこのチャンスを利用して、十個の混合旅団を拡充した。

1921 年春、郭松齡は吉林、黒龍江省の馬賊を平定した以後、奉天に戻って来た。奉天の北大営に駐在することになった。張作霖の命令を受けて、軍隊を拡大した。当初、張作霖が東三省巡閱使に就任した時に、一つの旅団を自分の衛隊にした。これにより原第三混成旅団は巡署衛隊旅団に変わった。張作霖は旅団長に任命された。この時、この近衛旅団は旧の番号に戻った。講武堂第一期に卒業した張学良は、張作霖の代わりに旅団長におさまった。それにともない新兵を募集し、新兵は第八混成旅団に編成された。張作霖は郭松齡を第八混成旅団旅団長に任命した。郭松齡の第八混成旅団と張学良の第三混成旅団は同じところに駐在したから、“三、八旅”と呼ばれた。

この時から、張学良の重用と推薦のおかげで、郭松齡は旅団長という軍権を把握する高級ポストに昇進することができ、軍の改革を推進しようとする願望を実際に実行できるまでにたどり着いた。

張学良は“三、八旅”の指揮官であったが、部隊の人事異動と作戦計画及び戦術戦略と軍事訓練などの軍事権利をすべて郭松齡に委ねた。張学良は口を出さなかった。張学良の応援によって、郭松齡は三、八旅団でさらに改革に取り組んだ。主要の措置は以下の通りであった⁷⁷。

士官には軍事学校の卒業生を重用して、次第に古くからの粗野な緑林出身の旧式士官を淘汰していった。そのために、郭松齡は張学良に講武堂の拡充を建

⁷⁵同上、39 頁。

⁷⁶張友坤、錢進『張学良年譜』(上) 前掲、39 頁。

⁷⁷以下の郭松齡の改革については、張学継『張作霖幕府与幕僚』浙江文芸出版社、2011 年、228 頁。

議した。そこで軍官教育班と教導団及び軍士教導隊を成立させ、優秀な軍官と文化的素養があった士官を選んで、軍官教育班で新式教育を受けさせた。そこを卒業した兵士を各部隊に派遣して、新兵士を訓練させるシステムを確立した。郭松齢自らも教官となって訓練した。同時に、多方面の人材を揃えた。およそ正式軍事学校の卒業は“三、八旅”の差遣隊に編入して、人材を備蓄した。所属部隊の各級士官が欠員した場合、そこから士官を選んで、補充した。

この軍隊改造業務は、次のような特徴を持っていた。

一、良家の子弟を募集して、土匪上がりの兵士と兵隊のクズを削減した。規律を厳格して、住民に迷惑をかけることを許さなかった。

二、軍需の独立を実行した。公金と兵士の給料をくすねる長官の汚職が横行していたが、厳禁された。違反者を厳罰に処した。軍需は部隊の金銭を掌握する重要な部門であった。それまでの奉天軍閥は、その他の軍閥部隊と同じように、軍需の管理担当者には、各級の長官（旅団、連隊、大隊）が自分で都合のよい身内の人物を任命してきた。任命された連中は、一般的にいわゆる、“三爺”と呼ばれていた。即ち、近親者の祖父、女婿などの連中だった。彼らは長官と姻戚関係を持っていたから、長官は軍需部門の経費を自分の帳場と見做した。自由に公金を横領し、自分のものにした。兵士たちはその行為を“兵士の血を飲む”と称した。これはすべての軍閥部隊の普遍的な現象であった。この悪弊を改めようと、郭松齢は“三、八旅”に来てから軍需の独立制度を押し広めた。軍需業務の専門家を任命して、軍需部門を掌握した。“兵士の血を飲む”という現象をやめさせたのである。

三、さらに愛国教育を強化した。兵士の職務は“軍人守土衛国”にあるという天職観念を叩き込んだ。郭松齢は常に部隊の士官と兵士に、次のように訓示していた。

郭松齢の愛国教育は、奉天軍に深い影響を与えた。郭松齢が自ら育成した士官と兵士は、その後の郭松齢叛乱では反奉戦争に追随した。郭松齢の改革に共鳴したからであろう。さらに満州事変以後は、愛国教育を受けた多くの兵士は抗日戦争の道に踏み出したのである。

郭松齢が進めた軍事改革の成果は、郭松齢死後に張学良が東北の政権を握ってから、実際に実現したと言い切れるであろう。このように、郭松齢は叛乱で処刑されたものの、張学良の軍事思想に大きな影響を与えたことは間違いない。

“三、八旅”の戦闘力、軍事素質及び軍紀は奉天軍の中でも飛び抜けていた。郭松齢と張学良の整軍の目的は、昔の奉天軍閥とは根本的に異なって、近代軍への脱皮を図ることであった。改革途上にあった1922年、張作霖の奉天軍は、北京政権の掌握をめぐる直隸軍閥の曹錕と第一次奉直戦争を戦った。ところが曹錕の直隸軍に敗れてしまった。この敗北を通して、張作霖は奉天軍の弱点を発見した。武器は低劣で、軍事訓練が欠乏し、組織が不健全であり、優秀な軍事指揮官が不足していた。

奉天に戻った張作霖は奉天軍の再建に取り組むこととなった。目を付けたのは、近衛旅団整備に実績を見せた張学良であった。張学良を東北三省陸軍整理処の参謀長に任命し、奉天軍の訓練と再編に当たらせることとなった。

この権限移譲について、伝記『張作霖』は次のように記している。

「陸軍整理処の職能は、部隊の整編と人事異動と昇進などに責任を持つことであった。最高戦略決定は、張作霖を始めとする統帥部によって決められるも

の、他の軍事案件は陸軍整理処に決定権限が与えられた。

また、東北陸軍講武堂の拡張も実現された。張作霖は自ら講武堂堂長に就任し、張学良は講武堂監督に任命された。中国陸軍大学を卒業した蕭其煊が講武堂教育長に任命された。郭松齡は訓練教官に任命された。そして、張学良と郭松齡の“三、八旅”（二、六旅団に改編された）が、模範的モデルをして示された。張作霖は張学良に権限を委ねて、奉天軍の弱点を改善させた⁷⁸。

いわゆる、「整軍経武」であった。

東北三省陸軍整理処の参謀長となった張学良は、奉天軍の「整軍経武」にあたって、まず郭松齡の意見を聞いてから、奉天軍の軍事訓練を強化し、軍事組織と軍事管理を改善し、軍制を改革し、兵器工場を拡大し、財政経済を改革した。こうして張学良は奉天軍を整編したが、それは郭松齡の構想に従って再編、整編が進んだともいえよう。

東北陸軍講武堂を拡充させるに当たっても、郭松齡は意見を出した。その内容は次のように整理されている。

「最初の三期の学生はすべて部隊から選んだ職業軍人であったが、連隊以下の軍人は緑林出身の士官であったため、その文化水準はとても低く、学習能力において困難があった。これに鑑み、第四期の学生の募集において、大きな改革を行った。張学良は郭松齡の意見を受けて、社会から中学生を受け入れた⁷⁹。

もちろん中学生以外のすべての学生は、各部隊の現職士官から選んだ。

軍士教導隊に関する状況については、元の教導隊兵士であった張国威が以下のように回想している。

「総値官の楊煥彩は、本隊と郭松齡旅団長の指示によって、東北陸軍講武堂第四期生の新規募集を始めた。教導隊の隊員も、中学校と同じ学力レベルを持っている隊員であるならば入学試験を受けることができると発表された。隊員たちはこのことを聞いて、非常に喜んだ。東北陸軍講武堂は陸軍士官を育てる学府と言われていたからである。もし東北陸軍講武堂を卒業できたら、陸軍士官になれるのではないかと隊員たちに期待された。従って、数百人の隊員が入学試験を受けた。郭松齡旅団長は自ら試験問題を作成し、隊員の答案用紙を採点した。結局 50 名しか合格させなかった。そして郭松齡自ら、50 名の合格者の名前を読み上げた⁸⁰。

第四期の教官は、その殆どが日本陸軍士官学校を卒業した高級士官であった。第四期の卒業生の素質は、それまでの三期より、非常に高くなった。卒業生の素質が高まったために、軍隊の戦闘力も高くなった。そのことが、その後に発生した第二次奉直戦争で、奉天軍が直隸軍と戦えた重要な原因になった。

こうした優秀な卒業生によって編成され直した軍隊の内容は、次の通りであった。

「一、軍官の昇進は、軍事試験によって決められた。以前のような各部隊の長官による推薦という制度は廃止された。二、各部隊は人材を育成する必要があり、素質と軍紀に劣る兵士については淘汰した。三、各部隊は学科時間を配

⁷⁸常城『張作霖』遼寧人民出版社、2000年、97頁。

⁷⁹徐轍、徐忱『張学良』中国文史出版社、2012年、38頁。

⁸⁰張国威「郭松齡熱心部隊整訓」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、137頁。

置して、毎日二時間ほどの軍事授業を行った。四、各部隊に軍事雑誌と講義を配布して、士官と兵士に閲覽し、見聞を広めさせた。五、各部隊は必ず兵員を充足させることとし、兵隊の給料の上前をはねることを厳禁した。六、アヘンを吸うことは厳禁とされた。発見されれば、免職させられることが決められた。そして、軍人の年齢は十七歳から四十歳以下に限定された。身分が不明な人物については淘汰した。もう一つ、重用な規定が決められた。軍需を独立させて、完全な後方勤務を保障する制度が作られたことである。糧秣、被服、兵器、通信、交通、軍医などの系統に手を加え、より完全なものに変えていった。軍需分野を独立させた以後、軍人の汚職行為がなくなった。軍隊への物資供給が保障されるようになった。それ以外としては、軍法も独立させた⁸¹。

新しくなった奉天軍には、蒋介石も敬意を示していたようである。1934年、蒋介石は新しい奉天軍（東北軍）について、以下のように張学良に語ったことがあった。

「私たちは東北軍から教えてもらうことが二つあった。一つは、軍需を独立させたこと。もう一つは人材の活用制度であったこと」⁸²。

この蒋介石の発言のように、当時の奉天軍が軍需を独立させたことは非常に正しかった。完備な軍需制度がなければ、奉天軍は強化されなかったであろう。

1922年10月下旬、陸軍整理処の決定によって、大幅な軍制改革が実施された。「満州現代史」によれば、その内容は次の通りである。

「一、東北三省の軍制は師団、旅団制に統一された。二、東北三省の軍隊の番号と順番が統一された。三、東北三省の軍隊における駐在地の管轄が杜撰であった。そこで各部隊は、守備任務の交替をすることとした。奉天省内の軍隊の三割を吉林に駐在させ、二割は黒龍江に駐在させるように配備し直すことができた。四、各部隊の連絡を密にするために、東北三省各部隊の長官も移動・交換させることはできるようにした。就任する場所は、くじ引きで決められることとなった。五、営長（大隊長）以下の軍官の軍刀、軍服を回収して、軍人の階級は肩章によって区別されることとした。六、東北三省の各部隊の歩兵は騎兵と砲兵の戦術と操作仕方を訓練させた。七、軍隊の反乱と脱走兵を予防するために、今後、東北三省の各部隊の士官と兵士は保証書を書く必要があった。八、今後、各部隊は新たな兵隊を編成することとなった。新兵士は一ヶ月の訓練を受けさせて、不合格者は排除した。九、軍需費を支出した場合、その内容を新式帳簿に記入して、師、旅団部の長官に監察させることを決めた」⁸³。

郭松齢は厳しい訓練に耐えられ、軍事技量の学習に優れた優秀な兵士のみを採用するという精兵主義を取っていた。この精兵主義は、実は郭松齢の軍事思想の中核であった。

郭松齢は、数だけ多くの兵力を持っていても、兵士の素質がよくなければ、勝利を収めることができないことに気付いていた。

奉天軍のなかで、張学良に影響を与えた人物は、当然ながら郭松齢一人であったわけではない。奉天軍における郭松齢のライバルともいえる楊宇霆もその一人である。そこで次に、楊宇霆の軍事思想を検討してみる。

⁸¹常城『張作霖』前掲、95頁。

⁸²王書君、唐徳剛『張学良世紀伝奇—口述実録』上巻、93頁。

⁸³常城『張作霖』前掲、95～96頁。

楊宇霆の息子である楊茂元は、次のように父親を回想している。

「私の父親である楊宇霆は原名を玉亭という。字は鄰葛であった。原籍は河北省灤県戴家峪であった。曾祖父の楊正榮は清朝同治年の時に飢饉のために、万里長城を越えて関外にまで逃避した。奉天省法庫県東 15 キロメートルにある蛇山溝村に定住することとなった。祖父は楊永昌で、祖母は張氏であった。当時の家は貧乏であった。父親である楊宇霆の誕生は 1885 年旧暦の七月二十(陽暦 8 月 29 日)であった。彼の幼少期、家庭の生活は向上し始めていた。祖父は蛇山溝村で荷車屋を経営していた。

しかし、祖父は父親が本を読むことに反対した。常に“本を読んでも、飯を食える。本を読まなくても、飯を食える。”と言った。その後、他人の説得を受けて、父親は塾に通うことができた。父親は文章を見れば、すぐに覚えるという才能があったために、父親の教師であった高先生は、引き続いて父親を教えることは望ましいことではないと思った。父親の学業を遅らせると心配するために、父親を鉄嶺県の秀才である張先生のところに推薦した。父親は幼い自分を目覚めさせてくれた高先生の恩情に報いるため、その後も、高先生の自宅まで出向いて、孝養を尽くした。我々兄弟は彼を高爺さんと称した。その関係は瀋陽が解放されるまで続いた。一生懸命に勉学を続けたが、家庭は店の経営で忙しく、科挙試験には受験できなかった。その後、同じ楊姓の人と知り合っ、支援を受け、清朝の最後の科挙試験で秀才に合格した。当時は弱冠 16 歳であった。以後、科挙試験が廃棄されたために、父親は日本へ留学した。出国の時に、祖父は留学資金を出せなかったが、私の伯父がやり繰りして、日本へ留学することができた。そこで日本士官学校に入学した⁸⁴。

実際のところ、楊宇霆は 1908 年、奉天中学堂に入学した。当時の東三省総督であった趙爾巽に選ばれて、1909 年 6 月日本へ留学した。日本では日本士官学校中華隊第八期砲兵科を卒業した。卒業した 1911 年 5 月に帰国した。帰国後は、奉天軍の第三鎮見習という職に任命された。やがて、趙爾巽は再び東三省総督を務め、東北三省講武堂を創設した。日本から戻った楊宇霆は、その学問を買われて、講武堂の教官に任命された。各巡防營の中下級士官を訓練するポストであった。1912 年に中華民国が成立すると、楊宇霆は北京陸軍部科員に任命されたが、1913 年には奉天に戻り、新たな東三省都督府の軍械課長兼軍械場場長に任命された。

楊宇霆は、張作霖と奉天軍にとって、最も存在感が大きかった将校の一人である。なぜなら日本で受けた軍事教育が、奉天軍の中でも一番先進的なものであったからだ。

楊宇霆は郭松齡と違って、日本の士官学校で近代軍事戦略を学んできた高級将領である。楊は軍隊の訓練と奉直戦争など具体的な軍閥混戦の戦闘を経験する中から、郭松齡と同じように、近代戦争で勝利を収めるためには、軍隊の近代化という改革の必要性が分かっていた。しかし、その対応は若干異なっていた。楊宇霆は奉天督軍署総参議と東北三省兵器工場総督辦という二つの職に就任していた間、東北三省における軍事産業の生産拡大を進めた。軍事改革には、軍事産業の発展という側面も組み込まれていたのである。

1924 年～1925 年、1926 年～1928 年、楊は二度に渡って、東北三省兵器工場

⁸⁴楊茂元「回憶父親楊宇霆」楊宇霆記念館、2001 年、1～4 頁。

を拡張した。この拡張によって、東北三省兵器工場は当時、国内最大の銃器、弾薬ともに生産できる総合的な近代兵器工場に成長した。それにともない、東北軍の装備も強化、改善された。楊の努力によって、張作霖の奉天軍の実力は北洋軍閥の中においても、群を抜く強力な軍事力を誇れるようにまで強化された。その後、張作霖は北京を支配する北洋軍閥政権の最後の首領となったが、その実力はこうした軍事産業の近代化が大きく貢献したのである。

そこで次に、こうした東北地域における兵器工場の近代化について、具体的な成果を検討したい。

1897年、武器を製造することができない奉天軍の弱点を危惧した吉林將軍延茂は、朝廷に兵器工場の建設を進言した。朝廷は奉天に兵器工場を作ることを認めた。このため1899年、盛京將軍依克唐阿が朝廷の命令によって、奉天機械局を成立した。しかし、兵器を作らず、銀貨を鑄造した。

中華民国になって袁世凱が死去した後、張作霖は盛武將軍を任命されて、同時に巡按使を兼任し、奉天の軍務を督理することになった。こうして東北三省の武器製造が張作霖のもとで本格的に始まった。それは、1919年に張作霖が東三省兵工廠設置を定めたことから始まるのであった。

この兵工廠は、張作霖軍、すなわち奉天軍が使用する武器弾薬を製造し、しかも安定した兵器供給を確保するために計画されたものであった。その規模は、当時の中国で最大のものであった。そして、1924年頃には、張作霖の目論見どおり、自軍が使用する兵器を自給できるようになっていた。

1919年8月から1924年の時期は、兵器工場の初期建設であった。1919年秋、張作霖は元奉天軍械場場長であった陶冶平に命令して、兵器工場建設の準備にあたらせた。陶冶平は1921年、無煙薬場、銃弾場、銃場を建設した。1923年に陶冶平は退職して、韓麟春がその職を引き続いた。その韓麟春はすぐに転任して、1924年に楊宇霆がその職を引き継いだのである。日本の軍事強化は、軍需産業の発展に基礎があり、それを日本で学んできた楊宇霆によって、いよいよ本格的な兵器工場の整備、強化が始まるのである。

そこで次は楊宇霆の兵器工場建設について、具体的な成果を検討したい。

楊宇霆は東北三省兵器工場総督辦に就任してから、兵器工場を発展させた。『遼寧軍工史料』によれば、次の通りであった。

元々、奉天にあったのは基礎的兵器工場（砲弾場、銃弾場、機械場、発電場）であり、さらに砲場、銃場、火具場（引信と火工品）、鑄造場（原機械場）、火薬場、木工所などの工場があった。総計八場、四处、及び統計委員会、兵工学校、兵工病院などの十七個にのぼる単位であった。

1926～1928年、楊は旧来の工場の規模を拡大した。例えば、銃場と砲場はこの間、以前より七倍～八倍ほどに拡大された。その後、火工、塩素電解、硫酸、ダイナマイト及び黄銅を引き伸ばすなどの工場を増やした。満州事変勃発までには、兵器工場の職員は100人から1000人までに増員された。工場労働者は300人から2万人まで増えた。一番多い時は2.5万人に達した。工場を守る防衛軍隊は1300人がいた。1928年、兵器工場の中の機械設備は8000部に達した。発電機は4台があった。発電の総量は一万キロワットになった。これらの工場拡大、生産拡大は、楊宇霆の積極的な取り組みの賜物であった⁸⁵。

⁸⁵遼寧省機械工業委員会軍工史誌辨編『遼寧軍工史料』第2輯（近代兵器工業）1988年、

兵器工場を拡大する初期には、楊宇霆は兵器製造機械を海外から購入する路線を選んでいった。具体的には、次のような様子であった。

「工場の建物と製造機械はデンマーク文徳会社が引き受けた。1923年、銃弾、砲弾場の設備は日本から購入してきた。1925年、大量の機械をドイツから購入してきた。特殊機械と一般設備以外に、兵器工場が一番誇れる大きな特徴は、完全的な検証設備と検証場所を配備していたことだ。例えば、火砲と歩機関銃の射撃場、化学分析器械、切断試験器、金属晶形カメラ、張力試験機、圧縮試験機、転換試験機、ばねの強さを測る機械及び電気ストーブ、電気高温機械などがあった」⁸⁶。

技術面から言えば、当時の東北三省兵器工場は中国国内のなかでも一流レベルになっていた。この兵器工場は引き続いて拡充を進めた。生産区は3244ムーを占めていた。工員の生活区は448ムーを占めていた。建設用の資金は3億銀元になった。全国最大規模の兵器工場になったのである。

兵器工場を拡充する過程で、楊宇霆は兵器工場の場合まで鉄道のレールを引き入れ、プラッドホームを造った。工場と鉄道を直結させたのである。

楊宇霆は事業拡大に当たって、専門技術人材の育成にも力を注いだ。

初期の兵器工場には、近代工場を支える人材が少なかった。楊宇霆は人材確保のために外国から専門家を招聘してきた。

外国から招聘してきた専門家は、日本人、ドイツ人、オーストリア人、ロシア人とスウェーデン人などの30人がいた。顧問、技師、技士などのポストを占め、皆が重用されていた。外国の専門家は、機械の設置、機械の部品と工具モデルの改造、機械の部品と工具モデルの設計、技術人材の育成などの仕事に従事していた⁸⁷。

外国の専門家は兵器工場の建設に大きな力を尽くした。楊宇霆は各国の専門家を重用した。しかも、招いた各国の専門家を自国に戻らせ、そこから先進的な武器装備と生産設備を購入させることとなった。楊宇霆は外国専門家の招聘によって、世界レベルの先進的な国防科学技術を獲得することに成功した。同時に、専門家を利用して、国内の武器技術人材をも育成していった。

楊宇霆は有能な人材確保のために、資金を惜しまなかった。人材確保で、けちなことをするなど、楊は張作霖に進言した。その進言を尊重し、「ある日、張作霖は兵器工場に属する弾薬場の責任者葉禾と銃弾場の責任者呉伯琴を招聘するため、その場で二人に5万銀元の小切手を与えた」⁸⁸。このエピソードからも明らかのように、張作霖は楊宇霆の意見を尊重し、人材確保に資金をおしまなかった、といえるであろう。

兵器工場の発展にとって、外国の専門家と技師の力だけでは、十分ではなかった。楊宇霆は、国内の人材を育てることもまた重視した。そのために、楊宇霆は兵器学校を成立させた。「東北省兵器工場」の研究によれば、楊宇霆の努力でつくられた兵器学校は次のようであった。

84～87 頁。

⁸⁶遼寧省機械工業委員会軍工史誌辨編『遼寧軍工史料』第2輯（近代兵器工業）前掲、100～102 頁。

⁸⁷陳修和「奉張時期和日偽時期的東北兵工場」、全国政協文史和学習委員会『文史史料選暨』第25輯、中国文史出版社、1999年、25頁。

⁸⁸徐轍、徐悦『張作霖』前掲、139頁。

「学生は中学校、高校、専門部に分けられた。三三制度を採用した。中学校を卒業すると、兵器工場で三等技手として勤務させ、三年間の実習を施した。高校を卒業すると、練習生として兵器工場に勤務させた。うまくいけば、一等技手に昇格できた。専門部を卒業できた学生は大学卒の学力を持っていた。兵器工場で一等技手あるいは技士を務めていた」⁸⁹。

楊宇霆は、さらに中国国内から幅広く人材を集めた。兵器工場の規定によれば、「中国国内の工科大学で卒業した方は兵器工場で副技士に任命する。日本の大学を卒業した方は技士、あるいは副技師に任命する。日本の高工を卒業した方は技士、あるいは副技士に任命する。欧米への留学生は技士、あるいは副技師を任命する」⁹⁰。その後、外国の専門家が減少したが、中国国内の人材が成長しはじめたために、兵器工場の活動には影響がなかった。

兵器工場の労働者は上海、漢陽など先進地区から集められた。東北三省出身の労働者は少なかった。とくに上海の兵器工場で働いた経験をもつ労働者が多かった。この経験者たちは来る前にある程度の技術を持っていたから、兵器工場は短期的に発展することができた。

次の特徴点は、完全的な企業管理制度にあった。

東北三省兵器工場は極めて整備された管理機構を持っていた。その具体的機構は次の通りであった。

「総辯の下に、公務処、材料処、審査処、庶務処、市政建設管理処、統計委員会、会計課、文牘科があり、各生産場にも科学研究会を付属させていた。兵器工場病院、兵器工場学校などの機構も整備されていた。各処、各場の組織は厳密であった。公務処の下に、製造股、機械股、建築股、核算股、訓育股、水道所、蒸気所、発電所があった。審査処の下に、第一股（生產品の改良と設計及び工作図を制作することを主管する）、第二股（生產品の検査及び模本を製造することを主管する）、第三股（材料の検査を主管する）があった。材料処の下に、採運股、収発股、木工股があった。庶務科の下に、庶務股、査察股、衛隊所があった。各処には、処長一人、処員、司事、司書など若干の職員がいた。各股と各所には、主任一人、股員、所員など若干の職員がいた。文牘、会計両科には督辦、総辯、會辯辦公庁内、各科長は一人がいた。科員、司事、録事は若干がいた。各場の組織は殆どこれと同じであった。工場の下には、二つの股があった。第一股は製造を主管した。第二股は事務を管理した。第二股の下に若干の所があり、所の下に若干の班があった。各場の場長一人、各股主任一人、各所所長一人がいた。每班には首領または領工がいた。その他芸徒、職人、場員、工人管理者がいた。技術人員は正、副技師（正、副工程師）、第一、二、三等技士、第一、二、三等技手、第一、二、三等製図員を分かれていた。各場の股主任、所長等の職務は技師、技士を担任した」⁹¹。

兵器工場の完全な組織体系が確立することによって、生産能力と工作効率も高まった。

1928年、注目すべきこととして、兵器工場で科学研究会が組織された。その

⁸⁹ 瀋振榮「東三省兵器工場」、『遼寧文史資料精粹』第1巻、遼寧人民出版社、1999年、523頁。

⁹⁰ 『中国近代兵器工業』編審委員会『国近代兵器工業—清末至民国的兵器工業』、国防工業出版社、1998年、177頁。

⁹¹ 同上、178頁。

目的は、兵器工場の人材を集めて、兵器と工兵に関する科学技術を研究することであった。そして、会員の研究意欲を掻き立てるために、各国の研究者と専門家の学理と経験を紹介した。皆が集まり、有益な意見を広く吸収するという成果をもたらした。

「研究会会員としては各場の場長、技師、技士が担任した。毎週、一回、二回ほど集会するようにと要求された。研究会の会長は弾薬場の場長洪中であった」⁹²。

研究会が開催されていたから、中国国内の研究者の視野を広めた。それにもなって考え方にも変化があり、中国と各国の軍事技術の交流を促進した。この研究会は《東三省兵器工場科学研究会雑誌》という月刊雑誌を出版した。雑誌の内容は造兵、火薬、新兵器科学、弾道、応用科学、器楽冶金、工程などが盛り込まれていた。

完全な検査制度があることは、この兵器工場の特徴であった。審査処は検査という仕事を管理した。

「例えば、審査処の第二股は生産品の検査を管理した。火砲と歩機関銃の射撃場を備えた。火砲の後退距離、砲架を取り付ける高度、砲座の固有偏差、銃弾と砲弾の初速、火薬ガスの最大の圧力、雷管の精度などのデータを集めた。銃弾、砲弾、銃、砲及び兵器工場の工具、模本などの物の検査も完全な制度があった」⁹³。

この検査制度は当時の中国でも、非常に先進的な管理方式であった。生産された武器の質量と安全を保障して、軍隊の戦闘力を高めた。

兵器工場は武器を生産するばかりではなく、奉天軍の武器装備の修理の仕事も担当していた。しかし、各部隊の武器管理は、厳しい規則が徹底されていなかった。「各部隊の武器が勝手に持ち込まれ、正式の依頼公文もなく、修理時間も少なく、対応できない」⁹⁴有様であった。

従って、楊宇霆は「緊急の軍事時期以外、どこでも、正式の公文と司令部の命令があるもの以外は受け取れない。製造品の検査を実行して、資金が必要な部品購入などについては、先ず、経験がある技術専門家を任命して、多数の職員ができるようになって、はじめて計画を実行できる」⁹⁵と規定した。楊宇霆が強調したことは、管理面における紀律の重要性であった。まず規則制度を策定し、規定に沿って仕事を進めることで、兵器工場の管理秩序を安定させたのである。

楊宇霆の軍事思想を端的に表現すれば、軍隊の近代化と先進的な武器を備えた軍隊を創ることであった。そのために、各国から先進的な武器を購入するばかりではなく、自分の先進的な兵器工場が必要だと考えていたのである。

明らかに、軍紀厳正化など軍人精神の近代化を進めた郭松齡と、兵器生産体制の近代化を進めた楊宇霆とは、ともに軍事的近代化路線にかわりはなかったが、それぞれ異質な軍事的側面で、その力量を発揮してきたのである。

⁹²李滔、陸洪洲『中国兵器工業史』兵器工業出版社、2003年、102頁。

⁹³陳修和「奉張時期和日偽時期的東北兵工場」、全国政協文史和学習委員会『文史史料選覽』第25輯、中国文史出版社、1999年、178頁。

⁹⁴遼寧省檔案館『中華民國資料叢稿—奉天軍閥密信』中華書局、1985年、164頁。

⁹⁵同上。

第三章 張作霖の軍事戦略

張学良の軍事思想形成に、大きな影響を与えたのは、まずは郭松齡であり、次いで楊宇霆である。しかし、なんといっても張学良は張作霖の長子であり、その影響は無視できない。張作霖死後になると、かつての郭松齡の影響もあって、張作霖の軍閥的戦略の克服を目指し、張作霖を反面教師的に捉えながら、新しい張学良の成長を試みた。

このため、ここでは張作霖の軍事戦略をまとめておきたい。それに叛逆したのが郭松齡の反奉叛乱である。東北近代史の軍事的、政治的ドラマを形成した張作霖は、本当に叛逆され、克服されるべきものであったのか。

第一節 緑林出身の張作霖奉天軍閥の形成

1875年3月19日、張作霖は奉天省海城県小窪村で生まれた。字は雨亭であった。原籍は河北省大城県（張作霖の原籍は竇応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』の張学良の自述による）。曾祖父張永貴は道光元年（1821年）、原籍の河北省大城県では生活が維持できず、郷里を離れて河北省から奉天省海城まで移動してきた。祖父張發は4人の子供にめぐまれ、その三子である張有財が張作霖の父親であった。妻の王氏は先夫の子（李作泰）を連れて、張有財と結婚した。王氏は3人の男の子と1人の女の子を生んだ。長子作泰は早年で亡くなった。次男作孚は宣統年間巡防營の哨長を務めたが、馬賊を討伐する時に戦死した。三男は張作霖であった⁹⁶。

実は連れ子の長子作泰は、張作霖の父親である張有財に殺されたという。張学良の口述で次のように述べている。

「私の伯父（張作泰）は、端麗な男であった。私のお祖父さん（張有財）に殺された。私の父親は伯父の話をするたびに、涙を流す。二人は仲が良かったからだ。……伯父は田舎で夫がいる婦人と関係を持ち、……それを聞いた祖父が怒った。……婦人の夫が衙門に告訴したことを聞いた祖父は、棒で伯父の腰を強打し、伯父が亡くなった」⁹⁷。

当時、張作霖は13歳で、殺された張作泰は23歳であった。

少年時代の張作霖は家庭が貧乏であったために、学校（塾）で勉強することはできなかった。

「13歳の時、いつも私塾の外で楊景鎮先生の授業を盗み聞きしていた。ある日、楊に見つかり、楊先生は『誰だ、なかに入りなさい』と言ってくれた。張作霖は中に入ってから、以下のように述べていた。『私は張作霖といい、家庭が貧乏のために、塾に入れません。ですから、いつも塾の外で盗み聞きをしていました』。楊は張の話聞き、張が熱心な子であると思った。こうして、張作霖は授業料を払わなくて、塾で勉強することができた。張作霖は楊の下で、

⁹⁶陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』遼寧人民出版社、1991年、1頁。

⁹⁷唐徳剛『張学良口述歴史』山西人民出版社、2013年、7頁。

三か月ほど勉強した」⁹⁸。

1889年、張作霖が14歳の時に、実父の張有財は義憤に燃えて賭博で負けた若者を助太刀したために喧嘩となって、王という姓の男に殺害された。張学良の口述で次のように述べている。

「王姓の男は『お前と関係ないではないか、余計な節介をするな』と喧嘩になり、祖父はこの話を聞いて激怒した。祖父は凶暴な人であった。その時、50歳余であった。王姓の男に『もし、お前がやったことを全部話したら、お前はここに居られない』と、ずばりと急所を突いた。……話が合わずに殴り合いとなって、……祖父は負傷した。……その後、このことによって、祖父は亡くなった。二番目の伯父（張作孚）と父は、王姓の男に復讐しようと思った。しかし、その時は、私たちの家族には実力がなかった。……（その後、復讐を図るために）、旧式銃を持って、伯父と父は王家を襲った。彼らは壁を乗り越えたところで、お婆さんに見つかった。……銃が爆発し、お婆さんは銃殺された。……父は逃げたが、伯父が捕まった。十年の刑罰を受けた。銃を撃った人物は父であったから、伯父が死刑されることはなかった」⁹⁹。

この復讐事件からも分かるように、張作霖及び張作孚兄弟が育った家庭は、血で血を洗う暴力的で粗野な世界であったことが分かる。

生活がさらに困難に陥ったため、張作霖は母親と一緒に祖父のもとに行った。鎮安県（黒山県）小黒山付近二道溝であった。張作霖は16歳から、多くの仕事に従事してきたが、どれもうまくいかなかった。結局、獣医の継父から習った乗馬と獣医の医術に長じることとなったのである。

1894年、日清戦争が勃発した。この時、知り合いの清軍官吏に紹介されて、張作霖は清軍に編入されることとなった。

「張作霖は小柄であるが、精悍であり、機敏であり、乗馬と獣医の医術が上手であった。やがて、それが宋慶という上官の目に留まって、騎兵小隊長に昇進した」¹⁰⁰。

日清戦争が終わると、張作霖は清軍を退役して、自宅に戻った。実際は退役ではなくて、途中で逃げたのである。その経緯は、張学良口述によれば次の通りである。

「騎馬小隊長に昇進しており、父は錦を飾って私たちの自宅に戻った。この時、彼は馬賊という名声に更に近づいた。ところが家に着いたばかり、近隣の人から父に消息が伝えられた。王家の人はあなたを見つけ次第、あなたを捕まえようと衙門に告訴した、と。仕方なくして、父はまた逃げて、軍営に戻らなかった。……その時、宋慶は朝鮮に駐屯することとなり、父も朝鮮に行った。そこで日本と戦った。所謂、日清戦争であった」¹⁰¹。

その時、趙家廟の農民である趙占元の次女と結婚した。張作霖は岳父の家に住んでいたものの、その後は岳父宅を離れて、営口市高坎鎮一帯に移り、そこで馬獣医となり、それで生活を立てていた。当時は、日清戦争が終わったばかりであり、戦場となった遼南、遼西のあたりには、混乱した地域を軍事的に統

⁹⁸ 欒貴田「張作霖二三事」、『全国文史資料選輯』第35輯、1986年、75頁。

⁹⁹ 唐徳剛『張学良口述歴史』山西人民出版社、前掲、6頁。

¹⁰⁰ 陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』前掲、2頁。

¹⁰¹ 唐徳剛『張学良口述歴史』山西人民出版社、前掲、10頁。

率する馬賊集団が割拠して、馬獣医の需要はとても多かった。

馬賊集団は、正規の軍隊ではなかった私兵集団であったが、正規の清軍が見捨てた郷村を軍事的に防衛し、「緑林」といわれていた。張作霖は獣医であったことから、当然ながら緑林の人と付き合っていた。このため高坎鎮では、「張作霖は馬賊である」という噂が広がった。この噂は張作霖にとって、非常に大きなプレッシャーとなった。獣医（馬医）の生活に満足していなかった張作霖は、よくない噂も立っていたこともあって、本当の馬賊に参加することを決意した。

次に、馬医から馬賊へ転身した経緯を明らかにする。

1896年、張作霖は広寧（今北鎮県）で活動していた馬賊の頭領であった馮麟閣に頼った。馮の紹介によって、董大虎の馬賊団に入った。これより、張作霖は正式に馬賊になった¹⁰²。

しかし、張作霖は董大虎の馬賊団のやり方に馴染めなかった。彼らは婦人と子供に対し、厳しい対応を見せていたからである。その仕打ちに嫌気をさした張作霖は、やがて、董馬賊を離れて、趙家廟に戻ったのである。

日清戦争と日露戦争の戦場として荒らされた中国東北地域の政治、経済、社会及び庶民は、その戦禍によって非常に大きな被害を受けた。この時の東北地域には、多くの馬賊集団が暗躍していた。戦禍に苦しむ庶民たちは自分の命と財産を守るために、その郷鎮などに自ら武装した保険隊と民団などを成立させた。

当時の大きな保険隊は、駐屯していた日本軍、ロシア軍と深く関わっていた。張作霖が馬賊に入るきっかけとなった馮麟閣（後に馮徳麟と改称した）が組織した保険隊は日本軍の応援を受けており、その勢力が周辺では一番大きかった。

馮麟閣は海城県で生まれた。海城県の役所である県衙門で務めたこともあった。ところが緑林の連中と付き合っていたために、役所を免職された。馮は日本と関わっているために、義和団事件後に東北一帯へ進軍、支配したロシア軍に逮捕された。二年間の監獄の生活を余儀なくされた。1902年、サハリン島にあったロシア軍の監獄から脱走することに成功した。海城に戻って、相変わらず、保険隊を組織し、活動していた¹⁰³。

張作霖も趙家廟に戻った以後、村の中の二十名程の若者を集めて、自分の保険隊を組織した。目的は付近にある七、八個村の安全を守ることであった。保険隊とは、村の安全を守る自衛軍隊であったから、その費用は村ごとが各自で負担していた。

張作霖は自分が防衛する保険区の中では、規則を厳しく守って、村民には少しも迷惑をかけていなかったといわれた。馬賊が村を襲ったら、張作霖の保険隊に阻止された。従って、張作霖の保険隊の活躍で、村の安定は保障されていた。その規律正しさと戦闘力の高さにおいて、張作霖は村民たちに称賛された。

こうして、張作霖の保険区域以外の村でも、自分の村を守るために、張作霖に防衛を依頼するようになった。こうした誘いによって、張作霖は勢力を拡大していた。張作霖が統率する保険区域に含まれる村の数は二十個村まで拡大された。やがて、勢力を拡大した張作霖の保険隊は、奉天省北鎮中安堡に駐在す

¹⁰²陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』前掲、3頁。

¹⁰³朱信泉、姜獻閣『民国人物伝』中華民国、第12巻、2005年、444頁。

ることになった。

当時、中安堡には、すでにロシア軍の応援を受けている金壽山の保険隊が存在し、中安堡は自分の地盤であると自負していた。だから張作霖の保険隊が新たに中安堡に駐在することに、不満を抱くことになった。

金壽山は字を万福といい、もともとは北洋武備学堂生徒であった。軍隊の生活に慣れないために、出身地の海城県に戻って、保険隊を組織した。金はバックにロシア軍の応援があったため、張作霖を自分の部隊に編入するつもりがあった。ところが張作霖に断られた。断られた金は、新興の張作霖保険隊を攻め立てた。張作霖は危機に陥ったが、幸いにも大凌河を支配していた湯玉麟によって、命を助けられた。張作霖は湯に感謝すると同時に、張作霖の保険隊に湯を誘い、張作霖と合流することになったのである¹⁰⁴。

湯玉麟¹⁰⁵は字を閣臣といい、熱河阜新県人であった。もともと湯は地元で農業をやっている、無学であったが、腕っ節は非常に強かった。馬術と射撃に興味を持っており、両手でも射撃できた。湯は性格が荒く、軽率であった。常に殴り合いをしていた。だから二虎子と呼ばれていた。県衙門で兵士をやったことがあったものの、その後、大凌河の苑四、苑五兄弟と一緒に保険隊を組織したが、衝突があって、別れた。そのため、湯は自ら軍事派閥を組織した。湯の部下は人数が少なかったが、戦闘力は強かった。張作霖の軍隊は、こうした胡散臭い軍事集団も取り込み、肥大化していったのである。

この時期に、錦州の張作相が張作霖と合流することになった。

張作相はその後の張作霖軍閥政権、および張学良を支えた大幹部である。東三省巡閱使署総参謀長として張作霖を補佐し、東三省講武堂堂長、鎮国軍東路軍司令官、東三省陸軍整理処副監、東北边防軍駐吉林副司令官（吉林省督軍ともいう）、東北边防軍副司令官兼吉林省政府主席、東北四省留守司令官、長城防戦第二集団軍総司令官などの要職を務めた経歴を有する大物である。

張作相は吉林省を管理している間、アヘンを吸うことと売買することを禁止した。また日本の圧力に抗して、国家主権を維持しようと努力した。袁世凱政府、段祺瑞政府は列強と不平等条約を結んだが、それに抵抗した。日本は天図鉄道（吉林省の天宝山から図門江まで）を建設したが、それに対抗して張作相は奉海鉄道（奉天から吉林省の海龍まで）を敷設した。張作相は張作霖が日本の関東軍に殺された以後、東北三省の政、軍各界を団結させて、張学良を補佐した。満州事変以後、天津の英国租界に隠居したが、抗日戦争で日本と汪精衛政権は協力を要請したものの、それを断って、民族の節操を守った。さらに1949年、蒋介石から台湾への招請があったが、中国大陸に残った¹⁰⁶。

錦州で私兵集団を率いていた張作相は凌河を渡って、張作霖と合流することになったのである。張作霖は、こうして正規の軍人、軍隊ではない、地方を牛耳る馬賊、匪賊の類の軍事組織を掻き集め、その軍事力を強化していった。その拡大過程は次のようであった。

張作霖に不満を抱く金壽山は、肥大化して抬頭する張作霖を殺害しようと狙

¹⁰⁴陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』前掲、6頁。

¹⁰⁵王鴻賓、孫宝君、袁占先、徐徹、曹夫興『東北人物大辞典』第2卷（上）、遼寧古籍出版社、前掲、733頁。

¹⁰⁶同上、953～954頁。

っていた。1901年2月18日（中国の春節の日）夜、金はロシア軍と手を結んで、張作霖の保険隊を攻めた。張作霖は準備不足で敗北し、逃走した。今回の衝撃によって、張作霖は大きな損失を受け、残った仲間は、張作霖を含めて、わずか八人でしかなかった。兵力を失った張作霖はその後、台安県に移動した。張作霖の妻子は台安県付近の張家堡に居た趙明德（張作霖の妻子趙氏の親戚）の家に住むことになった。やがて、そこで張学良が生まれた。この時、妻子を抱えた張作霖は、このままでは展望がないと悟り、より大きな保険隊に頼っていく選択肢を選んだ¹⁰⁷。

当時の八角台（今台安県鎮）は、張景恵の保険隊が支配する保険区域であった。

張景恵は字を叙五といい、地元の台安県人であった。張景恵は人間関係の形成がうまくて、常に匪賊と交際していた。賭博も好きだった。張景恵の決断は大胆で、八角台で名をあげていた。従って、八角台における地方部隊の領袖に選ばれた。張景恵は、表では村を守っているものの、裏では密かに各地の匪賊と結託していた¹⁰⁸。

1905年、張景恵は張作霖と合流した。後に張作霖軍閥政権のもとでは、張作相と並ぶ地位を確立した大物である。以後、張作霖に協力して、重要ポストを歴任した。チャハル都統、奉軍第五十三旅団の旅団長、鎮国軍西路軍司令官などを務めた。しかし張作霖が爆殺された以後、張学良には合流しなかった。東北を離れて、南京国民党政府で軍事参議院長に任命された。満州事変後に建国された満州国に合流し、張景恵は満州国参議府議長兼東三省特別行政区行政長官に任命された。1932年9月満州国軍政部長に任命された。1934年3月軍政部大臣に任命された。1935年5月から國務総理、協和会長、建国大学総長などの職を務めていたことがある。

勢力を失った張作霖は、その再出発にあたって、このような危険人物である張景恵の傘下に加わることに決めた。張作霖は友達の紹介によって、自ら張景恵を訪ねた。

「張景恵と張作霖は一見旧知のこと親しくなった。張作霖は、人材を集めて、官吏と交際し、勢力を拡充するなどの意見を張景恵に進言した。張景恵は、張作霖の能力は自分を超えると感じとった。将来見込みのある人物になると判断したのである。すぐに、自分の地位を張作霖に譲ることを決めた」¹⁰⁹。

張景恵はトップを張作霖に譲り、自分は張作霖の下の二番目に位置することを願った。このことから見ると、張景恵は自分の能力の限界をよく分かっていた、といえよう。

当時の遼西は、群雄割拠の局面が形成されていた。張作霖は張景恵と合流した後、部下の人数が七十人程度になったとはいえ、決して大きな勢力ではなかった。その故に、常に周辺の匪賊に襲われていた。特に台安付近で活動していた項昭子（回教）の軍事勢力は、張作霖、張景恵の保険隊を併呑しようと企んでいた。ところが逆に、張作霖の軍に敗れてしまった。この項昭子は、八角台

¹⁰⁷姜向春「張作霖在遼西的片断」、『遼寧文史資料』第6輯、遼寧人民出版社、1981年、24頁。

¹⁰⁸朱信泉、姜獻閣『民国人物伝』中華民国、第12巻、前掲、703頁。

¹⁰⁹陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』前掲、8頁。

周辺で一番大きな勢力を占めていたから、項昭子に勝利した張作霖は八角台を根拠地として、再び勢力を発展し始めた。

張作霖は八角台に駐在している間、多くの地方名士と付き合っていた。この名士との交流で、多くの意見を参考にしてきた。同時に、こうした知的文人、名士とも付き合いを通し、張作霖の物言いと振る舞いが変わってきた。荒々しい武人であった張作霖は、謙虚にも多くの英知を周辺から吸収しようと努力したのである。従って、張作霖の保険隊は、地方の有力な地主や名人から、郷村防衛の費用として食料や資金を受け取るだけでなく、同時に自分の発展に有利な、さまざまな知的戦略、方策を得ることができたのである。

張作霖が地方の馬賊である保険隊から、清軍の一部として政府軍へ登用される機会は義和団事件である。

八ヶ国連合軍の義和団弾圧を契機に、1900年以後、帝政ロシアは中国の東北に侵入してきた。東北の民家を焼き払い、抵抗する庶民を殺害し、金品を略奪した。ロシア侵略軍は東北で悪事の限りを尽くした。清軍はロシア軍を駆逐できなかった。東北の各村では、自分で自分の村を守る以外に道はなかった。張作霖は、村民が自分で自分を守りたいという切羽詰まった考えに応え、自分の勢力を拡大した。こうして地元との関係を良好に維持できた張作霖の保険隊は遼西地域において、一番信頼が大きく、軍事的にも強い保険隊になった。張作霖は、軍事勢力を拡大しながら、それにともない、同時に彼の政治野心も大きくなったのである。

1900年、義和団事件に付け込んで、帝政ロシア軍は中国の東北に侵入してきた。東北を守るはずの清盛京將軍・増祺は帝政ロシア軍の侵攻を恐れ、義県に逃亡してしまった。自分の家族は、北京に送り届けた。義和団事件を収めた以後、増祺は再び盛京に戻ってきた。

張作霖はこの盛京帰還を聞き、非常に喜んだ。なぜなら、張作霖はこのチャンスを利用して、清政府に取り入ろうと考えていたからである。地方の馬賊から正規軍に登用されるチャンスと見たのである。張作霖は黒山付近で、増祺の帰還を待ち受けていた。北京から盛京へ戻る途中の増祺の家族を、新立屯で張作霖が待ち受けた。そこで張作霖は、増祺の妻と家族を懇ろにもてなして、雅やかで礼儀正しく対処した。張作霖は清政府に帰順して、増祺の下で力を尽くしたい旨を、増祺の妻に伝えた。増祺の妻は奉天に戻った後、張作霖の意向を増祺に伝えたという。張作霖の意向を受けて、増祺も張作霖を自分の傘下に編入するつもりがあった。しかし、このことは増祺一存で決めることはできなかった。上官に報告する必要があったのである。

当時、遼西において、保険隊の勢力は益々強くなっていた。清軍と対抗できるほどの軍事力を保持していた。当然、清軍は保険隊を消滅することを考えていたが、清軍には、その実力を持っていなかった。

「当時、遼西地域で展開できる清軍は一百六十名、洋銃三十個しかもっていなかった。兵力と武器は足りなかった。この状況のため、“伏願投誠”（保険隊は清軍に投降して編入されることを願う）という策が提案された」¹¹⁰。

1902年10月15日、増祺は次のように新民府に報告した。

¹¹⁰寧武「清末東北三省緑林各幫之產生、分化及其結局」、『全国文史資料選輯』第6輯、1979年、37頁。

「張作霖という人は政府に帰順するという意を表した以上、受け入れないわけではない。調査によると、張の軍隊には二百五十名の若者がいる。軍費は政府から支払う必要はなく、地方の地主によって、負担することになっている」¹¹¹。

「1902年11月9日、新民知府増韞は自ら張作霖の駐在地に来て、張作霖を“新民府巡警前營”幫帶（副中隊長）に任命した。新民府巡警というポストは正式な清政府の軍隊ではなく、新民府に属する地方武装部隊であった。

張作霖は清政府に帰順してから、積極的に清政府のために力を尽くしていた。何回となく土匪、盗賊と戦って、功績を挙げた。やがて、増韞にその忠誠ぶりが認められた。1903年7月、張作霖の軍隊は新民府の巡捕隊と合流して、巡防馬歩撃隊になった。軍隊の人数は485人になった。騎兵は二哨（小隊）であった。歩兵は三哨であった。張作霖は管帶（中隊長）に昇任した。仲間の張景恵は幫帶（副中隊長）に任命された。湯玉麟、張作相は哨長（小隊長）に任命された。1904年春、新民府当地の地主たちは、自らの財力では張作霖の軍費を負担できなくなった。そのため、張作霖の軍隊は増韞の推薦によって、清軍の戦闘序列に編入された。1904年7月から、張作霖の軍費は清政府が負担することになった」¹¹²。これより、馬賊から出発した張作霖の新しい政治生涯が始まったのである。

張作霖は新民府に駐在してから、手段を選ばない方法で、増韞の信頼を勝ち取って、自分の勢力を拡大していった。やがて、新民府の軍事権利は張作霖に握られることとなった。

1911年10月10日、清朝打倒の武昌蜂起が成功した。中国の各省は積極的に辛亥革命を応援していた。奉天省の革命党も応援しようと考えていた。

辛亥革命前夜の奉天の状況は次のようであった。奉天省に駐在している軍隊は第二十鎮（師団）、統制（師団長）が張紹曾であった。新民、錦州周辺に駐在していた。第二混成協（旅団）は北大營に駐在していた。協統（旅団長）は藍天蔚であった。

「藍天蔚は字秀豪、湖北人である。1902年、自費で日本へ留学した。日本士官学校で勉強したことがある。1903年から1904年まで、黄興、蔡鍔、陳天華、秋瑾などの人と一緒に抗俄義勇軍を成立した。帰国して、ロシアに抵抗しようと考えていた。藍天蔚は隊長に任命された。しかし、日本政府と清政府が阻止することによって、解散された。藍は日本士官学校を卒業した後、帰国して、何年間か働いて、再び日本に来た。日本陸軍大学に入学した。1904年同盟会に加入した。1906年同盟会遼東支部責任者に任命された」¹¹³。

新軍第三鎮は長春に駐在していた。統制は曹錕であった。曹錕は北洋直系軍閥の将領である。後に、軍閥混戦の主役であって、段祺瑞の安徽軍閥を破って、北京の中央政権を掌握した直隸軍閥政権の大総統になる人物である。1907年曹錕は新軍第三鎮を率いて、東北三省総督徐世昌と一緒に長春に駐在することになった。ここで辛亥革命を迎えたのである。

「中華民國が誕生すると、第三鎮は第三師団という名に変わった。曹錕はその師団長であり、1914年4月、第三師団を率いて、湖南岳州に駐在すること

¹¹¹遼寧省档案馆：奉天交渉総局档。

¹¹²陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』前掲、12—13頁。

¹¹³陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』前掲、21頁。

になった。東北に駐屯していた新軍二十三鎮（師団）の統制（師団長）は猛恩遠で、永吉に駐在していた。第一混成協（旅団）の協統（旅団長）は朱慶瀾で、黒龍江に駐在していた。新軍は清政府の正規軍隊であった。清の中央政府が直接に指揮した。地方政府は新軍を指揮することができなかった。新軍第二十鎮（師団）は辛亥革命勃発一か月前に清の中央政府の命令によって、関内まで移転した。辛亥革命が勃発する時、奉天省に駐在している軍隊は藍天蔚の新軍第二混成協（旅団）しかなかったのである。

奉天省の地方軍隊は旧軍であった。巡防營とも呼ばれた。当時、奉天省巡防營は中、前、左、右、後五路を分けて、総計四十營であった。中路巡防營は奉天、鉄嶺に駐在していた。統領は朱道堅であった。前路巡防營は洮南府に駐在していた。この統領が張作霖であった。辛亥革命期の張作霖は、まだまだ地方軍の小さな統領（連隊長）に過ぎなかったのである。左路巡防營は彰武、黒山地域に駐在していた。統領は馮德麟（馮麟閣）であった。右路巡防營は東辺道に駐在していた。統領は馬竜潭であった。後路巡防營は遼源、通遼地域に駐在していた。統領は呉俊昇であった」¹¹⁴。

辛亥革命期、奉天省にも革命党が活動していた。張榕、寧武、商震などである。同時に新軍の中にも呉禄貞、藍天蔚などの革命党軍人がいった。

辛亥革命を勃発した時、東三省総督であった趙爾巽は黒龍江省のチチハルで巡視中であった。辛亥革命の勃発によって、急遽奉天に戻った。軍事会議を開いて、奉天省の革命党蜂起への対策を検討した。この時、第二混成協の協統藍天蔚が奉天で武装蜂起を準備していた。趙爾巽は非常に驚愕した。奉天省諮議局副議長袁金鎧と対策を練った。藍天蔚の第二混成協は奉天で駐在した唯一の軍隊であったからだ。もし、武装蜂起が決行されたら、間違いなく奉天の政権は革命派に陥ることとなる。袁金鎧は新軍ではない地方旧巡防營の軍隊を重用して、藍天蔚と対抗すべきと趙爾巽に進言した。旧巡防營の将校は旧式の軍人であって、新軍のなかの革命党とは関係がなかった。趙爾巽はすぐ、呉俊昇の後路巡防營を奉天に移動するようにと命令した。

この情報は張作霖の部下である張作霖駐奉天辯事処の処長張惠臨に知られた。張惠臨はすぐに張作霖へ伝えた。張作霖はこのまま、洮南府でくすぶる気はなかった。更に大きな舞台で自分の才能を發揮したかった。張作霖はこの情報をキャッチすると、大きなチャンスと捉えた。すべての部隊を集合して、奉天に向かい、すぐに趙爾巽に拝見した。

趙爾巽の周りには、新軍革命党蜂起に対抗した鎮圧に使える部隊がなかった。この時、張作霖がやってきた。趙爾巽にとって、救いの神であった。張作霖を責めることなく、逆に奨励した。張作霖に移動指令を再交付しただけでなく、奉天、鉄嶺一帯の中路巡防營の指揮権を張作霖に渡した。そして、後路巡防營の呉俊昇には、現地で移動しないようにと命令した。張作霖はこの行動で中路巡防營統領も兼任することとなり、張作霖は従来の七營の兵力に加えて、十五營の兵力を持つように膨れ上がった。

1911年10月22日、革命党呉景濂は奉天省諮議局の局長の名義を掲げて、奉天城の各界の領袖たちを招集した。治安を維持するという名義で、奉天省防安会を成立しようとしたのである。その前に、奉天革命党の首領である藍天蔚、

¹¹⁴陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』、前掲、20頁。

呉景濂は秘密会議を開いて、各界との協議によって、清政府の総督を追い落とし、東北の政権を取ろうと画策した。

その戦略は次の通りであった。藍天蔚を関外総督に推薦する。呉景濂を奉天省民政長に推薦する。そして独立を宣布する。そうすれば、刃に血塗りをすることなく勝利を収められる。東北を支配した以後、関内に出兵し、北京城郊外で友軍と合流して、北京に攻撃する¹¹⁵。プランはこうしたシナリオであった。革命党の人々は会議で投票という平和方式を通して、政権を取ろうと思ったのである。

当日の会議に参加した総督の趙爾巽は、張作霖を連れて登場した。会場の内外に兵力を手配しておくようにと張作霖に命令していた。張作霖も銃を持って、会場に入った。会場の雰囲気には緊張が走った。革命党は清政府から離脱して、独立すると唱えた。趙爾巽は反対した。自治は認めるが、独立することは絶対に認めないと発言した。革命党は趙爾巽に独立すると迫った。

この時、張作霖が立ち上がり、銃を机の上に置いた。張学良は口述で次のように述べている。

「藍天蔚は皆の前で東北三省独立すべきと宣布した。趙爾巽を都督に擁立しようと思うが、意見はどうかと皆に聞いた。私の父親は当時、主席台の上に藍天蔚と並んで座っていた。突然、立ち上がり、銃を出して、机の上に置いた。大きな声で張作霖が反対した。誰がこのことを議論したいのかと聞いた。会場は静かになった。藍天蔚は悄然と会場を離れた。私の父親は急いで城中に戻って、趙爾巽に城門を閉めさせた。万が一のことに対処した。趙爾巽は私の父親を城防司令官に任命した。警察と趙爾巽親衛隊を指揮させた。そして急いで、遼北の軍隊を奉天に移動させた。……四日後には、瀋陽（奉天）に到着した。しかし、藍天蔚の方は何にも動きがとれなかった」¹¹⁶。

趙爾巽はすぐに、新軍における藍天蔚の兵権を奪った。そして、1911年11月13日、趙爾巽は袁世凱に電報を打った。「宣統三年九月二十三日東三省趙爾巽致袁世凱電」によれば、暫く、聶汝清を協統に任命して、奉天を守るという態勢をとった。こうして革命を抑え込み、奉天の治安を維持できた¹¹⁷。

趙爾巽は藍天蔚が奉天でさらに独立を画策するのではないかと恐れ、藍天蔚を関内に追いやった。これが辛亥革命期における奉天の顛末である。

張作霖は革命党を抑え込んだことで功績をあげた。功績を讃えるために趙爾巽の推薦によって、張作霖が二十七鎮協統に任命された。さらに奉天巡防營総辦にも兼任した。こうして、張作霖は奉天省の軍権を握ることとなった。

1912年袁世凱が中華民国大總統に就任する前に、張作霖は袁世凱に忠誠を誓う電報を打った。張作霖の忠誠心が袁世凱に認められた。

1912年9月11日、袁世凱は東北三省の軍隊に、再整頓を命令した。張作霖の中路、前路巡防營は国家陸軍二十七師団に編成された。奉天に駐在することになった。張作霖は中将師団長に任命された。張作霖、38歳の時であった。

張作霖にとって非常に重要な転換期であった。以前の巡防營は地方治安を維

¹¹⁵中国史学会『辛亥革命』（中国近代史資料叢刊）第7輯、上海人民出版社、1981年、389頁。

¹¹⁶竇応泰『張学良遺稿一幽禁期間自述、日記和信函』前掲、13頁。

¹¹⁷中国史学会『辛亥革命』（中国近代史資料叢刊）第7輯、前掲、421頁。

持する部隊に過ぎなかった。正規の陸軍に協力する部隊であった。軍費は地方が工面した。ところが新たに就任した陸軍師団は国家を守るという大任を授けられ、地方の馬賊を討伐することも兼任した。軍費は国家から貰うことができるようになったのである。しかし実際は、国家の命令に従わなかった。

「陸軍二十七師団の編成は以前より拡充された。以前は主に騎兵と歩兵の部隊であったが、多兵種混成の先進な部隊に変わった。二十七師団は二個歩兵旅団、一個騎兵連隊、一個砲兵連隊、一個工兵大隊、一個輜重大隊などの五つの兵団によって編成されたのである。

張作霖の部下も昇任できた。湯玉麟は第五十三旅団の旅団長に、孫烈臣は第五十四旅団の旅団長に、張景恵は騎兵二十七連隊の連隊長に、そして張作相は砲兵二十七連隊の連隊長に任命された。その他の連隊長、大隊長、中隊長も張作霖の腹心であった。二十七師団は名義的には国家の部隊であったが、実際は張作霖の自分の部隊であった。張作霖の部隊は馬賊時代に築かれた兄弟の契りという義理堅い関係によって、堅く結ばれた。人的忠誠心を中核とするいわゆる封建集団であった。彼達は張作霖の命令にしか従わなかった。

張作霖は二十七師団を任せられたが、当時の東三省全体では、三つの武装集団があった。一つは、馮徳麟の二十八師団であった。原左路巡防營が改編された師団である。二個歩兵旅団を持っていた。師団長は馮徳麟であった。北鎮に駐在することになった。

もう一つは以前の後路巡防營の一部であり、騎兵第二旅団に改編された。旅団長は呉俊昇であった。巡防營統領と洮南鎮守使も兼任した。奉天省の西方の治安を維持する責任を担った。洮南に駐在することになった。

さらにもう一つは、以前と変わらず、右路巡防營であった。統領は東辺鎮守使馬龍潭であった。鳳城に駐在することになった」¹¹⁸。

しかしこの三つの武装集団は装備、兵力、兵種、駐在地など、どの点をとっても、張作霖の二十七師団と比べるものになれなかった。この時、張作霖は奉天軍閥の基礎を定めたといえることができる。

1914年6月6日、陸軍二十七師団の師団長張作霖は北京へ呼び出され、袁世凱に拝見した。袁世凱は、各省の將軍を呼び付けて面会した。その目的は将来の帝位につくために、各省の將軍の意見を確認したかったからである。この時の奉天省の將軍は張作霖ではなく、張錫鑾であった。しかし、張作霖は奉天省の軍権を持っていたから、袁世凱は張作霖を重視しなければならなかった。そのため、わざわざ張作霖を北京まで呼んだのである。

「張作霖は自分の野心を袁世凱に見せたくなかった。北京に到着した以後、故意に花柳の巷に遊んでいた。袁世凱は張作霖の状況を聞いて、非常に喜んでいて。張作霖には野心がないと思われたからである。張作霖は袁世凱の前でも跪いた。袁世凱は張作霖の対応に満足していた」¹¹⁹。奉天省はこのような人物に任せても心配しないとみなしたのであろう。

張作霖は袁世凱の信用を勝ち得た以後、次は東北三省の最高統治者のポストに挑戦しようとした。1914年6月30日、袁世凱は各省の都督を廃止し、全国

¹¹⁸ 荆有岩「奉系軍事集团的形成与扩展」、『遼寧文史資料』第21輯、遼寧人民出版社、1987年、3頁。

¹¹⁹ 徐徹、徐悦『張作霖』前掲、54頁。

的な再編を実施した。東三省都督であった趙爾巽は清史館館長に任命された。

「もう一人の実力者であった張錫鑾は、1912年9月東三省西辺宣撫使に任命されていた。そして11月奉天都督兼奉天民政長に就任した。1914年5月、奉天巡按使に就任して、やがて、奉天将軍に就任した。こうして張錫鑾が奉天、吉林、黒龍江省の軍務を掌握した。

張錫鑾は袁世凱の腹心であり、張錫鑾を東北に派遣して、影響力を確立していた。かつて張錫鑾が奉天巡務營総辦を務めた時、張作霖は前路巡防營の統領であり、馮徳麟は後路巡防營の統領であった。だから二人とも張錫鑾の下で働いていたことがあり、問題はなかった。

しかし、今の張作霖は昔と違って、勢力を一段と増していた。袁世凱が腹心の張錫鑾を東北に派遣した理由は、抬頭した張作霖を監視することにあった。だが、張錫鑾は張作霖の眼中になかった。張作霖は、表面上は張錫鑾に従順であったが、裏で排斥していた。すでに奉天の軍政官吏は、地元出身の張作霖の命令しか従わなかった。やがて、中央から派遣された張錫鑾は奉天で立脚地がなくなった。この状況で張錫鑾は袁世凱に辞職願を提出した。そして奉天を離れ、湖北将軍に転職となった。しかし、張作霖は奉天将軍のポストを得ることはできなかった。袁世凱は自分の腹心である段芝貴を奉天将軍に任命したからである」¹²⁰。

段芝貴¹²¹は北洋武備学堂の出身で、日本へ留学した経験がある。1914年彰武上將軍を授与されて、湖北省の軍務を掌握していた。今回、張錫鑾の代わりに、東北三省の軍務を掌握して、奉天巡按使も兼任した。段芝貴は一個連隊を連れて赴任したが、主力部隊は灤東の一帶に駐在させた。自分は少数衛隊を連れて、奉天に来た。これも張作霖をあまり刺激したくないためであった。

張作霖は段芝貴の立派な経歴と実力がよく分かっていたから、張作霖もまた爪を隠して対応した。

袁世凱は皇帝就任の手続きについて、国民投票という儀式を実施したが、張作霖も積極的に協力した。奉天で国民代表大会を行った時、張作霖は軍隊を率いて、投票を監視していた。その結果、奉天では賛成が満票であった。

1915年12月12日、袁世凱は帝制復活で洪憲皇帝と称した。しかし、この暴挙は全国の反対を受けた。12月末、蔡鍔将軍は雲南で護国軍を組織し、反袁の旗を掲げた。各省は相次いで独立を宣布した。一斉に帝制の取り消しを要求したのである。

張作霖は形勢が不利と判断し、今度は自分が有利なように“奉人治奉”というスローガンを掲げ直した（“奉人治奉”は初出、ここには注が必要）。

全国に巻き起こった反袁の圧力によって、袁世凱は1916年3月23日帝制の取り消しを宣布した。

このチャンスを逃さず、“奉人治奉”を掲げた張作霖と馮徳麟が共謀して、東北から段芝貴追討の義に立ち上がった。

馮徳麟は軍隊を率いて、奉天に入った。段芝貴は、多くの公金と武器を携帯

¹²⁰ 周大文「張作霖統一東三省の経過」、『吉林文史資料選輯』第4輯、吉林人民出版社、1983年、69頁。

¹²¹ 王鴻賓、孫宝君、袁占先、徐徹、曹夫興『東北人物大辞典』第2巻（上）、前掲、848頁。

して、列車で天津に逃げようとした。しかし列車は途中で止められ、馮徳麟軍に包囲された。

張作霖の斡旋によって、公金と武器を棄てて、やっと東北を離れることができた。段芝貴は馮徳麟を恨んだが、張作霖には良い印象を抱いた。張作霖のお蔭で、自分の命が助かったと思ったからだ。段芝貴は自分のポストを張作霖に譲ることにした。

段芝貴の推薦によって、袁世凱は1916年4月22日、張作霖を奉天盛武將軍に任命した。念願の奉天の軍務を掌握したのである。奉天巡按使も兼任した。

こうして張作霖は、奉天省の最高統治者のポストを奪い取った。1916年6月6日、袁世凱は病死した。『臨時約法』の規定によって、副総統黎元洪が6月7日、大總統に就任した。黎元洪は国会を回復すると宣布した。そして地方官制度を改革した。將軍という職を督軍に変更した。巡按使という職は省長に変更した。それにともない、7月6日、張作霖は奉天督軍と奉天省長に就任したのである。

「この時、奉天省では張作霖の二十七師団の他に、馮徳麟の二十八師団があった。馮徳麟の軍事勢力は張作霖と比べるものにならなかつたが、張作霖にとって、奉天全省を統治する障害物であった。馮徳麟追討が次の課題であった。馮徳麟も張作霖よりは低いポストの奉天軍務幫辦に任命され、不満を抱いていた。1917年6月張勳の「清朝復辟」事件が勃発した。清王朝の最後の皇帝であった溥儀を推戴して、復辟しようと画策したからである。6月の中旬、張勳は馮徳麟に電報をして、北京まで呼びつけた。馮徳麟は北京へ200名の先遣隊を派遣し、6月20日には自ら30人の衛隊を率いて、上京した。直ちに、張勳と会見して、復辟に賛成の意を表明した。さらに溥儀にも謁見した。溥儀は馮徳麟を“御前侍衛大臣”に任命した。馮徳麟は非常に喜び、二十八師団に北京まで移動するようにと命令した。

しかし、張勳復辟はたったの十二日で幕を閉じた。7月12日、張勳が段祺瑞軍に敗北したからである。馮徳麟は天津で逮捕された。8月15日、段祺瑞は馮徳麟が共和を裏切ったために、すべての職と勳位を剥奪して、法院に送ると宣布したのである。

張作霖は張勳の「清朝復辟」事件が勃発した時、冷静に情勢を見ていた。「清朝復辟」の反対を宣言した。また、馮徳麟の保釈を段祺瑞に求めた。温情を示すことで、馮徳麟の二十八師団の將校と兵士に張作霖への恭順を得たからである¹²²。

馮徳麟が逮捕されたため、張作霖が二十八師団を接收した。ここから、張作霖は奉天省のすべての軍権を掌握したのである。

張作霖は奉天省の軍政を掌握しただけは、満足できなかった。彼は東北三省全体を掌握しようと願った。奉天省の次に、黒龍江省にも手を出した。当時の黒龍江省の將軍は、張作霖にとっては四川から恩が多い朱慶瀾であった。張作霖は朱慶瀾の手に握られている黒龍江省を奪い取るのは難しかった。そこで張作霖は当時、黒龍江省に駐在している陸軍第一師団の師団長許蘭洲の利用を画策した。

実は、許蘭洲も朱慶瀾のポストを狙っていた。そのため、張作霖は許蘭洲に

¹²²王克承「張作霖驅逐段芝貴的密謀和經過」、『吉林文史資料選輯』第4輯、前掲、91頁。

協力の約束を取り交わした。1916年3月17日夜、許蘭洲は黒龍江省チチハルの満州族の旗人を煽動して、騒動を引き起こした。そして、中央に電報をして、朱慶瀾が満州族の旗人を迫害すると報告した。一方、朱慶瀾も、許蘭洲は黒龍江省チチハルの満州族の旗人を煽動して、問題を引き起こしたと中央の袁世凱に報告した。この対立の中で、「袁世凱は許蘭洲に電報をして、無茶なことを仕出かして朱慶瀾を傷つければ、あなたが責任を取ることになる」¹²³と、許蘭洲が批判された。

許蘭洲は袁世凱の命令に背くことはできず、朱慶瀾と対峙したままであった。しかし袁世凱は事態が悪化していくのを恐れ、朱慶瀾を広東省省長に転職させた。袁世凱は許蘭洲を黒龍江將軍には就けさせなかった。代わりに畢桂芳を黒龍江省將軍（のちに督軍）に任命した。巡按使も兼任した。畢桂芳はロシアへ留学し、総統府高等外交顧問に就任したロシア通であった。今回、黒龍江省に派遣された目的は、緊張を深めていた隣国ロシアとの外交関係を処理させるためであった。そして1917年7月、北京政府は畢桂芳に代えて鮑貴卿を黒龍江省督軍に任命した。省長も兼任した。

結果として許蘭洲の目的は適えられなかった。張作霖は自分が黒龍江省を収めるために、許蘭洲を利用したにすぎなかった。畢桂芳の後任には、張作霖は親戚の鮑貴卿を推薦した。鮑貴卿は奉天省海城で生まれ、1915年には北京陸軍講武堂の堂長に任命された。張作霖の長女が鮑貴卿の二男と結婚し、二人は親戚となっていた。もちろん鮑貴卿の就任は、張作霖の意図を反映したものであった。そして黒龍江省の安定を維持するために、許蘭洲の第一師団は奉天省に移動させられた。かくして張作霖は完全に黒龍江省を手中に収めた。

次の目標は吉林省であった。当時の吉林省の督軍は孟恩遠であった。孟恩遠¹²⁴は天津の小站で新式陸軍に加入し、1907年には吉林省巡防營翼長（提督）に任命されていた。中華民国が誕生すると陸軍二十三師団の師団長に任命された。1914年には鎮安左將軍に任命され、吉林省の軍務を掌握した。1916年7月、名称が変更されて、吉林督軍となった。このように孟恩遠は吉林省で長期駐在しており、その勢力は根強かった。簡単に排斥することは困難であった。

張作霖はその時期を窺っていた。1918年9月7日、当時の北京政府総統徐世昌は、張作霖を東三省巡閱使に任命した。東三省巡閱使は清の時代の東三省総督に相当し、吉林督軍より地位が高かった。徐世昌は清朝時代、東三省総督を務めたことがあり、その時に、張作霖は徐世昌の部下であった。徐世昌は張作霖を高く評価しており、1918年9月4日、徐世昌は総統に就任したわずか3日目、張作霖を東三省巡閱使に任命した。張作霖への懐柔でもあった。

張作霖は東三省巡閱使に就任することで、東北三省の人事異動権を確保できた。張作霖にとって、孟恩遠を追いやるチャンスが到来したのである。そこで、張作霖は徐世昌に伺いをたてた。孟恩遠を恵威將軍に転任させ、黒龍江省の督軍鮑貴卿が吉林省の督軍を引き継ぐという願いである。同時に、徐世昌に対し、張作霖の腹心孫烈臣を黒龍江省の督軍に引き継がせるようにと伺いを立てた。張作霖は徐世昌からその願いを許可された。1919年7月6日、北京政府は孟

¹²³徐徹、徐悦『張作霖』前掲、44頁。

¹²⁴王鴻賓、孫宝君、袁占先、徐徹、曹夫興『東北人物大辞典』第2巻（上）、前掲、832頁。

恩遠を恵威將軍に転任させた。

この時、張作霖の軍隊が城下に迫ると、孟恩遠は張作霖に、自分の命と財産を保障すれば、吉林省の軍権を渡すと約束した。8月5日、孟恩遠は吉林市で鮑貴卿に督軍印鑑を渡した。

この軍事的、政治的な権謀術数を駆使した成果で、ついに張作霖は完全に東北三省を制圧した。かくして東北三省を根拠地として、さらに関内に進出し、北洋政府制覇への道に向かっていったのである。

第二節 東北の軍事的改革

1920年初頭は、各地に割拠した有力な軍閥が中央への覇権を求めて激しく対立していた。中国はこうした軍閥間の戦争によって混乱していた。袁世凱政権を支えていた北洋軍閥は、1916年6月の袁の死によって、分裂を開始した。段祺瑞を長とする安徽（皖）派軍閥と、馮国璋を長とする曹錕、呉佩孚の直隸派軍閥の対立となった。そして、この両派はいずれも全国を完全に統一するだけの力を持たず、各地に中小の軍閥が割拠して軍閥混戦の様相を深めた。

苦勞して東三省を支配した奉天軍閥の張作霖は、それに満足せず、次第に関内の中央政治に進出する意欲を見せ始めた。北京政府は段祺瑞の安徽軍閥政権であったが、張作霖は直隸軍閥と手を結んで、段祺瑞政権打倒を目指したのである。これが、1920年7月の直隸軍閥＋奉天軍閥連合軍が安徽軍閥に戦いを挑んだ安直（直皖）戦争であった。この安直戦争では直・奉連合軍が勝利を収め、段祺瑞政権は崩壊し、北京政府の実権は直隸軍閥によって掌握された。

地方軍閥の覇者であった張作霖は、こうして天下に名を轟かせた。しかし両雄並び立たずで、実権を握った直隸軍閥の曹錕は軍事・財政面で次々に自己強化策に取り組み、張作霖との亀裂を深めた。張作霖は1922年4月に直隸軍閥に戦いを挑んだ。しかし、奉天軍は敗北した。イギリスやアメリカの支援を受け、近代的な装備を持つ直隸軍に北京近郊の長辛店で敗れ、張作霖は奉天に撤退した。これが、いわゆる第一次奉直戦争であった。

(1) 東北講武堂

第一次奉直戦争では、張学良も東路軍の第二梯隊を率いて参戦した。奉天軍が敗北する中で、直隸軍の精鋭部隊である呉佩孚部隊と良く戦い、直隸軍の進攻を山海関で阻止することに成功した。この戦いにより、張学良は奉天軍閥内で一目置かれる存在となったのである。

第一次奉直戦争の敗北のなかから、張作霖は奉天軍の弱点を発見した。武器は低劣で、軍事訓練が欠乏し、組織が不健全であり、優秀な軍事指揮官もいなしという重大な欠陥であった。奉天に戻った張作霖は奉天軍の再建に取り組むこととなった。その任に当たらせたのが、若き張学良であり、郭松齡であった。張学良を東北三省陸軍整理処の参謀長に任命し、奉天軍の訓練と再編に当たらせた。

軍隊の整頓、再編については、すでに述べた如く、郭松齡の構想の下で進められた。ここでは、軍隊整理の一つの重要な部分である東北講武堂について、述べたい。

郭松齡をはじめ、多くの東北軍人を輩出した東北講武堂は、東北地域において、最も歴史の古い軍事教育機関であった。張作霖時代の奉天軍と張学良時代の東北軍の士官は、殆どこの出身であった。だから東北講武堂は奉天軍と東北軍の形成と発展に大きな役割をはたした。

当時、昆明の雲南講武堂、保定の講武堂、東北の講武堂、広州の黄埔軍校は「四大軍官学校」とも称されたほど、中国のなかでも中心的役割を果たしていた。

1906年、当時の奉天の盛京將軍趙爾巽は陸軍初級士官を育てるために、奉天に東北講武堂を建学した。この時期、従来の旧式軍隊が改められ、巡防營制に変わった。中、前、左、右、後五路巡防營が整備された。講武堂が設立されると、その学生は主に巡防營から選んだ。訓練期間は一年間であった。もともとの原名は「東三省講武堂普通科」であった。

1907年、盛京將軍が東三省總督と改名され、初代總督として徐世昌が着任してきた。徐世昌は清朝重臣である袁世凱の腹心的幕閣であった。袁世凱は東北地域に影響力を拡大するために、徐世昌を東北に派遣した。東三省總督徐世昌は、1908年に盛京講武堂を東三省講武堂と改名してさらに拡充を行った。東三省講武堂は東三省の各部隊の士官に武学を勉強させるために拡張されたものである。この東三省講武堂の教育内容については、次のような状況であったという。

講武堂を設立すると、《東三省講武堂暫行章程（三十六條）》を發布した。《章程》は、「本学堂は三省各營の士官に武学を研究させるところである」と規定した。各級教官は陸軍学堂出身者を充て、同時に各部隊の長官を招聘し、講義を行った。1908年10月第二期から二科を設置した。第一科では新編陸軍士官を募集し、学期は一年間であった。第二科では巡防、捕盜の各營士官を募集し、学期は一年間であった。学生は各師團、旅團、團、大隊から選ばれた。講義の内容は学科と術科の二種類に分かれていた。学科としては戦術、軍制、兵器、地形、築壘、交通、衛生、馬学、服務綱要、軍用文書等の課程があった。術科は各兵科操練、野操、体操、劍術、射撃等の操練があった¹²⁵。

1911年に辛亥革命が勃発すると、奉天では革命軍の北伐に備える必要があったため、東三省講武堂は一時閉鎖になった。1912年9月、巡防營は師團という編制に変わった。閉鎖されていた東三省講武堂も再び開校した。当時の張作霖はまだ27師團の師團長に就任したばかりであったが、1912年10月5日、各旅團の士官を集めて戦術と指揮訓練を研究する機関の設立を、当時の東三省總督趙爾巽に進言した。進言内容は次のようなものであった。

「私の師團は巡防營から陸軍師團に変わった。ところが仕事が煩雑であるから、まずうまく整備しなければならない。特に教育の側面について急いで手を付けるべきである。各旅團、連隊、大隊の將校は軍事訓練を施し、指揮について内外學術から学ばせるために講堂を設立すべきである。多くの研究を集め、武学を重視することを期する」¹²⁶。

この進言から、張作霖は軍事教育の重要性を自覚し始めていたことが分かる。

¹²⁵陳景悦、董慧雲、張秀春『張学良与東北教育』香港同澤出版社、1993年、234頁。

¹²⁶「張作霖為在東閔講武堂旧址設立隨營講堂給趙爾巽的諮呈」、陳景悦、董慧雲、張秀春『張学良与東北教育』、同上、310頁。

その理由は明らかである。当時の張作霖の部下は、正式な軍事教育を受けていない緑林の出身が主流を占めていたからである。しかし、1915年には東三省講武堂は閉鎖された。1918年9月4日、張作霖は東三省巡閱使に就任した。事実上、中国東北部を手中に収めることができたのである。東北三省の覇者となった張作霖の奉天派は、急速に軍隊を拡大していった。しかし膨張した奉天軍であったが、近代軍隊として高度な戦術を身に着けて指揮できる士官は圧倒的に不足していた。

この現状を打破するために、1919年2月、東三省陸軍講武堂と改称した上で、閉鎖されていた講武堂を再度開校することとなった。張作霖を堂長に、熙洽を教育長とした。李伝璽「東北講武堂」によれば、その内容は次の通りである。

学生の定員は二百名に定められた（奉天省140名、吉林、黒龍江両省各30名）。開学が数ヵ月以後、吉林省からは学生が送られてこなかった。張作霖の命令によって、さらに、学生50余名を募集した。これは第一期であった。一九二〇年（民国九年）二月に卒業した。卒業した学生は総計228名であった。第一期が卒業した後、続いて第二期を募集した。一九二一年（民国十年）二月に卒業した。卒業学生総計は352名であった。第三期は一九二一年（民国十年）五月に入学した。一九二二年（民国十一年）四月に卒業した。卒業学生総計は391名であった。第四期生は同年四月中旬に入学した。一九二三年（民国十二年）九月に卒業した。卒業学生は335名であった。教育長が改められ、蕭其煊が担任した。一九二三年末、第五期生が入学した。一九二四年秋、北京を支配する直隸派軍閥との天下分け目の奉直戦争が勃発したため、一時的に停止された。すべての学生は原部隊に戻って、戦闘に出陣した。一九二四年末、奉直戦争が幕を閉じると、再び学生は学校に戻って、授業を再開し、一九二五年秋に卒業した。卒業学生総計は406名であった。すぐに第六期の学生を募集して、入学した。朱継先が教育長に就任した。一九二七年六月に卒業した学生徒総計は406名であった¹²⁷。

講武堂は第一期から第六期まで、第四期と第五期を除いて、中学生を募集した。軍事学校で学ぶ中学生とは、既存の軍隊から士官候補生を募集、教育する正規の軍事学校とは違って、社会から軍事経験のない少年兵士の教育を指す。民間から募集する中学生に軍事教育機関で勉強させるという意見は郭松齡が構想し、その実現を張学良に進言した。張学良はその意見を受け入れて、張作霖に進言した。

初の三期の学生はすべて部隊から選んだ職業軍人であったが、連隊以下の軍人は緑林出身の士官であったため、その文化水準はとても低く、学習能力において困難があった。これに鑑み、第四期の学生の募集において、大きな改革を行った。張学良は郭松齡の意見を受けて、社会から中学生を受け入れた¹²⁸。

もちろん中学生以外のすべての学生は、各部隊の現職士官から選んだ。第二次奉直戦争で勝利した奉天軍の張作霖は1924年11月、段祺瑞を担いで北京に「臨時執政」政権を樹立した。25年8月、奉天軍は大部隊を率いて北京に入り、そして段祺瑞に代わって、張作霖は北京に安国軍政府を樹立し、大元

¹²⁷ 李伝璽「東北講武堂」、『遼寧文史資料』第6輯、前掲、73頁。

¹²⁸ 徐轍、徐忱『張学良』中国文史出版社、前掲、38頁。

帥を名乗った。奉天軍の軍備と兵力が拡大されたために、士官と下士官が不足する事態となった。それを克服するため、1926年冬、東北講武堂北京分校が北京に樹立された。東北講武堂第七期生募集の時であった。第七期は北京と奉天の双方で学生を募集したのである。

中学校以上の学歴を持っている学生 960 名が入学した。1927 年 5 月、第七期の入学式を行った。講武堂の堂長は張作霖であり、監督張学良、吉林督軍張作相、黒龍江督軍呉俊昇などの奉天軍閥の高級将領たちが入学式に顔をそろえた。張作霖は入学式で次のように講話した。

「屈辱を味わいたくなければ、まずは強大的な軍隊を持って、国家と国民を守らなければならない。良い軍隊を持つために、良い士官を得なければならない。だからこそ、私は講武堂北京分校を開学した。貴方たち学問ある学生を受け入れ、訓練して良い士官として育てることとした。良い士官になるために、学校で良く勉強して、先生の話をよく聞きなさい。更に重要なことは頑張りであって、苦勞を恐れないことだ」¹²⁹。

第六期の学生が卒業すると、即刻、奉天で第八期の学生を募集した。学生は各部隊の現職士官から選んだ。1927 年 9 月 14 日に授業を開始した。また第八期から、東三省陸軍講武堂は東北陸軍講武堂という校名に変わった。1927 年 6 月 18 日、張作霖は安国軍陸海軍大元帥に就任した。奉天軍の勢力範囲が東北部を越えて拡大されたために、1928 年 3 月、東北陸軍講武堂は東北の名称を外して、陸軍講武堂という名に変えた。しかしながら、1928 年、蒋介石を総司令官とする国民革命軍の北伐軍に張作霖の安国軍は敗北し、奉天に撤退する時に張作霖は爆殺された。北京の陸軍講武堂に入学した第七期の学生は奉天軍と一緒に北京を離れて、奉天陸軍講武堂に移った。1928 年 8 月、第七期の学生は奉天で卒業した。卒業学生総計は 968 名であった。同年 12 月、第八期の学生も卒業した。卒業学生総計は 559 名であった。

以上、張作霖時代の東北陸軍講武堂で育った第一期から第八期までの卒業学生総数は、3,645 名にのぼった。これが、張学良が引き継いだ東北軍の基幹的士官となったのである。

東北講武堂の講義の内容は、李伝璽「東北講武堂」に詳しく記されている。

東北講武堂は学科と術科に分かれていた。学科は甲、乙の両課程に分かれていた。甲は軍事教程であった。乙は各種典範令の学習教程であった。

学科の主要な科目は軍事教程であった。戦術、兵器、軍制、築城、地形、交通などの授業があった。一般的に六大教程と呼ばれていた。これ以外は衛生学と軍隊教育学などの課程があった。

各種典範令は術科教練の基本教材であった。隊長、隊附及び助教が担任した。各兵科操典はいわゆる、射撃、教範。陣中要務令、築城教範、通信教範、体操教範、銃剣術教範、陸軍懲罰令、衛戍勤務、内務規則などの課程の略称であった。

術科は操場教練と野外演習であった。訓練場で、各班、排、連、營（大隊）、団（連隊）に分かれて訓練させた。そのなかに制式訓練、射撃訓練、陣中勤務、築城作業、通信作業などの訓練が含まれている。これ以外に、個別術科があった。銃剣術、技術、体操、馬術などの術があった。野外演習は毎期の学生が卒

¹²⁹陳景悦、董慧雲、張秀春『張学良与東北教育』前掲、236 頁。

業する前に、一回の野外演習が行われた。学校で学んだことを現地で実践した。専門教官及び隊長以上の教官が担任した。例えば、現地戦術は戦術教官が担任した。図実施、野戦築城及通信作業等の科目は地形、築城、通信等の専属教官が担当した。戦闘、行軍、宿営及陣地徹夜演習等の科目という、隊長以上の士官が担当した。演習時間は一か月ぐらいかかった。

講武堂の各期の学生が学ぶ教程と各種典范令などの講義では、殆ど保定陸軍学校と日本士官学校の教科書が採用されていた。毎年、それらが使われていた。教官、隊長、隊附などの担当者は士官学校の正規卒業者（保定講武堂、奉天講武堂、日本から戻った士官）が担当した¹³⁰。

(2) 空軍の創設

第一世界大戦中において、英国、フランス、ドイツ等の各国飛行機はドイツ戦場で活躍していた。空中偵察、情報収集、爆撃等にめざましいものがあった。敵の士気と後方を攪乱した。各国空軍の活躍は、中国の北洋政府の注目を引いた。このため、北洋政府は北京南苑に航空学校を成立させた。そして、南苑に飛行機場を設置した。南苑航空学校は中国歴史上、最初の航空学校であった。南苑飛行機場は中国国内における最初の飛行機場であった。

同時的に各地の軍閥は北洋政府と対抗するために、自分の空軍を新設しようと考えていた。奉天軍閥、張作霖と張学良は北洋政府に続いて、東三省航空処を成立させた。その後、雲南軍閥唐繼堯、河北軍閥曹錕、四川軍閥劉湘、河南軍閥何健、山西軍閥閻錫山、山東軍閥張宗昌、西北軍閥馮玉祥、広西軍閥李宗仁、新疆軍閥盛世才、そして国民党の蒋介石も空軍を新設した。

張学良は軍隊の教育を重視する一方で、東北の空軍の建設も重視した。1923年9月、張作霖は東北空軍の建設を速めるために、張学良を東三省航空処総弁に任命した。張学良は航空処の総弁になってから、人材を招いて、飛行機を購入した。当時東北空軍飛鷹隊の副隊長徐則林の回想によれば、「1923年、当時の東北新軍第二、六兩旅団（旅団長は張学良、郭松齡）から十一名青年尉官と佐官徐世英を選んで、フランスへ留学させ、航空を勉強させた。この十二人はフランス航空学校で勉強した。その中の三人は航空に適応しないということで、タンクを勉強した。一人は卒業試験の長距離飛行中、事故で焼死した。八人は飛行機の操縦技術を身に着けた。偵察知識と爆撃術も勉強した。1925年春帰国した。全員が東三省航空処大尉隊員に任命された」¹³¹。

清の時代から、中国政府は各種のことを学ばせるために留学生を各国に派遣していた。しかし、操縦士を育てるために、留学生を派遣したのは奉天軍閥が初めてであった。

「1924年、東三省航空処は既に60名のパイロットを持っていた。この中の40余名は東北航校の第一期の卒業生であった。飛行機50余機を備えていた。張学良は以上のパイロットと飛行機をもとに、飛龍、飛虎、飛鷹、飛鷹、飛豹などの五つの航空隊を編成した」¹³²。

¹³⁰李伝璽「東北講武堂」、『遼寧文史資料』第6輯、前掲、77～79頁。

¹³¹徐則林「東北空軍的誕生和發展」、『遼寧文史資料』第6輯、前掲、41—42頁。

¹³²同上、42頁。

五つの航空隊及び他の重要な機関の責任者は主に南苑航空学校の出身者であった。当時、東北空軍司令部大佐訓練部副部長孫炎の回想によれば、次のようであった。

「南苑航空学校を卒業した章斌、伊利布、皮思良、趙廷緒、趙翔陸が飛龍等の五つの飛行隊の隊長であった。張学良は航空学校の校長を兼任した。万鹹章、王立序、陳海華、盛建模等の南苑出身パイロットは飛行教官に任命された。フランスの教官二人、英国の教官一人を雇った。その後、ハルビンから白ロシアのパイロットを雇って、教官に任命した。アメリカへ留学したことがある刑啓新を工場場の場長に任命した。

航空隊は奉天、錦州、葫芦島と綏中等の基地に配置した。

1922年、東北航空学校が成立した。二期の学生が入った。入学資格は中学校以上の学力を持つ人と制限された。体の強健さが要求された。学習期間は二年間であった。講義の内容は主に飛行操縦技術が中心であった。学科方面において、飛行機構造学、発動機学、飛行学、航空学、気象学等の学科があった」

133。

1925年、東三省航空処を東北航空処に変更した。総務処、機械処、航空工場、を設置した。同年3月、東北空軍航空学校を設置した。張学良は校長になった。張学良は優秀な人材を育成するために有名な教官を招聘した。北京南苑航空学校を卒業した趙延緒、王立序及びフランスから退職のパイロットなどであった。

1925年、張学良は第三期のパイロット留学生を海外に派遣した。「張学良は東北仕官研究班の1000名學員から20歳頃の學員を選んで、28名をフランス留学へ派遣した。今回、フランスへ派遣した學員は35名にのぼったが、その中の28名に航空を勉強させた。残り7名は他の学科を勉強させた。28名の航空を勉強する學員は二つのグループに分けられた。第一グループは、高い健康状態が求められるパリの航空学校に入学した。18名であった。第二グループはフランス西南部の航空学校に入学した。10名であった。パリの航空学校の講義内容は機械、操縦、実習、フランス語等の科目があった。フランス西南部の航空学校の講義内容は機械、戦闘、爆撃、無線電連繫等の科目があった。コースは八カ月であった。卒業した以後、両グループの學員とも国際航空ライセンスを獲得した。初級の飛行機操縦員資格を得たのである。1926年秋、両グループの學員はフランス空軍の第三十五団に編入され、戦闘実習を行った。実習の内容は爆撃、爆弾を投下する、狙いを定める、掃射する、空中戦争、無線電連繫等の科目があった。1927年初め、卒業してから帰国した」¹³⁴。

この時、フランスへ留学した學員は、国内で最も優れた操縦士になった。国内の各軍閥は力を尽くして、操縦士を獲得しようとした。国民党の南京政府もこの操縦士たちを招きたかった。この操縦士たちはフランスに勉強していた時に、フランスに駐在していた南京政府国民党党部の代表が操縦士たちと連絡を取っていたから、張学良は自分の操縦士を確保するために、この操縦士がフランスで勉強していた時から、すでに高い給料と高等官階を操縦士たちに与えて

¹³³孫炎「1921—1933年東北空軍的歴史回憶」、『遼寧文史資料』第6輯、前掲、53—54頁。

¹³⁴孫繼先口述、羅正難整理「東北航空軍建立始末」、『遼寧文史資料選輯』第2輯、前掲、58頁。

いたほどである。

張作霖が北京の政権を握った以後、東北空軍を拡大した。「張学良はイタリア、ドイツ、イギリス、日本から九機の偵察機、八機の水陸飛行機、九機の爆撃機、五機の戦闘機、教練機八機を購入してきた」¹³⁵。

(3) 東北海軍の建設

張作霖は空軍を創設しただけではなく、海軍の建設も重視した。東北海軍はハルビンの河川防衛である吉黒江防艦隊の創設から始まった。1919年、ロシアの攻撃を予防するために、北洋政府は東北に“江亨”、“利捷”、“利綏”、“利川”という四つの艦艇によって、吉黒江防艦隊を創設した。王崇文が司令官に任命された。「四つの艦艇の中で一番大きな艦艇は江亨であった。日本で建造された。四点七インチの艦首大砲、三インチの艦尾大砲を一門ずつが装備された。容積トン数は五百トンであった。戦闘力は非常に弱かった」¹³⁶。

その後、吉黒江防御線が長すぎるために、北洋政府は吉黒江防艦隊に、さらに“江平”、“江安”、“江通”、“利濟”という四つの艦艇を補充した。

吉黒江防艦隊は北洋政府の創設であったが、北京海軍部からの後方支援がすくなくあったために、1919年には張作霖政権に降服し、奉天軍閥に所属するようになった。

こうして安直戦争後、東北海軍は瀋鴻烈によって再編成された。瀋鴻烈は次のような海軍出身者であった。1906年日本海軍学校に入学し同盟会に加入していた。1912年南京臨時政府の海軍部軍機処参謀に任命された。その後、1920年に吉黒江防司令工署中佐参謀に任命された¹³⁷。

当時の中国海軍は福建派に握られていた。福建派の海軍はイギリス海軍に大きな影響を受けていたから、日本留学組は海軍では重用されなかった。瀋鴻烈もあまり重視されていなかった。もともと北洋政府は海軍の充足に力を入れず、海軍の実力は大きく損なわれていた。

1922年の第一次奉直戦争においては、張作霖の敗北に、海軍が深くかかわっていた。張作霖の奉天軍は直隸軍の海軍による海からの砲撃によって、進軍を妨げられ、大きな損失を受けて直隸派に敗北したからである。この教訓から、第一次奉直戦争以後、張作霖は海軍の建設に非常に力を入れることとなったのである。

瀋鴻烈はこのチャンスを見逃さず、張作霖に自己を売り込んだ。こうして瀋鴻烈は東北航警処少将処長に任命された。瀋鴻烈は彼の仲間である日本へ留学した海軍経験者を集めて、東北海軍を創り始めたのである。

瀋鴻烈は航警処長に就任した以後、多くの改革措置を実行したが、最大の功績は、1923年に海軍学校を創設し、優秀な海軍士官を育てたことである。その経緯は、当時のメンバーであった張鳳仁の回想では、次のように記されている。

「先ず、葫蘆島に東北三省航警学校を創り、そこで海軍士官を訓練させた。海軍士官には全面的な海軍基礎知識を把握させる必要があった。中学校の学力

¹³⁵ 龍国華「東北空軍の発軀和消亡」、『環球軍事』、2009年、第24期。

¹³⁶ 『遼寧文史資料』第4輯、遼寧人民出版社、1981年、71頁。

¹³⁷ 徐轍、徐悦『張作霖』前掲、145頁。

を持って海軍学校に入学すれば、四年間学び、一年間実習を経て、海軍少尉に任官された。艦艇で見習士官として勤務させられた。例えば、三等航海士、三等銃砲士などのものがあつた。

この学校が葫蘆島に創られた時に、学校と訓練キャンプが併設された。海軍兵士には優れた身体素質が必要だった。だから、一年間の訓練キャンプの訓練を受けたのちにはじめて、艦艇に乗務することができた。

航警学校には校長、教育長と佐理官及び学監が設置された。その下で兵学教官が設置された。(教科としては)主に「航海、船芸、銃砲、魚雷、タービン、気象、海洋及び海戦術、砲戦術などの科目があつた。そして、数学、物理、化学専門教官が設置された。学生隊は隊長、班長、学兵隊長が設置された」¹³⁸。

「1921年冬、海軍学兵、水兵隊及びタービン隊各二百名を受験させた。1923年春、奉天で航校将校学生班第一期の入学試験を行った。中学校の学力及び中学校と同じ学力を持っている学生は受験できた。試験の科目は代数、幾何、三角、物理、化学、英語、国文、地理、歴史、製図などの科目があつた。当時、500名の学生が受験した。40名が合格した。そのうち38名の学生が入学した。四年間の勉強と訓練を通して、27名が卒業までこぎつけた。これが最初の東北海軍の基礎であつた」¹³⁹。

この資料によって、張作霖が早急に海軍を整備したかつたものの、海軍人材を育てるには厳格な訓練と時間が必要であつたことが分かる。

海軍学校を成立した時に、奉天軍には河川の江防艦隊のみで、海防艦隊(外洋の艦隊)としては一つの大型戦艦もなかつた。海外から購入することは困難があり、苦肉の策として商船を艦船に改造することとなつた。

「張作霖は煙台政紀汽船会社から2500トンの汽船を購入した。戦艦に改造された以後、鎮海と命名された。そして、張作霖は日本から2500トンの汽船を購入した。戦艦に改造された以後、威海と命名された。この二つの戦艦は4.7インチ海軍砲と3インチ陸軍砲が設置された。その後、張作霖は中央海軍学校煙台分校8年制卒業生から30人を招集した。これより、海防艦隊における下級士官不足が解決された」¹⁴⁰。

第一次奉直戦争で敗れた奉天軍は、第二次奉直戦争では勝利を収めた。戦艦“鎮海”と“威海”があつたためである。これで奉天軍は直隸軍の戦艦からの脅威がなくなった。それを契機に、張作霖は更に海軍整備に力を尽くして、東北海防艦隊を発展させた。

第二次奉直戦争の勝利を収めたために、張作霖は直隸軍からロシアで製造された1000トンの砕氷船を捕獲した。この戦艦は定海と命名された。そして、さらに日本から300トンの魚雷艇を購入した。飛鵬と命名された。これで、鎮海、威海、定海、飛鵬によって編成された海防艦隊が形成された。これより、第二次奉直戦争以後、東北海軍は江防、海防の二つの艦隊及び一つの家軍学校を整備できたのである。とはいえ、東北海軍はさらに増強する必要があつた。

東北海軍が直面していた敵は直隸軍の渤海艦隊であつた。渤海艦隊は三隻の

¹³⁸張鳳仁「東北海軍的建立与壮大」、『遼寧文史資料』第3輯、遼寧人民出版社、1963年、73頁。

¹³⁹張鳳仁「東北海軍的建立与壮大」、『遼寧文史資料』第3輯、前掲、73～74頁。

¹⁴⁰同上、74頁。

巡洋艦、二隻の砲艦及び一隻の魚雷艇を備えていた強大な艦隊であった。東北海軍の陣容は渤海艦隊とは比べものにならないほど貧弱なものであった。しかし、直隸軍は第二次奉直戦争で敗北した以後、渤海海軍の士気が衰えた。海兵たちは給料すら支給されなかった。張作霖はこのチャンスを利用して、渤海海軍を接收することとした。接收状況は次の通りであった。

「渤海艦隊の“海圻”という巡洋艦は修理する必要があった。しかし、当時の北方地域では、旅順以外には大きなドックなかった。だから、1927年、巡洋艦“海圻”は修理のために旅順へ入港してきた。この時、東北海軍の艦艇“鎮海”も旅順で修理していた。巡洋艦“海圻”の士官と兵士は、東北海軍の兵士たちの衣食が満ち足りている様子を見てから、東北海軍に降服することを考えた。この状況によって、巡洋艦“海圻”が修理を終えた直後、通電して東北海軍に降服した。張作霖はこのことを聞いて、非常に喜んだ。張作霖は巡洋艦“海圻”の士官と兵士に三ヶ月の給料を与えた。巡洋艦“海圻”は東北海軍に降服する前に直隸政府から三ヶ月の給料を受け取っていなかったからである」¹⁴¹。

巡洋艦“海圻”は当時、中国国内では最も巨大な艦艇であった。1894年日清戦争に敗北した4年後、清政府はイギリスからこの巡洋艦を購入した。辛亥革命前に、“海圻”は中国海軍を代表して、イギリス皇帝の戴冠式に参加したほどである。

巡洋艦“海圻”は「海上の王」と呼ばれていた。“海圻”のスピードと武器装備は当時、世界で一流であった。この“海圻”が東北海軍に加入したことによって、東北海軍の実力が強化された。艦隊の士気が高まった。「当時、南京政府の海軍部長であった陳紹寛は彼の部下に、もし、東北海軍が南下すれば、対決できるかと聞いた。彼の部下は対決しないほうが良いと答えた」¹⁴²という。蒋介石国民党の南京政府でさえ、脅威を感じていた艦船であった。

“海圻”は東北海軍に投降したが、巡洋艦はわずか一隻しかなかった。続いて、渤海艦隊全体を接收する必要があった。第二次奉直戦争で勝利を収めたために、張作霖の勢力範囲は東北三省から、さらに河北省、山東省、江蘇省、河南省、安徽省にまで拡大していた。しかし、渤海艦隊は山東省の青島湾に閉じこもったままで、奉天軍には降服しなかった。

瀋鴻烈は強引に渤海艦隊を奉天軍海防艦隊として改編するつもりであった。まず、瀋鴻烈は当時の山東省督軍張宗昌を東北海軍総司令に推戴した。瀋鴻烈は自ら副司令官を任じた。これより、張宗昌の陸軍を動員して、渤海艦隊を包囲した。渤海艦隊は陸、海両面の脅威によって、奉天軍に降服するしかなかった。

こうして奉天軍は二つの艦隊を持つことができた。第一艦隊はもともとの東北海防艦隊であり、“海圻”、“江利”によって構成された。大連の長山島に駐在することになった。第二艦隊は渤海艦隊の接收によって構成された。青島に駐在することになった。これより、東北海軍は全盛期を迎えた。

全盛期の東北海軍で瀋鴻烈は海軍中将司令に任じられて、江防艦隊を指揮することになった。二つの海防艦隊を持つことができた。第一艦隊は“海圻”、“海琛”、“鎮海”、“威海”、“同安”などの中国を代表する艦艇で構成されてい

¹⁴¹徐轍、徐悦『張作霖』前掲、148頁。

¹⁴²同上。

た。第二艦隊は“永翔”、“楚豫”、“江利”、“定海”などの艦艇を持っていた。海軍少将袁方喬は第二艦隊長に任命され、長山島に駐在することになった。

陸上の海軍機関としては、海軍学校、陸戦隊、造船所、海軍航空隊、海軍医院などの海軍機関があった。全盛期の東北海軍は21隻の艦艇を誇った。総トン数は約3.22万トンで、艦隊の兵力は3300人であった。当時、中国全体の海軍艦艇は約4.2万トン¹⁴³で、東北海軍が四分之三を占めていた。張作霖の東北海軍は世界列強の海軍と比べものにはならなかったが、世界海軍に準じた海軍システムを築き上げ、国内には敵がいなかった。

1927年6月、張作霖は東北海軍総司令部を成立させた。張作霖は自ら総司令を任じた。瀋鴻烈が副司令に任命された。

第三節 北洋政府制覇への道

1924年9月、第二次奉直戦争が勃発した。国会議員に対する賄賂で総統職を買ったと非難される曹錕が牛耳る直隸軍閥政権に対する張作霖の奉天軍閥が挑戦した奉直対決であるが、もっと複雑な構造を有していた。曹錕の賄賂選挙や武力統一に反発した奉天派、安徽派、それに孫文の広東政府もが加わる反直隸派が大規模な武力抗争に出たのである。いわゆる“反直三角軍事同盟”が築かれていた。軍閥政治の典型であった安徽軍閥、奉天軍閥と、反軍閥を掲げてコミンテルン・ソ連と提携した孫文・国共合作政権との野合という奇妙な連合でもあった。

この第二次奉直戦争に、張学良は奉系軍閥の第三軍を率いて参戦した。この戦いで張学良は、奉直両軍が最も激しく衝突した山海関を拠点として最前線で総指揮を取り、巧みな戦術で直隸軍を撃滅した。郭松齡は張学良の命令に従って、三個の歩兵団、一個の山砲營を率いて、九門口を突襲した。郭松齡は夜間に行軍して、昼間に休憩するという戦術を取っていた。9月27日夜、九門口に着いた。翌日の払暁で猛烈な攻撃を行った。29日払暁、九門口を占領して、山海関を突破した。相次いで、北戴河と秦皇島を占領した。

この山海関の敗北によって、直隸派の馮玉祥が突然反旗を翻して北京に戻り、曹錕を監禁した。有名な馮玉祥の北京政変である。このクーデターによって、直隸軍は総崩れとなり、実力者の呉佩孚も軍艦を乗って、逃亡した。

こうして第二次奉直戦争は奉天派の勝利に終わり、北京政府は張作霖の奉天派、段祺瑞の安徽派、馮玉祥の国民軍の三派連合が支配することになった。この時、張作霖は二十個師団、七個旅団、二個騎兵旅団、二個砲兵旅団、一個工兵連隊、一個輜重連隊を持っていた。総兵力は三十五万にもものぼった。

“反直三角軍事同盟”とは、第一次奉直戦争に敗北した後、失地回復を目指した張作霖は直隸軍閥を倒すために、段祺瑞、孫文と手を結ぶ戦略を選択した軍事同盟である。。

かつての安直戦争では、張作霖は直隸軍閥と手を結んで、段祺瑞を打倒した。しかし第一次奉直戦争で張作霖は曹錕の直隸軍閥政権と対立関係に入った。敵の敵は味方というわけで、段祺瑞の安徽派と関係を修復した。もともと張作霖

¹⁴³張鳳仁「東北海軍的建立与壮大」、『遼寧文史資料』第3輯、前掲、82頁。

と段祺瑞は同じ親日派として関係が密であった。安直戦争で敗北した段祺瑞は天津に撤退したものの、直隸軍閥打倒の再起を画策して、張作霖と連絡を取り合っていた。張作霖は段祺瑞と連絡しながら、安徽派軍閥を代表していた浙江督軍の盧永祥と密接に連絡した。

同時に張作霖は広東政権を握っていた孫文とも連絡を取っていた。当時、孫文は広東軍政府の大元帥であり、直隸政権打倒の北伐出師を準備していた。新しく創設した国民革命軍単独では、北伐出師を成功させることはできない。そこで、孫文は北洋軍閥同士の対立抗争を利用する戦略を展開した。国民党と合作していた提携相手の共産党は、軍閥打倒のために軍閥と手を組むことに反対していたが、孫文は腹心の汪精衛を使って、張作霖と連絡を取り、反直三角軍事同盟を实らせていた。1922年9月、汪兆銘は孫文の命令を受けて、張作霖を訪問した。

張作霖は孫文と段祺瑞のほか、直隸軍閥曹錕の部下であった馮玉祥とも連絡を取ってきた。第二次奉直戦争前に張作霖は馮玉祥を籠絡するために、馮玉祥に軍費二百万を渡していた。既に開戦前において、直隸軍閥は張作霖によって瓦解させられたともいえる¹⁴⁴。

第二次奉直戦争では、奉天軍は主力部隊を山海関、九門口一線に集結して、直隸軍に壊滅的な打撃を与える計画がたてられた。先ず熱河から兩路に分けて攻撃しながら、進軍する。熱河方面の部隊は山海関、九門口一線に到着すれば、ここで直隸軍を迎え撃つ。そこで奉天からの部隊も合流して、三路から進軍した部隊が一斉に直隸軍を攻撃することで、その目的を達成する。この戦略のメリットは、一つには、熱河方面における直隸軍の部隊が少ないこと、もう一つは、直隸軍が朝陽で奉天軍の退却路を断たつ恐れがあり、それを予防できるからであった。

この戦略¹⁴⁵によって、奉天軍には六軍が配備された。姜登選（軍長）、韓麟春（副軍長）が第一軍を統率した。張学良（軍長）、郭松齡（副軍長）は第三軍を統率した。第一、三軍を組み合わせると六万の精鋭部隊になった。この部隊は山海関、九門口一線の攻撃という任務を遂行することとなった。別の第二軍（約三万人）は李景林、張宗昌が統率した。熱河南面において朝陽、冷口一線を攻撃しながら、進軍した。第五、六軍は吳俊昇、許蘭洲が統率し、熱河北面において、主に騎兵部隊を中心に建平、平泉一線を攻撃しながら、進んだ。張作霖の第四軍は総予備隊に回った。総兵力は二十五万に膨れ上がった。

1924年9月17日に戦闘が始まった。山海関、九門口において、直奉兩軍ともに精鋭部隊を集中させたため、戦闘は非常に激しかった。張作霖は第三軍の精鋭部隊第二、六旅団を先鋒として、張学良にその総指揮権を与えた。直隸軍の抵抗も厳しく、兩方とも大きな損害を受けて、勝負がつかなかった。

この時、奉天軍の第一軍が直隸軍の側面を攻撃し、九門口を突破した。そして、戦略要地である石門寨を占領した。この時、馮玉祥は急に、前線で寝返った。直隸軍は混乱した。張学良はこの混乱につけ込んで、秦皇島を占領した。これより、直隸軍は奉天軍に包囲された。

¹⁴⁴馬炳南「二次直奉戦前張作霖与馮玉祥的拉攏」、『文史資料選輯』第35輯、前掲、55頁。

¹⁴⁵傅興沛「第二次直奉戦争記実」、『文史資料選輯』第4輯、中華書局、1960年版、34頁。

実は、戦闘が始まる前に奉天軍内部で戦術的争いがあった。戦闘開始前の最後の作戦会議で、郭松齡と姜登選の意見が対立したのである。どちらの部隊が真っ先に九門口を攻撃するかという先陣争いであった。実は、この二人の対立は二つの派閥間対立でもあった。郭松齡は国内陸軍学校派であった。姜登選は楊宇霆を始め、日本士官学校派であった。この二つの派閥は常に、奉天軍のなかでも主導権争いを繰り返していた。二人とも功績を挙げたかった。お互いに功績を譲りたくなかった。自分の意見を堅持し、激しい口げんかをした。郭松齡は非常に憤慨した。

この作戦会議が終わると、郭松齡は自分の部隊を率いて、戦場を離れるという行動に出た。張学良は非常に驚愕した。すぐ、郭松齡を追いかけ、説得に当たった。この結果、郭松齡は戦場に戻った。張学良の説得は、以下のようなものであったと、張学良は述べている。

「かつてあなたは私の先生であり、私はあなたの生徒であった。しかし、今は状況が違う。私はあなたの上官で、あなたは私の部下である。あなたが考えているような行動をとるには、先ず私を殺さなければならない。今私は何の武器を持っていないが、あなたは銃を持っている。もし反乱を起そうと考えているなら、それは間違っている。軍隊を連れて行きたいかもしれないが、私はあなたの上官であり、私は許可しない。もし命令に従わないのなら、私を殺さなければならない。さあ、命令に従うのか、それとも従わず、私をここで殺すのか」¹⁴⁶。

郭松齡は張学良に謝り、姜登選も張学良の説得に従った。こうして郭松齡が九門口に向けて真っ先に攻撃することになった。張学良の仲裁のおかげで、対立は収まった。この懸命な調停によって、張学良は奉天軍の中でさらなる影響力を増した。張学良は統帥としての能力を示しはじめたのである。

九門口と山海関の戦闘は第二次奉直戦争の中でも最も重要な戦闘であった。もし、山海関と九門口を突破しなければ、奉天軍の勝利はあり得なかったからだ。だから、奉天軍のなかでも精鋭部隊であった張学良と郭松齡が指揮する一、三軍が激しい戦闘を通して山海関、九門口一線の勝利を収めたということは、奉天軍にとって非常に重要な転換点であった。

直隸軍の装備は奉天軍と同じレベルであった。両軍にとっての分かれ目は、装備力ではなく戦闘力の違いであった。張学良と郭松齡が整頓してきた第一、三軍の戦闘力は他の部隊と比べものにならないほど高かった。しかも、戦闘中であって郭松齡と張学良は自ら兵士の先頭に立っていた。兵士の士気を鼓舞した。山海関、九門口の戦功によって、張学良が進めてきた奉天軍の再編整理が成功したことが確かめられた。

1924年10月23日、前線から撤退した馮玉祥は部隊を率いて北京に帰還し、北京政変を断行した。総統府を包囲し、直隸派によって掌握されている北京政府に停戦と呉佩孚の職務の解除を命令するよう迫り、総統の曹錕を監禁した。馮玉祥は、独自の「国民軍」の成立を宣言し、国民党の孫文との協力を模索することとなった。

曹錕政権崩壊の後、大総統制を廃止して、段祺瑞が臨時執政となった。段祺瑞、張作霖、馮玉祥は、「善後会議」を開いて、今後の方針を協議することと

¹⁴⁶唐徳剛『張学良口述歴史』前掲、69～70頁。

した。同盟者である広東の孫文に対し、上京して協議するよう、要請した。

孫文は「北上宣言」を發表して広東を離れ、1924年12月14日、張作霖と張学良に駐在している天津に着いた。張作霖らの理解では、奉天軍が馮玉祥の国民軍と協力して、直隸軍閥を打倒することができたとして、張作霖に感謝するために来た、とみなした。この時の面会について、張学良は次のように口述している。

「総理は病気で横になっていた。会見の時に、総理は私を床の側に座らせ、私に語った。中国の将来は、貴方達青年の肩にかかっている。尤も貴方達東北の青年の責任は重大である。強大な隣邦は虎視眈眈と窺っている。目下の日本は侵略の野心が明らかにしてきた。貴方は有為な青年である。貴方に大きな期待を抱いている」¹⁴⁷。

この孫文から声をかけられたことは、張学良にとって、大きな意味を持っていたのかもしれない。国民党の南京政府が全国を統一すると、張学良は自らの意思で国民党に参加する「東北易幟」を断行したからである。この時から、張学良は孫文の意思を受け継いで、国家統一という考え方を持っていたのであろうか。

山海関での戦闘によって、張学良と郭松齡の名声は一段高まり、奉天軍での地位も揺ぎないものとなった。そして、第二次奉直戦争に勝利した張作霖は、自分の腹心を直隸省（李景林）・山東省（張宗昌）・江蘇省（楊宇霆）・安徽省（姜登選）の都督に任命し、その勢力を長江流域にまで拡大した。

南下する張作霖の積極的膨張戦略に対抗して、浙江省をはじめ江南に勢力を張る孫伝芳は奉天軍と開戦することを避けられないと考えるに至った。そのために、積極的に各省の地方軍閥と連絡を取った。各地の地方軍閥も奉天軍の圧力を受けて脅威を感じており、孫伝芳に協力して奉天軍と戦う準備をし始めた。いわゆる“浙奉戦争”の始まりである。

この時、奉天軍の戦線は山海関から上海まで、とても長くなっていた。全戦線を同時的に守ることは困難があった。江蘇督辦となった楊宇霆は、張作霖の命令に従って、戦線を縮小して、戦力を温存して、徐州まで撤退してきた。10月14日、上海に駐在していた奉天軍邢士廉の第二十師団も上海から撤退してきた。張作霖はこうした撤兵を通して、戦争の爆発を遅らせようとしたのである。

一方、対抗する孫伝芳は10月15日、浙、閩、蘇、皖、贛五省連軍総司令に就任すると通電した。そして退却する奉天軍への攻撃を命令した。当日の夜、浙軍の二個連隊は松江から上海龍華地域に猛烈な攻撃を始めた。浙奉戦争が勃発したのである。

孫伝芳の浙軍の先制攻撃で浙奉戦争が始まると、奉天軍は上海から早々に撤退したため、浙軍は順調に上海龍華を占領した。さらに10月16日、浙軍謝鴻勛の軍隊は上海全域を占領した。盧香亭の軍隊も宜興を占領した。同日、孫伝芳と浙江省長夏超などは「討奉通電」を發表した。

「数月以来、奉天軍は阿片を販売して、利益をあげ、国内外の笑いものになった。人を殺して、品物を奪った……江南を私物化した。政権を盗み取って、勝手に出鱈目なことをした。甚だしくは長官たちもそれに喜びをにじませて就

¹⁴⁷ 竇応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、94頁。

任した。だから兵士たちも公然と略奪を繰り返した。掠奪は十日も過ぎたが、軍紀で処分されたとは一度も聞いたことはない。今日に至って、伝芳は忍耐強く我慢し、兵士も我慢してきたが、人民は到底我慢できなかった。極悪非道な連中が戦争の首謀者となっている。今、同志と軍隊を連合した。当世の豪傑は心を合わせて、協力することとなった。唯、元凶張作霖一人の策略であって、他の者の罪は不問とする」¹⁴⁸。

孫伝芳は反奉的世論を利用して、張作霖糾弾に徹し、奉天軍閥の内部を離間しようと考えていた。

孫伝芳の通電が各地に送られた以後、湖北、江蘇、江西、福建各省の直系軍閥は孫伝芳の檄文に応えたのである。華中、華東に勢力を伸ばそうとした張作霖にとって、情勢は厳しくなった。

10月18日、盧香亭の軍隊は丹陽、鎮江、龍潭などの地方を占領した。同日、謝鴻勛の軍隊は蘇州、無錫、常州などの地方を占領した。10月19日、包囲された楊宇霆、鄭兼が南京から撤退した。

楊宇霆は蚌埠まで撤退してきた時に、姜登選と面会したものの、慌しく逃げ去った。姜は非常に憤慨して、自分の部下に次のように語ったという。

「私は麟閣(楊宇霆、字は麟閣)と長く付き合ってきた。今、はじめてその無能さが見えた。二人の軍隊を一カ所に連合させ、要害の地を利用して、陣地を設置すれば、雌雄を決することができる。不幸にも敗北したとしても、それから撤退しても遅くはない。どうして、ここまで驚いて、あたふたと軍隊を捨てて、逃げ去ったのだろうか」¹⁴⁹。

安徽督辦の姜登選は対抗できる兵力を擁していないために、安徽省から離れた。そして、安徽督辦を辞任する通電を発表し、徐州に逃れた。

こうして8月末に奉系軍閥が江蘇督辦、安徽督辦を奪い取ってからのたったの50日間で、奉天軍は江蘇、安徽両省から追い出された。

上海と南京を結ぶ一線でも、奉天軍が大きな損失を受けた。第八師団のすべてが武装を解除された。第二十師団は敗戦して、解散した。第二十師団の第四十四旅団の旅団長劉翼飛は、上海まで撤退の途中で浙軍と数時間にわたる戦闘を繰り広げたが、敗北した。劉翼飛は一人で奉天に逃げ戻った。11月7日、奉天軍は海州、宿県、徐州を結ぶ一線から、山東の台兒莊、韓莊、臨城の一線までに撤退した。次の日、五省連軍は徐州を占領した。かくして、10月中旬から始まった浙奉戦争が、奉系軍閥の敗北という結果で終了した。

¹⁴⁸『中華民国史資料叢稿・大記事』第11輯、中華書局、1978年、176頁。

¹⁴⁹邢贊亭「孫伝芳駆奉」、『文史資料選輯』中華書局、1968年、49頁。

第四章 郭松齡の叛乱

1925年秋の浙奉戦争で敗北した奉天軍は、長江流域に勢力を拡大するという戦略を見直さなければならない苦境に陥っていた。そこに勃発したのが、張学良の懐刀ともいべき郭松齡の叛乱であった。1925年11月22日、張作霖に叛旗を翻した。武力叛乱である。

当初、奉天軍内部の楊宇霆糾弾であったが、それは軍閥張作霖打倒へ向かい、郭松齡を師と仰ぐ張学良を困惑させた。かつて同盟会など革命派の思想洗礼を受けた郭松齡は、武力統一を目指す軍閥混戦を克服する道を模索したが、張作霖に対する武力叛乱という最後の一線を越えた異議申し立ては、張学良の協力を得ることができず、12月25日、郭松齡夫妻は捉えられて銃殺に処された。かくして一か月余りの叛乱は失敗に終わった。しかし、郭松齡の思いは、張学良に受け継がれ、張作霖爆殺によって張学良が東北の覇者となると、全国統一を願って、国民党政権に参加する「東北易幟」を実現させた。

第一節 叛乱の原因——張作霖との違い

1925年11月22日、郭松齡は叛乱の口火となった「主和罷戦」（平和を求めて戦争を回避する）の通電を発表した。通電の内容は次の通りであった。

「天は中国に禍をもたらした。内乱が絶え間なく起こり、同類が殺し合い、まるで復讐のようだ。人心を失って、行く末はどうなることか。その根源を推理すれば、ただ一、二の窮兵黷武（みだりに兵を動員したがる）な人物が、私欲を求めるために、人民を惨殺してきたことにある。武力統一というが、何回挑戦しても、失敗した。それでも懲りずに悟らず、戦禍は絶えることが無かった。資金が枯渇すると外国から借款し、国を売ってしまった。この悪循環が今日にまでに至っている。

国家存亡の危機を見るにつけ、まさに軍人は覚悟の時であった。我が松齡はそこに身を置いて、政治に明るくはないが、ただ、内乱を、国内の戦禍を、これ以上続けさせてはならないと知っていた。各地を支配する諸公達は、『保境安民』を上策と見なす。だから兵力を統率して、『安内御外』の責任を果たそうとする。去年の『榆関之戦』（奉直戦争を指す）の血痕はまだ乾いていないというのに、敗者が急いで報復を図っていた。国家の安否を顧みようとしなかった。勝者も満足せず、人民の苦痛に配慮しなかった。こうして戦争がもたらす災禍は毎年絶えなかった。連中は自分の軍隊を率いて、互いに軍事的野合を実現して、それを国民に宣告してきた。東三省の健児はいつも、強豪忠愛の一家と称し、その思いは誰にも負けなかった。

今回の奉天軍にあっては、主戦者はただ、楊宇霆一人だけであった。戦いに失敗して受けた失地の恥を雪ぐため、倒行逆施（道理に逆行）を惜しまず、報復の機会を求めたのである。我が松齡は国家の元気を取り戻すため、また東三省の安全のために策を練り、和平を唱え、軍隊を率いて山海関を越えた。そこで、人を欺いて主戦を唱える楊宇霆の即日退陣を要求し、張軍団長漢卿（張学良）を司令に推挙しようとするものである。それによって、東三省の根本を強固にして、実業を発展させて、人民の職責を守ることができる。全国の同僚た

ちよ、この主旨を諒解し、各自の人民を守って、ゆっくりと保養し、武力で人民を苛めるようなことをしないで欲しい。もし、好乱の輩が悔い改めず、東三省の土地を少しでも侵すものがあれば、我が松齡は責任をもって、死ぬまで抵抗する ……」¹⁵⁰。

この叛乱の狼煙を上げた通電の特徴は、内戦を停止させるための軍事蜂起（新たな内戦）であるという矛盾した主張である。だが郭松齡は、自分の軍事的叛乱が新たな内戦を誘発させるものではないと主張している。内戦に反対し、叛乱の目的は、主戦派の楊宇霆を排斥し、張学良を奉天軍の司令官に推薦するためのものであり、それによって人民を害する戦争を超克できるというものである。糾弾相手は楊宇霆であって、それは張作霖への叛乱ではないと強調している。そして根本目標は、東三省の根本を強固にし、実業を発展させて、民力を養い、人民を守ることであると唱えた。

この段階での郭松齡は、張作霖の軍閥的好戦姿勢を糾弾するのではなく、奉天軍の中で、悪いのは楊宇霆一人であり、それ以外の人々の責任を追及しないことを強調した。楊宇霆の蹴落としを狙っていることから見ると、郭松齡は楊宇霆に対するライバル意識は強かったのであろう。

だが、目標は楊宇霆であっただろうか。そうではない。その後に出された下記の「敬告東三省父老書」では、主要な打倒目標は張作霖に格上げされており、この段階では張作霖打倒をカモフラージュさせるために、楊宇霆に攻撃・批判を集中させたのである。

同時に、張学良を奉天軍司令官に推挙したことから見れば、微妙な立場にあった張学良の呼応を克ち取ることで、叛乱の大義を正当化しようとしたのである。そして、張学良の名義を挙げることによって、張学良の軍隊の反撃を抑えようとしたのである。

では、当面の敵である楊宇霆のどこが悪いのか。1925年11月22日、郭松齡は「討伐楊宇霆」の通電を発表した。通電の内容は次の通りであった。

「我が松齡は今回、“主和罷戦”を唱え、軍隊を率いて山海関を越えた。そこで悪玉・楊宇霆の罷免を要求し、通電を通して、宣告した。既に閲覧したことであろう。

ただ、悪玉・楊宇霆の罪状については、さらに言わなければならないことがある。楊宇霆を調べれば分かることだが、楊という人物は残忍な性格であり、非常に陰険であり、異分子を排斥する手段に長けていた。東北各軍官に対して、新、旧を問わず、多くの人を陥れた。或いは、抑えつけて登用、昇格を許さず、排斥して職位を奪った。

例えば、第一次奉直戦争の時、張都統叙五（張景恵）に対して、多くの誹謗中傷を投げかけ、いろいろな方法で難癖をつけた。戦争に敗北した以後、帥座府（張作霖）は張都統の功績を考えて、奉天に戻そうとしていた。しかし、楊は日夜を費やして、全力で妨害して、張都統叙五は京津に棄てられた。こうして冤罪を晴らすことができなかった。彼は忠賢な人びとを嫉妬し、陥れるのが常であった。

¹⁵⁰ 「主和罷戦之通電」1925年11月22日、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、164頁。

楊は江蘇督辦に就任してから、至る所で私党を樹立し、職権を濫用した。人民への苛斂誅求で財産をかき集め、私腹を肥やした。就任すると、やがて、百萬元を掻き集めた。このため与論が沸き立って、恨み声が溢れた。江蘇省の人民は奉天軍に言及すれば、齒ぎしりをして恨み憤る結果になった。そして、浙軍と衝突すると、敗北してほうほうの体で逃げ去った。上海に駐在していた奉天軍を顧みる余裕もなく見棄てて、二個師団、一個旅団の奉天軍はほとんど惨殺され、傷ついた。土地を失い、軍隊を喪失する罪は数えきれなかった。

奉天に戻った以後、悔い改めなかった。逆に積極的に戦うことだけを主張した。報復を求めたのである。江蘇、上海を失った仇を討って雪辱をしようと考えてただけであった。この時、国家は多事多難に直面していた。連年の兵乱によって、人民は困窮していたから、このまま、再び戦禍をもたらしてはいけない。だから悔い改めない主戦論者の楊宇霆は即日職務を去るべきであると要求する。

我が松齡はこの危機的状況を危惧して、和平の愛護を求める。今まさに関税会議（関税自主権に関する国際会議）が開始される時であり、戦争を行うべきではない。今回、軍隊を率いて、奉天に戻ることができれば、元凶を駆逐した後、即刻、部下と一緒に、辺境に駐屯して開墾し、国防を強固にする。勝手に武力を使用して、内戦を起こそうとする者が居れば、松齡は共通の敵を見なして、力を尽くして戦う。悪いことを企んで、東北三省を侵略してくる連中が居れば、更に仇敵と見なして、死ぬまで、抵抗することを誓う……」¹⁵¹。

楊宇霆の主戦論は、江蘇、上海で敗北した汚名を雪ぐための単なる報復戦争であり、人民の支持を得られないという。ここでは、ライバル楊宇霆の悪行を書き並べるだけで、これでは叛乱の大義とはならない。

郭松齡の真意を探るためには、直接に面会するのが肝要として、張学良は11月25日、郭松齡の居る秦皇島に向かった。日本側の史料によれば、郭松齡は張学良との会談を断ったものの、関東軍の浦澄江参謀と儀我誠也顧問と会い、叛乱の意図を説明した。その経緯は次の通りであった。

「二十五日、再ヒ出發。連山ヨリ軍艦鎮海ニ乗シテ秦皇島ニ至リ、先ツ郭ノ意中ヲ確カメタル後、灤州ニ赴カントス。依テ儀我荒木両顧問ハ二十六日、秦皇島ニ上陸ス。時恰モ関東軍司令部ヨリ情況偵察ノ為派遣セラレタル浦参謀来リ會ス。乃チ守田医師ヲ郭(當時灤州ヨリ昌黎ニ前進セリ)ノ許ニ派遣シ、張学良、浦参謀等ト会見スルノ意圖アリヤ否ヤヲ確メシ。郭ハ浦参謀儀我顧問等トハ会見スルモ、学良トハ最早面会スルノ要ナキ旨ノ回答ニ接セシヲ以テ、浦参謀儀我顧問等ハ二十七日、昌黎ニ赴キ、正午十二時郭ト会見ス。郭ハ約二時間ニ直リ挙事ノ事情ヲ縷述セリ。其ノ要ハ、張作霖ノ武力統一策ヲ難シ、和平主義ヲ高唱シ、彼カ挙事ハ一ニ之カ實現ニ外ナラスト為ス。理由ノ概要ヲ述フレハ、以下ノ如シ。

一、中国ノ内戦ト世界戦トノ關係。奉馮開戦セハ、必スヤ日露ノ繁争開戦トナルヘク。日露開戦トナレハ、朝鮮及貴國(日本)ノ政治界ハ勞農ノ畫策宣傳ニ依リ、必スヤ一異変ヲ来シ、遂ニハ米國ノ加入ヲ誘致セン。斯クテ中國ノ内争ハ極東ノ大乱ト化シ、延イテ世界大戦トナル公算ト危険トヲ有ス。

¹⁵¹ 「討伐楊宇霆之通電」1925年11月22日、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、165-166頁。

二、武力統一政策ノ失敗。 民國過去ノ兵乱ヲ見ルニ、武力政策ハ悉ク失敗セリ。然ルニ張作霖ハ此ニ想到セスシ、同政策ヲ断行セントス。其ノ失敗歴然タルモノアリ。故ニ予ハ張ノ失敗ノ前ニ軍民ヲ救助シ、以テ時局ノ和平ヲ計ラントスルモノナリ。

三、国民ノ心理ニ反ス。 中国ノ民心ハ累年ノ兵変ニ飽キ、今ヤ和平ヲ熱望シアル。従テ軍人タルモノハ民心ノ帰趨ヲ察シ、国民ノ福祉ヲ圖ラサルヘカラス。

四、経済上ノ見地。 中国ハ目下経済上、財政上極メテ困難ナルノ情況ニ在リテ、将ニ死ニ瀕セントシツツアリ。奉天ニ於テモ亦然リ。是レ兵亂相續キ、軍事費膨張シテ停止スル所ナキカ為ナリ。今ニシテ内戦ヲ中止セスンハ、軍閥ハ輿論ノ攻撃ヲ受ケテ失墜スヘク。國民ハ益々窮乏センノミ。

五、軍隊ノ実情ニ就テ。 奉天軍ハ大擴張ノ結果、新募ノ兵多ク、其ノ素質不良訓練不十分全ク、烏合ノ衆ニ等シ。此ノ如キ軍隊ヲ以テ一度戦闘ヲ開始センカ、忽チ解散スルニ至ルヘキコト、火ヲ睹ルヨリ明カナリ。

六、官兵ノ心理ニ就テ。 今ヤ官兵ハ戦ヲ欲セス。蓋シ仮令戦フモ、賞ハ少数者ノ為壟断セラレ、官兵自身ハ何等俸所ナケレバナリ。此ノ如キ官兵ヲ率ヒテ作战セン。必スヤ彼等ハ戈ヲ逆ニスルカ、或ハ解散スルニ至ルヘキハ豫察難カラス。張將軍ハ頻リニ赤化防止ヲ云々スルモ、張將軍自身自ラ赤化製造ヲナシツツアルニアラスヤ。

七、戦略關係ニ就テ。 目下、馮孫河南各軍ト奉天軍トノ戰略關係ハ、奉軍ノ為頗ル不利ニシテ、若シ奉天軍ニシテ南口ニ退却セル馮軍ニ対シ、攻勢ヲ採ランカ、反奉各軍ノ包圍攻撃スル所トナリ、一朝ニシテ覆滅スルニ至ラン」¹⁵²。

少し長い引用になったが、まとめれば、「其ノ要ハ、張作霖ノ武力統一策ヲ難シ、和平主義ヲ高唱シ」とあり、①奉天軍と馮玉祥の国民軍とが戦争となれば、国民軍の背後にはロシア（ソ連）があって、日露戦争に拡大される。②張作霖の武力政策は失敗が歴然としている。③民心は戦乱に飽き、平和を求めている。④内戦を止めれば膨大な軍事費膨張を抑えることができる。⑤奉天軍の拡張は烏合の衆を掻き集めるだけである。⑥兵士は戦闘を望んではいない。⑦馮軍打倒は、反奉天の各軍が包圍攻撃し、奉天軍に不利である。

だから叛乱の大義は、張作霖の武力政策を止めさせ、平和を求める国民のために、内戦を終息させるための叛乱である、ということになる。どこか、10年後の西安事件における蒋介石への「兵諫」をほうふつとさせるところがある。張学良が内戦を止めない蒋介石に叛乱を企てて武装逮捕し、武力を背景に諫言した「兵諫」の大義は、共産党との「内戦中止」であったからだ。郭松齡にも、「兵諫」の思いが込められていたのであろう。

郭松齡の叛乱の最も重要な原因は、郭松齡と張作霖の戰略思想において、分歧があったことである。郭松齡の叛乱は、軍閥混戦の内戦状況からの克服（平和主義）を目指すもので、その前史は奉天軍閥と直隸軍閥を中心とした軍閥同士の内戦にある。

第二次奉直戦争が、直隸派であった馮玉祥の北京政変で終息し、直隸派軍閥

¹⁵²JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—張郭戦史送付の件、大正 15 年 6 冊の内第 6 冊、防衛省防衛研究所、1221 頁—1227 頁。

の曹錕が大総統を辞して下野した。第一次奉直戦争では敗北した奉天軍であったが、今度は勝利した。張作霖は段祺瑞、馮玉祥と提携して、北京に「臨時執政府」を樹立した。そして、奉天派軍閥の張宗昌が山東督軍、楊宇霆が江蘇督軍、姜登選が安徽督軍となって、奉天派の勢力を関内においても一気に拡大した。張作霖はこの勢いに乗じて、さらに南下して、勢力を華東以南に広げかけた。

郭松齡は、こうした関内での勢力拡大路線をもっとも危惧した。今は、東北に留まって、内部充実に精力を集中すべきであると、杞憂したのである。

当時、郭松齡は、天下に打って出る張作霖が主張していた“窮兵黷武、武力統一”の政策に反対した。そして張作霖に、次のように進言したといわれる。

「我々の東北は広大な土地を有している。経済は豊かで、人口も三千万にのぼる。我々にとって、それだけで充分である。今回、関内へ出兵して、既に曹、呉を打ち負かした。かつての恥を漱ぐことができた。もし、再び南下して、勝利したとしても、それは多くの非難の的になってしまうだけだ。失敗すれば、上將軍の名誉を損なうだけである。関外に居座って、時機をうかがって、変化を見据え、その間に鋭気を養って力を蓄え、その後に統一を図るべきである」

153。

郭松齡は奉天軍閥に入る以前から、東北再建の道筋を考えていた。奉天軍閥に参加した以後、彼の軍事思想は奉天軍でかなり発揮することができるようになった。軍事才能も認められてきた。しかし、東北の再建構想は、まだ実現できないままでいた。ところが張作霖は、まだ、未完の東北再建に力を注ぐのではなく、関内に進出して天下統一の野望を明らかにしてきている。郭松齡からみれば、筋道が逆である。

張作霖に進言した話から見えることは、郭松齡は東北の資源を利用して、鋭気を養い、力を蓄えて、奉天軍閥を強大させたかったということである。その後、国家統一を図るべきである、と見なしていた。裏を返せば、今の奉天軍閥は国家を統一する力を持っていないし、かつその時機が来ていない、という認識である。しかし、張作霖は郭の考え方を認めていなかった。

張作霖は目前の功利を求めるに急であった。東北は治められたとしても、全国を治める実力に欠けていた。自分の実力を冷静に分析することができなかつたのであろう。結果、その後の浙奉戦争では、長江流域までに勢力を拡大せんとした奉天軍の楊宇霆、姜登選は孫伝芳に敗れてしまった。三個師団と安徽、江蘇を失ったのである。

この現実には郭松齡にとってみれば、まずは東北に閉籠って、東北再建に精力を注ぐことが最優先であるという確信を強めることになったであろう。張作霖の過ちを諭す「兵諫」で、自己の主張が正しいことを知らしめようとしたのである。11年後、張学良が西安で蒋介石を拘禁し、政策の変更を求めた西安事変の郭松齡版であった。

¹⁵³何柱国「郭松齡反奉失敗之我見」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、88頁。

第二節 軍事面から見る郭松齡叛乱事件

郭松齡は奉天軍閥に倒すために、馮玉祥、李景林と手を結んだ。馮玉祥は第二次直奉戦争で「北京クーデター」を敢行して、臨時執政政権を生み出す一翼を担った。国民軍を組織して、権力の中枢に躍り出たが、張作霖と対立し、微妙な地位を立っていた。一方、李景林は奉天軍第二軍長として第二次直奉戦争に参加し、天津を支配した。そして直隸軍務督辦となり、遂には直隸省長のポストを奪って「軍政統一」を実現した。

1925年10月、馮玉祥国民軍と奉天軍閥は代表を派遣して、日本での軍事演習を見学した。国民軍の代表は韓復榘であった。奉軍の代表は郭松齡であった。その時、郭松齡は韓復榘と協議し、馮玉祥と手を結んで、張作霖を倒す意を示した。韓復榘は帰国してから、馮玉祥に報告すると約束した¹⁵⁴。その時の馮玉祥は張作霖の圧力によって、直隸省を離れて、サハルー、綏遠、河南、甘肅、陝西及び北京を含めた京漢鉄道以北の地域に撤退せざるを得なかった。だから張作霖に対し、非常に不満を抱くようになっていた。このため、韓復榘から郭松齡の意向を聞くと、馮玉祥は即刻、韓復榘を派遣して、郭松齡に手を結びたいとの意を伝えた。11月中旬、郭松齡は李堅白と、弟の郭大鳴を派遣して、馮玉祥と具体的な提携内容を相談した¹⁵⁵。

李景林は郭松齡の恩に報いるために、郭松齡と手を結んだのである。第二次直奉戦争の時に、李景林は張作霖の命令に従って、熱河を攻撃した。李景林はさらに直隸省を手に入れようと考え、熱河を攻め下した以後、天津へ攻撃した。天津を攻め攻め落とした以後、直隸省の省長を駆逐して、直隸省の省長公署を占領した。

直隸省支配は李景林の単独行為であり、活動は張作霖の計画を攪乱した。張作霖は非常に激怒し、李景林を銃刑すると公言した。郭松齡は李景林の助命を嘆願し、張作霖は李景林の銃殺を取り止めた¹⁵⁶。李景林は郭松齡に非常な恩義を感じていた。このように李景林と張作霖との関係悪化が進んだ。その故に、李景林は郭松齡に協力すると承知した。

1925年11月23日、李景林、郭松齡の代表は北京で国民軍と協定を定めた。協定より「郭松齡ハ奉天地方ヲ占領ス。第一国民軍司令官馮玉祥ハ直隸省ヲ占領ス。李景林ハ熱河地方ヲ占領ス」¹⁵⁷ということになった。いわゆる郭、馮、李三角連盟が結ばれたのである。

1925年11月22日、郭松齡は灤州（現在は河北省唐山市灤県）で軍事会議を招集し、そこで張作霖への叛乱を明確にした。そして、そのための戦闘序列と戦闘計画を決定した。

郭松齡が指揮する全ての軍隊(第三、四方面軍)を四個軍に編成した。その編

¹⁵⁴ 吳錫祺「馮玉祥、郭松齡連合反対張作霖的經過」、『文史資料選輯』第35輯、前掲、170頁。

¹⁵⁵ 曾憲權訳（維・馬・普裏馬科夫著）『馮玉祥与国民軍』中国社会科学出版社、1982年、123頁。

¹⁵⁶ 徐徹、徐悦『張作霖』前掲、226頁。

¹⁵⁷ 「1 大正14年12月16日から大正15年1月20日」 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03030457000、諸外国外交関係雑纂／露、支間 第二卷(1-2-3-1_11_002)(外務省外交史料館)」

成内容は次の通りである¹⁵⁸。

劉振東を第一軍軍長に任命して、昌黎、山海関一帶の第五方面軍を殲滅するという任務を持たせた。対峙する第五方面軍は、第九師団、第十五師団及び騎兵第十六師団を含めて、三個師団35,000人から構成されていた。この第一軍は、周書明の第六旅団、劉連瑞の第十六師団及び砲兵第二連隊の一部から構成されていた。

劉偉を第二軍軍長に任命して、奉天の占領と、その治安を維持する任務を持たせた。

この第二軍は、王徳印の第二旅団、馬忠誠の第十二旅団、高士毅の第十九旅団、砲兵第二連隊の一部から構成されていた。

范浦江を第三軍軍長に任命して、錦州鉄道の沿線を維持するという任務を持たせた。この第三軍は、孫慶廷の第三十三旅団、劉文清の第三十四旅団、斎大鵬の第三十七旅団、砲兵第二連隊の一部から構成されていた。

霽雲を第四軍軍長に任命して、予備隊に充てた。この第四軍は、栞雲奎の第四旅団、劉維勇の第五旅団、砲兵第一連隊から構成されていた。

郭軍の編成については、日本軍の報告資料である「張郭戦史送付の件」にも同様な内容が報告されている¹⁵⁹。

当初の軍事計画によれば、次のような行軍予定が示された。

第一軍は昌黎、山海関に向かって徒歩で進軍し、第五方面軍を殲滅する。第二軍は列車に乗って、直接的に奉天へ向かう。第二軍に続いて、第三軍もまた列車に乗って、錦州の付近に到達する。第四軍はそのまま、留まって移動しない¹⁶⁰。

しかし、この計画は発表されると、直ちに各方面から反対を受けた。第一軍は徒歩ではなく列車に乗って山海関に到着し、そこで第五方面軍との戦闘に入るべきであると進言された。その理由は、鉄道の沿線と奉天の付近には、張作霖の軍隊が殆ど駐在していなかったからである。第五方面軍を迅速に殲滅すれば、簡単に奉天を占領できると判断した。時間を迅速に且つ有効に使うために、第一軍を列車で運ぶほうが効率的と考えられた。

しかし列車は時間通りに準備できなかった。列車で行軍する第二軍の出発時間は午前六時と計画されたが、列車が到達したのは午前十時であった。しかも、少数の軍隊しか載せられなかった。戦闘に干渉した日本軍の資料によれば、状況は次の通りであった。

「奉天ヲ占領セントシ、魏益三ノ指揮スル歩兵第十八團同歩兵第九十一團及工兵第四營一列車ニ満載シ、二十三日未明、夜暗ニ乗シ昌黎附近ニ駐兵セシ第九師(汲金純)ヲ突破シテ東進セシメ、次イテ同日午後、劉文清ノ指揮スル第三十四旅(第七十八團、第八十九團)及工兵第四營ヲ二列車ニ分乗セシメ、之ニ続行セシム。先頭列車ハ弘暁山海関ヲ通過シ、萬家屯ニ至リ、一團ヲ下車セシム。通信線ヲ破壊シ、奉天、山海関間ノ連絡ヲ遮断シ、第二第三列車ハ山海関ニ停

¹⁵⁸韓世儒「郭松齡反奉的軍事部署及戦闘経過」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、60頁。

¹⁵⁹JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—張郭戦史送付の件、前掲、1217-1218頁。

¹⁶⁰韓世儒「郭松齡反奉的軍事部署及戦闘経過」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、61頁。

止ス」¹⁶¹。

日本側の資料によれば、魏益三を率いる部隊は奇兵として、奉天を占領しようとしている。山海関を通過した後、速やかに、奉天を占領するために、奉天と山海関の間の通信を遮断した。考え方には間違いなかったが、実際はその目的を達成できなかった。

郭松齡叛乱の意向は、郭軍から離脱し張作相の息子である張廷樞が第五方面軍に、事前に伝えた。日本軍側の資料によれば、張廷樞の離脱で、郭松齡軍の氣勢をそがれたという。

「二十三日朝、張作霖ノ子張廷樞、昌黎ヨリ山海関ニ逃レ来リ、郭ノ行動不穩ニ付警戒ヲ要スヘキヲ傳フ。依テ第五方面軍参謀処長、第十五師長、第十六師長等対策協議中、偶前記ノ三列車到着シ、一列車ハ既ニ突破前進シ、二列車ハ停止セシ報ニ接シ、次テ騎兵ノ報告ニ依リ、先頭列車ハ萬家屯ニ停止シ、通信線破壊中ナルヲ知ル。依テ三人協議ノ結果、歩兵一旅及騎兵一團ヲ以テ列車ヲ抑留スルニ決シ、直ニ實行ニ着手セシカ、攻撃功ヲ奏シ、郭軍ノ主力ハ降伏シテ」¹⁶²。

このため、奇襲の手段で奉天を攻略するという郭松齡の計画は失敗した。その後、第五方面軍は連山に築いていた既設陣地にまで撤退して、郭軍の東進を阻止しようとした。

連山(現在、遼寧省錦西県)附近の既設陣地とは、1923年に錦州の第二十七師団と綏中に駐在している第四旅団が構築した野城式陣地であった。陣地は非常に堅固で、機能は完備していた。この陣地は、もともと奉天軍が直隸軍との戦闘で、不利な状況に追い込まれた場合、ここに撤退して防衛するために、構築したものであった。

第二軍の全部隊が灤州の各駅で列車に乗車し終わるのに時間を要し、深夜になった。次の日の朝、列車は封台駅に到着した。駅長の報告によれば、昌黎と封台の間の鉄橋は第五方面軍第九師団の軍隊に破壊されていた。そこで、第二軍の工兵部隊は急いで、鉄橋を修復することとなった。このため、第二軍の軍隊は列車を降りて、戦闘の準備を始めた。この時、第五方面軍の第九師団は昌黎の陣地に入ったが、午後には昌黎と山海関の第五方面軍の軍隊は、第二軍に押されて綏中に撤退した。第二軍は破壊された鉄橋を直した。第二軍はさらに列車で奉天方面に進軍した。しかし、この時、進軍に戸惑った第一軍はまだ、到着していなかった。

日本軍の報告によれば、「郭松齡ハ十一月二十三日、突如灤州ニ於テ反旗ヲ翻シ、同日ヨリ東進ヲ開始ス。而モテ隱密裡ニ奉天城ヲ略取スル目的ヲ以テ、最初ニ輸送シタル一部ハ萬家屯及山海関附近ニ於テ、張作相及汲金純師ノ為ニ潰滅セラレタルモ、主力ハ先進ヲ継続シ」¹⁶³、とある。

日本軍の報告によれば、郭松齡が叛乱を起こしたのは1925年11月23日であった。そして最初、奉天に送った第二軍の一部の部隊は張作相及び汲金純の軍隊によって潰滅させられた。中国の資料と突き合わせれば、ここに記載されてい

¹⁶¹JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記一張郭戦史送付の件、前掲、1219-1220 頁。

¹⁶²同上。

¹⁶³同上、1211 頁。

る張作相は第五方面軍の司令官、汲金純は第九師団の師団長であることは明らかである。

ここで、朱慶瀾のもとで抬頭し、奉天軍参謀であった姜登選が殺害されるという重大事件が発生した。

当時の郭軍の第二軍参謀長韓世儒の回憶によれば、「郭松齡が反奉を宣告した日、姜登選は専用車両に乗って、蚌埠から奉天へ行こうとしていた。列車は灤州を通過する時に、郭松齡に取り押さえられた。夜、昌黎城外まで連れていかれ、そこで銃殺された」¹⁶⁴という。

張学良年譜によれば、「1925年11月25日、郭松齡の命令に従って、姜登選を銃殺した」¹⁶⁵とある。

郭松齡が姜登選を銃殺した原因について、当時、郭軍の第四軍軍法処長であった高問樵の回想によれば、次のように語っている。

「郭松齡が姜登選を銃殺したというよりは、むしろ姜登選を殺したのは張振鷺（郭軍の軍需処の軍需官）だったというべきである。私と霽雲（郭軍の第四軍軍長）は、張振鷺が個人の利益のために、叛乱全体を不利な局面に向けようと画策した影響であったと考えていた」¹⁶⁶。

叛乱時における郭松齡と姜登選と張振鷺の関係は複雑であった。郭松齡の叛乱は突然であったから、軍需の面において、よく準備が整っていなかった。軍費を集めるために、郭軍の軍需処の軍需官であった張振鷺は、姜登選から軍費を借りるように郭松齡へ進言した。なぜなら今回、姜登選は安徽督辦に就任するにあたって、張作霖から三十万の資金を受けていたからである。そのことを思い出した張振鷺は姜登選から軍費を借りるように進言した。郭松齡は張振鷺の進言を受け入れたものの、無理をしないようにと命令した。しかし、張振鷺は姜登選に軍費の徴用を強要した。姜登選は張振鷺の態度に怒って、軍費を供出しなかったばかりか、郭松齡に告発すると反論したという。張振鷺は立場が苦しくなり、郭松齡と姜登選の間の仲を裂こうとした。このため、張振鷺は郭松齡に、叛乱に対する姜登選の対応について、虚偽の対応を伝えた。誤った報告を受けて、郭松齡は姜登選に対して非常に立腹した。姜登選を銃殺した¹⁶⁷。これが張振鷺陰謀説である。

この時期、革命的大義と同時に、軍閥軍の地位を争う醜い権力闘争が複雑に絡み合っている。叛乱の最中に突然に発生した大事件である姜登選殺害事件の原因論を、こうした個人的な怨みで議論することは、必ずしも適切であるとはいえないであろうが、今のところ客観的な議論ができる資料もなく、陰謀説を紹介するにとどめる。

また当時、奉天軍第六混成旅団の旅団長宋九齡の回憶によれば、次の通りである。

「1925年11月20日午後（灤州会議の午後）、安徽督辦であった姜登選の専用列車は天津鉄道から灤州を通過する時に、郭松齡に拘禁された。姜は列車から下

¹⁶⁴韓世儒「郭松齡反奉的軍事部署及戦闘経過」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、62頁。

¹⁶⁵張友坤、錢進『張学良年譜』上、前掲、137頁。

¹⁶⁶高問樵「郭松齡銃斃姜登選的詳情」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』中華書局、2008年、78頁。

¹⁶⁷同上、80-83頁。

車させられ、趙恩臻などの六人と一緒に軟禁された。姜は趙など六人を見て、とても怪訝そうな顔で聞いた。“皆さん、何で揃って居るのか”。趙などの六人は笑って、何にも言わなかった。私はその時、部屋の中に居た。……郭軍の軍車両が興城の西の白廟子に到着する時、私の以前の副官であった張徳勝(後に郭の副官に推薦した)が言った。“総指揮が、姜督辯を銃殺に処した”。どこで銃殺されたのかと私は尋ねた。灤州の東河套で銃殺されたと張は回答した。私は憤慨して尋ねた。“お前が殺したのか”と聞くと、“私じゃない、郭軍長が私に監督を命じただけである”と答えた。また私は、“屍体はどうやって処理したのか”と聞くと、“河套の側に埋めた”と答えた¹⁶⁸。

以上に挙げた資料の中にある趙恩臻などの六人とは、趙恩臻(第五師団師団長)、韓麟春、高維岳(第七師団の師団長)、齋恩銘(第十師団の師団長)、額賓英、穆春号、裴春生(第十二師団の師団長)であった。

郭松齡は姜登選を銃殺した原因について、当時、郭軍の第四軍軍法処長高問樵の回想によれば「郭松齡は姜登選を銃殺したよりは、姜登選を殺したものが張振鷺(郭軍の軍需処の軍需官)だったほうがよい。私と霽雲(郭軍の第四軍軍長)は張振鷺が個人の利益のために、全体の事業を不利の局面に果たしたと考えていた」¹⁶⁹。

郭松齡は突然、叛乱事件を起こした。軍需の面において、よく準備していなかった。軍費を集めるために、郭軍の軍需処の軍需官張振鷺は郭松齡に姜登選から軍費を借りることを進言した。今回、姜登選は安徽督辦に就任する前に、張作霖から三十万の資金をもらった。その故に、張振鷺は姜登選から軍費を借りることを思い出した。郭松齡は張振鷺の進言を受け取ったが、無理しないと命令した。しかし、張振鷺は姜登選に対し、強引なやり方で軍費を借りようとした。姜登選が怒って、お金を貸出そうとはしなかった。郭松齡に告発すると激しく対立した。張振鷺は怖くなって、郭松齡と姜登選の間の関係を引き裂こうと、郭松齡に姜登選の対する誹謗悪態をついた。郭松齡は非常に立腹し、姜登選を銃殺した¹⁷⁰。

灤州会議での郭松齡の発言については、当時、奉天軍第六混成旅団の旅団長であった宋九齡は次のように回憶している。

「郭はこの時、二つの方案を制定した。皆がどちらかを選んで署名することになった。第一案、兵士は開墾のために移動し、国内の戦争には参加しない。第二案、最後まで、戦って、武力で統一する。この時、会場の雰囲気は非常に堅くなり、お互いに顔を見合わせて、誰も発言しなかった。机の隣の趙恩臻がまず第一枚の紙の上に署名してから、他の人も従って、署名した。裴春生軍長のみ、後ろ手を組んで背を向け、署名しなかった。私は、裴軍長は字が書けないから、と言った。私は彼の代わりに署名していいのかと聞いた。その時、ある人が、よろしいと言った。従って、私は彼の代わりに署名した。その後、郭松齡が次のように述べた。“このような行為は叛乱と同じである。福棠長兄(趙恩臻の号)、振東長兄(裴春生の号)、佐臣長兄(齋恩銘の号)、子欽長兄(高維岳の号)、賓英長兄(額賓英の号)、祝三長兄(穆春の号)のあなた方は、

¹⁶⁸宋九齡口述、于俊満整理「郭松齡反奉片断」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』前掲、91頁。

¹⁶⁹高問樵「郭松齡銃斃姜登選的詳情」、同上、78頁。

¹⁷⁰同上、80-83頁。

老将（張作霖）に従う期間が長かった。老将の忠臣であった。だからあなた方を叛乱に参加させたくない。老将にすまないことをさせたくない。皆さん暫く、休憩してください。将来、私が成功すれば、また、あなた方を誘いますから、助けてください。好きなことをしてください”。話し終わったら、この六人を退席させた。そうして、散会を宣布した¹⁷¹。

郭松齡は灤州會議で、裴春生などの六名の張作霖の忠実な部下を軟禁したが、この六人を殺す意思がなかったことは、このことから明らかであった。

宋九齡の回憶によれば、灤州會議は11月20日となっているが、総合的に判断すれば、灤州會議は11月22日であった。宋九齡の回憶が間違っていたと思われる。ただ宋の回憶によって、姜登選は郭松齡の命令で銃殺されたことがはっきりした。場所も灤州の東河套と断定された。

日本軍の報告と照らし合わせても食い違いはない。

「當時拘禁セラレタル者ハ、韓麟春、高維岳、趙恩臻、齋恩銘ノ四師長及旅長数名ニレテ、又姜登選ハ奉天ヘノ帰途灤州ニ於テ捕ヘラレ、銃殺セラレタリ」¹⁷²。

郭松齡叛乱の軍事的経緯については、日本軍の報告が当時の第一次史料として価値が高い。この叛乱については、叛乱の意図と張学良との関係に最も関心が注がれる。叛乱中に直接的に郭松齡と会見したところの日本軍報告は、とても貴重であり、最も生々しい現地報告となっている。

叛乱に遭遇した以後、奉天軍の軍隊の動向は以下の通りであった。

①張作相の第五方面軍の情況

二十六日午後、張作霖から連山付近で防衛線を張れとの命令があり、「連山附近ニ陣地ヲ占領スルニ決シ」¹⁷³た。

②奉天軍の空軍の反応

昌黎飛行隊には飛行機が36機ほど配備されていた。11月23日に、郭松齡叛乱が伝えられた。「各飛行将校、技術将校等ハ各自ノ意思ニ基キ任意ニ行動セシモ、其ノ大部ハ張学良ニ忠實ニシテ、郭軍ニ抑留セラルルヲ恐レ、速ニ奉天ニ逃レ帰ラント努力シ、飛行機十四機ニ分乗シ、先ヅ錦州ニ向ヒ、飛行退却セントシ。一機ノ途中不時着陸ヲ除キ、残餘ノ十三機ニ、二十四日日午後、無事錦州ニ到着スルヲ得タリ」¹⁷⁴。

結局、郭松齡は奉天軍の空軍を抑えることはできなかった。殆ど、張学良側に掌握されたのである。その後の戦闘中で、張学良は空軍を利用して、郭軍の動向を偵察した。このため、郭松齡軍の動きを察知でき、張学良は事前に部隊を配置することができた。空軍を掌握できなかったことも郭松齡の敗因の一つでもある。

③奉天軍の騎兵軍の反応

¹⁷¹宋九齡口述、于俊満整理「郭松齡反奉片断」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』、前掲、86頁。

¹⁷²JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—張郭戦史送付の件、前掲、1211—1212頁。

¹⁷³同上、1229—1233頁。

¹⁷⁴同上、1233—1234頁。

奉天軍総司令部より「騎兵軍ハ退却スヘシ」という命令があった一方、「蒙古ハ東三省ノ門戸ナリ嚴ニ防守セヨ」などの電命を受けて、混乱していた。26日になって、騎兵軍は阜新に向けて撤退することになった。そして「騎兵軍ハ錦西ニ到リ、連山ノ線ヲ占領セル第五軍ト協同シテ、反軍ヲ拒止セヘシ」¹⁷⁵ということとなった。

日本の資料から見れば、郭松齡の叛乱事件が起こった以後、奉天軍の総司令部は騎兵軍に対して、二つの考えがあったという。一つ、主力部隊と合流させる方法。もう一つは、蒙古を防守させる方法。この点から見れば、その時、詳細は不明であるが、蒙古にも張作霖に脅威を与える勢力が存在していたと考えられる。最終的には郭軍に対峙するために、主力部隊と合流させた。

④熱河都統闞朝璽の第十二軍の行動

日本側の資料から見れば、熱河の闞朝璽と湯玉麟は奉天軍に協力して支援する命令を受けたが、闞朝璽は郭軍に恐怖して、一人で義州へ逃げ、自分の部隊を捨てた。指揮官を失った闞の部隊は連山の奉天軍を増援することができなかった。

「闞朝璽ハ諸隊ニ退却ヲ命スルト共ニ、自身ハ單身自動車ニテ義州ニ走り、同地ニ於テ諸隊ノ退却ヲ待ツ。斯クテ闞軍ノ諸部隊ハ統率者ナキ為、或ハ四散逃亡シテ匪賊ニ投スル等、無節制ノ行軍ヲ實施シ、連山戦闘ノ時期、即騎兵ノ一部ナリシカ如シ」¹⁷⁶。他方、湯玉麟は第十一師を指揮して熱河を出発し、一兵も失うことなく、朝陽に移動した。連山の敗北を聞いて、義州へ向かった。湯玉麟は自分の部隊をよく、統轄していたが、連山戦闘に間に合わなかった。それでも、その後、遼河決戦で大きな役に立った。

⑤直、魯の第一、二方面の行動

当初、「李景林、馮玉祥、郭松齡の三角連盟」が成立していた。しかし熱河都統闞朝璽が去った熱河をめぐる、李景林は国民軍の馮玉祥と戦火を交え、「三角連盟」は崩壊した。李景林は馮玉祥に対抗するため、山東督軍張宗昌と手を結んで、直魯連軍を組織した。

「李景林ハ初メ郭松齡ト共ニ和平ヲ主張シ、郭ノ反旗ヲ翻スヤ、暫ク中立ノ態度ヲ持シツツアリシカ、国民軍ノ壓迫次第ニ加ハリ、自己ノ地位ニ不安ヲ感スルニ至ルヤ、茲ニ軍隊ノ改編ヲ行ヒ、内容ノ充實ヲ圖リ、終ニ十二月四日赤化防止防境安民ノ為ノ許ニ、馮玉祥ニ対シ宣戦ヲ布告シ、天津附近ヲ堅固ニ占領シテ、国民軍ヲ迎撃スルニ決ス。張宗昌ハ十一月二十六、七日、泰安附近ニ於テ、李記オノ指揮スル国民第二軍ニカ師ノ攻撃ヲ受ケタルモ、之ヲ撃退シテ徹底的打撃ヲ與へ、爾後一部ヲ以テ追撃シ、曲阜ヲ恢復ス」¹⁷⁷。

以上は奉天軍側の状況である。他方、日本軍の報告によれば、郭松齡軍の行動は、次のようであった。

¹⁷⁵JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—張郭戦史送付の件、前掲、1237—1243頁。

¹⁷⁶同上、1244—1246頁。

¹⁷⁷同上、1246—1247頁。

①連山の戦闘

郭松齡の第二軍は11月25日、昌黎を占領し、鉄道に乗って秦皇島に向かい、翌日には秦皇島を占領した。この日、郭軍司令部も昌黎に前進した。第二軍第十九旅は山海関からさらに前屯衛へ入り、12月1日には、第二軍は興城を占領した。「張軍ハ連山東北方高地ニ於テ陣地占領ニ着手セルヲ知り、之カ攻撃ノ準備ニ着手リ」¹⁷⁸。

郭軍は1925年11月27日、山海関を越えた以後、張作相の第五方面軍を追撃していた。張作相の第五方面軍は張作霖の命令により連山付近の陣地を占領して、郭松齡軍を迎え撃った。連山の戦闘が始まったのである。

12月5日、郭軍は攻撃を開始した。戦闘状況は以下の通りであった。

「五日ノ払暁ヨリ総攻撃ヲ行フ。五日払暁ヨリ猛烈ナル砲撃ニ次キテ、諸隊ハ攻撃先進ヲ起シ、午前十一時頃ニハ右翼第三軍方面ノ戦況逐次有利ニ発展シテ、漸次張軍第九師ノ左翼ヲ包囲セル。結果正午頃ヨリ張軍ハ先ツ、其ノ左翼方面ヨリ退却ヲ開始シ、次テ、全線ニ総退却ヲ行フ。同夜八時頃迄ニ郭軍ハ全ク陣地ヲ占領シ、捕虜二千ヲ得タリ」¹⁷⁹。

張軍は郭軍の猛烈な砲撃によって、やがて、敗北した。

「五日午前六時頃ヨリ、郭軍ハ俄然約六十門ノ砲兵ヲ以テ一齋ニ砲撃ヲ開始シ、主トシテ、第九師ノ正面ヲ猛射シ、第九師ノ全線為ニ動揺ス。砲撃ハ午前十一時半頃迄連続セシム。郭軍歩兵ハ概シテ、爾後、前進セス。第九師ノ左翼ハ郭軍砲兵ノ猛射ニ堪ヘス。……張作相ハ情況非ニシテ到底恢復ノ見込ナキヲ察シ、錦州ニ到リ学良ト協議シ、爾後ノ対策ヲ講スルニ決シ、退却命令ヲ下シ。第九師ハ紅螺縣ニ向ヒ退却ス。第十五、十六師ハ義州ニ向ヒ退却ス」¹⁸⁰。

かくして連山の戦闘は郭軍が勝利を収めた。郭松齡は自軍が優勢な砲兵部隊を抱える利点を活用し、先ず、敵の陣地に長時間の砲撃を行った。この戦術によって、勝利を収めたものの、郭軍の損失もまた多かった。「連山戦闘ニ於テ投降兵約六千、凍傷患者一千餘ヲ出シタル」¹⁸¹という。奉天軍に投降した兵士も多く、その内部は安定していなかった。多くの兵士は張作霖、張学良と敵対することに躊躇していたことがうかがえる。必ずしも郭松齡は自分の軍隊を完全に抑えてはいなかった。

②遼河戦役

張学良軍と郭松齡軍とが本格的に衝突したのは、新民、公主屯周辺の遼河をめぐる攻防戦であった。快進撃を続けた郭松齡軍であったが、ここにおいて奉天軍に敗北し、叛乱は失敗に終わった。この戦闘を、遼河戦役という。戦闘は1925年12月13日から12月24日にかけて、10日以上も続いた。

遼河戦役とは、奉天から西約60キロメートルにある新民を中心とした地域で郭松齡軍と奉天軍が激突し、そこに遼河が南北に流れているので、このような名称がつけられた。

遼河戦役で、奉天に向かって進軍する郭松齡叛乱軍を迎え撃つ奉天軍の迎撃

¹⁷⁸JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—張郭戦史送付の件、前掲、1235—1237 頁

¹⁷⁹同上、1250—1252 頁。

¹⁸⁰同上、1252—1257 頁。

¹⁸¹同上、1490 頁。

作戦要領について、日本軍の資料は次のように記している。

「吉林軍(新ニ南下セシモノヲ含ム)ヲシテ張学良軍ノ右翼ニ連繋シ、前文家台、後文家台(公主屯西南二里)ノ線ニ、黒龍軍ヲシテ大荒地、花楼ノ線(大民屯東方)ニ、陣地ヲ占領セシメ、湯玉麟師ヲ総予備隊トナス。呉俊昇ヲシテ騎兵二師ヲ率キ、郭軍ノ背後ヲ擾乱セシム」¹⁸²。

奉天軍の防衛作戦に対して、遼河戦役に向けた郭軍の攻撃計画はどのようなものであったか。簡単であるが、日本資料には次のように報告されている。

「先ツ、第二第三軍ノ各一部ヲ以テ新民附近ニ於ケル敵ノ前進陣地ヲ奪取シタル。後、主力ヲ以テ大民屯ヨリ敵ノ左側背ヲ攻撃シ、一挙ニシテ之ヲ撃破セントス」¹⁸³。

これによれば、郭松齡軍としては、別働部隊で新民付近の陣地を攻撃し、主力の本隊は大民屯への総攻撃であった。

以上は、日本軍報告に基づく作戦概要の紹介である。中国に残された資料を探すと、当時の原資料(当時の新聞記録など後で補充する)はなく、次のような見聞録(当時の奉天鎮威將軍公署参謀處上校課長姚東藩の回想)がある。遼河戦役に迎え撃つ奉天軍の戦役指導の概要である。右翼(張作相の第五方面軍)、中央(張学良の第三方面軍)、左翼(呉俊昇の第六方面軍)に分けて、分かりやすく説明している。

「中央は第三方面軍団(軍団長張学良)であった。右側面は第五方面軍団と接していた。左側面は七家子までの陣地を占領した。第三方面軍団に属した部隊は次の通りであった。歩兵第十九旅団は鉄道東側と巨流河左側の陣地を占領した。右翼は第五方面軍団の左翼と接していた。左翼は歩兵第十二旅団と接していた。歩兵第十二旅団は鉄道西側と巨流河左岸陣地を占領した。右翼は第十九旅団と接していた。左翼は大王家窩鋪東北側までの陣地を占領した。張学成団は大王家窩鋪附近の陣地を占領した。騎兵第八旅団は張学成団の左翼と接していた。方巾牛碌、七家子の線までの陣地を占領した。総予備隊の総指揮は朱継先中將であった。指揮司令部は興隆店駅で設置された。その劉一飛、王瑞華の二個旅団は軍団の右翼の後方に配置された。軍団部は興隆店で設置された。

左翼は第六方面軍団(軍団長呉俊昇)であった。……もともと灤州会議以後、熱河から合流した部隊で、最初は第五方面軍団に属して、連山戦役に参加した。連山を撤退後、新民県に到達して第六方面軍団に編入された。前長溝沿、花楼、温家牛碌一帯の陣地を占領した」¹⁸⁴。

日中の二つの資料を比較すると、かなり様相が異なる。外国人から見た作戦全貌と、後からの回想であるから、食い違うのも当然であろう。いずれにしても、遼河付近の新民を中心に、奉天軍は防衛陣をしいたのである。

先の姚東藩の回想では、所属していた第三方面軍団について、当時の様子を語っている。同軍団の各部隊は十二月中旬頃、防衛陣地に入った。張学良は自ら、陣地の最前方に視察しに来た。

「正面に位置する富双英、張廷枢の二個旅団の陣地は半恒久的な防禦工事で

¹⁸²JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1319—1321頁。

¹⁸³同上、1322頁。

¹⁸⁴姚東藩「郭松齡反对奉張東軍見聞記略」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』、前掲、21-22頁。

造られていた。……兵士は殆ど、陣地内で食事をとり、宿泊していた。新たに任命されたばかりの第四方面軍団軍団長韓麟春が興隆店に現れた。張学良、韓麟春の二人は、自ら陣地の最前線を視察した。旅団長の劉振東が次のように語った。“このような、旺盛な士気、堅固な陣地がある以上は、堅固な陣地攻略に長け、山海関を陥落させた名将郭鬼子(郭松齡)と雖も、一步も近づかせない。更に主要なことは、彼(郭松齡)の部下が彼の為に命がかけで働きたくないと言っていることだ”。韓麟春は答えて言った。“必要な時に、我々は 反転攻勢して、主力部隊を出撃させる条件が整っている”。

同時に、張作霖の指示を伝えた。富、張両旅団の兵士については現在から、月ごとに、二倍給料を支払う。作戦期間、ビスケット、肉類缶詰は日ごとに、支給する。これを聞いた兵士は熱狂した。郭軍と最後まで戦うという決意を示した。兵士もまた凍傷の治療にあたって欲しい要求を出した。そのために野戦病院を設立して欲しい、毛皮の軍服を配布して欲しいと請求した。張学良軍団長は請求の一つ一つについて、しかと承知した¹⁸⁵。

この回想の特徴的な点は、兵士にとっての戦意高揚が、大義のために戦うことにあるのではなく、金銭や軍隊生活の改善向上にあったことを明らかにしていることである。遼河戦役を開始する前に、張学良は自ら前線を視察し、兵士の士気を鼓舞した。即物的な身近な要求を認めることで、兵士の戦闘力を高めようとしたのである。ここにあるのは、郭松齡の叛乱が、正義にかなっているか否かの判断はなく、いかにも物資と領土を奪い合う従来の軍閥戦争のレベルにとどまっていたことを物語っている。その意味で、張学良もまた、軍閥の旧弊の打破を掲げた郭松齡の思いに応えることができず、依然として軍閥の域を脱することはできていなかった。

次に、両軍が激突した遼河戦役の具体的な戦闘過程について明らかにしたい。

幾度も日本側の同じ資料を使うが、中国には当時の戦記についての原資料は残されておらず、最も具体的で詳しい戦闘報告は、これに勝るものがないからである。

12月23日早朝から、郭松齡軍は総攻撃を開始し、左翼軍は腰高臺子の奪回を目指した。しかし守備隊の吉林軍の攻撃で、奪回に成功しなかった。張学良軍が吉林軍に加勢し、新民方面の郭松齡軍は形勢不利となった。

他方、郭松齡の右翼軍は「猛烈ナル攻撃ヲ續行シ、先ツ張軍騎兵ヲ撃退シテ大民屯ヲ占領シ、次テ大荒地、花楼ノ線ニ在ル黒龍軍ニ殺到ス」。ところが呉俊陞の騎兵集団が郭松齡軍の背後に回り、戦況は一変した。「奉軍右翼軍方面ノ有利ナル戦局ノ発展相俟テ、郭軍ノ将卒ハ全ク戦意ヲ失ヒ、二十三日夜張作霖ニ対シ投降ヲ申込ミ、郭松齡ハ二十四日朝逃走中、張軍騎兵ニ捕ヘラル。十二月二十四日ヲ以テ郭軍ハ全部武装ヲ解除セラレ、遼河ノ会戦ハ張軍ノ大勝ヲ以テ終レリ」¹⁸⁶。

ここに於いて、郭松齡の叛乱は、水泡に帰したのである。

遼河戦役を開始する前に、郭松齡は既に後顧の憂いがあった。郭松齡は第五軍を山海関に残して、李景林の攻撃を抑止していた。叛乱にあたって、当初は

¹⁸⁵ 姚東藩「郭松齡反對奉張東軍見聞記略」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』、22-23頁。

¹⁸⁶ JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1331—1333頁。

提携していた李景林であったが、郭松齡が錦州に侵入した以後、李景林は郭松齡に背いて、反郭松齡を通电した。李景林が三角連盟（郭松齡、馮玉祥、李景林）を破壊した原因について、当時東北国民軍第四軍の軍法処長であった高問樵が次のように回想している。

「その一つ。郭と李は秘密裡に反奉を練り上げていた時に、灤河以北に戻るというかつての協議をもとに、熱河の勢力範囲を李景林に与えるということを認めていた。ところが郭軍が綏中に進入した以後、（友軍である）馮玉祥の第一国民軍に属する宋哲元の部隊が熱河に出兵して、（熱河支配の）闞朝璽を駆逐した。李景林はこのことに対して、不満を持っていた。

もう一つ。張作霖は李景林に電話をした時、次のように伝えたという。“貴方と郭松齡はこうしたことを企んでいるが、あなたの母親を見棄てるのか（李の母親は奉天で住んでいた）”。李は電話に出た後、涙を流した。“必ず大帥の恩に報いるために努力して、郭松齡を反撃する”と答えた¹⁸⁷。

このことから何を見て取ることができるか。郭、馮、李の反奉天三角連盟は、確かに近代国家建設という大義で結ばれていた側面も濃厚であったが、同時に具体的な権益を獲得するために手を結ぶという伝統的な結びつきの側面もあった。互いが利益を確保できなければ、自然的に分裂する運命でもあった。このような連盟は、確かに脆弱であった。しかも、李は反奉に立ち上がる前に、自分の家族を奉天から安全なところへ移さなかったという致命的なミスを行っている。奉天にいる張作霖が李の家族を人質にとって、李に脅迫することは、容易に予想できる。こうした準備なく、叛乱を決起したとすれば、その叛乱計画は稚拙であったと思われる。準備周到というわけではなかったことを物語っている。

姚東藩の回想によれば、郭松齡軍から見た遼河戦役の戦闘の概要は以下の通りであった¹⁸⁸。

12月21日、郭軍の先頭部隊が新民県に進入した。同日、郭松齡も白旗堡に到着した。12月22日、郭軍は攻撃を開始したが、その時の配備は次の通りであった。

第一軍（軍長劉振東）は、新民県東北地域で展開した。腰高臺子、高台村一帯陣地を占領していた奉天軍の第五方面軍団に攻撃を仕掛けた。

第二軍（軍長劉偉）は、新民県迤南地区、王家窩鋪を占領していた張学成団（連隊）と第三軍方面軍団の富双英旅団陣地を攻撃した。

第三軍（軍長范浦江）は、新民県東南地区に展開し、第三軍方面軍団右翼の張廷枢旅団の陣地に攻撃を加えた。

第四軍（軍長斎雲）は、大民屯を占領することに成功し、次いで花楼、長溝沿、方巾牛石碌地域にあった奉天軍第六方面軍団陣地を攻撃した。この方面の戦闘は最も激しかったが、旅団長の一人が奉天軍に捕らえられた。しかし、夜間、すきに乗じて脱走した、という混乱ぶりであった。

第五軍（軍長魏益三）は、山海関に留まり、戦況をうかがっていた。しかし郭軍の敗北が確定すると、国民党の国民革命軍である蒋介石を頼って行った。

当時の郭軍の第二軍参謀長韓世儒の回想によれば、郭軍の総攻撃を開始する

¹⁸⁷高問樵「關於郭松齡反奉倒張的經過記實」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』、前掲、37頁。

¹⁸⁸姚東藩「郭松齡反对奉張東軍見聞記略」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』、前掲、23-24頁。

前から、戦局は郭軍にとって、非常に不利な状況にあったという。日本の関東軍は南満州鉄道沿線への立ち入りを禁止していた。しかしそこを通らずに奉天へ攻め込むことは困難があったからだ。

「任務は奉天を占領することであったが、そこまでの距離が遠かった。しかも途中では、南満州鉄道を通すしなければならないから、問題が起こるのではないかと心配していた。加えて、天気が寒かった。だから士気が旺盛とはいかなかった。最終決断として、新民南小崗子附近から一点突破することとなった。七個歩兵団を準備し、いわゆる（部隊を一点に凝縮させる）円錐状戦術を駆使して、休まず奉天まで攻撃することが目的であった。しかし、攻撃を開始する前夜、第三軍方面は敵の二個団の兵力の夜襲によって、壊滅させられた。やむを得ず、主要な攻撃に投入しようとしていた五個歩兵団を第三軍方面に補充せざるを得なかった。このためその故に、攻撃を開始し、敵の陣地を突破して、第一軍の目標である王家窩棚を占領したものの、主力部隊はまだ到着できていなかった。このため、攻撃を停止した。

この時、郭松齡が新民に到着した。旅団長以上の軍官を集めて、軍事会議を行い、対処を練った。郭は自ら五個歩兵団を率いて、もともとの計画通り、明日明け方に攻撃を行うと決定した。そうして、郭は命令書を書いて、攻撃に参加する各旅団長に伝えた。命令の内容は以下の通りであった。“自ら部隊を率いて、明日、敵と決戦する。失敗しても、光栄である。状況からして、勝利を収めることも期待できる”。当時、私は主力攻撃の責任を取っていた。しかし、次の日の明け方まで待っていたが、郭松齡は現れなかった。部隊も到着していなかった。電話で問い合わせると、そこでやっと、状況が変わり、郭松齡が部隊を離れたことを知った」¹⁸⁹。

なぜ郭松齡は部隊を離れたのか。韓世儒の回想によれば、郭軍の総攻撃を開始する前に、郭軍の内部が分裂していたためだという。郭軍の総司令部参謀長である鄒作華と参謀處長の陳再新が、密かに張作霖、及びその背後にいる日本の日本と接触したのである。

鄒作華は参謀處長陳再新を率いて、郭松齡の専用列車から離れて、新民に到着した。ここで陳再新は密かに新民県駐在の日本副領事と交渉した。日本が調停に入るよう求めたのである。さらに奉天の張作霖に対し、郭軍の兵士は餓えと寒さに苦しみ、戦闘意欲も低下している現状を報告し、部隊編成までも漏らした。いわば裏切りである。この時、日本副領事は、調停の条件として、郭松齡軍の進軍停止であった、という¹⁹⁰。

以下は核心部分であるから、直接引用する。

「郭軍の攻撃を開始すると、鄒作華も攻撃に加わった。しかしその後、鄒作華は前線兵士の意欲が低落して、これ以上戦いたくないという不満を述べていることを知った。鄒は劉振東、劉偉、范浦江等の軍長と相談して、兵士の士気を鼓舞するために、郭松齡に、前線まで出陣する要請した。郭松齡は列車を乗って、柳河溝に到着したが、そこで橋梁が破壊されていたため、それ以上前進できなくなった。郭松齡と妻の韓淑秀はクルマに乗り換えて、12月22日午後六

¹⁸⁹ 韓世儒「郭松齡反奉的軍事部署及戦闘経過」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、64頁。

¹⁹⁰ 同上、124頁。

時頃に新民に到着した。

徳興店で各将校の報告を聴取した以後、自ら、前方を視察し、総大将自らが戦いの前線に立った。そこで幾つかの旅団長、団長は兵士の状況を陳述した。即ち、攻勢から守勢に転換しても、戦況を有利に導くことはできそうもないのに、総攻撃をすることは更に困難である、と。

視察は夜半過ぎまで続き、やっと新民に戻って、各将校を集め、明日の総攻撃を協議した。各軍長は黙して一言も発しなかった。郭は“事は既にここまでやって来て、これからどうする”と聞いた。陳再新は、新民にある日本領事に調停を頼むべきであると進言した。郭松齡は“私の願いは、楊宇霆と一緒に下野するというのが条件である”と述べた。そして、日本領事館に使者を派遣して、話し合いを持った。

日本領事は“時が移り、状況が変わり、今は何にもできない”ということであった。そして、ある人が主張した。“我々は張学良軍団長の部下であるから、彼の指図に従わなければならない。だから貴方（郭松齡）はここから離れて欲しい”。行き詰まりのなか、郭は仕方なく、“どうやって、離れる”と聞いた。劉偉が提案した。“二個歩兵団を引き抜いて、戦いながら、撤退する。総司令を援護して、西に向かって行く。魏益三に兵士を派遣させて、溝幫子まで迎えてくるようにと命令する”と言った。鄒作華の提案は次の通りである。敵の騎兵隊は優勢で、白旗堡、繞陽河を占領し、新民にまで攻めて来た。柳河溝にも敵を発見した。戦いながら、撤退すると、途中で騎兵に襲われやすく、最も危険である。だから、軽装備のクルマで随人を減らし、南に向かって進み、南満州鉄道の駅に到着するようにすれば、この方が安全になると言った。郭松齡は鄒作華の意見を受け入れた。

12月23日、間も無く夜が明ける時に、郭松齡、韓淑民及び林長民（郭松齡が任命した東北三省総理と奉天省の省長）は十輦のクルマに乗って、五十余名御付きの人と歩兵一連の援護の下で、密かに出奔した。ところが途中で、穆春騎兵師団に属した王永清旅団の騎兵と遭遇した。郭松齡及び妻韓淑秀が捕らえられて、死亡した。12月25日午後、郭松齡夫婦の屍体は奉天に運ばれた。屍体は奉天小河沿（万泉河）の運動場に置かれていた¹⁹¹。

郭松齡側が新民にある日本の領事館と交渉したこと、及び郭松齡の捕縛状況が日本の外務省記録に残っている。郭松齡は馬車夫に変装して逃亡したとあるが、先の韓世儒の回想とは異なる。あたかも巷間の話のようだ。

「昨日奉天ヨリ帰遼シタル于冲漢ノ談ニ依レハ、郭カ新民屯ヨリ変装脱出シタル後、幾干モナク奉軍新民府ニ入り、其ノ行衛ヲ取調ヘシニ、西南ニ向ケ変装脱出シタルコト及未タ遠ク落ち延ヒ居ラサルコト明トナリタルヨリ、奉軍騎兵第十四師ノ旅長王子青之ヲ追跡シ、途中ニテ郭松齡ノ遺失セル名刺ヲ拾得シタルヨリ、大ニカヲ得、捜査ヲ續行シ、遂ニ本月二十五日午後三時頃、新民県蘇家窩棚ニ郭同夫人及秘書ノ三名ヲ獲タル次第ナルカ、奉軍ノ兵士等ハ、其ノ果シテ郭ナルヤ否ヤ不明ナルヨリ、王旅長ノ下ニ拉致シタルニ、面識アル王旅団長ハ直ニ郭ニ相違ナキヲ認メ、捕縛セムトシカ、郭ハ拳銃ヲ放テ之ニ抵抗シ

¹⁹¹韓世儒「郭松齡反奉的軍事部署及戦闘経過」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、24-26頁。

タルヨリ、遂ニ其場ニテ銃殺セシメタルモノナリト」¹⁹²。

中国と日本の資料を合わせてみても、郭松齡が敗北直前に日本側に調停を頼んだことは間違いない。東北政治を刷新しようとする郭松齡と、その權益を守ろうとする日本、関東軍とは、基本的に対立関係にあった。実際に関東軍は張作霖の奉天軍を側面支援し、その影響力拡大を図っていた。郭松齡は反日といわれるが、その敵対的勢力である日本の領事館に調停を申し込むことは、どのような意味を持っているのか。

郭松齡夫妻の捕縛死をもって、郭松齡の反奉戦争は終息した。大義を掲げて立ち上がった郭松齡であったが、志半ばで挫折した。皮肉なことに、この時は敵側に回った張学良であったが、その屍から掲げた大義を取り出して受け継ぎ、1928年の張作霖爆殺以降、東北の覇者となった張学良は、東北の改革、中国の改革に乗り出した。

この戦史に関して日本側と中国側の資料を突き合わせてみると、最も違うところは騎兵部隊の存在であった。日本の資料は、奉天軍の騎兵部隊の役割について、多くの指摘が並んでいる。ところが、中国の資料の中には殆ど、述べられていなかった。そして、日本側の資料によれば、郭軍は奉天軍の騎兵部隊の攻撃によって、最終的に敗北した。これが、最も重要な敗因であったという。何故だか、中国の側の資料は、この敗因に触れていない。

第三節 郭松齡叛乱事件の敗因

最後に、郭松齡が敗北した原因について、検討してみる。

郭松齡事件に関する研究については、主に郭松齡が叛乱した反奉の原因と郭松齡の反奉失敗の原因をめぐって研究されてきた。

徐徹、徐忱『張作霖』中国文史出版社、2011年。

ここでは、郭松齡の反奉の原因について、以下のように述べている。一、地方割拠の軍閥を打倒して、全国を統一するため。二、奉天軍閥における内部の闘争の影響があったこと。三、張作霖と郭松齡との戦略思想が異なっていたため。四、張作霖の賞罰に対する不満がたまっていたこと。また郭松齡の敗因については、以下のように述べている。一、思想認識ははっきりしていないため。二、政治、軍事、外交において、闘争経験が足らなかったこと。三、郭、馮、李の三角連盟が分裂したため。四、日本の武力干渉にあったこと。

徐徹、徐悦『張学良』中国文史出版社、2011年。

ここでは、郭松齡の反奉の原因について、三つに纏めている。一、張作霖の賞罰に不満を持っていたため。二、張作霖が日本帝国主義と手を結びことに反対したため。三、人事異動に不満を抱いていたこと。

陳崇橋 胡玉海『張作霖』遼寧人民出版社、1991年。

郭松齡の反奉の原因について、徐徹、徐悦研究とほぼ同じ意見をあげている。郭松齡の敗因については、日本の武装干渉によって、敗北したことを強調している。

任松、武育文『郭松齡將軍』遼寧人民出版社 1985年。

¹⁹² 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03040969800、宣伝関係雑件／外国新聞論調／支那ノ部 第三卷(1-3-2-51_1_1_003)(外務省外交史料館)」(1 大正14年12月24日から大正15年2月2日)(時局時報送付ノ件 一、郭松齡ノ最後ニ就テ)、6頁。

郭松齡の敗因について、郭松齡、李景林、馮玉祥三角連盟が潰れたことを重視している。李景林は張作霖に降伏した。なぜなら、李景林の妻と子供及び母親が、張作霖に逮捕されたからである。馮玉祥は郭松齡に支援しないため、郭松齡は自ら張作霖と戦うことになったが、結局、力が足らず、敗北した。

劉建忠、崔毅軍「試析馮玉祥与郭松齡反奉的失敗」、『河北建築科技学院学報』第22卷第一期、2005年。

郭松齡の反奉失敗の原因として、馮玉祥が李景林の領土を奪うために、お互いに戦うことになったために、郭、馮、李の反奉三角連盟が分裂することになったことを挙げる。これが郭松齡の反奉失敗の原因であると見なす。

武育文「郭松齡的歴史評価」、『近代中国人物』第3輯、重慶出版社、1986年。

ここでは、郭松齡は東北三省を改革しようという思想を抱き、その観点から張作霖の軍事拡張政策及び張作霖と日本帝国主義と手を結びことを反対し、張作霖打倒を目指すようになったと結論付けている。このような評価を下す研究者が多い。

日本における研究は、次のような状況である。

渋谷由里『馬賊で見る『満州』—張作霖の歩んだ道』講談社、2004年。

郭松齡の反奉叛乱について、郭松齡は張作霖の軍備拡張策を批判して、東三省行財政の重視という方針を主張したと、その違いをあげている。当時の奉天省の省長王永江も張作霖側の不利を見て、郭松齡との連携を構想したと指摘している。

江口圭一「郭松齡事件と日本帝国主義」、(『日本帝国主義史論』所収、青木書店、1975年)

郭松齡の敗因については、郭松齡が勝利することを満蒙權益への脅威とみなした日本の干渉により敗北した、と見なす。

関静雄「幣原外交と郭松齡事件」、『帝塚山大学教養学部紀要』、1997年、巻54。

この郭松齡叛乱事件は、日本の張作霖支持派である田中義一首相などにとっては、張作霖への懐柔・操縦の条件と見なされ、逆に張作霖打倒派にとっては、張作霖を「忘恩の徒」として批判するさいの論拠とされた。また、張作霖政権内部においても、「保境安民」論を提唱し、軍事費の削減を主張していた実力者王永江の辞任をもたらし、張政権全体に弱化的兆が見え始めた、と論じている。

郭松齡叛乱敗北の主な原因は、なんといっても張作霖、張学良父子が団結し、最後まで郭軍と戦ったことである。郭松齡は、張学良を味方につけたかったが、ついにその親子の間に楔を打ち込めなかった。

日本側の資料と奉天軍側、すなわち張作霖及び張学良側の回想によると、張作霖は郭松齡の叛乱に、最初から大きな衝撃を受けた。且つ、表では少なくとも抵抗していたが、実際は恐れ慌て、裏では逃げ道を手配したという。張学良は最終的には自分の父親と一緒に郭軍と戦うという決断を下した。その決断を示すため、飛行機を使って、郭松齡を討つという宣伝ビラを、自分の部隊及び郭軍にも散布した¹⁹³。

¹⁹³徐則林「東北空軍的誕生和發展」、『遼寧文史資料』第6輯、前掲、42頁。

張学良の離脱で、郭松齡の叛乱は「大義なき叛乱」の汚名を被されることとなった。もう一つ、重要な原因は、張学良を叛乱陣営に組み込めなかったことで、自分の歩兵が最前線に於いて敵に投降することが危惧されたことである。郭松齡の部隊といえども、もともとは張学良の部隊であった。だから叛乱当初、郭松齡は張学良の名義を利用した。ところが、張学良は連山戦役から早くも郭松齡打倒の立場を鮮明にした。この結果、郭松齡は「錦の御旗」として、張学良の名義を利用できなくなった。郭松齡は大義を掲げて叛乱し、その大義は張学良も共有しているはずであったが、張学良と連合できなかつた。そうすると、大義の争いではなく、単なる権力争いに陥ることとなってしまふ。そうなれば、張学良にも刃を向けることとなり、自分の部隊が依然として、自分の命令に従うであろうという自信もなくなった。

郭松齡だけではなくて、郭軍の他の指揮官もまた、自分の兵士が敵に投降しないように奔走していた。郭軍の行動は、一致団結という状況から程遠かつた。だから奉天までの進軍距離は遠く、前進速度は非常に遅かつた。

事実上、郭松齡の憂いは的中した。連山戦役で、郭軍の富双英は二千余兵を率いて、張作相の奉天軍第五方面軍団に投降した。

日本側は、敗北原因をどのように見なしていたか。

「郭軍ハ張軍ノ結束及戦闘力ニ就キ、判断ヲ誤リシノミナラス、特ニ私情ニ掣肘セラレタリ。即チ堅固ニ設備セル既設陣地ニシテ、而モ両翼ニ騎兵ヲ有スル張軍ニ対シ、正面力攻ノ冒険ヲ敢テセリ。是レ連山ノ一戦以来、張軍ヲ蔑視セルト、且郭松齡妻女ノ鉄道線ヲ離ルルヲ欲セサルト、現大洋百数十万弗ト多量ノ貴重品トヲ携行セルニ因ルモノアリ。若シ彼ニシテ此等ヲ顧ミス、新民方面ニ対シテハ慎重ナル攻撃法ヲ採用シ、黒龍軍方面ニ対シテハ自ラ第一軍ヲ提ケテ第四軍ニ續行シ、決意強襲ヲ断行シタランニハ、或ハ勝敗ヲ逆転セシヤモ測ラレス。張軍ノ危機ハ實ニ此ニ存セシナリ」¹⁹⁴。

ここでは、私的欲望と作戦上のミスを指摘している。郭松齡は自分の妻女と列車の中の保管していた現金及び貴重品を心配していたという。だから鉄道線から遠く離れる作戦は採れなかつたと見なしている。いかにも軍閥らしい扱いである。日本軍の視点であるから、郭松齡の叛乱を革命的決起とは見なさず、軍閥同士の権勢争いとは見なしていたから、こうした原因論になるのであろう。

作戦上の問題としては、戦闘力が強くて、局部戦場で優勢を獲得していた第四軍の兵力を利用して、敵に強襲を断行すれば、勝敗を逆転させる可能性があつた、という。郭松齡の優柔不断と陣頭指揮のミスが敗戦に繋がつたというが、果たして的確を得ているか確かでない。

奉天軍の参謀の連繋及び部隊の後方態勢の整備も、奉天軍の勝利を収めた原因であつた。奉天軍の司令部は絶え間なく命令を出して、各部隊を連絡していた。郭松齡が寝返つた後も、一度も機能が中断、瓦解していなかつた。奉天軍の各部隊の中には一時的に混乱に陥つたケースもあつたが、奉天軍司令部との連絡によって、やがて、正常な戦闘態勢に戻る事ができた。このことから見れば、奉天軍は平素の軍紀が厳命であり、訓練が適切であつたといえる。すなわち軍閥軍ではあつたが、制度化と規範化を持っている軍隊であつた。張作霖

¹⁹⁴JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年 6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1506—1507頁。

の直系部隊である張作相、吳俊昇及び湯玉麟等は命令通りに行動した。戦闘中で損失を受けたが、兵士の潰乱と逃走等のことはなかった。

熱河を支配していた奉天軍の闕朝璽の部隊は、郭軍と衝突するとすぐに潰れてしまった。少数の敗走兵は闕朝璽と一緒に奉天に逃げ込んだ。だが肝腎な点は、この闕朝璽部隊は客軍であって、張作霖の直系部隊ではなかったことだ。

軍需生産と補給の面でも、奉天軍は優れていた。奉天にあった軍需基地である兵器工場、食糧場、被服場は、昼夜にわたったフル生産で機能していた。絶え間なく、前方の奉天軍に補給していた。1925年12月4日から24日にかけて、東三省兵器工場は多くの武器と弾薬を生産した記録がある。

十三式野砲鋼性銃榴弾14,400発、十三式野砲鋼性榴霰弾4,040発、山砲鋼性銃榴弾15,170発、山砲鋼性銃榴霰弾3,630発、克式野砲鋼性銃榴弾3,210発、克式山砲鋼榴弾9,040発、十五珊榴弾砲鋼性銃榴弾2,799発、三十七耗平射砲2,280発、飛行機用焼夷弾300発。この補給によって、奉天軍は重砲一門約200発、野砲一門約500発、山砲一門約400発の弾薬を擁した。また奉天軍が遼河に陣地を占領した後、兵器工場が補給された大砲は、十三式十五珊榴弾砲6門、野砲8門、山砲36門、三十七耗平射砲15門(内5門は「タンク」に装備された)に膨れ上がった¹⁹⁵。

遼河戦役以前にあっても、すでに東三省兵器工場の稼働によって、奉天軍の軍備力は大きく増強されていた。食糧の面に於いても、遼河戦役に参加した奉天軍の食糧は主に興隆店と公主屯の兵站にまで補給されていた。11月24日から12月24日にかけて、奉天軍兵站と総司令部が奉天軍に補給した食糧の数字は以下の通りであった。

精米1,265,233斤。麦粉12,850,254斤。蒸米11,868箱。乾餅11,985箱。鹹菜1,673,736斤。塩干魚1,199,723斤。牛肉罐頭42,896箱。大豆516,500斤。馬の飼料粟稈4,992,633斤、高粱8,720,732斤、豆粕5,645,056斤。薪13,388,294斤¹⁹⁶。

以上の数字から見れば、奉天軍は十分な補給を確保できた。これは最後の勝利を収める保証であった。

郭軍の方は、既に指摘したように、厳冬に耐えられる冬の被服が不十分であった。多くの兵士は秋の服を着たまま戦った。それに比較すれば、奉天軍は毛皮の軍服を用意できた。「防寒帽15,000個、毛皮服8,000着、靴1,000足」¹⁹⁷が準備できたという。

騎兵隊の扱いも論じなければならない点だ。郭松齡は騎兵隊編成を軽視したという指摘がある。郭松齡軍である東北国民軍第四軍の軍法処長であった高問樵の回想によれば、騎馬隊を重んじなかったという。

東北国民軍は総計五十二団から組織され、兵力としては少なくはなかった。しかし、欠けている点があった。郭松齡は騎兵を重視しなかったために、騎兵が缺乏したのである。

叛乱への準備が不十分で、武器、食糧の補給態勢が整っていなかった。例えば、弾薬は兵士一人当たり400発しか配備されておらず、韓家溝の戦闘では弾

¹⁹⁵JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年 6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1831-1832頁。

¹⁹⁶同上、1878-1879頁。

¹⁹⁷同上、1888頁。

葉が足らなくなり、急遽、後方の第四軍から一人200発を調達したほどである¹⁹⁸。

叛乱軍が、補給態勢が整っている正規軍を打ち破るには、短期決戦で勝利する必要がある。長期戦に持ち込まれると、武器や食糧の補給に於いて、叛乱軍は弱点を晒すことになるからである。

郭軍の叛乱は、用意周到ではなく、戦闘準備は万全ではなかった。特に、補給路等に於いて、十分な態勢確保がなされていなかった。ということは、郭松齡は短期で奉天軍を潰すことができると考えていたのであろう。しかし、速攻、陥落は成功しなかった。それは、郭が相手を過小評価したからであろう。逆にいえば、自分の実力を過大評価した、ということである。奉天軍の中における反旗であるから、自分のことも相手のこともよく知っていた。百戦錬磨の郭松齡は、短期決戦で勝利できると自信を抱いていたのかもしれない。しかし、これは傲慢な自負であったことを証明した。

総合的に張郭戦を見れば、張軍（奉天軍）の戦術と兵力の活用は叛乱軍の郭軍より、やや優れていた。両方の目標とも奉天の支配であった。しかし、郭は大義を掲げた決起であったが、それに応える兵士の戦意が乏しかった。張学良が後ろ盾とならず、加えて厳冬で、戦意低下は明らかであった。後方の安全も心配しなければならなかった。だから、山海関、営口といった地区に兵力を分散していた。自然と強力な奉天軍と正面決戦できる自分の兵力を減らさざるを得なかった。最後の遼河戦役でも、全ての兵力を動員できたわけではない。第一軍と第五軍を後方防備に向けられていた。

突然の叛乱で張軍は、その端緒はあたふたしたが、時間がたつにつれ、防衛目標が明確となった。郭松齡軍の進軍が遅かったことも幸いし、遼河決戦においては、全ての兵力を集中させることができ、連山戦役における劣勢状況から遼河戦役の時には、兵力的劣勢を逆転することに成功した。

張軍は主動出撃という積極的戦術を採用した。郭軍の攻撃が始まる前に、先手を取って真っ先に出撃した。吉林軍も連山戦役敗北の教訓を汲み取って、陣地に留まって敵を迎えるのではなく、郭軍を積極的に奇襲した。黒龍江軍は危険を犯して、郭軍の後方まで迂回した。こうして三方からの攻撃を受けて、強力な郭軍の砲兵戦術の優勢性を発揮することが出来なくなった。三面攻撃に遭遇した郭軍は、全線同時前進の計画が失敗した。

吉林、黒龍江両軍は終始、主力の奉天軍と協働して、成果をあげていた。黒龍軍は、郭松齡の第四軍から猛烈な攻撃を受けていた時、張学良が迅速な措置として、すかさず予備隊を投入した。各軍は差別なく戦線に投入させられ、戦後の戦力バランスを睨みながら実力を温存するということもなかった。各軍は最後まで協力しながら、叛乱軍討伐に足並みを揃えた。

張軍の騎兵部隊活用も勝利を収めた原因であった。戦闘の頭から、張軍の騎兵部隊はずっと、郭軍を悩ませていた。連山戦役では、騎兵部隊は戦闘に参加することが間に合わなかった。しかし、間接的に郭軍の前進速度を遅らすことに貢献した。郭軍は終始、張軍騎兵を探したが、その位置を見つけることができなかった。その故に、騎兵軍からの攻撃に怯え、幻の攻撃に用心しながら、ゆっくりと前進していた。それが、前進の速度に巨大な影響を与えた。

遼河戦役の時、郭松齡は第一軍を後方に残して、張軍の騎兵部隊からの攻撃

¹⁹⁸高問樵「關於郭松齡反奉倒張的經過記實」、姚東藩『郭松齡反奉見聞』、前掲、47頁。

に対処する防備に当てた。この結果、第一軍は最後の決戦に参加できなくなった。遼河戦役を迎えるに当たって、張軍の騎兵は郭軍の動向を逐一奉天に報告した。且つ、新民と大民屯に於いては、郭軍の集中力を引きつけ、その前進を阻んだ。戦術の面に言えば、多数の兵の存在を装う“疑兵”という役に立っていた。

他方、郭松齡は騎兵を重視していなかったために、自分の腹心を騎兵部隊に配置することはなかった。そのため、郭軍は騎兵の応援が缺乏した。ただ十九世紀から、機関銃が登場し、兵器革命が進んだ。第一次大戦の戦史から見れば、戦闘の主役は機関銃など近代兵器であって、伝統的な騎兵部隊は影をひそめた。だが馬賊出身の張作霖は、伝統的な騎兵部隊の活用に長けており、東北における戦争には、まだ騎兵部隊の活用は有効であった。郭松齡の同盟者である馮玉祥は二個騎兵師団を熱河省に進めたが、郭松齡を支援することはなかった。騎兵部隊が缺乏していたために、郭松齡は敵情視察に成果を上げることが出来ず、自分の左翼が吉林軍に奇襲されたが、それを予知することができなかった。

最後の遼河戦役において、奉天軍の騎兵部隊の奇襲によって、郭軍が大きな損傷を受けた。結果として敗北を招く重要な要因となった。これについて、中国側資料では十分に検証できず、むしろ日本側の資料の方が詳しく論じている。

「二十二日、戦闘序列、再ヒ変更セラレ、第十四師モ亦第六方面軍(黒龍軍)ニ移リ、呉俊陞ハ第十四、第十七両師ヲ率キ、別働隊トナリ、郭軍ノ背後ヲ攪乱スルコトナリ。又騎兵第八旅ハ張学良ノ命ニ依リ、新民ニ移リシヲ以テ、張九郷ハ第十三師ノミヲ指揮スルニ至レリ。二十四日、騎兵第十三師ノ諸隊ハ払暁ヨリ攻撃ヲ開始シ。第六旅ハ午前九時四十分張家屯ヲ占領シ、其ノ左翼ニ連撃セシ。第三旅ノ一團ハ二家子及三家子ヲ占領シテ、土崗子ニ向ヒ攻撃ス。手前十一時過第六旅ハ土崗子ニ突入シテ奮闘ノ後、之ヲ占領セリ。郭軍ノ最右部隊ハ、腹背ヨリノ攻撃ニ堪ヘス。正午頃ヨリ漸次西方ニ退却ヲ開始ス。斯ノ如クシテ郭軍第四軍ハ総退却ヲ始メ、騎兵軍ハ之ヲ追撃セリ。然ルニ此ノ退却部隊ハ大民屯西方ニ於テ、別働隊ニ属スル第十四師ノ一旅ニ依リ、退路ヲ遮断セラレ、遂ニ悉ク投降ス」¹⁹⁹。

郭軍の中の最も戦闘力が高かった第四軍であったが、奉天軍の騎兵の攻撃を受けて、戦闘力を失って、敗北した。郭軍の退路も遮断された。

近代戦争において、重火器が出てきた以後、騎兵の優勢がなくなった。しかし、近代の中国の戦場では騎兵がなければ、簡単に勝利を収めることができなかった。近代重火器が十分に普及していない中国では、依然として騎兵の重要性は低くなかった。騎兵は、突撃の役割を持っているだけではなかった。敵情の偵察と敵の攪乱任務も与えられていた。郭松齡は急激な叛乱であったから、十分な敵情偵察をやる機関を整備できなかった。奉天軍騎兵の襲撃、攪乱行為を受けて、前進の速度が著しく遅くなった。迅速さに欠けて、戦機を失った。軍事的には、騎兵をもっていなかったことは、郭軍の重要な敗因の一つであった。

¹⁹⁹JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1353—1362頁。

第四節 郭松齡叛乱事件と張学良

張学良は、かつて郭松齡が第二次奉直戦争の戦場で、無断で戦場を離れるという違反行為を犯したが、自分が温情で軍事処罰から救ったという。

第二次奉直戦争で奉天軍は大分の主力部隊を山海関、九門口一線に集結して、直隸軍に壊滅的な打撃を与える計画がなされた。張学良、郭松齡の第三軍は山海関の正面に攻撃するという任務を担当していた。姜登選、韓麟春の第一軍は九門口及び其の以北、以西の各口に攻撃するという任務を担当していた。1924年10月4日、奉天軍は数十回の攻撃を行ったが、直軍に撃退された。この局面において、姜登選、韓麟春の部隊は九門口の側面に攻撃し、突破口を開いた。張学良は郭松齡に対し、姜登選、韓麟春に増援するように命令した。ところが前述したように、郭松齡は命令に従わず、自分の部隊を率いて、戦場を離れた。

郭松齡が第二次奉直戦の時に、戦闘中に命令を無視して、勝手に部隊を率いて戦場を離れたことは、厳しく言えば、叛乱と変わらない。銃殺されるべきである。しかし、張学良の「先生」であった郭松齡に温情を掛けて、郭松齡を処理しなかったという。しかしこのことは、張学良に衝撃を与えた。この時から、張学良は郭松齡が遅かれ早かれ、叛乱を起こすと考え始めたという。

処罰できなかったもう一つの理由として、軍内部に育っていた郭松齡に対する戦略的崇拜心に動揺を与えるのではないかと心配していたことを挙げる事ができる。

「私の過去の作戦の功績は、彼のお蔭であった。私はこれまで、戦場で名をあげたが、すべて具体的な指揮は彼がやってくれた。この人は、苦しみやつらさを堪え忍んだ。勇敢的に作戦していた。言い換えれば、死をも怖れなかった。勇敢的に作戦していたために、部下に尊敬されていた」²⁰⁰。

郭松齡の補佐によって、張学良は優秀の指揮官になることができた。そのことは張学良も十分に自覚していた。そのお蔭で多くの功績を挙げることができた。郭松齡の軍事思想は張学良に大きな影響を与えたのである。張学良は郭松齡の軍事の才能に高い評価を認めていた。張学良の軍事思想は郭松齡の教えを受け継いだものである。郭松齡という人物は、苦しみや辛さを堪え忍ぶという生活の態度と、戦闘で勇敢な振る舞いによって、部下から尊敬されていた。自ら模範となって、優秀の人材を育成してきた。優秀な人材が多くなれば、強力な軍隊を作れる。郭松齡は張学良の最も頼りになった人物であった。そうした部下から尊敬を集める郭松齡を処罰すれば、張学良自分の勢力を弱めると変わらない。

且つ、郭松齡は奉天軍の中の“陸大”派軍官の領袖であり、兵士の中での威信が高かった。郭松齡を処罰すれば、“陸大”派軍官と兵士の不満を引き起こす可能性が高い。そうなれば、軍隊の叛乱を引き起こす可能性もある。郭松齡は張学良の腹心であった。その腹心・郭松齡を殺したならば、張学良には人を許容する度量もないと思われる可能性が強かった。張学良は自分のあとにつき従う人がいなくなると心配して、郭松齡を処罰しなかったのではなかろうか。即ち、張学良は自分の名誉と地位を配慮して、郭松齡を処罰しなかった。

²⁰⁰張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第1冊、当代中国出版社、2014年、16頁。

張学良はこの時の心情を次のように述べている。

「私という人はとても自負心が強い。私は何が起こっても、彼は私の手中から逃れることはできないと分かっていた。しかし、私がとても苦しんだことは、私は自分の名望を守るために、郭松齡を処罰しなかったことである。その故に、東北の人民及び私の部下に害をもたらし、多くの人々が死んでしまった。彼らの死亡は私が自分の名譽を守ろうとした結果である。その故に、私はとても、悲しかった」²⁰¹。

張学良は自分の名譽を守るために、郭松齡を処罰しなかった、と自己の非を示している。このため、東北の人民及び私の部下を波及して、多くの人々が死んでしまったと悔んでいる。ただこのことは次の郭松齡の叛乱において、二度目の叛乱は許さないということで、郭松齡への弾圧と銃殺という極刑に対処した自分の正当性を立証するために、自己弁護した可能性が高い。

逮捕された郭松齡夫婦が銃殺に処されたことについて、張学良の口述によれば、次のように弁護している。

「郭松齡が捕虜され、私は父親にお願いした。彼のために情けをかけて欲しいというのではないが、彼の夫人には情けをかけて欲しいと頼んだ。私の願いは父から叱咤を受けた。また楊宇霆に対し、彼一人（郭松齡）の罪であり、罪のない女（郭松齡の妻韓淑秀）であるから、彼女を殺さないでほしいと言った。私は軍法会を開いて、彼（郭松齡）が叛乱した原因を尋問して、話したいことを話させるべきだと考えていた。

その後、楊宇霆はこのことに怖れをなした。彼は一つのデマをでっち上げた。間違いなく彼が作り上げたものであった。彼は、奉天へ郭松齡を護送すれば、途中で日本人が郭松齡を奪おうと計画していると言った。奉天に戻るためには、途中で日本の鉄道を通すしなければならなかった。しかし、これは明らかに彼がでっち上げた嘘であって、そのことは私には分かっていた。私の父親は、楊宇霆が報告した情報に基づいて、（殺害の）命令を下した。こうして、郭松齡は銃殺されたのである」²⁰²。

この回想によれば、郭松齡が捕虜された以後、張学良は郭松齡を奉天で公開的に尋問しようと考えていた、と言う。しかし、郭松齡が奉天に戻って事実関係を報告すれば、楊宇霆にとって自分に不利な話を告げられるのではないかと心配していた。その故に、奉天へ郭松齡を護送する途中で日本人が郭松齡を奪おうとしているというデマを造った、という筋書きである。張作霖はそのデマを信じて、郭松齡を銃殺するという命令を下したということになっている。

張学良は、こうした楊宇霆に不満を持っていた。だから、郭松齡殺害の悪役を楊宇霆にでっち上げた。その後、張学良は楊宇霆を殺害したが、その一因は、ここにあったのかもしれない。

叛乱直後の1925年11月25日、張学良は郭松齡に会うために秦皇島へ行った。しかし郭松齡は張学良に会わなかった。それは張学良を銃殺しようと考えていたからであると、張学良は語っている。

「秦皇島に着いて、彼の部下も私の部下であったから、私は彼に面会しよう

²⁰¹張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第6冊、当代中国出版社、2014年、1852頁。

²⁰²張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第1冊、前掲、27—28頁。

としたが、彼は私に会ってくれなかった。私は下船しようとしたが、彼の部下が語るところでは、もし彼（張学良）が来たら、どうするのかと聞いたところ、彼（郭松齡）は射殺すると言った、と言う。あの時、彼は叛乱を決意していたのだ。それ以来、彼は理性を失った、と私は考えるようになった」²⁰³。

郭松齡による張学良殺害計画は、部下から聞いた話であり、その信憑性は疑わしいが、この状況判断が真実であれば、秦皇島で郭松齡が張学良を殺そうと考えていた、ということになる。即ち、最初の叛乱声明のように、張学良と一緒に張作霖に叛乱することを考えていなかった、ということになる。その理由は、郭松齡はいかに崇高な反奉天軍の旗を掲げても、張学良は結局、自分と一緒に父親張作霖に叛乱することの見込みはないと判断したからであろう。

もしここで、張学良を殺害することができれば、最初の障害を乗り越えることができる、郭松齡は判断したとも考えられる。郭松齡の決意が真実であれば、張学良は郭松齡の叛乱に合流する選択肢はなかった。かくして、これをきっかけに、張学良は自分の父親と一緒に郭松齡と戦うという決意が生まれた。これが郭松齡弾圧を決意した張学良の主張である。

郭松齡の処刑によって、叛乱に対する郭松齡の弁明の機会は歴史上から抹殺され、それに対して張学良は生き残って、その機会が残された。歴史とは皮肉なものである。

郭松齡の戦略上の過ちを、張学良は次のように指摘している。

「従来、私が正式の総司令官であり、彼は副官であった。彼が下した命令は私の命令であった。ところがその後、新民府に着いた時に、彼は私の総司令官の職を免職した。彼自己の名義を使った。これだけではなかった。それまでは総司令官は私であったのが、私が敵対者になってしまった。私の部下は戸惑った。私たちはどうして、張学良と戦わなければならないのか？ だから、私の部下は戦わなかった。一つの弾も打っていなかったと言える。郭松齡の命令がすべてではなかった。ある旅団長は命令を遵守しなかった。彼は仕方なくして、団長に対して直接命令を下した。団長は殆ど、命令を返上した。結局、大勢を挽回できないことを知ることになった」²⁰⁴。

郭松齡は叛乱事件を行った時に、張学良の名義を挙げて、叛乱の正当性を訴えた。あくまで張学良の軍隊を指揮していた。ところが、郭松齡からみれば、張学良が裏切って、叛乱軍に合流しなかった。とくに遼河戦役の前には、張学良は郭松齡軍討伐の対立面に立っていた。もともと、張学良の御旗を掲げて叛乱したはずであるが、総司令官の張学良と戦うという矛盾に直面した郭軍の多くの指揮官は、総司令官に代わった郭松齡の命令に従わなかったのは当然である。張学良が味方せず、敵対者に変ったことは、郭松齡の戦略的誤算であったのか、それとも戦略に織り込み済みであったのか、この点は定かでない。叛乱初期の秦皇島で、すでに張学良殺害を計画していたのであれば、郭松齡は張学良に匹敵する指揮官としての権威を確立していると自惚れていたことになる。張学良の困り込みに失敗したのは、郭松齡の読み間違いであれば、それは明らかに戦略的誤算であった。

²⁰³張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第4冊、当代中国出版社、2014年、1219頁。

²⁰⁴張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第6冊、前掲、1840頁。

この点について、張学良は次のように述べている。

「彼の失敗の最も重要な原因は、私と敵対したことであった。これこそ、重要なことであった。あの軍隊の連中は私が敵対するとは思ってもよらないことであった。あの連中は私の軍隊であった。私の命令にしか従わなかった。郭松齡は私に服従する連中を引き連れて、私と戦った。自己滅亡の道を辿るほかはなかった。命令を聞かない連中と、どうやって、戦うことができようか」²⁰⁵。

日本側の資料である張学良に対するインタビューを実施した臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』にも、張学良の口述を載せている。奉天軍が勝利を収めた第二次奉直戦争で、張学良は功績を挙げた。その勝利における郭松齡について、張学良は次のように口述している。

「この勝利により、私はの上がっていきました。しかし、この勝利の功労は、私にあったものではありません。私にはそのような能力はありません。実際は郭松齡が私を支えてくれたのです」²⁰⁶。

郭松齡のお陰様で、勝利を収めた。郭松齡が居なければ、張学良は勝利を収めることができなかつたと言った。張学良は郭松齡の軍事才能に高い評価を与えていた。郭松齡に対する尊敬及び感謝の気持ちも見えた。しかし、ここでは、張学良は自らの謙遜さを示す言葉として発言したという意味も持っていた。第二次奉直戦争において、張学良は奉天軍の第三軍の軍長として、郭松齡の影響を受けて、高い軍事才能を持っていたが、郭松齡と比べるものにならなかつた。しかし、全体的で軍隊をコントロールすることが誰にも負けなかつた。戦闘中で、郭松齡は命令に従わず、自分の部隊を率いて、戦場を離れた。張学良はすぐ、郭松齡を追いかけた。張学良の説得のおかげで、郭松齡は戦場に戻った。

張学良の統帥力でいえば、軍事才能を持っていることだけでは、勝利を収めることはできない。全体を収める優秀な統帥力を必要である。軍隊を収めることができなければ、軍事才能を持っていても、軍隊は命令に従わない、軍事戦術を実施することができない。即ち、張学良の統帥力と郭松齡の軍事才能を合わせることによって、勝利を収めることができたのである。

郭松齡の叛乱事件に対して、張学良は自分の過ちを責め咎めることをしていた。張学良は郭松齡の叛乱を予測したが、叛乱を抑える自信を持っていた。その結果から見れば、確かに叛乱を抑えた。しかし、東北の人々と彼の部下に大きな災難と犠牲を与えたことに対して、張学良は予測できなかった。心に疾しさを感じていた。張学良も第二次奉直戦争の時に、命令に背いた郭松齡を許したことを後悔していた。張学良は郭松齡がまた、同じことを起こすと考えていた。張学良の口述は、次のように言っている。

「この時私は、きつたまたいつか命令に背くことがあるだろう、と思っていました。私はもし誰が反乱を起こしても、それを抑える自信がありました。その反乱は成功しないと確信しました。ところが郭松齡は本当に反乱を起こしていました。その時、私はとても悩みました。東北の人々と、私の部下にたいへん済まなく思ったのです。反乱が起こったことにより、東北の人々に大きな災難が降りかかり、私の部下の多くが犠牲になったからです。たしかに私は郭松齡が大好きでしたが、彼が以前命令に背いた時、彼を許すべきではなかつたと

²⁰⁵ 同上、1853－1854 頁。

²⁰⁶ 臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店、1995 年、32 頁。

思いました。あの時私が許した結果、彼は反乱を起こし、多くの人々が犠牲になってしまったのです」²⁰⁷。

第五節 郭松齡の叛乱事件と日本干渉

郭松齡の思いに立ちはだかったのは、張作霖、張学良の奉天軍だけではなく、日本では「満州」と呼ばれた東北三省に勢力を伸ばしていた日本の関東軍であった。

1925年12月8日、関東軍は張郭両軍に第一次警告文を交付した。第一次警告文の内容は以下の通りであった。

「本司令官ハ帝国政府ノ方針ヲ体シ、隣邦ノ動乱ニ當リテ常ニ絶対不干渉ノ態度ヲ厳守シ、断シテ支那國內一党一派ノ興廢ニ関與スルノ意ナキハ、之ヲ闡明スルノ要ナシ。然リト雖、満州ニ於テ数十萬ノ帝国臣民居住シテ、各般ノ平和的事業ヲ経営シ、日本ノ投資亦巨額ニ上リ、帝國ノ同地方ニ於ケル權利、利益頗ル重大ナルモノアリ。随テ鐵道付属地帯即チ我軍守備正区域内ハ勿論、其ノ附近ニ於ケル戦鬪並攪乱ノ為、此ノ重大ナル帝國ノ權利、利益ヲ毀損シ或ハ危害ヲ及ホスノ虞アルニ於テハ、軍ノ職責上黙視シ得サル所ニシテ、目下対戦中ノ両軍ニ於テモ、帝國ノ此ノ特種ノ地位ヲ尊重セラルヘキヲ信ス。若シ不幸ニシテ如上ノ危険切迫スルニ於テハ、本司令官ハ當然必要ノ措置ヲ採ラサルヲ得ス。今ヤ両軍ノ戦鬪或ハ我守備區域ノ附近ニ及ハントスルノ形勢ニ鑑ミ、対戦中ノ両軍司令官ニ対シ、茲ニ豫メ前記ノ點ニ就キ注意ヲ喚起シ置クハ喫緊ノ要務ナリト信ス」²⁰⁸。

日本関東軍の警告文から見れば、日本政府は張郭戦のどちらかを支援するというような軍事介入ではなくて、中立の立場をとると強調した。しかし、日本は中国の東北地域における權益を守るために、張郭両軍ともに、関東軍が守る満州鐵道付属地へ侵入することを禁止した。日本政府の警告文に違反する場合はあれば、日本関東軍が軍事行動を行うと警告したのである。両軍に対して中立というが、明らかに郭松齡の叛乱軍にとって不利に働いた。郭松齡の叛乱軍は、「鐵道付属地帯即チ我軍守備正区域内」を越えて奉天へ進軍しなければならなかったからである。

以上の警告文によって、郭松齡は營口を経て、奉天に攻撃する計画が失敗した。1925年12月13日、郭松齡は馬忠誠の第十二旅団を派遣して、營口を占領しようと計画していたが、関東軍に阻止された。日本側の資料によれば、次のように報告されている。

「十二月十二日、郭軍溝幫子(營口線トノ分岐駅)ヲ占領スヤ、郭松齡ハ馬忠誠ノ指揮スル第十二旅及砲若干ヲ營口方面ニ派遣ス。同部隊ハ十三日午前八時河北驛(營口ノ対岸)ニ到着ス。其ノ兵力歩兵約千五百、砲數門ナリ。在營口河防練軍ハ情報ヲ接シ、午前六時蒼皇トシテ營口出發、奉天ニ向ヒ退却セリ。是ヨリ先、郭軍前進ノ報營口ニ傳ハルヤ、人心動揺シ、我居留民ノ生命財産並

²⁰⁷同上、34頁。

²⁰⁸JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年 6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1304頁—1306頁。

我権利、利益ニ危険ヲ感スルニ至リシヲ以テ、関東軍司令官ハ獨立守備隊司令官ニ命シ、在大石橋獨立守備歩兵第三大隊長ヲシテ、營口方面ニ兵力ヲ増派シ、事前ニ備ヘシメ。又第十師団ニ命シ、何時ニテモ歩兵一中隊ヲ營口ニ派遣シ得ルノ準備ニアラシメタリ。郭軍ハ一挙營口ニ進入セントシ、強硬ニ道尹ニ対シ其ノ承認ヲ要求シ、道尹ハ已ムヲ得ス、之ヲ承認セルカ如シ。軍司令部ハ、本情況ニ於テ郭軍ノ我付屬地進入ヲ黙視スルトキハ、他ニ及ホス影響鮮少ナラサルヲ思ヒ、獨立守備隊第三大隊長安河内中佐ニ対シ以下ノ電命ヲ發セリ。「貴官ハ本職ノ代表トナリ、河北ニ来レル郭軍ニ対シ、河北付近ニ於テ遼河ヲ渡河スルコトヲ禁スル旨ヲ通告シ、其ノ回答ヲ電報スヘシ」。安河内中佐ハ之ヲ傳フヘク河北驛ニ急行セントシ、遼河々岸ニ至リシカ、既ニ郭軍外交主任齋世英、馬旅長ノ參謀長(守田福松モ同行)等營口左岸ニ上陸セントシツツアリ。依テ日本領事館ニ於テ軍司令部ノ通告ヲ傳達セシニ、郭軍モ遂ニ我要求ヲ容レ、營口進入ヲ中止シ、田庄臺ニ至リ掠奪ヲ行フ。十四日、練軍營長ハ張作霖ノ電命ヲ受ケ、歩兵三百、騎兵四十、二門ヲ率キ營口ニ歸還セントシ、營口道尹ト交渉ヲ始メタルヲ以テ、軍司令部ハ再ヒ安河内中佐ニ電命シ、郭軍ト同様練軍營ノ營口進入ヲ禁止セリ」²⁰⁹。

日本政府は本国の居留民の生命財産及び日本国の権利、利益を守るためにと
いう口実で、関東軍獨立守備隊を派遣して、營口を占領した。郭軍が營口に進
軍することを阻止した。且つ、奉天軍の營口守備隊は營口に戻ることも禁止し
た。表面上から見ると、日本政府は中立の立場を立てていたように映るが、実
は奉天軍を助けた。もし、郭軍の馬忠誠の第十二旅団が予定通り營口を占領で
きていれば、そこから遼河を渡河し、奇兵として、直接的に奉天に攻め込むこ
とができていた。そうすれば、戦局が大きく郭松齡軍に有利に轉換される可能
性もあった。即ち、日本政府は軍隊を出して、奉天軍の代わりに、營口を守つ
たということになる。これは、日本政府が武力手段で奉天軍に援助した一つの
証拠であった。

1925年12月21日、関東軍參謀長が日本陸軍次長に送った電報で、軍隊を
派遣して、奉天軍に応援することが言及されている。

「数日前、奉軍援助ノ為、護路軍中ヨリ約千五百名ヲ抽出シテ、南送セリ」
²¹⁰。

派遣目的は、はっきり「奉軍援助ノ為」と記されている。

1925年12月15日、郭松齡は各国公使に「質問日本駐華公使電」を送達し、
関東軍の措置に抗議した。

「私は馬忠誠旅団長を派遣して、一個団を率いて、十三日、營口河北駅に行
かせた。もともと南岸に進軍させ、各国の居留民及び外人商業を保護しようと
した。ところが思いもよらず、日本関東軍白川司令官は、營口視察の守備歩兵
第三大隊長の歩兵中佐である安河内中佐を派遣し、我軍を渡河させないと声明
した。營口は通商の重要な所であった。もともと營口に駐在していた海防營は
逃亡し、奉張方面の軍隊は一人も駐在していなかった。戦闘行為が起こるはず

²⁰⁹JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記—大正15年 6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1312—1315頁。

²¹⁰「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03050752100、江浙並奉直紛擾關係 松本記録 第四卷(1-6-1-85_004)(外務省外交史料館)」、22979頁。

がない」²¹¹。

郭松齡が軍隊を營口に派遣し、そこから奉天へ進撃する計画を練っていたことは間違いなかった。前述のような日本軍の見立てと同じであった。郭松齡は各国の居留民と商業を保護するという名義を挙げて、奉天軍が逃げ去った營口を進入しようと考えていた。そして、各国の力を借りて、日本関東軍に圧力を加えようと画策した。

他方、関東軍の第一次警告文に対する張作霖の回答は、日本軍に迎合するものであった。日本側に残された資料では、次のような回答であった。

「貴國関東軍司令官ノ十二月八日附ノ来書ヲ詳悉ス査スルニ、此次郭松齡背反シテ東三省ヲ擾害シ、貴國在留民ヲシテ不安ヲ壞カシムルニ至リ、本上將軍ハ深く此ヲ遺憾トス。顧フニ郭松齡ハ元東三省ノ軍隊ニ係リ、已ニ叛乱ノ事情アレハ、長官タル者ハ剿赤スルノ権利責任アリヤ。郭松齡ノ此次ノ挙動ハ實ニ政治的赤化ノ意味アリテ、獨リ東三省人民カ其ノ荼毒ヲ受クルノミナラス、其ノ影響ハ全國ニ及ハントス、此等ノ叛乱人ハ國法ノ容レサル處、剿除セサルヘカラス。且奉天ハ上將軍ノ所在地タリ。彼茲ニ来ツテ擾乱スルニ於テハ、防線ヲ投ケテ保衛ノ責ニ任セサルヲ得ス。此レ宜敷貴司令官ノ諒解セラルル處ナルヘシ。貴國在留民ノ生命財産及貴國ノ利益ニ至リテハ、本上將軍ハ極力尊重シ、逆軍討伐ノ官兵ニ嚴命シ、特別ニ注意スヘシ。茲ニ答覆ス」²¹²。

郭松齡の叛乱は、「政治的赤化」の結果であるという。当時、広東の国民党孫文政権は、コミンテルン、ソ連、中国共産党と提携し、軍閥打倒の「国民革命軍」を創設し、帝国主義打倒のナショナリズムを高揚させていた。また奉直戦争で北京政変によって権力の中枢に抬頭した馮玉祥も国民党に近づき、「国民軍」を自称した。その影響で、郭松齡も叛乱軍を「東北国民軍」と呼んだ。日本軍はこうしたマルクス主義など排日ナショナリズムの抬頭を恐れていた。

この日本軍排斥の「政治的赤化」グループと違って、張作霖の奉天軍は、東三省における外国の既得権益を擁護し、強烈的な排日ナショナリズムを掲げることとはしないと、日本軍の歓心を買おうとしている。

郭松齡が東北三省を占領すれば、東北三省で共産主義を実行することとなり、日本側の権益を損害することになると訴えた。張作霖は日本の力を借りて、郭松齡を鎮圧するという考えであった。

他方、関東軍の第一次警告文に対する郭松齡の回答はどうだったかといえ、以下の通りであった。

「茲ニ條約ヲ尊重シ及行軍ヲ慎重ニスル見地ヨリ

一、貴司令官ニ於テ鐵道付屬地帯ノ警備範圍及其ノ根據トスル所ノ條約文句ヲ明白ニ示サレ、以テ考證ニ資セラレムコトヲ請フ。之レ貴國ノ中立ニ侵害ヲ及ホスヲ免レン為ナリ。

二、風聞ニ依レハ、軍事ノ相手方ニハ貴國人民ニシテ中國ノ武装ヲ著ケテ戦闘ニ参加スルモノアリト。此ノ件ハ自然未タ確信スル能ハサルモ、但シ萬一ニモ此ノ事實アラハ、敵軍ノ對敵行動中其ノ區別ヲナシ、加フルニ保護ヲ以テス

²¹¹ 「郭松齡向各国駐華公使送達質問日本駐華公使電（1925年12月15日）」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、180頁。

²¹² JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記-大正15年6冊の内第6冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1306頁-1307頁。

ルハ困難ナレハ、諒恕セラレンコトヲ祈ル。

三、現ニ軍事ノ相手方ハ、依然新民屯巨流河一帯ニ於テ抵抗ニ従事シツツアリ。敵軍ハ近ク前進シテ討伐ヲ加ヘントス。此レ眞ニ已ムヲ得サル所ナリ」²¹³。

当然であるが、郭松齡は日本と戦火を交えることは避けたかった。日本側に対し、中立の要件の明示を求めている。しかし、日本人が奉天軍の服を着て、戦闘に参加しているという噂を紹介することで、明らかに奉天軍に対する関東軍の軍事的支援に警告を与えている。日本側への反応において、張作霖と郭松齡との見解には、大きな違いがみられた。「張作霖＋関東軍 VS 郭松齡」の対立構造に、郭松齡は焦りがあつたろう。

²¹³ JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記－大正 15 年 6 冊の内第 6 冊(防衛省防衛研究所)(張郭戦史送付の件)、1308 頁－1312 頁。

第五章 張作霖爆殺事件と東北易幟

第一節 張作霖の死

1928年6月4日、奉天皇姑屯近くのクロス鉄橋で、張作霖が乗った列車が爆破された。日本の関東軍が周到に準備した爆殺計画の犠牲者となったのである。では、なぜ殺害されたのか。そこには、従来からの軍閥間の争い、コミンテルン・ソ連と手を結んだ国民党（蒋介石）の軍閥支配を打破しようとした北伐統一戦争、そして満州支配を強化しようとする関東軍との複雑なドラマがあった。

張作霖は爆殺された前には、奉天の覇者から飛躍し、安徽軍閥、直隸軍閥、奉天軍閥などが天下を争っていた中国の北京政府の頂点に達していた。郭松齡の叛乱事件が鎮圧された以後、張作霖は郭松齡の同盟者であった国民軍の馮玉祥に反撃するため、中原を支配する直隸軍閥の呉佩孚と手を結んだ。

第二次奉直戦争の時に、直隸軍閥に属していた馮玉祥が北京政変を起して、戦闘中に寝かえたために、呉佩孚ら直隸軍閥軍が敗北し、曹錕、呉佩孚ら直隸軍閥政権であった北京政府は、臨時執政政権にとって代わられた。呉佩孚はこの仇を忘れていなかった。それゆえ、奉直戦争では敵であった張作霖と手を結んだ。

「1926年1月11日、張作霖は郭松齡の残存部隊である魏益三を討伐するという名義を挙げて、関内に入関して追討軍を展開した。奉系の李景林は、天津で馮玉祥の国民軍に敗れて、山東省に退却していた。そこで山東省の軍閥張宗昌と手を結んで、直魯連軍と称していた。張作霖軍の入関に合わせて、直魯連軍は山東省から北京政府がある直隸を攻撃した。他方、張作霖と手を結んだ呉佩孚は1926年1月、湖北省から馮玉祥が支配する河南省に進軍した。1926年3月、四面楚歌に陥った馮玉祥は下野を発表し、ソ連に逃亡した。

姿を消した馮玉祥の代わりに張之江が国民軍第一軍司令に就任した。この時、国民軍が抑えていた直隸、河南地域は、奉直両軍によって三面から包囲されてしまった。1926年4月15日、奉天軍は北京の東・通州を占領した。呉佩孚の直隸軍は西苑を占領した。1926年5月13日、北京の臨時執政政権は段祺瑞が失脚し、代わって顔惠慶内閣が成立したが安定しなかった。こうした流動する情勢のなか、奉直両軍は北京、天津及び直隸、河南両省を占領した」²¹⁴。

張之江が指揮する国民軍の第一軍は奉直両軍に敗れたが、大きな損失を受けずに北京南口に退却した。しかし北京に対する脅威となっていた。「国民軍の脅威を解除するために、1925年7月、奉直両軍は南口の国民軍に攻撃を加えた。ところが呉佩孚の主力部隊は北京付近に駐在していなかったために、南口を攻撃した部隊は殆ど奉天軍であった。8月13日、国民軍は南口から西北地区に大きく退却した。8月14日、奉天軍は南口に進入し、北京周辺を制圧した。続いて、張家口も占領した」²¹⁵。これによって、張作霖の奉天軍は熱河、チャハル両省及び直隸省の大部分を抑えた。

1926年7月、広東国民政府は蒋介石を北伐軍総司令として、国民革命軍の

²¹⁴陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』、前掲、247—248頁。

²¹⁵同上、251頁。

北伐出師を發表した。「当時の中国の領土は、その大部分が北洋軍閥に占められていた。直隸軍閥呉佩孚は湖北、河南及び直隸省の保定、大名一帯を抑えていた。京漢鉄道の沿線にも呉の勢力範囲があった。直隸軍閥孫伝芳は南京を中心に、江蘇、浙江、福建、安徽、江西の五省を抑えていた。奉天軍閥張作霖は東北三省だけでなく、関内においても、北京、天津及び直隸、山東両省を抑えていた。京奉及び津浦線の北側も張作霖の勢力範囲であった。奉天軍に追われた馮玉祥の国民軍も西北を抑えていた。閻錫山は山西省に「山西王国」を築いていた」²¹⁶。

広州から出発した北伐軍は先ず、呉佩孚軍と衝突した。北伐軍は二手に分かれ、中央ルートは湖南、湖北を北上して、8月に辛亥革命が勃発した武漢の漢口、漢陽を占領した。国民党の北伐軍優勢というこの情勢に対処するため、1926年9月7日から11日にかけて、張作霖は奉天で軍事会議を行った。その結果、佩孚国民革命軍の北伐戦果に直面した以上、かつての敵であった直隸派の呉佩孚との軍閥提携に踏み切ろうとした。しかし、呉佩孚は張作霖が南下支援の口実で、自分の地盤を占領するのではないかと心配し、張作霖の援助を断った。

10月10日、北伐軍は武漢三鎮のうち、最後に残っていた武昌を占領した。こうして呉佩孚の部隊は殆ど、壊滅状況であった。蒋介石司令官の北伐軍は、沿岸ルートの福建省から北上し、江西省に入った。11月、北伐軍は九江、南昌を占領した。ここに依拠していた孫伝芳の主力部隊は殆ど、消滅させられた。11月14日、危機感を募らせた張作霖は天津の蔡園で軍事会議を開いた。そこでは、北伐軍に対抗するため、呉佩孚、孫伝芳両軍との提携を探ることとなった²¹⁷。

11月19日、孫伝芳は天津の蔡園で張作霖と会見して、張作霖と手を結ぶことを決定した。11月29日、孫伝芳、張宗昌は、直隸、山東、江西、江蘇、安徽、河南、浙江、福建、山西、陝西、チャハル、熱河、綏遠、吉林、黒龍江十五省の名義を取って、張作霖を安国軍総司令に推薦した。12月1日、張作霖は天津の蔡園で就任儀式を行った。孫伝芳、張宗昌が安国軍副司令官に任命された²¹⁸。

1927年1月から3月にかけて、奉天軍は呉佩孚への援助という名義を挙げて、河南省の大部を占領した。しかし1927年3月、孫伝芳は長江南岸で北伐軍に敗れて、江北に逃げた。長江まで北上した北伐軍は、中華民国建国時の首都南京を占領した。

1927年6月16日、孫伝芳、張宗昌及び奉系将校は北京順承王府で軍事会議を行った。北伐軍と講和談判するか戦うかを協議した。その結果、主戦論が勝利し、国民党に対抗できる国家体制の明確化を決めた。歴代の北京政府を継承し、「安国軍政府」（正式名は中華民国軍政府）を組織し、張作霖が安国軍政府臨時総統に推薦された。6月18日、張作霖は北京の懷仁堂で就任の宣誓をした²¹⁹。これによって、張作霖は夢にまで見た北洋軍閥の頂点に君臨することになった。

²¹⁶徐轍、徐悦『張作霖』前掲、296頁。

²¹⁷陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』、前掲、254—256頁。

²¹⁸章伯鋒『北洋軍閥 1912—1928』第5巻、武漢出版社、1989年、379頁。

²¹⁹陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』、前掲、261—262頁

蒋介石は、1927年4月に共産党弾圧のクーデターを断行して国共合作政策を破棄すると同時に、南京国民政府を樹立した。ライバルである汪精衛の武漢国民政府と争って勝利し、武漢国民政府は南京国民政府に統一された。こうして1928年1月8日、最高権力を掌握した蒋介石は再び国民革命軍総司令に就任した。2月22日、蒋介石は国民政府軍事委員会主席に就任した。そこで、一時中断していた北伐戦争を再開し、北京への進軍を目指す第二次北伐を開始すると発表した。この北京進軍には、山西軍の閻錫山、西北軍の馮玉祥、広西軍の李宗仁も合流することになった。4月10日、蒋介石、閻錫山、馮玉祥、李宗仁は、一緒に安国軍に攻撃する命令を下した。第二次北伐戦争は、日本軍の干渉（済南事件）を受けるなど、困難があったが、新たな友軍の参加を受けて北伐軍は北京に迫った。北伐軍の猛烈な攻撃によって、安国軍は戦線を支えきることが困難になった。奉天軍は兵力を温存するために、5月下旬、奉天軍は安陽と石家荘方面から灤東の一帯に退却した。この兵力温存戦略によって、戦闘による損失は多くなかった。

5月9日、張学良と楊宇霆は張作霖の命令を受けてとって、安国軍政府の北京に入った。張作霖、張学良、楊宇霆という奉天軍の三巨頭による作戦会議が開かれた。張作霖は、これからも、北伐軍との戦いを続けるか否かについて、張学良と楊宇霆の意見を聞いた。張学良、楊宇霆とも、停戦すべきであるという意見を提出した²²⁰。

これを受けて、張作霖は停戦を求める通電を発表した²²¹。ところが優勢な北伐軍側にとっては、停戦案など検討するに値しなかった。しかし、蒋介石は張作霖の停戦通電を受け取れない、とした。引き続き北伐継続を決定した。停戦講和を拒否された張作霖は5月30日、北京で軍事会議を行った。そこで全ての奉天軍は東北に戻ると決定した。1926年12月に安国軍総司令になってから、そしてさらに安国軍政府大元帥として北京政府を樹立してからわずか1年半で、張作霖による天下統一の夢は消え去った。

6月2日、張作霖は北京から東北に退却するという通電を発表した²²²。張作霖は安国軍政府大元帥の席を辞して、奉天へ撤退した。ところが6月4日、驚く事件が発生した。張作霖が奉天に戻る途中で列車ごと爆発、爆殺されるという大事件が発生したのである。爆殺首謀者は日本の関東軍であった。しかし「満州某重大事件」として、その関東軍関与の真相は伏せられていた。

この事件は、関東軍の高級参謀であった河本大作大佐の起した謀略事件であった。戦後になって、初めて河本大作はこのことを認めた。河本大作「私が張作霖を殺した」²²³がそれである。河本は次のように証言している。

「一人の張作霖が倒れば、あとの奉天派諸将といわれるものは、バラバラになる。今日までは、張作霖一個によって、満州に君臨させれば、治安が保たれると信じたのが間違いである。ひっきょう彼は一個の軍閥者流に過ぎず、眼中国家もなければ、民衆の福利もない。他の諸将に至っては、ただ親分乾分の

²²⁰魯穆庭「張作霖与閻、馮、蔣、李戦争記略」、『遼寧文史資料選輯』第1輯、内部発行1962年版、53頁。

²²¹遼寧档案館『奉系軍閥档案資料彙編』第7巻、江蘇籍出版社、1990年、182頁。

²²²「張作霖出閩通電」、『大公報』、1926年6月3日。

²²³河本大作「私が張作霖を殺した」『「文藝春秋」にみる昭和史』第1巻、文藝春秋、1988年。

関係に結ばれた私党の集合である。ことにこうした集合の常として、その巨頭さえ斃れれば、彼らはただちに四散し、再び第二の張作霖たるまでは、手も足も出ないような存在である。匪賊の巨頭と何ら変ることがない。巨頭を斃す。これ以外に満州問題解決の鍵はないと観じた。一個の張作霖を抹殺すれば足るのである。

村岡將軍（村岡長太郎関東軍司令官）も、ついにここに到着した。では、張作霖を抹殺するには、何も在満の我が兵力をもってする必要はない。これを謀略によって行えば、さほど困難なことでもない。当の張作霖は、まだ北支でウロウロして、逃げ支度をしている。我が北支派遣軍の手で、これを簡単に抹殺せしむれば足る一と考えられた。

北京には建川美次少将が大使館付武官としておった。竹下参謀からやがて、暗号電報が達した。張作霖がいよいよ関外へ逃れて、奉天へ帰るというのであった。その乗車の予定を知らせて来たのである。

満鉄線と、京奉線とがクロスしている地点、煌古屯、ここなれば満鉄線が下を通り、京奉線はその上を通過しているから、日本人が少々ウロついて目立たない。ここに限ると結論を得た。

万一この爆破計画が、失敗に終わった場合は、ただちに第二段の手筈として、列車を脱線転覆せしめるという計画をめぐらせた。そして時を移さずその混乱に乗じて、抜刀隊を踏み込ませて、斬り込む。万端周到な用意は出来た。

来た。何も知らぬ張作霖一行の乗った列車はクロス点にさしかかった。轟然たる爆音とともに、黒煙は二百米も空へ舞い上った。張作霖の骨も、この空に舞い上ったかと思えたが、この凄まじい黒煙と爆音には我ながら驚き、ヒヤヒヤした。薬が利きすぎるとはまったくこのことだ」²²⁴。

殺害可能地点を模索したが、奉天軍の監視が厳しく、結果として関東軍の監視が、比較的自由に行える地点として煌古屯が選ばれた。周到な準備であった。河本大作が張作霖殺害を立案したといわれ、その首謀者と見なされるが、もともと関東軍の最高幹部である村岡長太郎司令官が張作霖殺害の必要性を認め、その意思を実行に結びつけたのが河本大作大佐であった。その故に、張作霖爆殺事件は河本大作の個人の行動ではなかった。関東軍の上層部が計画したことは明らかである。

張作霖が爆殺された時、奉天で留守番役を任されていたのが奉天省長劉尚清と奉天督軍署参謀長臧式毅であった。この二人は突然の事態にもかかわらず、冷静に対処した。まず、密電報で張作霖が死んだことは張学良に伝えたものの、二人は東北の軍政事情が混乱することを恐れ、北京から張学良が戻るまで、張作霖が死んだことを発表しないと決定した。

そのため、混乱を避け、時勢を安定させるために、各地方の知事に次のような密電報を發した。

「知事へ：主座（張作霖）は北京を離れて、奉天に戻った。途中、皇姑屯の南満鉄橋を通過した時に爆破事件が発生した。数人が負傷したが、主座（張作霖）もまた身体に軽い傷を負ったものの、意識は良く、無事であった。関内の軍情についていえば、各路の軍隊は停戦通電を遵守し、それに従って完全に

²²⁴河本大作「私が張作霖を殺した」『「文藝春秋」にみる昭和史』第1巻、前掲、48-50頁。

適当な地点に転移した。奉天は依然として、平常通り静かである。最近、外部の新聞には様々な流言飛語が飛び交っているが、人の耳目を惑わすことであった。各地方の知事は地方の商民に諭して、デマを輕輕しく信じて騒ぐことがないように迅速に伝えなければならない」²²⁵。

「本日、上將軍公署からの命令を受けて、黒龍省の省長呉俊昇は病気のために、奉天で休養する必要がある。呉俊昇のすべての職務は呉泰来が代わりに担うことを決定した」²²⁶と、通達された。実は、呉俊昇は張作霖と同時に爆殺されたにも拘わらず、その死は伏せられていた。急遽、呉泰来が呉俊昇の代わりに黒龍省の督辦に任命されたのである。

さらに奉天では即座に戒嚴令が敷かれた。斎恩銘が戒嚴司令に任命された。戒嚴令公布の名目上の理由は張作霖殺害に伴う混乱防止ではなかった。「奉天は省都であって外国人も多く住んでおり、彼らを保護しなければならない」²²⁷という理由を掲げている。あくまで張作霖死去に伴う混乱を避けるため、張作霖の死を伏せて、新たな指導者となる張学良の奉天帰還を待ったのである。

北京にいた張学良は、父親の張作霖が死んだことを一週間ほど知らなかった、という。負傷しただけであると聞かされていたにすぎなかった。このため、張学良は北京から奉天軍が結集している河北省の灤州に行き、肅々と軍隊を奉天に撤退させる任務を遂行した。その任務が完了した時に、張作霖の死去を知らされた。その時の心情を次のように回顧している。

「私は父が死んだことを一週間ほど知りませんでした。部下が隠して教えてくれなかったのです。その時はただ、父が怪我をしたことを知っていただけでした。ですから私は北京から河北省の灤州に行き、軍隊を撤退させる任務を遂行しました。その任務を完了した時に、部下がやっと父が死んだことを教えてくれたのです。父の死を知った時、私はたいへん悲しみました。と同時に、大きな責任が全部私の肩にかかってきたことを感じました。その時私は体の調子が悪く、衰弱していたのです」²²⁸。

張学良は自分父親が関東軍に殺されたことを確信していた。「事件が関東軍の仕業だということは、誰でも知っていました。それは公然の秘密でした。当時南満州鉄道には日本の軍人の他に、一体誰が近づくことができたでしょうか。ですから私は日本の軍人は嫌なのです。この事件を仕組むために、日本は事前に南満州鉄道を一時止めたのです。他に誰が汽車を止められるでしょうか。もちろん日本に対してたいへん不愉快で、不満でした。家仇国難すべて私の身に降りかかってきました。中国にはこのような古い諺があります。『父の仇は、天の仇より憎し』と」²²⁹。

この時、張学良は亡くなった張作霖とは異なって、全国を統一せんとする蒋介石の国民党、国民政府に帰依することを選んだ。その可能性を、北京から奉天軍を追い払った蒋介石に伝えている。「学良、当に民意を以て依歸するところと為す。学良、愛郷、愛国人に後れるを甘んぜず、決して統一を妨害する意

²²⁵ 遼寧省档案馆『奉系軍閥档案彙編』第7卷（上）、前掲、208頁。

²²⁶ 同上、219頁。

²²⁷ 同上、225頁。

²²⁸ 白井勝美『張学良の昭和史最後の証言』前掲、74頁。

²²⁹ 同上、76頁。

無し」²³⁰。

父親の殺害を目の当たりにして、抬頭してきた革命勢力のもとでの全国統一で、日本軍に対抗する必要性を感じ取ったのであろう。「昨日の敵は、今日の友」というべき豹変であるが、真の敵は目前の北伐軍ではなく、父を殺害し、東北への浸透を強化する日本と関東軍にあることを痛感したのであろう。軍閥混戦を生き抜いた父という重石が取れて、まさに郭松齢が望んだような新しい道を模索し始めたのである。これが張作霖の爆殺事件が促した東北易幟への契機であった。

張作霖が爆殺された6月4日、この日は張学良27歳の旧暦誕生日であった。その後、父の死を知らされた後も張学良は冷静に対処した。張学良の命令によって、北京を防衛する長辛店、盧溝橋一線に駐在していた三、四軍団は河北省の灤河方向に撤退した。そして、張学良は現地の指揮権を楊宇霆に渡し、秘密裡に奉天へ戻った。当時、張学良の衛隊營長であった崔成義は次のように回想している。

「出発する前に、張学良はわざと、灰色の兵卒軍服を着て、髪を短くした。兵士の中に座っていた。張学良の近衛大隊の隊長崔成義と副官譚海が張学良を護っていた。列車が給水のために山海関に停車すると、日本関東軍の三人の憲兵が列車を叩いて、この列車の最高指揮官は誰と聞いた。兵士たちは崔營長と答えた。憲兵は崔に列車が奉天へ何しに行くかと聞いた。崔は奉天に戻ったら、他の任務があると答えた。また、張学良が列車の中にいるかと聞いたが、崔はいないと答えた。列車は綏中、錦州、溝帮子などで停車したが、その時も各駅の日本憲兵が同じ質問を聞いた。状況を見れば、彼らは張学良が奉天に戻ることを知っていた」²³¹。

これは、張作霖殺害だけでなく、張学良が奉天へ戻ることを阻止しようとする関東軍が狙っていたことを物語るのではなかろうか。

張学良自身も次のように口述している。

「山海関を過ぎると、日本兵で一杯だということは分かっていました。日本兵に見つかれば殺されるかもしれないと思いました。そこで私は炊事兵に変装して汽車に乗り奉天に戻りました。誰も私だと気付きませんでした。奉天に帰って張帥府に私が姿を現してした。こうして私が戻った時には父は亡くなっていました。しかし私は父の字をそっくりまねて書くことができましたし、父の印鑑も残っていましたので、父の名で次々に命令を下しました。そして黒竜江や奉天の懸案事項がすべて解決してから、父の死を発表したのです」²³²。

²³⁰ 「決不妨害統一通電」（1928年7月1日）、畢万聞『張学良文集』（上）、新華出版社、1992年、98頁。

²³¹ 方正『張学良和東北軍（1901—1936）』中国文史出版社、1986年、84頁。

²³² 白井勝美『張学良の昭和史最後の証言』前掲、76頁。

第二節 東北易幟

さて、東北易幟をどのように見なすべきか。先行研究の項目で指摘したように相対立する二つの見方があった。一つは、東北易幟以後も、張学良は親日派から親英米派に変わって蒋介石と提携したものの、張学良は依然として軍閥であり続けたという観点である。実は東北易幟以後、張学良の合流で国民党の実力が増大し、共産党にとってそれは脅威であったからだ²³³。この説に賛成する研究論文は少なくない²³⁴。

もう一つの説は、東北易幟を通じて張学良が愛国者になったとするものである²³⁵。

問題は、張学良の愛国思想、愛国主義をどのように理解するかであった。これについても、様々な見解があった。一つは張学良の東北易幟は、彼の抗日思想に基づいて決断されたとするものである²³⁶。もう一つは張学良の父親張作霖を殺害された日本への仇討、復讐から国民党と合流を決めただけでなく、侵略者と戦うためには、内戦に反対して、国民を苦しい生活から救い出す必要があり、そのためには何よりも国家統一で国力を強化することが重要である。すでに東北易幟の前から、張学良は国家統一することを考えていたとする説がある²³⁷。

東北易幟と張学良の国家統一との関連についての論文も少なくない²³⁸。また、張学良は日本からの脅威と勧誘を拒否したとする見解もある²³⁹。そこではおおむね張学良の東北易幟は高く評価された。しかし、傅虹霖（アメリカ籍中国人）によれば、評価は厳しく、易幟以後も東北の主権は依然として独裁者張学良の手に握られていた、という。この説に賛成する参考文献は多い²⁴⁰。

²³³ 1928年12月29日『東北易幟通電』、1929年1月10日『関与軍政党务問題的談話』など原資料があった畢万聞『張学良文集』（上）前掲、35頁と42頁。

²³⁴ 常城「略論張学良將軍」、『東北師大学報』、第6期、1986年；広玉、倪廉潔「張学良“東北易幟”辯析」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年、104頁。

錢進「張学良与東北易幟新釈」、『民国档案』、第4期、2000年。

²³⁵ 「東北“易幟”探析」、『江海学刊』、第1期、1986年；韓信夫「二次北伐与東北易幟」（下）、『東北地方歴史研究』、第2期、1990年；張魁堂『張学良伝』東北出版社、1991年、31～32頁；陸錦華「論東北易幟」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年、753頁；周毅「東北易幟—中国平和統一的創挙」、『東北易幟暨東北新建設國際學術検討会論集』、15頁；畢万聞「張学良、蒋介石和東北易幟」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年、143頁。

²³⁶ 王維遠「簡論張学良抗日思想的形成」、『東北地方史研究』、第4期、1991年。

²³⁷ 李仲明、劉麗「試論張学良東北易幟的思想基礎」、相從智『中外学者論張学良楊虎城与閻錫山』人民出版社、1995年、45頁。

²³⁸ 劉鳴九「我所知道的常楊事件」、『遼寧文史資料』第15輯、遼寧人民出版社、1986年。

²³⁹ 1928年12月29日「東北易幟通電」、畢万聞『張学良文集』（上）新華出版社、1992年35頁。

²⁴⁰ 荆有岩『張学良執政時期東北、華北財政狀況』遼寧省文史研究館与遼寧省遼寧省人民政府参事室（文史資料）、1982年；傅虹霖（米）、（王海晨、胥波）訳『張学良的政治生涯—一位民族英雄的悲劇』遼寧大学出版社、1988年；張梅玲「張学良从東北易幟到西安事變的思想轉變」『遼寧大学学報』、第5期、1988年。；郭正秋「東北地域国民党組織的

では、東北易幟について、どのように理解すべきか。私の見解は次の通りである。

郭松齢との関係からも明らかなように、張作霖が殺される以前から、すでに張学良は軍閥同士が争う内戦を止めて、国家統一の必要性を痛感していた。張作霖爆殺事件が張学良の考え方を進める動力になった。しかしながら、軍事面においても、また経済面においても、国民政府を凌駕する実力がないと自覚していた。だから張学良は国民政府の力を借りて自分の東北政権を固める以外に選択の余地はなかった。

1921年秋、張学良は日本に訪問した時、日本の強大な軍事力を目のあたりにした。張学良は東北軍だけの軍事力で、日本軍と敵対することできないと理解していた²⁴¹。しかも、自分の父親である張作霖は日本の関東軍に殺された。父親の仇を討つためにも、抬頭してきた蒋介石と手を結ぶしか選択肢はなかったのである。これが東北易幟の現実的側面であった。

張学良の東北易幟を、単純に愛国主義という綺麗ごとな言葉で語ることはできない。彼は、「東北易幟」通電から明らかなように、父親と同じく、また蒋介石と同じく、反共同盟の側面は濃厚であった。軍閥内戦の中止を強調しながら、東北易幟によって蒋介石と同盟を結んだことで、後に起こる国民党内部の反蔣戦争では、独裁傾向を強める蒋介石側について、積極的に国民党内戦へ干渉していった。

張作霖の殺害から2週間後の1928年6月18日、奉天で新しい指導態勢を決定する最高政軍会議が開催された。会議では全員一致で張学良を奉天軍務督辦に推薦した²⁴²。張作霖が亡くなったことはまだ発表されていないために、張学良は一応「代理督辦」という名義で新しい指導者として公衆の前に登場した。

6月20日、張学良は「就任奉天軍務督辦通電」²⁴³を発表し、自らの施政方針を明らかにした。

「一、これからは、大元帥（張作霖）が出された停戦の通電に従って、一切の軍事行動を停止する。戦争から解放されて休息し、民の安寧をはかることを旨とする。侵略されて生存の危機に直面する時以外、決して軽率には戦争をしないという意思を貫徹する。

二、これからは、友国とは誠意を尽くす態度で接し、仲を引き裂くという陰謀を取り除き、共存共栄の目的に到達することを祈る。

三、これからは、精兵主義を取って、軍縮に努める。一面、兵農政策を励行する。即ち、過剰に膨れた軍隊は農業開墾に振り向ける。地の利を開発して、国のために、国境を固める。生産力を伸ばして、そうすれば自ら軍費も日に日に縮小される。

四、これからは、開源節流主義（収入を増やし支出を節約すること）を励行する。事実に基づいて真実を求める。過酷で雑多な税金をすべて取り除き、民生に利する。実業を提唱する。出産を奨励する。その他、教育を普及させる。

建立与蔣張關係『史学月刊』、第3期、2000年。

²⁴¹ 竇応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』前掲、50頁。

²⁴² 張友坤 錢進『張学良年譜』（上）前掲、282頁。

²⁴³ 「就任奉天軍務督辦通電」（1928年6月20日）、畢万聞編『張学良文集』（上）前掲、94頁。

司法を整備する。

五、これからは、すべての民意に従って、順を追って一步一步進める。その一切の規則と制度は民意を聴取して、公儀で決定する」。

張学良の通電をまとめて言えば、関内に攻め込んで行った戦争をやめて、膨れ上がった軍隊を縮小し、余った兵卒を農業開発に振り向け、東北地方の地域開発の民需に応える。東北三省以外の地域とは、繰り返された戦争を止めて仲良くし、日本との外交関係も友好的に対処することによって東北を戦乱から回避し、東北建設に専念する、ということである。山海関以北、すなわち万里長城以北に撤退し、東北三省だけに専念する限定された地域主義であった。天下は蒋介石らの国民政府に任せ、自らは東北三省の経営に専念することとした。

張学良は奉天の政権を握った以後、やっと6月21日正式に張作霖が亡くなったことを発表した。では、権力を集中した万全なる張学良体制が確立したのであろうか。そうではない。

同日、奉天で東三省緊急臨時大会が開かれたが、張作霖の後を継いで最高ポストの東三省保安総司令に推薦されたのは張学良ではなく、張作相であった。彼には吉林省保安司令をも兼任させるというものであった。張学良は奉天省保安司令に推薦されたにすぎなかった。黒龍江省保安司令に推薦されたのは万福麟であった。

ではなぜ、張学良を差し置いて、総大将として張作相が推薦されたのであろうか。理由は次のようなものであったと考えられる。

張作相は張作霖の下で、序列第二位にあった大幹部であった。張作相は緑林の出身であったこともあって、馬賊時代から張作霖とは刎頸の友だった。奉天軍閥の中では一番信頼が高かった。また、張作相は奉天軍閥の中では反日派であり、民族的節操が高かった。

ところが、張作相は推挙された東三省保安総司令の就任を固辞した。張作相は、張作霖遺言の意思を尊重し、後継者は自分ではなく張学良にあるとして、固辞したのである。張作霖が残した「遺囑」は、長子・張学良を後継者として指定するものであったからだ。

「今後、東北三省の重責は学良に任す。汝よく政治を処理し、有能の士を招聘して、内政を改革して、庶民を落ち着いて生活させ、父老を安心させるように望む。一方で和平に努力し、戦禍をなくして国家統一を促成せよ。私の停戦の通電に背かないように」²⁴⁴。

この張作霖「遺囑」を遵守する忠誠心を発揮し、張作相は張学良を推薦したのである。

張作霖への忠誠心だけでなく、張作相は張学良への期待が大きかったからであろう。張学良は若いながら、学力、学識、才能など多方面で自分以上の素質を持っていると理解していた。張作相は東北三省が張学良の下で、最も富強になると確信していた。若くても、張学良が政治面と軍事面において、十分な経験を持っていると理解した。すなわち重任をひきうける能力と条件を持っていると確信していた。張学良は東北三省の政権を握ると、忠実に張作霖の遺書に従った。これも張作霖の片腕であった張作相の気質に合致していた²⁴⁵。

²⁴⁴張作霖「遺囑」『張大元帥哀挽録』、第1編、遺囑、徐徹 徐悦『張作霖』前掲、383頁。

²⁴⁵「輔帥生平—張作霖的老佐臣張作相」、『吉林市文史資料』第7輯、政協吉林市文史資料

1928年7月2日に開かれた東北三省の連席会議では、改めて全員一致で、張作相に代わって張学良を東北三省保安司令に推薦した。翌日、就任の宣言をした。こうして7月19日、東三省保安委員会が成立された。

張学良は東三省保安委員会主席、保安総司令に任命された。これより、張学良は東北三省の政権を握ったのである。張作相の応援がなければ、張学良はこのように容易に東北政権を握ることはできなかつたであろう²⁴⁶。

この時、弱冠28歳の張学良であったが、若くして父親張作霖の地盤、事業を相続した。東北三省全域の政権を握ることになった。「貴公子」と呼ばれるような若き太子であったが、中国の政治舞台において、あつという間に重要な立場にある人物となった。中国の命運を握るキーパーソンへと成長するのであった。9年後、中国の歴史を変えた「西安事変」を発動し、東北の地方軍閥から、「一致抗日」の民族英雄となったのである。

そうはいっても東北三省と張学良には、直面している多くの問題があった。張学良は東北三省を取り巻く外部との諸問題の処理で良い成果をあげることができれば、自然と内部の安定を維持することとなり、いわば外部との関係構築が最も重要であった。そのなかでも、南京国民政府との関係を適切に処理することは一刻も猶予が許されなかつた。さらに外圧としては、いうまでもなく、張学良は日本の脅威に対して、警戒心を高める必要があると苦慮していた。華北、華中の支配を諦めて東北三省に閉じ籠るとしても、政治、軍事、経済、外交などの多方面の課題を片づけなくてはならない重圧が張学良にはのしかかっていた。

政治と軍事の面において、張学良は張作霖の意思を尊重する形で、南京国民政府に戦争をやめて、平和統一を望むという誠意を示そうとし、その証として山海関内に留まっている奉天軍に対して、関外に戻るよう命令した²⁴⁷。

関内に留まっていた三、四方面軍は、6月29日からまず昌黎に集中して、関外に撤退する。張作相の吉林省部隊は7月2日まで関外に撤退する、という命令であった。こうして7月16日まで奉天軍は殆ど、奉天方面の関外に撤退した。張作相が率いる第五方面軍もまた山海関より引き揚げることになった。命令通り6月29日夜より順次撤退を開始した。張作相は歩兵一師団、騎兵一旅団と共に錦州方面に撤退した。7月中旬までに全部隊がもともと駐屯していた地に引き揚げた。灤河の線にある第三、四方面軍約7万は山海関に、直魯軍(四、五万)は灤州昌黎の間に移駐する事となり、北戴河の線を第二次目標とする退却命令は7月5日発せられた。

1928年7月1日、張学良は蒋介石に宛てて「決不妨害統一通電(決して統一を妨害しない)」を送った。ここには、すでに張学良の「東北易幟」の意思を汲み取ることができる。

それは次のような内容であった。当時の日本側資料の日本語訳で示せば、次の通りである。

「曩に兵を灤河に退けたるは此れ和平貫徹の為に外ならず。更に一步を進めて全軍の撤退を令し、以て真意を明らかにせり。国是に至つては学良將に民意

研究委員会、1988年、76頁。

²⁴⁶『張学良与東北易幟』、遼寧人民出版社、2008年、51頁。

²⁴⁷張友坤 錢進『張学良年譜』(上) 前掲、285頁。

を以て生きんとす。冀くば愛国の諸公国家の大局を以て前提とし、同時に軍事行動を収め一面最捷方法を以て国民会議を開き眼前一切の重要問題を解決せん事を。学良郷土国家を愛する事人後に落ちらず、決して、統一を阻害する意志なし。因つて近く代表を派遣、協議せしむ」²⁴⁸。

中国語を忠実に訳せば次の通りである。「和平を貫徹するために、更に一步進んで意思表示を行い、前方の弊軍に処理と撤兵を命じて真意を明らかにした。国難の所在については、学良は民意を拠りどころにする。当局の諸公に、国家の大計を前提にし、それと同時に軍事を縮小し、一方では、最も簡単かつ有効な方法で早急に国民会議を開催し、目前の一切の重要問題を解決するよう希望する。学良は郷土を愛し国を愛することでは、人後に落ちることはなく、絶対に統一を妨害する気はない。代表を派遣してただちにお目通りさせる」²⁴⁹。

全国統一の道を歩む国民政府との軍事対峙をやめて、平和な手段で共に国家統一を実現しようというものである。こうした意を蒋介石の国民政府に伝えたのである。西村成雄はこれをもって「張学良はすでに国民政府との合流を決意していた」²⁵⁰という。

北伐戦争の勝利によって、天下の帰趨は軍閥から国民党、蒋介石が主導する国民政府に移っていた。張作霖が殺害された以後、蒋介石は東北の問題をどのように解決するかという難題に直面していた。東北三省は張学良が支配し、国民革命軍は一兵とも入ることはできないままであった。南京に統一政府としての国民政府を樹立したが、東北三省にはいかなる命令ひとつ届かなかった。この東北をどのようにして国民政府のもとに統一するか。選択肢として二つの対策があった。

一つは、東北（奉天）に北伐軍をさらに派遣して、武力統一を実現する方法であった。しかし、武力で統一する場合、二つの問題が出てきた。一、張学良の奉天軍はまだ強力で多くの兵力を温存していた。しかも、東北各軍は作戦上、合理的な軍事配備がなされていた。それに挑戦して北伐軍を派遣することには困難があった。

二つ目は、内戦が東北地方に拡散すれば、日本は東北に築いてきた既存権益を守るために、必ず武力干渉をすると考えられた。だから、二つの障壁を乗り越えて武力で統一することは選択できなかった。

そうなれば、残された選択肢は平和的な協議による統一であった。蒋介石は張作霖が殺された困難を旨く利用して、張学良を説得できると考えた。蒋介石は平和談判を通して、張学良を南京政府に服従させることが最良の策と考えたのである。1928年6月、蒋介石は孔繁蔚（当時の国民政府代表、軍事委員会の委員）の口を借りて、軍事手段を使わなくて、政治手段を通して、東北の問題を解決するという意を示した²⁵¹。

1928年7月1日に発した蒋介石宛の通電を受けて、蒋介石は平和的手段で

²⁴⁸ 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B02130770900、『国際時報』第3巻第13号～第24号(情-19)(外務省外交史料館)」42頁。

²⁴⁹ 張学良「決不妨害統一通電」『張学良文集』(上)前掲、98頁。日本語訳は、丁秋潔、宋平編(鈴木博訳)『蒋介石書簡集1912-1949』中、みすず書房、2000年、460頁から引用した。

²⁵⁰ 西村成雄『張学良』岩波書店、前掲、46頁。

²⁵¹ 『張学良与東北易幟』前掲、35頁。

統一することを決定した。7月5日、蒋介石の代表李烈鈞は『新聞報』で東北問題の対処原則を発表した。「政治手段で東北三省人民の福利を図る」²⁵²。

こうして、実際に張学良の「東北易幟」作業が始まった。突然の「易幟」ではなかった。

1928年6月4日から8月10日まで。張学良は南北妥協交渉について、非常に楽観視していた。張学良は、妥協が容易だと感じていた。

7月に入ると、張学良は和統一の交渉を続けるため、王樹翰、邢士廉、米春霖、徐祖貽などの四人を北京へ派遣した。7月10日、張学良の代表である王樹翰が北京で蒋介石に会った。蒋介石は東北三省を易幟して、三民主義を実行することを求めた。他のことはまた相談すると提案した。この提案について、王樹翰は東北三省が国民政府に服従して、易幟することを了承した²⁵³。

しかし、日本側は南北妥協することに激しく反対した。

この張学良側と蒋介石側で繰り広げられた易幟交渉について、東北に膨大な権益を有する日本側はどのように対応したのか。国民政府の北伐政策がそのまま東北地域に発展すれば、日本の利益を損ねるとよく分かっていた日本は、張学良を利用して、南北統一を阻止するつもりだった。帝国主義反対のナショナリズムを掲げる国民党の全国統一は、日本にとって脅威であった。日本の外交官と奉天の政軍要人は順番で張学良を説得して、軍事脅威と政治圧力を与えた。日本は張学良に圧力をかけて、武力に訴えても南北妥協を阻止することに躍起であった。

7月16日、奉天総領事林久治郎は張学良に説得を試みたが、成功しなかった。直に村岡関東軍司令官を訪ねて、武力手段で南北統一を阻止しようと提案した。林久治郎の遺稿によれば、次のような協議であった。

「直に村岡司令官を訪い、事此所に及びたる以上、口頭を以て之を阻止するは殆ど不可能である。政府にして武力阻止を決心し得るならば好し、然らずんば寧ろ関らざるにしかず、と思考する旨を電稟方商議し、司令官も同意せるを以て、直ちに此旨政府に電報したが、十八日朝回訓あり、飽く迄東三省政府の南方合作を阻止せよとの主旨にて、聴かれざる場合の措置に関しては何等云うところがない。此回訓を得て大いに喜べるは軍部だ。自分は本訓令執行後の成功に懸念し、心中躊躇する所ありたれ共大勢動かし難きを以て、取敢ず同日午後学良を往訪し、帝国政府の意向を伝え、青天白日旗掲揚の然るべからざるの旨を懇切に勧告し、若し妥協せば、日支関係を阻止するの甚しきものとなると阻止に努力したるが、学良は遂に首肯せず、尚考うべしと答えた」²⁵⁴。

日本政府、関東軍司令官及び当時の奉天総領事林久治郎は意見が一致して、武力脅威という手段を使用して、南北妥協を阻止しようと考えていたということになる。

1928年7月18日、田中義一内閣は張学良に東北三省易幟を断念するよう警告を発した。

「現状ニ於テ東三省トシテハ、南方ニタイシ迎合的態度ヲ執ラス。保境安民ヲ主トシ中立ヲ守リ天下ノ形勢ヲ注視スルコソ最モ策ノ得タルモノナリトス

²⁵² 同上。

²⁵³ 『張学良与東北易幟』、前掲、56頁

²⁵⁴ 林久治郎『満州と奉天総領事—林久治郎遺稿』原書房、1978年、32頁。

ル本大臣ノ見解ニツイテハ、張学良ニ於テモ同意見ナリシカ如ク、本大臣ニ於テモ彼ノ態度ニ満足シ居リタル」²⁵⁵。

これを受けて7月20日、奉天総領事林久治郎は東北易幟をしないようにと張学良に説得した旨を、高圧的で知られる田中義一（外務大臣兼任）に報告している。

「本官ハ学良ノ参考迄ニ、貴訓令ニ従ヒ、（一）東三省トシテハ当分国民政府トノ妥協ヲ見合セ、形勢ヲ觀望スルコト。（二）国民政府ノ主義ニ対シ、外ニトリテ内ニトラストノ主義ハ断シテ不可能ナルコトヲ更ニ繰返シ、必要ノ場合ニハ当方ヨリ充分ノ援助ヲ与フ」²⁵⁶。

翌日、林奉天総領事に代わって関東軍司令官村岡長太郎が対南方妥協問題に関する張学良との会談を行った。その内容は次のようなものであった。

「貴説一応諒トスルモ、南方ハ未タ全支那ヲ統一セルニ非ス。前途ノ變異測リ難ク、且南方ノ三民主義ハ共產主義ト近似シ、現ニ京津地方ニ於ケル運動ハ、共產主義的色彩ヲ帯ヒ、該地方民ヲ恐怖戦慄セシメアルニ見ルモ明ナリ。殊ニ国民党ハ対外的不平等条約ヲ破壊スルヲ以テ標語トセルモノナルカ。故ニ日本カ之ヲ選ハサルハ勿論ナリ、而カモ貴下今言フ様ニ妥協ヲ行ハハ、妥協直後ニ於テ一時小康ヲ得ンモ、爾後南方ノ容喙使嗾ヲ受ケ、内部ヲ攪乱セラレ、遂ニ其地位ヲ失ヘキヲ憂フ。従テ当分保境安民主義ヲ持シ、南方ノ統一完成ヲ待チテ、交渉スルモ、遅シトセス」²⁵⁷。

国民党は共產主義的色彩が濃厚で、不平等条約の破棄を叫んでおり、手を組む相手ではないと牽制している。この日本側の執拗な圧力に屈して、張学良は一旦、腰が引けた。7月24日、張学良は蒋介石に電報を打って、日本側の脅威を受けたために、東北易幟を延期すると返事した。易幟を迫る蒋介石と、武力行使をちらつかせる日本との板挟みにあって、張学良は苦境にあった。

「現在、実に二つの困惑がある。即ち、易幟をしなければ兄や全国に顔向けできず、易幟をすれば直ちに禍乱が生じ、三省の父老に顔向けできないのである。数日前、我が方が勧告を聴き容れなければ直ちに武力を用いるという田中の意向を探知したが、空言の恫喝でないことは確実である。……田中の地位は動揺しつつあるが、我々が、現在、口実を与えれば、彼は益々対外問題を口実に政治的に延命を図ることができる。それ故、大局のためには、現在、焦る必要はない」²⁵⁸。

1928年8月3日、林久治郎は再び張学良を説得した。

「本官ハ今従来ノ決心ヲ翻シテ南方ニ同スル如キハ、日本ニ喧嘩ヲ仕掛クルニ同シク、日本ハ飽迄保境安民ノ貴総司令ヲ援クル積ナルヲ以テ、如何ナル圧

²⁵⁵ 「昭和三年7月18日 田中外務大臣より在奉天林総領事宛（電報）南方に対し迎合的態度を執らず保境安民を主として中立を守るよう張学良に警告方訓令」『日本外交文書』昭和期I 第一部第二卷、外務省、1990年、212頁。

²⁵⁶ 「昭和三年7月20日 在奉天林総領事より田中外務大臣宛（電報）国民政府との妥協による易幟の不可なる旨張学良に対する説得について」同上、217頁。

²⁵⁷ 「昭和三年7月20日 在奉天林総領事より田中外務大臣宛（電報）対南方妥協問題に関する張学良と村岡関東軍司令官の会談について」同上、220頁。

²⁵⁸ 「致蒋介石電」1928年7月28日、『張学良文集』（上）、前掲、103頁。日本語訳は、丁秋潔、宋平編（鈴木博訳）『蒋介石書簡集1912-1949』中、前掲、468～469頁。同書は、7月24日の書簡という。

迫モ之ヲ排除シテ進ムヘク」²⁵⁹。

東北易幟で日本に喧嘩を仕掛けるのであれば、それに武力で対抗する。しなければ、日本は張学良を援助する。さあ、どちらを選択するのか。こうした恫喝であった。

日本側の恫喝について、張学良はどのように受け取ったのか。蒋介石に対し、次のように伝えている。

「林権助が奉天にやって来て、日本の忠告に従って南方への妥協を中止するよう希望し、さもなければ、日本は断固たる態度を取って自由に行動することを表明した。それとともに、林総領事はいたるところで、中国の内政に干渉する嫌いのある言葉を口にするのを避けなかった」²⁶⁰。

林権助は東京から派遣された外交官の重鎮であり、奉天総領事の林久治郎との両林は、張学良に対し、執拗に易幟への干渉を繰り返した。恫喝の内容は、一言でいえば、次の通りであったという。

「東三省は日本の忠告に従い、形勢を観望する態度を取り、南方への妥協を中止すべきである。さもなければ、田中は決意をしており、断固たる態度を取って自由に行動する」²⁶¹。

本来、張学良は南方の国民政府と妥協して、易幟することと決定していた。しかし、日本からの圧力によって、延期しなければならなかった。

そして、張学良は蒋介石に電報して、日本の圧力に抵抗する力はなく、易幟は延期することを説明した。しかし日本の脅威を阻止する対策を検討している。

「対処すべき策は三種しかない。即ち、一に強硬、二に軟化、三に円滑（如才なく）である。強硬に出れば武力を使う必要があるが、東三省の力では不足するばかりか、全国の協力も見込みがない。軟化すれば、東三省は保護国になり、朝鮮の二の舞を演ずることになるので、敢えて軟化することはない。それ故、暫く円滑の方法を用いて引き延し、一方で国際関係の利用に着手してこそ、その野心を挫折させるのに効果がある」²⁶²。

東北易幟は三か月延期したために、張学良による内政、外交の処理に時間を与えた。易幟を断行する前に、張学良には多くのやるべきことがあった。先ず、軍事の面において、張学良は蒋介石と手を結んで張作霖の部下であった直魯連軍の張宗昌を打倒した。

1928年6月、張作霖の命令によって、奉天軍は全軍が関内に撤退するはずであった。ところが張宗昌は張作霖の命令に従わず、そのまま天津に駐在した。しかし、国民革命軍に敵対できなかったために、止むを得ず天津を離れた。それでも張宗昌は残っていた軍隊を率いて、関内の楽州に駐屯した。

蒋介石は張宗昌を打倒する必要があったが、直接には手が出せなかった。二つの理由があった。一つには、恭順を示した張学良が張宗昌を自己の軍隊へ改編するつもりだったからである。二つ目は、蒋介石の軍隊が張宗昌打倒に乗り

²⁵⁹ 「昭和三年8月3日 在奉天総領事より幣原外務大臣宛（電報）奉天白日旗掲揚に反対の旨張学良に申入れについて」『日本外交文書』昭和期I第一部第二巻、前掲、244頁。

²⁶⁰ 「致蒋介石電」1928年8月10日、『張学良文集』（上）、前掲、113頁。日本語訳は、丁秋潔、宋平編（鈴木博訳）『蒋介石書簡集1912-1949』中、前掲、473頁。

²⁶¹ 「致蒋介石電」1928年8月9日、『張学良文集』（上）、前掲、112頁。日本語訳は、丁秋潔、宋平編（鈴木博訳）『蒋介石書簡集1912-1949』中、前掲、473頁。

²⁶² 同上。

出すためには京奉天鉄道沿線と沿海線で作戦する必要があったが、それを日本が許さなかったからであった。

張学良は蒋介石の許可をもらって、張宗昌に指揮権を差し出すようにと命令した。もちろん張宗昌に拒否された。この対処について、張学良は次のように指示している

「張宗昌、褚玉璞が率いる直魯連軍は内部が複雑である。事態を收拾させるには時間が必要である。急いで、この二人を処理する予定であるが、万が一、失敗すれば、その時は、断固たる処置を取る」²⁶³。

武力行使も辞さない決意で、張学良は張宗昌を処理しようと考えていた。すでにこの時、張学良はいちいち蒋介石の了解を取りながら、張宗昌処理を進めていたのである。

栞州に駐屯していた張宗昌の部隊は、イギリスが利権を持つ開楽炭鉱から強制的に税金を徴収した。このことによって、張宗昌に対するイギリスの不满を引き起こした。イギリスは日本に圧力をかけて、張学良、あるいは蒋介石と張宗昌の関係には干渉させないようにした。

張宗昌は張学良の勧告を聞かなかった。日本からの圧力がなくなって、蒋介石の国民革命軍は張宗昌軍を包囲し、張宗昌は孤立した。9月、国民革命軍の追撃を受けて全軍覆滅となり、張宗昌は日本の保護を求めて大連へ逃げ込んだ。

これより、張学良は張宗昌軍の改編に失敗したものの、国民革命軍の手で事態の解決を見た。こうして軍事の面において、張学良は完全に国民政府に服従することとなった。

10月8日、国民党中央常委委員会会議は、蒋介石、張学良などの16人を国民政府委員に選出した。張学良が国民党、国民政府に易幟することを見越しての措置である。蒋介石が国民政府主席に選ばれた。蒋介石は張学良に国民委員ポストを発令し、このチャンスを利用して、正式の易幟を要請した。それに対し、張学良は蒋介石に次のように返電している。

「学良は才識が浅薄であるのに、破格に引き立てられ、諸賢とともに国事に協力することができ、已に心から幸せに感じていたが、公が主席になり、随従する側近を得たので、とりわけ私の密かな願いは満たされていた」²⁶⁴。

しかし、政治面において東北三省は国民政府に服従したが、すぐには易幟することはできなかった。微妙な心境を、蒋介石へ伝えている。

「東三省の易幟は早くから決意していたが、実に某方の圧迫によって障害が生ずるに至った。そのころ、私は三か月を期限とし、その時期になったら直ちに易幟を行うことを約束」²⁶⁵。

明らかに日本との調整に時間がかかったのであろう。東北易幟を三か月延長すると答えたのである。

それまで度重なる干渉を続けてきた日本側であったが、この時に至っては、もはや張学良の易幟合流を阻止することができないと観念していた。国民政府側外交担当の王正廷は、上海駐在日本公使に干渉の中止を申し入れた。

²⁶³ 「致何成濬電」(1928年8月18日)、畢万聞編『張学良文集』(上)前掲、114頁。

²⁶⁴ 「致蒋介石電」1928年10月9日、同上、129頁。日本語訳は、丁秋潔、宋平編(鈴木博訳)『蒋介石書簡集1912-1949』中、前掲、476頁。

²⁶⁵ 「致蒋介石電」1928年10月10日、同上、130頁。日本語訳は、丁秋潔、宋平編(鈴木博訳)『蒋介石書簡集1912-1949』中、前掲、476頁。

「日本政府ハ満州易幟問題ヲ干渉スルコトヲ止メラレテハ如何。支那民衆ノ誤解ヲ招クノミニテ、何等実益ナキコトナラスヤト」²⁶⁶。

日本は張学良に干渉すれば、張学良を支援する国民政府側とも紛争を起すこととなり、この段階では恫喝を実行するにはリスクが大きすぎた。

1928年10月10日の双十節、張学良は国民政府委員として、奉天省長署で中華民国建国祭を行った。翌日、張学良は奉天で閲兵式を行って、兵士一万人が参加した。国民党への帰順を公然とし、加えて日本に軍事力を誇示したことを意味した。

年も迫った12月1日から12月6日まで、蒋介石と奉天の代表王樹翰は三回に渡って、東北三省の内政、外交、交通などの問題をめぐって相談した。相談の結果、東北の内政問題には中央政府が介入しないということになった。事実上、東北三省の内政は中央政府から独立し、東北三省が抱える外交問題についてのみ、中央政府が責任を取るということが決定された²⁶⁷。

事実上、南京政府から独立した「張学良王国」の誕生であった。

12月5日、張学良は東北三省で国民党の党部を組織することを決定した。そして、志高い青年を選んで、南京に派遣し、勉強させることとした。これより、東北三省は国民党党務の面において、先行的に中央に接近した。さらに12月26日、国民党中央政治会議第169回会議によって、張学良は東北边防軍司令長官に任命された。張学良は東北三省及び熱河省政府委員に列せられ、正式に中央に認められた。熱河省を含めた東北四省の最高指導者として国民党に参加することとなったのである。

1928年12月29日、張学良は日本との関係を断ち切り、全国に通電して、「三民主義を守って、南京政府に服従する」と発表した。電文の内容は次の通りであった。

「現在、国民政府の諸公は共産党に反対して、党内を整頓している。この間、私の宗旨と同じであり、お互いに使者を派遣し合った。相互の思いは明らかになった。亡くなった大元帥の遺志を受け継いで、力を尽くして、統一を謀り、平和を堅持しなければならない。この日から、三民主義を遵守し、国民政府に服従して、掲げる旗を取り換えると宣布する」²⁶⁸。

張学良が東北易幟を宣言した以後、日本政府は、日本国の満州権益を侵さないようにと張学良に圧力を加えた。

「東三省ノ政治組織改変ノ為ニ、満蒙ニ於ケル我カ特殊ノ地位ハ毫モ影響ヲ受クル所ナシト信ス。若シ又今後此ノ新事態ノ下ニ於テ、万一帝国トノ条約約定ヲ無視、又ハ現ニ東三省当局ト進行中ノ交渉ヲ阻碍シ、又ハ東三省ノ治安紊レ我カ権益ニ影響ヲ及ホス虞アル場合ニハ、帝国政府トシテ断然権益擁護治安維持ノ為、必要ナル措置ヲ執ル」²⁶⁹。

²⁶⁶「昭和3年10月23日 在上海矢田総領事より幣原外務大臣宛（電報）易幟問題に干渉せざるようにとの王正廷の非公式申し入れについて」『日本外交文書』昭和期I第一部第二卷、前掲、274頁。

²⁶⁷張友坤、錢進『張学良年譜』（上）、前掲、325頁。

²⁶⁸「東北易幟通電」（1928年12月29日）、畢万聞編『張学良文集』（上）前掲、150頁。

²⁶⁹「昭和三年12月30日 田中外務大臣より在奉天林総領事宛（電報）南北妥協に際して東三省における権益擁護、治安維持に関する日本側の決意張学良へ申し入れ方訓令」『日本外交文書』昭和期I第一部第二卷、外務省、1990年、283頁。

日本政府は南北妥協を阻止できなかったが、満州における権益を守るためには、武力手段を使う用意があると張学良を脅し続けたのである。

正式の「東北易幟」の誕生である。

関東軍という日本の圧倒的支配権が強烈な東北三省で、日本軍の圧力を克服して、誕生した「張学良王国」は、日本が最も嫌う反帝ナショナリスト政党である国民党に合流したのである。

以上、張作霖の爆殺から、張学良の東北易幟までの過程を考察した。東北統治は、張作霖、張学良という親子二代に受け継がれたが、一方は国民党の北伐軍に正面から対峙した。当時、南北戦争といわれ、南軍であった国民革命軍は、軍閥打倒の革命軍であった。北軍の張作霖軍は、従来の軍閥軍の域を脱することができなかった。これに対し、息子の張学良は、敵対した国民党に合流するという、父親とはまったく正反対の対応であった。

張学良の新しい選択肢は、いわゆる「満州支配」をもくろむ日本の関東軍との関係を変えようとするものでもあった。日本が中国の東北三省を占めるという基本方針が、張学良によって打ち破られたからである。

こうした張学良がたどった政治生涯はまさに有為転変であったが、それは父親の下で始まった。張学良は奉系軍閥張作霖の長子として、若い時から軍事面の訓練を受けて、常に核心の問題に参加して、政治視野を広めた。軍における地位の確保には、自己努力だけでなく、「太子」としての有利な家庭背景があった。それだけではなく、頭脳明晰で、向上心もあった。郭松齡という師を得たことも、軍閥政治から脱しようとする彼の革新的意識を構築するのに大きな貢献をした。独断的ではなく、周辺にも耳を傾け、交際が上手だった。

以上の要素が加味されながら、張学良は奉系軍閥のなかで政治基礎を固めていった。張学良は東北の政権を掌握した以後、張作霖時代の東北三省保安総司令制度を踏襲し、従来の地盤を受け継いだ。万里長城以北、すなわち熱河を含めた東北四省の経営に専念し、保境安民と軍縮という政策を取った。その内向きな政策が、政権を固める重要措置となった。また父親を支えた緑林出身の張作相が中国の伝統的な「子承父業」（息子は父親の事業を相続する）思想に基づいて張学良を応援し、張学良は無事に東北の政権を握ることができた。

張学良は東北の政権を握った以後、政権を固めるために政治、軍事、経済面において、様々な革新的措置を行った。政治面での偉業は、何と云っても東北易幟であった。軍閥の野望を棄てて国民党、国民政府に合流することで、念願の国家統一を実現した。東北の独立的地位を確保したが、外交と国防問題については南京中央政府に権限を与えて、日本帝国主義が東北地方を中国から切り離し、中国を分裂させるもくろみを阻止することができた。満州事変で東北の地を失うまで、まさに張学良は熱き英雄であった。

張学良は東北易幟を選択、実行することで、東北の地方政府と中央の国民政府を結びつけた。張学良は東北边防総司令に就任して、東北の地方政権を固める目的を達した。最後には、東北内部統一の障害となっていた楊宇霆、常蔭槐を粛清して、政敵ライバルを殺害するという冷血な側面も見せた。張学良は東北の軍事と経済を整理したことで、その後の東北の発展の基礎を定めたといえる。

もともと、張作霖が殺される前においても、張学良は内戦を止めて、国家

統一することを真剣に検討していたという。張学良は、次のように回想している。

「私は中国の統一を主張していた。中国は内戦に打ちひしがれていたから、私は父親に（統一を）説得した」²⁷⁰。

「私は父に、『私たちが戦っているこの戦争に、どのような意味があるのですか？ なぜ私たちは、こんな戦いをしているのですか？』と詰め寄りました」²⁷¹。

この回想的な諫言が事実かどうかは、確かではない。しかし、軍閥間の争いである消耗的内戦を克服し、一致団結して新しい国家を建設し、帝国主義列強の侵略に対抗できる統一民族の力を発揮することは、師である郭松齡の教えでもあった。関東軍による張作霖爆殺事件は、張学良の考え方を一步前進させる推進力になった。この時、軍事面と経済面において、張学良は国民政府と張り合う実力がなかった。だから張学良も国民政府の力を借りて、自己の東北政権を固めようと目論んだ。

内戦を止めて、全国の力をまとめて、帝国主義と戦うためには、日本と手を結ぶことはできない。しかも、日本には父親張作霖殺害の仇があった。蒋介石もまた強引に軍事手段を通して東北を収める冒険を回避した。武力侵攻を進めれば、日本が満州における利益を守るために、武力干渉する可能性が高いからである。その故に、蒋介石は武力という手段を選ばなかった。そして、蒋介石も同じように張学良の力を借りて、自己の政権を固めようとした。このことについては、その後の中原大戦での両軍協力によって検証された。

こうした相互の政治的目論みが合致し、張学良と蒋介石とも平和的な手段を通して、東北易幟の問題を解決したのである。

²⁷⁰張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第1冊、前掲、62頁。

²⁷¹ NHK取材班、臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』前掲、48頁。

終章

第一節 東北の再建

張学良は東北を再建する前に内部を安定させる必要があった。それに向けて、血なまぐさい内部粛清である“楊、常事件”が断行された。

1929年1月10日午後、張学良は奉天の居城ともいべき大帥府で、張作霖側近の要職にあった楊宇霆、常蔭槐の二人を銃殺したのである。“楊・常事件”と言われている。

常蔭槐（1876－1929）は京奉鉄路局長、張作霖時期北京政府交通総長、黒龍江省の省長、黒龍江省政府の初代主席などの要職を務めた重鎮であった。明らかに、張学良独裁を固めるためのライバルの粛清であった。

1929年1月11日、張学良は「銃斃楊宇霆常蔭槐通電」で、その理由を次のように述べている。

「楊、常は結託して、政務を牛耳っていた。一切の政務を押さえて、すべてをつかさどっていた。民国13年以後、何度も戦禍が繰り広げられたが、いずれもこの二人の扇動と挑発によって、引き起こされてきたものである。先の大元帥が停戦を通電し、和平を提唱してから、使者が往来して、南北妥協を模索してきた。この二人だけが、傍観的な態度をとり、密かに阻止しようとしていた」²⁷²。

いかにも取って付けたような理由だが、張学良が楊宇霆、常蔭槐を殺した理由は二つがあった。一、張作霖死後における東北の政権争いで、張学良を排除しようと狙っていると危惧したこと。二、張学良が主導して進めた南北妥協を破壊し、張学良排斥の口実を企んでいると危惧したこと。以上の二つは、東北で権力を強化しようとする張学良にとって、許すことができなかった。

張学良は当時、楊宇霆を殺害するのが目的ではなく、常蔭槐殺害が目的であったと、次のように回想で語っている。

「楊宇霆の背後に常蔭槐が居た。この常蔭槐は楊宇霆の策士であった。楊宇霆はそんなに高い謀略がなかった。いつも常蔭槐が楊宇霆を扇動した。私は当時、常蔭槐を銃殺すると決定したが、楊宇霆は生かして、彼を殺したくなかった」²⁷³。

ところが張学良夫人が殺害を教唆し、楊宇霆も一緒に銃殺することを決定したという。

「彼女は言った。『あなた、なんとかしなければいけない。楊宇霆をどうやって、処理するの？』。私は彼を拘禁すると言った。彼女によれば、『あのような仲の良い先輩たち、張作相のような先輩たちは必ず、彼のために取り成すだろう。そうなれば、あなたは必ず、彼を釈放させることとなる。あなた、どうするの？』と言った。彼女はさらに言った。『日本人もやって来る。だからあなた、決断しなければいけない』」²⁷⁴。

²⁷² 「銃斃楊宇霆常蔭槐通電」（1929年1月11日）、畢万聞編『張学良文集』（上）前掲、156頁。

²⁷³ 張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第5冊、当代中国出版社、2014年、1353頁。

²⁷⁴ 同上、1353－1354頁。

真実であれば、恐ろしい夫人であるが、夫人への責任転嫁による自己弁護的色彩が濃厚である。楊宇霆は野心に満ちているといわれ、それが張学良にとって脅威であった。事件の体験者である奉天省警務処長高紀毅の回想によれば、楊宇霆を次のように語っている。張学良擁護の立場から楊宇霆を論じているから、正確であるかどうかは疑わしい。

「楊宇霆はお高くとまって、野心が大きいという人であった。ところが張作霖は彼を非常に信用していた。まさに腹心であった。自分の印鑑でさえ彼に渡したほどだ。東北の軍事と政治は、彼に任せていた。楊宇霆は諸葛亮孔明を気取っていて、傲慢で放縦な振る舞いであった」²⁷⁵。

張学良から見れば、父の権威を借りて楊宇霆は張学良を軽視していると映った。張学良は楊宇霆の傀儡になりたくなかったのであろう。これが楊宇霆を殺した理由の一つであった。張学良は次のように回想で語っている。

「私の父親の存命中は、彼は総参議であった。私の時代が来た時に、彼にポストを与えたくなかったが、彼は同じように総参議を務めたかった。黒幕の後ろで、指揮者になりたかったのだ。しかし、私は父親と違う。彼はまた、私を黒幕の裏から操ろうとしたかった。彼はこのように話した。『あなたは体が良くないから、何かあったら、私に相談してください』。彼らは、いつも私を子供扱いにし、私をバカにした」²⁷⁶。

張学良は全ての権力を握るためには、楊宇霆を殺さなければならなかった。この血に塗られた見せしめは効果をあげた。楊宇霆、常蔭槐を殺した以後、東北の軍、政界の中に張学良に反対できる人物は誰も居なくなった。即ち、張学良は張作霖を失った後に、新たな威信を打ち建てるためにも、楊宇霆と常蔭槐は邪魔者であった。

張学良研究の西村成雄も、同じような指摘をしている。

「この二人は半年来、易幟に反対する立場をとっていた。張学良と方本仁(南京国民政府から派遣された)を除く上記十二人(張作相などの東北政務委員会委員)は、事件の翌日、楊・常の死体を確認させられ、張学良の政治的決断への同調と、今後の東北政治空間における張学良の実権掌握と世襲的権威への服従を承認させられた。この事件によって『東北の政治的空気は一変し、張学良の政治的権威は空前に高まり、もはや掣肘を受けることなく、人心も統一され、人治の効果が十分に発揮された』とすらいわれた」²⁷⁷。

内部を安定させた以後、張学良は東北の再建を始めた。先ず、軍事面から再建に入った。

張学良が生まれた時の中国は、すでに列強の侵略を受けて分裂割拠の状況であった。各地に割拠する国内の軍閥は覇を争って混戦状態であった。統一国家とは程遠かった。国力が弱くて、国民の生活も非常に苦しい状態だった。その原因は、いうまでもなく統一の中核である中央政府が機能していなかったからであった。各地の軍閥は自分の勢力を拡充することだけを考えていた。何時果てるとも知れない軍閥間戦争によって、国家の経済力、軍事力は大きな損害を

²⁷⁵高紀毅「楊常事件的前因後果」、『遼寧文史資料』第25輯、遼寧人民出版社、1986年、78頁。

²⁷⁶張之丙、張之宇『張学良口述歴史—訪談実録』第5冊、前掲、1353頁。

²⁷⁷西村成雄『張学良—一日中覇権と「満州」』前掲、63頁。

被っていた。列強はこの軍閥混戦につけ込んで、中国から多くの利益を奪っていた。

奉天軍閥張作霖の長子として育った張学良は、この中国の悲しい現状に心を痛めていた。だから国家を統一できなければ、列強と対抗できないと痛感するようになり、その対応の一つが東北易幟であった。父親の張作霖は、奉天軍閥にとどまらず、自ら北京に進出して天下統一を目指していたが、国民党の北伐軍に敗北し、その夢は挫折した。その教訓から、張学良は東北建設に専念し、東北易幟を通じて、国民党による中国統一の悲願を実現させようとした。

張作霖に代わって東北の政権、軍権を引き継いだ張学良であったが、何よりも軍事力の強化が緊急の課題であった。強力な軍事力を持っていないければ、東北の支配権を堅持できず、さらに国家と国民を守ることができないことを熟知していた。特に1921年、張学良は日本を訪問し、軍事演習を見学した。この日本訪問で張学良は衝撃を受けた。強大な日本の軍事力を目のあたりにしたのである。日本に対抗するためには、奉天軍の近代化が焦眉の急であることを痛感した。張学良は日本人の親切な招待を受けたが、日本人に対して不満感を持っていた。「日本はいつも、中国に対して、権利でお前を服従させてやるといわんばかりに、しばしば、日本はこれだけの力があるのだと見せつけようとするのです。私は、力を振りかざすものに対しては、恐れることはなく反抗する人間です。ですから、日本訪問から帰ってきたときの私の日本の印象は決して良くはありませんでした」²⁷⁸。

日本政府は日本の陸軍、海軍、兵器工場及び軍事学校、政府機構などを張学良に見せた。その後、張学良は感想を聞かれた。「張学良は、日本ができることは、中国にもできるし、日本にできないことでも、中国はできるようになる。刮目して待ってください」と述べていたという²⁷⁹。このように、張学良は日本への違和感と反抗心を示した。

既述の如く、張学良は第二次奉直戦争前に、奉天軍を近代的軍隊として整理し、その成果もあって奉天軍は勝利を収めた。このような軍事的改革に基づいて、張学良は東北の政権を握った以後、更に東北軍を近代的軍隊へ大改革することに努めた。しかし、奉天軍の再編は、叛乱で処刑した郭松齡と深く関わっていた。張学良は郭松齡なき東北で、郭松齡の教えを実現するという困難な作業をせざるを得なかった。

張学良は郭松齡の軍事遺産を引き受けて、自分の東北軍を再建することとなったのである。

もちろん、新東北の再建は、軍事的強化に留まるものではない。人材育成としての教育の充実を目指し、経済振興にも力を注いだ。東北で現代的な重工業、軽工業、交通業、電信業、炭鉱業を開発し、日本の「満州経営」に対抗しようとした。

張学良は強い軍隊、現代的な経済力及び現代的な教育に基づいて、強大な国家を創るという目標を掲げて、その実現に努力した。ここでは、先ず軍事面の近代化から分析を進める。

²⁷⁸ 白井勝美『張学良の昭和史最後の証言』前掲、43頁。

²⁷⁹ 張友坤 銭進『張学良年譜』(上) 前掲、47頁。

第二節 東北軍の軍事近代化教育

1928年7月、張学良は東北三省保安司令に就任した以後、軍隊の素質を高めるために、さらなる東北軍の再整備に着手した。

張学良は軍隊を整頓し、軍隊の編制混乱、職責不明などの弊害を克服しようとした。そして自らの指導権を確立するため、重要な軍ポストには自分の腹心を充てた。全ての権利を自分で握ろうとしたのである。

張学良の一生は軍事と繋がっていた。彼自身が中国東北の政権を握った時、郭松齢から引き継いだ精兵主義を導入し、膨れ上がった軍隊を改編した。総計40余万であった歩、騎、砲、工、輜等の各項将兵を15万に削減した。また削除される将兵はその人の志願に従って、道を選ばせた。その選択肢は、甲、講武堂に入学して、勉強する。乙、士官隊に入り直す。丙、地方に戻って警察署に勤める。丁、農業に従事する。戊、お金を渡して、退職する、などであった。この結果、毎月、二百余万元以上を節約できるはずであった²⁸⁰。

張学良は、かつての奉天軍は軍閥の軍隊であったが、改編以後の奉天軍は国家の軍隊、国民の軍隊となるべきであると考えていた。

張学良の東北軍は海軍、陸軍、空軍、騎兵、砲兵、歩兵、工兵、特種兵、戦車隊、汽車隊、サーチライト隊、鉄道隊、通信隊、交通旅などの近代化された軍隊に再編された。

部隊の指揮官を育成するために、1929年10月、東北学生隊なる組織が新設された。この東北学生隊は士官予備隊であった。東北学生隊は東北保安司令に付属して、張学良の肝いりで設立されたものである。東北学生隊で各方面の軍事学校の予備教育を行った。学兵隊においては中学校の課程、軍事課程、英仏独日外国語課程を行った。学制三年であった。卒業した後は、講武堂に入学させて、引き続き勉強させた。非常な優秀な人は海軍、空軍学校に留学させた。

東北学生隊の規定は次のようなものであった。

「本隊の教育目的は学生の体育能力を育て、品性を陶冶し、軍人の精神を養成する。普通の中学校の課程を完成学び終え、軍事技術を勉強して、士官の基礎を育てる」²⁸¹。

東北学生隊は、郭松齢の思想を受け継いで、新式の近代軍人を育てるという目的を持っていた。

張学良は東北学生隊の軍規と軍人思想教育にも最も重視した。

「私の軍隊は軍事規律を守らなければならない。庶民を保護し、愛護するべきだ。庶民に迷惑をかけることをもって戒めとする」²⁸²。

張学良は軍人として、軍隊の軍事技術教育を非常に重視した。軍士の識字教育を実施した。彼は軍官の審査と昇進に厳格な軍事技術の規定を設けた。常に軍事演習の成績によって、昇進することができるかどうかが決められた。下級軍官と軍士の教育も非常に重視した。「各軍は必ず毎日一時間か二時間の基礎軍

²⁸⁰ 「張韓楊報告軍縮経過通電」(1928年11月16日) 畢万聞『張学良文集』(上) 前掲、94頁。

²⁸¹ 遼寧省档案馆『奉天公報』第200巻、第5970号。

²⁸² 遼寧省档案馆『奉天公報』第199巻、第5923号。

事授業を受け、中国武術訓練は一日少なくとも一時間の訓練を行った」²⁸³。

初級、中級、高級の軍事教育機関を設立した。軍官教育班と教導団及び軍士教導隊を成立させ、優秀な軍官と文化基礎があった士官を選んで、軍官教育班で勉強させて、卒業した後、各部隊で新兵を訓練させようと考えていた。

1928年冬、張学良は東北講武堂で軍需教育班を再開した。それは、1922年秋、奉天軍の後方勤務を強化するために、郭松齡は“三・八旅団”の中に軍需教育班を成立させたが、その考えを受け継いだものである。軍需学校を卒業した学生を教官に派遣した。郭松齡時代の軍需学校では、「中学校を卒業した学生30名を募集した。軍需学校の講義の内容を教え授けた。即ち、一般經理、糧秣經理、營繕經理と会計、公文公式などの講義があった」²⁸⁴。

1928年、張学良によって再開された以後、240余名の学生を募集した。入学した学生は、全員が東北軍の整理によって削減された25歳以下で、中学校と小学校の学力を持っている尉官であった。学制は二年間であった。1930年7月、張学良は高級軍需人材を育成するために、さらに高校を卒業した学生を募集した。

張学良は郭松齡の軍校建設思想を受けて、東北講武堂を再建した。郭松齡は1923年、張学良に建議して講武堂を拡充し、軍官教育班と軍士教導隊を成立させ、優秀な軍官と文化基礎があった士官を選んで、軍官教育班で新式教育を受けさせていた。

当時の軍士教導隊の生徒であった姜明文の回想によれば、次のような教育内容であった。

「教育班は郭松齡が自ら作った士官を育成するための軍事教育機関であった。軍事学内容は殆ど、講武堂と同じであった。しかし、学制が二年間であった。講武堂より半年多かった。英語、フランス語、ドイツ語、日本語などの外国語の授業が増えていた。将来、各国へ留学させようと考えていたのである」²⁸⁵。

この軍官教育班は陸軍各兵科士官を育成する総合的な軍事教育機関であった。1925年11月下旬、郭松齡の叛乱事件が発生したために、解散させられたが、学生たちはそのまま東北講武堂に編入された。東北講武堂の第六、八、九、十一期生として卒業した。郭松齡は、張学良の東北軍に大切な軍事人材を残していたのである。

1928年、軍士教導隊を東北講武堂に編入した。1928年9月、張学良は東北の軍事教育機関を統一するために、東北の軍事教育機関を東北講武堂のもとにおいた。改編された以後の東北講武堂は東北講武堂奉天本校と呼ばれた。その後、東北講武堂黒龍江分校と熱河分校を創った。そして、東北講武堂に各種主科教育科を付けた。東北講武堂は東北軍事教育最高機関になった。

1928年末から1930年9月の二年間に講武堂に卒業した学生数は、それまで卒業した学生の総和よりも多かった。奉天本校で勉強していた第九期と第十期の学生は3000人にのぼった。そのうちに、第九期の在職の士官は1500人であった。第十期の青年学生は1500人であった。高等軍事学研究班は100人であ

²⁸³張友坤、錢進『張学良年譜』(上)前掲、303頁。

²⁸⁴孫景悦、董慧雲、張秀春『張学良与遼寧教育』前掲、242頁。

²⁸⁵姜明文「対郭松齡夫婦的回憶」、『遼寧文史資料選輯』第16輯、前掲、126頁。

った。機関銃、平射砲、迫撃砲研修班三期は 900 人であった。

張学良は 1928 年 2 月、高度な教育を受けた指揮者を育てるために、高級軍学研究班を新設した。四大講武堂を卒業した在職参謀を招集して、陸軍大学の講義と高等的な軍事学を勉強させた。高等軍学研究班の講義内容は以下の通りであった²⁸⁶。

一、戦略戦術科目。基本戦術、凶上戦術、現地戦術、要塞戦術、航空戦術、大兵团戦術及び地形の模型戦術、兵棋、陣地攻防、戦術教育。

二、戦史科目。日露戦史、独仏戦争、第一世界大戦、ナポレオン戦史。

三、参謀業務科目。参謀業務、諜報勤務、輜重勤務、鉄道輸送、船舶輸送、動員学、高等司令部勤務、作戦計画、軍隊教育、演習計画、兵要地理。

四、一般兵学科目。軍制学、軍政学、地形学、馬政学、交通学、野戦永久築城学、兵器学、航空学、戦車学、化学戦、陸軍経理学、軍隊衛生学、海軍学。

五、補助学科目。国学、歴代兵略、国際公法、政治学、外交学、新聞学及び数学、経済学、外国語。

六、野外演習科目。築城実施、実兵指揮、参謀旅行、戦史旅行、高等司令部業務演習。

七、見学。航空見学、海軍見学、各特殊部隊見学。

以上、張学良が軍隊の教育に非常に重視したことを明らかにした。張学良は従来の軍閥軍と違って、学力と知識を持っている兵士を育てようと考えていた。精兵主義の考えから、兵士の学力を上げることによって、軍隊の戦闘力もあげることができると思っていた。

張学良は軍隊における政治思想教育を強調した。張作霖時代においては、奉天軍の政治思想教育は、張作霖に服従して、彼の意思に従って、彼の恵みに感謝して、自ら張作霖のために戦うことであった。家父長的支配の張作霖に対する忠誠思想を強いるものであった。しかし張学良にあっては、東北軍の政治思想教育は、国家の軍隊、国民の軍隊として、国家と国民のために戦うことが強調された。東北軍は軍人の人格も重要視された。良い軍人になる前にまず良い人間となるように学ぶことが求められた。

1930 年 1 月、張学良は葫蘆島航警学校タービン班の卒業式で次のように発言した。

航警学校を創る目的は海軍人材を育てることである。諸君、卒業してから、下級兵士と苦楽を共にすることが必要だ。困難を恐れずに、元気を出そう。現在の中国海軍は弱い。海軍を発展するために、人材が必要だ。そうしなければ、先進な武器を持っていても、勝利を得られない。日清戦争が明らかな事例であった。現在の中国は列強の侵略を受けている。諸君は軍人として、国家を守る義務がある。責任は重い。

そして最後に締めくくった。

「今日、私は三つのことを言いたい。一、人格を修養せよ。二、学習を続けよ。三、視線視野を広くせよ。この中でも、人格は社会で生きる基本である。国家を守ることは最も重視すべきことだ。軍事のモデルになるつもりであるべ

²⁸⁶ 李伝璽「東北講武堂」、『遼寧文史資料』第 6 輯、前掲、73 頁。

きだ」²⁸⁷。

1930年、張学良は“中東路事件”に失敗した以後、空軍の重要性を見直し、東北空軍を拡充した。

4月にはイギリスから練習機7機を購入し、フランスからは爆弾投下機5機、ないしは6機注文し、チェコスロバキアやアメリカ、ドイツにも注文をだしている。そして合計で140余機を擁する空軍部隊に達していた。ところが使用に耐える飛行機は70余機にすぎなかった。このため、「技術ヲ練習セシムヘク日本ヨリ教官六名ヲ招聘スルコトトナリ既ニ陸軍省トノ契約成立シタル由ナリ」²⁸⁸という。そして広い滑走路を得るために、北陵裏の三台子に、新たな空軍基地を確保することになった。

海軍の充実も課題であった。

張学良は東北边防総司令に就任してから、東北の海軍の建設にも非常に重視した。張学良は東北の海軍を改編し拡充するため、先ず、青島にあった海軍公署を奉天に移動した。その名前も東北海軍総司令部に変え、張学良は自ら東北海軍総司令に着任した。瀋鴻烈は副司令に任命された。総司令部の下に参謀処、秘書処、軍需処、軍械処などの機関が設置された。そして、元は一つであった海防艦隊を三つの艦隊に改編した。改編された以後、第一海防艦隊は青島に駐在することになった。遠洋勤務を担っていた。第二海防艦隊は山東省煙台長山島に駐在することになった。近海の海防という任務を担っていた。東北江防艦隊はハルビンに駐在することとなった。吉林省と黒龍省の河川を守る江防という任務を担っていた。

「戦艦は27隻を保持していた。全国の76.7パーセントを占めていた。海軍兵力は3300人であった。全国の61パーセントであった。張学良は海防艦隊に整備しながら、海軍軍費も増やした。1928年海軍軍費は291万元であった」²⁸⁹。

圧倒的に中国最大の海軍力を保持していたのである。逆にいえば、国軍としての海軍に統一されていたわけではなかった。「中国の海軍」ではなく、「張学良の海軍」であった。

このため、張学良は海軍に属した各機関を発展させた。海軍陸戦隊を拡充して、漁船会社（実は造船所であった。敵に知られないように普通の会社を偽装した）を樹立するなどの配慮も怠りなかった。

兵士の教育、訓練に熱心な張学良は東北海軍を強化するため、海軍の人材育成に力を注いだ。

1923年から1930年の8年間で海軍学校、海軍士官講習所、海軍兵士教練所などの多くの教育機関が創られた。

その中でも、葫蘆島海軍学校は東北海軍に最も大きな力を与えた。葫蘆島海軍学校は最初、東北三省航警学校と呼ばれていたもので、開学当初は全面的に日本海軍士官学校の制度を参考にしていて、教科書も日本海軍士官学校の教科書を翻訳して使用された。

²⁸⁷ 「在葫蘆島航警学校輪機班卒業典令上の講話」、畢万聞『張学良文集』（上）前掲、255頁。

²⁸⁸ 「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B04010608300、支那軍事関係雑件 第三卷(C-1-0-0-C1_003)(外務省外交史料館)」(3. 空軍)829-831頁。

²⁸⁹ 李鴻文、張本政『東北大事記』（下巻）、吉林文史出版社、1987年、660頁。

海軍学校は将校班と学兵班があった。将校班は航海、タービンと二つの専門があった。高校と大学予科の学力を有していれば受験させた。学制は三年間であった。三年間の学習を通して、実際に戦艦を使って実習することができた。卒業したら半年後には、正式的に海軍に入ることができた。学兵班は航海、タービン、管旗、掌号、看護などの五つの専門があった²⁹⁰。

東北海軍はこのように江防、海防、水上航空、陸戦隊、軍事教育及び各種後方支援という完璧なシステムを備えていた海軍であった。全盛期は中国では最も強い海軍になっていた。東北海軍は張作霖政権と張学良政権に大きな軍事的基盤を与えた。直奉戦争などでは、張作霖は海軍を利用して、勢力範囲を拡充することができたのである。

ところが張作霖海軍を継いだ張学良の海軍は、東北江防艦隊が壊滅するという悲劇を蒙った。ソ連と戦った中東路戦争では、戦場は松花江、黒龍江であって、東北江防艦隊が主役であった。国家の利権を回収するために、海軍の力を利用しようとしたのであったが、逆にソ連艦隊と空軍の攻撃で全滅させられた。

第三節 東北教育の発展

張学良は伝統的な中国儒学と道学の薫陶を受けたと同時に、キリスト教思想と西方科学文化をも勉強した。張学良は、中国が欧米列強より弱い原因は中国の教育が欧米列強より貧弱であるからだと考えた。1926年11月20日、張伯苓は張学良に随行して南開大学を視察したが、その時に張学良は次のように強調したという。

「中国の希望は青年である。青年の根本は教育である」²⁹¹。

1928年9月14日、張学良は東北大学の校長として、入学式で学生たちに教育の重要性にふれて、次のように話した。

「今日、諸君に言いたいことは、先ず、教育の提唱である。中国の教育界を言えば、殆ど、体育を重視していない。その結果、学生たちの身体は貧弱である。私は本大学が体育方面において、特別注意をはかるように希望する。強靱な身体を持ってこそ、学習はうまく行く。だからこそ、体育を軽視してはならない。

学問面においても、よいところを維持して、良くないところを改善する必要がある。現在、中国の情勢はまさに風雨に曝されている。だから、我々中国人の中国は、諸君たち同胞が努力して中国の危機を救うべきだ。そのためには、人材育成が非常に必要だ。

しかし、中華民国の教育は以前と違う。個人の利益、家族のためにではなくて、現在は国家の富強のために勉強するべきだ。そのためには、慎重な態度を持つべきだ。金銭の誘惑によって、人格を損なうことがないように」²⁹²

健全な肉体に健全な精神が宿るということであろうが、同時に教育の目的は個人の立身出世（「昇官發財」）のためではなく、国家のために尽くす人材の育

²⁹⁰陸軍、杜連慶『張学良与東北軍』遼寧人民出版社、1991年、452-453頁。

²⁹¹梁吉生『張伯苓年譜長編』（上）人民教育出版社、2008年、420頁。

²⁹²畢万聞『張学良文集』（上）前掲、120-121頁。

成にあると強調したのである。

張学良は軍事強化を図ると同時に、教育もまた非常に重視した。張学良は個人的にも資金を供出して、教育振興費用に充てたという。

「当時、奉天省の教育費用が少なかった。小学校と中学校の教員の給料は更に、少なかった。県級小学校教員の給料は現大洋 12 元であった。中学校教員の給料は現大洋 40 元であった。省級小学校教員の給料は 50 元現大洋であった。中学校教員の給料は 100 元現大洋であった。県級と省級の両方の違いが大きかった。この状況に鑑み、張学良は各級学校教育費用を増加した以外に、自らから 500 万を供出して、奉天省の小学校と中学校の経費に補充した」²⁹³。

張学良は小学生の教育を普及するために、奉天省の各市でモデル小学校を創った。「新民小学校」と呼ばれた。1927 年、張学良は自分の故郷である駕掌寺に、初めて、新民小学校を創った。学校の設備は完備していた。学生は無料で勉強することができた。食事と宿泊も無料であった。1929 年 1 月、張学良は「創辦新民小学校規程」を發表した。そして次のように強調した。

「各県に若干の新民小学校を創るつもりだ。貧乏なために学校に入る機会を失う児童に教育を受けさせる。そのために、多くの費用が必要だ。この多くの費用は一人で負担できるものではない。だから、校舎の選定とテーブル、椅子などの設備は各県で準備して欲しい。他の費用は私学良が負担する」²⁹⁴。

張学良は小学生の教育を重視しながら、中学生の教育も重視した。張学良は「同澤中学校」と呼ばれたモデル校を創設し、奉天省の中学校の教育を発展させた。張学良は同澤中学校の他に同澤女子中学校をも創った。

第二次奉直戦争以後、張学良は奉天軍の再建に努力したが、奉天軍には軍事才能が高い軍官が少ないことを痛感した。軍官の基礎学力を向上させる必要があった。郭松齡は張学良の命令に従って、奉天の東大營に東北軍官教育団と東北教導隊などの軍事機関を創ったが、下級軍官の基礎学力が弱かったために、難しい授業を理解することができなかった。この事態を克服するため、郭松齡は下級軍官の学力を高めるための中学校を創るべきだという意見を張学良に提出した。

1925 年夏、張学良は個人の懐から 60 万元を出して、東大營同澤中学校を創った。

「授業の内容は普通中学校の授業内容にそって構成された。……学校は中学三年、高校三年という学制であった。1928 年、張学良は資金を出して、教室、実験室、図書館、閲覧室、講堂、科学館を拡充した。学生たちの見聞を広めるために、常に学生たちに工場、炭鉱などを見学させた」²⁹⁵。

張学良と郭松齡はともに学校教育の振興に熱心であった。同澤中学校は張学良と郭松齡が一緒に創ったものである郭松齡が銃殺される前に張学良に宛てた最後の手紙で、次のように伝えている。

「私が数年来、経営していた動産と不動産について、魯穆庭、瀋振榮、張振鷺に清算を依頼し、借金を返した残りをすべて同澤中学校に寄付して欲しい」

²⁹³張友坤 錢進『張学良年譜』（上）前掲、334 頁。

²⁹⁴同上、347 頁。

²⁹⁵『遼寧文史資料』第 4 輯、前掲、278—281 頁。

郭松齡は死ぬ前に、自分の財産を同澤中学校に寄付したほど東北の教育に熱心であった。その姿勢は、明らかに張学良にも影響を与えた。

張学良は女子教育についても重視した。当時、女子は学問がなくてもいいという伝統思想に影響された中国にとって、女子教育の充実は珍しかった。西方のキリスト教思想と西方科学文化を勉強した張学良は、その影響を受けて女性の地位と役割にも関心を抱き、女性にも教育を受けるべきと考えていた。

1927年10月、同澤女子中学校を成立させ、翌年3月、正式な入学式を行った。当時の記録によれば、「試験によって、八十名の学生を募集した。中学校、補習などの二班に分けた。三月一日、入学した。我々の同澤女子学校が正式に成立した」²⁹⁷。

1928年7月8日、学校成立大会を開催した。学校が拡充するために、150名学生を増員した。その後、学校の費用は全部張学良が負担した。1930年まで、学生は400人になった²⁹⁸。

張学良は小学校と中学校を重視してただけでなく、大学の教育もまた大変重視したことはいうまでもない。1928年、張学良は東北保安総司令に就任した時に、東北大学校長に推薦された。張学良は東北大学の第三代校長であった。その前任者は王永江と張作霖であった。張学良は東北大学を発展させるために、次のような多くの措置を講じた。

一、初めて、女子学生を入学させた。前任者の王永江校長は、東北大学に女子学生が入学することを禁止していた。このため東北の女子学生が大学入学を希望すれば、関内の大学に入学しなければならなかった。1928年9月、第一期50名の学生が入学した。男女平等として、この措置は高い評価を受けた。張学良の妻于鳳至も常に学校で聴講していた。

二、最初の東北大学は南校（南関）と北校（北陵）に分けられていたが、張学良は多くの資金を出して、南校と北校を合併した。もともと北校は奉天の北陵で創られ、南校は南関で創られていた。いずれも奉天であったが両校は大きく離れており、学校の管理に便利でなかった。1929年2月、張学良は自ら150万を出して、昭陵の南側に現代の大学キャンパスを創った。このキャンパスには張学良の名前をとって名づけられた漢卿南楼、漢卿北楼が建てられた。

三、大学院制を実施して、6つの大学院を創った。1929年中華民国教育部の規定によれば、各大学は3つ以上の大学院を備えていなければならなかった。しかも、この中に必ず理系大学院がなければならなかった。この規定によって、張学良は以前の文学、法学、理学、工学などの四個学科を大学院に変更した。そして、師範学部は教育学院に変更した。また、農学院を増加した。各学院の下に各系を創られた。こうして、東北大学は6つの大学院を完備した総合大学になった。

四、東北大学は教員の素質を非常に重視したから、経費を惜しまず、一流の教員を招聘していた。東北大学の高い給料は全国の他の大学と比べものになら

²⁹⁶ 肖兆麟「憶郭松齡被殺的前前後後」、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、156頁。

²⁹⁷ 「張学良為《遼寧女子中学校一覽》題写弁言（1928年12月）」陳景悦、董慧雲、張秀春『張学良与東北教育』前掲、331頁。

²⁹⁸ 徐轍、徐忱『張学良』前掲、148頁。

なかった。有名な学者の給料は最も高かった。清末から革命派との交流で有名だった章士釗の給料は800元現大洋であった。当時、南開大学教授の給料は240元現大洋であった。北京大学、清華大学でも、教授の給料は300元現大洋であった。そして、東北大学は教授のために豪華な宿舎を創った。全部、高級洋式の別荘であった。このような好待遇によって、全国の有名な学者が東北大学に招かれた元外交総長羅文干、清華大学校長劉仙洲などが招聘され、当時の東北の大学の教員の素質は他の大学と比べものにならなかった。東北大学の最盛期には200名の有名な学者を擁していた、といわれる²⁹⁹。

張学良が東北の政権を握っていた三年間で、東北の教育事が目覚しく発展した。教育面において、張学良は小学校から大学まで、多くの資金を使って、東北の教育の改善と人材を育てるために、力を尽くした。この三年間で多くの人材を育てた。

第四節 東北の金融と財政の整理

張学良が東北の政権を握った時に直面した課題は、何よりも軍事と外交の問題に対処することであったが、内政においても、金融と財政の整理をする必要に迫られていた。張作霖は軍閥間戦争に明け暮れていたから、東北の経済は非常に苦しい状況に追い込まれた。張作霖晩年の1926年、奉天軍は軍備費が巨大に膨れ上がった。兵器工場の費用は2300万元であった。日常的に必要な軍費は1800万元であった。加えて張作霖の個人秘密費用は5100万元であった。ところが奉天省の年間歳入はわずか3300万元であった。奉天省としては、奉天軍の軍費調達に応じることはできなかった³⁰⁰。その板挟みに合って奉天省の省長が辞職した。

張作霖は東北の政権を掌握したときに、東北の金融財政再建を務管理専門家である王永江に依頼した。当時の王永江は奉天省の省長であったが、財政庁長も兼任させた。王永江は東北で幣制改革を実行した。

もともと1925年の第二次奉直戦争時期にあつては、東北の金融財政の状況は良好であった。奉天票の信用も高かった。その原因は奉天票の信用は豊かな準備金に基づいていたのではなく、東北の豊かな物産に基づいていたからである。奉天票の信用を支えていたのは、特に大豆であった。1925年の時点で、奉天大洋と現大洋の百分比で計算すると、最高1.99:1、最低2.397:1であった。比率は非常に近かった。1925年12月31日、奉天票と現大洋の一元の比率は2.29:1であった³⁰¹。

しかし、1927年に張作霖が北京の政権を握ると、財政的負担が一気に高くなった。張作霖は多くの紙幣を発行したために、奉天の価値が下がったのである。奉天票と現大洋の一元の比率は1928年1月5日16.6:1であったのが、1月末には25.58:1となってしまった。1928年5月、奉軍が敗北して北京を離れたときには、奉天票の信用はガタ落ちで、金融変動が最大であった。奉天票

²⁹⁹ 徐轍、徐忱『張学良』前掲、199-200頁。

³⁰⁰ 『遼寧文史資料』第12輯、遼寧人民出版社、1985年、68頁。

³⁰¹ 徐轍、徐忱『張学良』前掲、186頁。

と現大洋の一元の比率は1928年1月5日で50:1であった。

当然、価格の上昇は避けられなかった。1927年2月、奉天の豚は1キログラム0.9元であり、とうもろこしの粉は1キログラム0.13元であった。ところが一年後の1928年2月28日のデータでは、奉天の豚は1キログラム4元であった。とうもろこしの粉は1キログラム1.1元に値上がった³⁰²。まさに張作霖の野心のお蔭で、東北の経済は崩壊の瀬戸際に追い詰められていた。

この苦境から脱するために、張学良にとっては東北経済の再建が大きな仕事であった。東北の金融と財政を整理するために、次のような多くの措置を実施した。

一、歳入を増やし歳出を節約することであった。まず、軍費の節約に取り組んで、毎月軍費200万元を節約した。次に、外貨を獲得するため、食糧の輸出を増加した。1925年の段階では大豆生産量は417万トン、輸出量は146万トンであったのが、1931年9月までの生産量は523万トンに伸び、輸出量は284万トンにまで増やすことができた³⁰³。

二、金融の改革に着手した。新幣（現大洋）を発行して、旧幣（奉天票）を回収した。最も重要な措置は準備金を改革したことである。以前の準備金は少量の金銀と大量の農業生産品によって構成されていた。これが、奉天票が安定していなかった重要な原因であった。改革された準備金は七割の金銀と三割の有価証券によって、構成された。新しい準備金は社会、政局及び民心に安定させた。この結果、1929年末までに、東北の財政収支がバランスに達した³⁰⁴。

三、国民政府の許可を得て、上海で独自の公債を発行した。東北財政会議によって、整理金融公債2000万元を発行し、国民政府の協力によって、その一部は最大の金融都市・上海で発行することもできた³⁰⁵。

張学良が断行した東北の金融と財政に対する整理の成果が如実に現われ、収支のバランスを回復した。物価も安定し、工商業は繁栄した。

第五節 民族企業の振興

東北経済は外国資本、外国企業によって支配されていた。最初はロシアが進出し、日露戦争後は日本企業が、いわゆる満州全土を席卷した。「対華21箇条要求」で、日本資本の支配が決定的となっていた。このため、外国資本に対抗して東北経済の自立を実現するためには、何よりも中国の民族資本、民族企業の振興が必要であった。

1928年から1931年の三年間、張学良は東北で新規建設事業に着手した。東北の新規建設は、現代的な重工業、軽工業、交通業、電信業、炭鉱業をめぐって進められたのである。

もともと張作霖も東北の重工業を非常に重視していた。1920年代、張作霖は兵器産業の振興を目指して、奉天省で東三省兵器工場と奉天省迫撃砲工場を

³⁰² 同上。

³⁰³ 巖中平『中国近代経済史統計資料選輯』科学出版社、1955年、43頁。

³⁰⁴ 李桓「開東北現代化建設之先河者—張学良將軍」、『張学良研究』第1輯、吉林文史出版社、2002年、339頁。

³⁰⁵ 荊有岩「東三省銀号」、『遼寧文史資料』第12輯、前掲、69頁。

造った。1928年以後、張学良は多くの官立軍事工業を民間工業に変更した。この時点で、奉天では東北大学工場、皇姑屯機関車工場、大亨鉄工場、東北三省兵器工場付属機関車工場、奉天省迫撃砲付属民生工場の五工場が民間経営となっていた。この五個の民間工場は豊富な資金を有しており、非常に高い技術を持っていた。この五個の工場の技術と実力を基礎に、奉天省の重工業体制が形成された。

各工場の具体的な状況は以下の通りであった。

東北大学工場は主に器械製造が中心であったが、鉄道機関車と客、貨車も製造した。印刷工業も付属された。本部工場以外にも、客車、貨車、クリーン、ウインチ、送風機などの設備を造るための六個の支部工場も備えていた。400人の労働者が働いていた。皇姑屯機関車工場は京奉鉄道の付属修理場であった。機関車、貨車、客車などの器械を修理できた。1928年には修理だけでなく、客車と貨車を造る重工業工業企業にまで発展した。

大亨鉄工場は労働者500人を抱え、水道管、ボイラー及び鉄橋などの部品を製造した。東三省兵器工場は張作霖によって1920年に造られた。そのあと、次第に発展してきた。1927年、従業員は2万に至った。製造設備は8000台にのぼり、歩兵銃、機関銃、平射砲、山砲、野砲、砲弾、銃弾を造っていた。当時、この兵器工場はアジアで最大の工場であって、ドイツの有名な軍需工場にちなんで「東方のクルップ」と呼ばれた。

奉天省迫撃砲場は新式の迫撃砲、砲弾、砲車を造っていた。1929年、民間企業に改造された。トラック、人力車、紡績機械などが造られた。1929年8月、馬力は6.5トン、積載1.8トンを誇る中国初めてのトラックを造られた。張学良は「民生」という名をつけた³⁰⁶。

このように、奉天省の重工業は非常に大きな実力を備えるようになっていった。

1920年代、奉天では紡績、捺染、マッチなどの軽工業工場が生まれ始めた。奉天の紡績業は軽工業のリーダーであった。1930年、奉天に53個の紡績工場があった。この中に最も有名な工場は奉天紡績場、純益絹織物会社、東興染色紡績会社、厚生福紡績会社であった。奉天紡績場は奉天省と商民の半官半民工場であった。奉天で最も大きな紡績工場であった。1930年、この工場の総資本は300万元であり、工員は300名を擁していた。この工場で生産された木綿と綿糸は品質が優秀で、廉価であったから、供給が需要に応じ切れなかった³⁰⁷。

張作霖、張学良とも、東北の電信業の建設を重視した。1922年、張作霖は東北無線電監督処を設立した。翌年、張作霖は東北無線電総台を創った。そして、奉天故宮にマルコーニ電報機を架設した。1924年、張作霖は奉天で国内通信発信台を設置した。これは長波の通信発信台であったが、北へハルビン、西北へ新疆、南へ海南島まで届いた。さらに1927年、張作霖は奉天に短波の通信台を創った。こうして、東北の無線電事業が形成整備された。

張学良は東北における無線電信の建設を強化した。張学良は東北無線電監督処を廃止し、奉天で新しい無線電総台の充実を推進した。奉天の無線電総台に

³⁰⁶王貴忠「20世紀20年代中国東北自建工業体制的成就和管理政策」、『張学良研究』第1輯、前掲、90頁。

³⁰⁷同上、90頁。

よって東北各地方の無線電台が管理された。1931年、張学良は東北各地方の電報、電話、無線電を統一する東北電信管理处を成立した。こうして、東北は独立した通信体制を完成させた。

張学良は炭鉱業の開発にも力を注いだ。もともと東北には優良な炭田が多かった。露天掘りで有名な撫順炭鉱などは日本が経営していた。張学良が開発したのは阜新孫家湾炭鉱と八道壕炭鉱であった。この二つの炭鉱企業は欧米の先進的な技術を取り入れた近代的な炭鉱企業であった。

1924年、張学良は王子文を派遣し、40万元を注いで阜新孫家湾で鉱山を開発した。1926年、張学良は東北鉱務局を成立すると命令した。東北鉱務局は八道壕、西安（遼源）、孫家湾炭鉱、海城大嶺滑石鉱、輯安宝馬川等の五つの鉱石場を統率していた。外国の先進な設備を導入した。張学良は東北の政権を握った以後、さらに阜新孫家湾に40万元を投資した。阜新孫家湾が毎日60トンの石炭を生産した。一年で2.1万トンにのぼった。炭鉱夫は400名であった³⁰⁸。

八道壕炭鉱は、1919年12月、張作霖は50万元を投資して設立したものである。1921年4月、張作霖は北洋政府の許可を受けて、発掘した石炭を運ぶ全長約25キロメートルの虎壕鉄道（打虎山—八道壕）を敷設した。全線開通は1923年1月であった張学良は各地に幾つかの新民小学校を開学させたが、そのうち黒山県の三カ所に新民小学校を設けた。その中の一カ所が八道壕炭鉱の新民小学校であった。1929年正式に成立したが、八道壕炭鉱小学校は教育資金が八道壕炭鉱から捻出されていた³⁰⁹。

張作霖と張学良は阜新孫家湾炭鉱と八道壕炭鉱を成立したことで、東北の近代民族炭鉱事業を促進したといえるであろう。このことによって、外国経営に負けない民族の自信を強化した。

張学良は現代交通網の整備にも取り組んだ。東北の基幹鉄道は、ロシアのシベリア鉄道から延びる中東（旧東清）鉄道と、長春—大連を結ぶ南満州鉄道であった。いずれもソ連や日本の経営権が認められ、主要幹線が外国に握られていた。

1928年10月、交通委員会第一次会議決定によって、東北三省は「自建自営」（自分で鉄道を建設、自分で鉄道を経営）の、独立した東北鉄道を発展させることが決められた。東北政府が創設する鉄道は政府から資金を出す。政府と民間が一緒に創る鉄道は政府と民間が一緒に資金を負担することになった。国有の鉄道は交通委員会によって京奉鉄道から資金を出した。外資を導入しなかった³¹⁰。

張氏父子は自建自営鉄道を非常に重視した。満州事件が発生して日本が満州国を建設する前の十年間で、東北自建自営鉄道は非常な速さで発展した。この十年間で東北政府は三回にわたって鉄道計画を作った。

第一回目は、1922年6月に制定された。京奉鉄道の幹支線構想に基づいて、南満鉄道の両側に沿って走る兩大幹線であった。一つは、東の幹線である奉吉線（奉天—吉林）であった。もう一つは、西の幹線である打斎線（打虎山—チ

³⁰⁸王云鵬「張学良与阜新孫家湾炭鉱」、『張学良暨東北軍新論』、前掲、232頁。

³⁰⁹王云鵬「張学良与八道壕炭鉱」、同上、235頁。

³¹⁰遼寧省档案馆『交通委員会文書』、第7515号。

チハル)であった。1929年9月、吉海線(吉林—海龍)を開通させ、両大幹線計画が完成した。

第二回目の計画は、1928年に制定された。両大幹線を拡充するために、さらにその支線を設置した。これより、鉄道網を形成された。

第三回目は、1930年に制定された。葫蘆島を中心して、東、西、南の三大幹線を創ろうと立案された³¹¹。

1921年2月から1931年9月、中国の資金と資金を利用して敷設された鉄道は次の通りであった。

国有鉄道は、京奉鉄道の支線錦朝(錦州—朝陽)支線と打通(打虎山—通遼)支線。民間の鉄道は開奉(開原—奉天)鉄道。東北政府の鉄道は吉海(吉林—海龍)、昂斎(昂溪—チチハル)、洮索(洮南—索倫)、斎克(チチハル—克山)。政府と民間の合弁鉄道は奉海(奉天—海龍)、呼海(呼蘭—海倫)、鶴崗(蓮江口—鶴崗)。総計10路線が敷設された。総長は1521.7キロメートルであった。東北鉄道の四分の一を占めていた。全国鉄道の十分の一を占めていた。

この「自建自営」10路線に洮昂線(洮安—昂溪)を加えて、東北の自建自営鉄道は全国の自主鉄道の80.38パーセントを占めていた。だから鉄道の民族化にとって東北は全国のリーダーになった。この10路線の鉄道の中の昂斎(昂溪—チチハル)、斎克(チチハル—克山)、洮索(洮安—索倫)線及び、瀋海(瀋陽—海龍)幹支延長線、呼海(呼蘭—海倫)鉄道の北の段、吉海(吉林—海龍)のすべての軌道は張学良が東北の政権を握った時に造られた。全長は604.3キロメートルだった³¹²。

張学良は鉄道網の整備だけでなく、港湾の整備に取り組んだ。

日露戦争で東北経営から撤退したロシアは1905年以後、それまで東北に持っていた利益を日本に渡した。これより、大連、旅順、營口など三カ所の港湾と大長(大連—長春)、安奉(安東—奉天)の鉄道を日本が独占した。大連は遼南の輸出入の70パーセント以上を占める重要港湾であった。日本が支配する東北の交通路線の制限から抜け出すために、張学良が葫蘆島に新港を建設することを決めた。その理由を、張学良は次のように回想している。

「当時私たちは、東北で採れる大豆を海外に輸出していました。そのためには自分たちの港が必要だったのです。大連では日本の制限をうけましたので、私たちは自分たちの港を持ちたかったのです。日本人は東北の経済力を手中に収めておきたいと思ったようですが、私たちも当然、私たち自身の経済を発展させようと思ったのです。日本人は完全に不平等な立場に立った見方をしていました。中国をあたかも植民地のように扱っていたのです」³¹³。

張学良は、新しい港湾建設計画は東北の経済を発展するつもりだけではなくて、日本の経済侵略によって奪われた利権回収という目的も持っていた。

1930年1月24日、東北交通委員会とオランダ築港会社は契約を結んだ。契約によって、1930年には葫蘆島港建設を始めて、1935年10月に完成させる予定であった。完成すれば500万トンの物質を出し入れると計算されていた。1930年7月2日、東北交通委員会と北寧鐵路局は盛大な工事の開始式をおこ

³¹¹王貴忠「張学良与東北鉄道建設」、『張学良暨東北軍新論』華文出版社、1993年、211頁。

³¹²王貴忠「張学良与東北鉄道建設」、『張学良暨東北軍新論』、前掲、212頁。

³¹³白井勝美『張学良の昭和史最後の証言』前掲、106頁。

なった。張学良は自ら儀式に参加して、碑文を写した。

「この港は北の不動の良港にならなければならない。清末から、ここで、港を造ろうとしたができなかった。港が完成すれば、中国の北部の海陸の連絡に大きな利益を獲得する。重大な意義を持っている」³¹⁴。

だが残念ながら1931年、満州事件が起こったために、港の工事は未完に終わった。

以上、見てきたように、張学良は新しい東北建設に向けて、さまざまな試みに挑戦した。単なる軍事的な軍閥であるとは言えない。「自建自営」のスローガンが物語るように、民族的性格が濃厚である。ただ、その「民族的」とは、広く中国全国を意味するのか、それとも東北のローカルな意識にとどまっていたのか、検証する必要がある。間違いなくいえることは、日本が満州事変によって東北全域を支配し、そこから張学良を追い出すことによって、張学良はそのローカル性を打破して、西安事変を発動し「東北の英雄」から、「中国の英雄」になったのである。その道を切り開いたのは、明らかに郭松齡の影響が強かったといえるであろう。

まとめとしての包括的結論

最後にまとめとして、改めて張学良の東北建設思想と国家統一思想に与えた郭松齡の影響がどのようなものであったか、検証してみたい。

1925年12月14日、郭松齡は「敬告東三省父老書」を発表した。

「一、省の自治を実行して、人民の氣勢を發揚させる。全体の情勢が安定すれば、各県から代表を推薦して、省の議会と一緒に善後会議を行う。議論をつくり、施政方針、及び振興と改革すべきことを決定する。二、赤化の隠れた危険を取り除くために、労働者を保護して、資本を制限する。三、重税を免除して、貧困から民生を蘇らせる。四、精兵主義を取って、人民を苦しめる匪兵を淘汰し、人民の負担を軽減させる。五、金融を整理して、民間の産業を維持していく。六、教育費用を増加して、強制的な義務教育を実行する。七、人材の登用にあって、才能があることを根本として、党、派、親疎に拘らない。八、地利を開発して、実業を振興する。九、商業、運搬の利益を守るために、交通網を整理する。十、匪賊を肅清して、警察制度を整理する」³¹⁵。

以上の電文は将来、郭松齡が東北を改革する基本的なスタンスであった。張学良が実施し、構想した東北改革の措置と比べれば、非常に共通しているところが多かった。特に、四～九などについて、張学良は郭松齡の考え通りに実施したように思える。即ち、張学良は郭松齡から軍事思想の薫陶を受けただけでなく、東北の改造の思想もまた上継いでいたのであろう。郭松齡という人物は各面において、張学良に大きな影響を与えたと言えるだろう。

張学良が生まれた時代の中国は列強の侵略を受けており、国内の軍閥は絶えず混戦を繰り返していたために、人々は安心して生活することができなかった。

³¹⁴張友坤 錢進『張学良年譜』(上) 前掲、459頁。

³¹⁵「敬告東三省父老書」1925年12月14日、『遼寧文史資料-郭松齡反奉』第16輯、前掲、167-170頁。

ここから芽生えた危機意識が、軍閥の寵児であった張学良に、軍閥を越える新しい思想をもたらした。

張学良は小さい時から高度な学識を備えた一流の家庭教師がつき、そのため張学良は広く社会を考察する能力を身に着けていた。その後の軍隊の生活でも、学識において、一般の軍人は張学良にかなうものはなかった。中国では儒将と呼ばれほどで、高い学力と知識を持っていた將軍である。張学良は高い学力を持っていたために、冷静な判断を下すことができた。西方のキリスト教思想と近代的な民族民主的革命思想にと接触することで、思想を磨いた。外国語を学び、外国人と交流することで、張学良は欧米各国の文化、軍事思想、国家体制、政治思想にふれることができた。張学良が受けた欧米や日本の先進的な思想が、張学良における統一中国のモデルとして、東北の建設に大きく寄与した。

張学良はキリスト教青年会（YMCA）で閻宝航と付き合うことによって、閻宝航からの現代国家に関する意見を学び、現代国家のモデルが張学良の頭で形成された。張学良は東北の覇権を確立した後、東北の建設の具体策には閻宝航の影響が濃厚に反映されている。張学良の理想の国家の基礎イメージは郭松齡の影響と同時に、閻宝航のそれも強かったと見なすことができる。

張学良は、若い時期から奉天で上流社会の贅沢な生活を体験していたが、同時に下流社会の貧乏人の苦しい生活も見た。この社会の不平な現実に触れることができた。だから張学良は張伯苓と出会う以前はこの国家に非常に悲観して、中国はこのまま落ちぶれるのではなかと思つたほどである。ところが張学良は張伯苓の「中国の希望」という講演を聞いたことによって、考えが大きく変わった。自分の力を尽くして、中国を救おうと決意した。国家という意識及び民族という意識が出てきたのである。

これまで強調してきたように、軍事学校で郭松齡と出合いが、張学良の思想と、その後の運命に大きな影響を与えることになった。張学良は郭松齡から“強兵救国、抵御外侮”（強い軍事力を持って、国家を救う。帝国主義と戦う）という思想を叩き込まれた張学良は奉天軍及び他の軍閥の欠陥を郭松齡から教え込まれた。当時の軍閥は、いずれも兵士の数量を最も重視した。多くの兵力を抱えていれば、勝利を収めることができると考えられた。張学良は郭松齡と出合った以後、その誤りを教えられた。張学良は多くの兵力を擁していても、兵士の素質がよくなければ、勝利を手にすることができないことを気付いた。こうして張学良の軍事思想の中心に精兵主義が埋め込まれたのである。

1921年秋、張学良は日本を訪問したことによって、日本の強大な軍事力を目のあたりにし、軍事思想も変化を受けた。その時から、張学良は精兵主義だけでは不十分であり、さらに近代的な先進の武器と軍事組織を備えている重要性に気がついた。こうして、張学良の軍事思想の中心は、精兵主義に基づきながらも、同時に近代的な先進の武器と軍事組織を備えた軍隊を建軍するという課題を背負うこととなった。奉天に、近代的な軍事工場の建設を急いだのも、そのためである。

第一次直戦争で奉天軍は敗北したが、張学良の軍事才能が張作霖にも認められた。このため奉天軍に全面的に整理した。張学良は奉天軍の軍事訓練を強化し、軍事組織と軍事管理を改善し、軍制を改革し、兵器工場を拡大し、財政経済を改革した。そして、張学良は近代な軍事組織が陸軍だけでは足りないと感じた。だから、空軍と海軍の重要性を認識し、その新設と充実に力を注いだ。

張学良は奉系軍閥張作霖の後継者として軍閥混戦に加入した。張学良は軍閥戦争に参加し、その背後にある列強と接触することによって、国家の分裂による中国の弱体化が、列強に侵略された重要な原因であると悟るに至った。この経験から、張学良は内戦を止めて、全国の力を纏めて、帝国主義と戦うことを重視するようになった。

郭松齡事件は張学良にとっては大きなショックであったが、張作霖と奉天軍にとって、さらに大きなショックであった。郭松齡の叛乱事件は鎮圧することができたが、奉天軍の実力は大きな損失を被った。

張作霖を殺される前からすでに、張学良は内戦を止めて、全国の力を纏めて、帝国主義と戦うことを構想していた。だから張作霖爆殺事件は張学良の考え方を進める動力になった。しかも、軍事面と経済面において張学良は国民政府と戦う実力がないことを痛感していた。張学良は国民政府の力を借りて自分の東北政権を固めることを優先した。

張学良は国民革命軍との内戦を止めて、全国の力を纏めて、帝国主義と戦うことが優先されていたから、日本と手を結ぶことはできなかった。しかも、日本は父親である張作霖の仇でもあった。蒋介石もまた強引に軍事手段を通して東北を接收するつもりがなかった。蒋介石は簡単に張学良に勝てるとは思えなかったからである。しかも国民革命軍と奉天軍が衝突すれば、日本は満州における利益を守るために、武力干渉する可能性が高い。だから、蒋介石は武力という手段を選ばなかった。そして、蒋介石も張学良の力を借りて、自分の政権を固めると考えた。このことについては、張学良が蒋介石を支援したその後の中原大戦で検証された。だから、張学良と蒋介石とは共通した利害があり、平和的な手段を通して、東北易幟の問題を解決したのである。

張学良も内戦を回避して、新国家建設の時間を確保したかった。

内戦を止めるだけでは、新国家建設にならない。強大な軍事力と経済力で国家を支えることが必要と考えていた。だから、張学良は東北軍の全面的整理に取り組んだ。特に、軍隊教育強化は張学良が非常に重視した点である。張学良は幾ら先進の武器を持っても使い方が知らなければ、敵には勝てないと考えた。だから、張学良は東北軍の兵士までに教育を強化した。教育の強化は、他の軍閥には欠ける点である。兵士の訓練は重視したものの、教育には重視していなかった。軍隊教育が施された整理された以後の東北軍は、中国国内では誰も重視しなければならない強大な軍隊に育っていった。

張学良は高い学力を持っていたため、有名な教育家張伯苓と出会った以後、更に教育の重要性を痛感した。張学良は中国が欧米列強より弱い原因は中国の教育が欧米列強より貧弱であると悟った。だから、張学良は小学校から大学まで、多くの資金を使って、東北の教育の改善と人材を育てるために、力を尽くした。

1929年10月10日、張学良は東北新建設委員会を成立することを唱えた。張学良は全面的に東北新建設を考えたのである。そこで、次のように語った。

「東北新建設の目的は新しい東北を建設し、現代化した国家を育成することである。こうして、隣国の野心を消滅させる」³¹⁶。

張学良は東北を“中華振興の根拠地”にすることを考えていた。張学良は東北

³¹⁶ 『王卓然資料集』（遼寧文史資料第36輯）遼寧人民出版社、1992年、158頁。

地域の再建に力を注いだ。鉱山の採鉱、工場の新設、地方の開墾の振興、鉄道や港湾の整備、教育事業を発展など、多分野にわたって、新規事業を興した。

1929年、アメリカ作家エドガー・スノーは奉天で初めて張学良に会って深い印象をうけた。

「張学良は強烈な反日を公然と口にした。張学良は、日本を中国から追い出すことと満州現代化という二つの奇跡を実現しようとしている」³¹⁷。

張学良は東北を現代中国のモデルに仕上げようとした。張学良は近代的な組織と装備を持っている強い軍隊、現代的な教育、重工業、軽工業、交通業、電信業、炭鉱業が相互に結びついた近代的強国を造りたかったのである。

張学良が東北の政権を握っていたのはわずか三年間であったが、東北の経済、軍事、教育が目覚ましい勢いで進められていた。この時期は東北の発展史の最盛の時代になった。多方面の現代化建設は全国のリーダーとして注目された。その努力を壊したのが、いうまでもなく満州事変による日本軍の東北支配であった。張学良の東北軍は、錦州で日本軍の侵攻に対峙したが、南京政府からの援軍もなく、孤立無援で耐え切れなかった。こうして張学良は情熱を注いだ東北を失い、最強部隊であった東北軍は故郷を失った流浪の軍隊となったのである。

³¹⁷王振乾『東北大学史稿』東北師範大学出版社、1988年、31頁。

参考文献

史・資料集

中国側

- 『遼寧文史資料』第1輯、遼寧人民出版社、1963年。
『遼寧文史資料』第3輯、遼寧人民出版社、1963年。
『遼寧文史資料』第4輯、遼寧人民出版社、1981年。
『遼寧文史資料』第5輯、遼寧人民出版社、1981年。
『遼寧文史資料』第6輯、遼寧人民出版社、1981年。
『遼寧文史資料』第10輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第12輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第14輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第15輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第16輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第17輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第18輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第25輯、遼寧人民出版社、1986年。
『遼寧文史資料』第31輯、遼寧人民出版社、1991年。
『遼寧文史資料』第33輯、遼寧人民出版社、1991年。
- 『瀋陽文史資料』第1輯、政協瀋陽市委員会文史資料研究委員會、1981年。
『瀋陽文史資料』第3輯、政協瀋陽市委員会文史資料研究委員會、1982年。
『瀋陽文史資料』第11輯、政協瀋陽市委員会文史資料研究委員會、1986年。
- 『吉林市文史資料』第7輯、政協吉林市文史資料研究委員會、1988年。
『吉林文史資料選輯』第4輯、吉林人民出版社、1983年。
『文史史料選暨』第25輯、中国文史出版社、1999年。
『遼寧文史資料精粹』第1輯、遼寧人民出版社、1999年。
『遼寧文史資料選輯』第2輯、遼寧人民出版社、1963年。
『文史資料選輯』第4輯、中華書局、1960年版。
『文史資料選輯』第35輯、中華書局、1960年版。
『文史集萃』第1輯、文史資料出版社、1983年。
『文史集萃』第2輯、文史資料出版社、1983年。
『文史集萃』第4輯、文史資料出版社、1984年。
『文史集萃』第5輯、文史資料出版社、1985年。

『遼寧軍工史料』第2輯（近代兵器工業）、遼寧史誌辦出版社、1988年。

『全國文史資料選輯』第6輯、中國文史出版社、1979年。

『全國文史資料選輯』第35輯、中國文史出版社、1986年。

『盛京時報』1906年10月18日。

『申報』1911年9月28日。

『滿州報』1925年12月1日。

中國人民政治協商會議全國委員會、廣東省委員會、廣州市委員會文史資料研究委員會『孫中山三次在廣東建立政權』、中國文史出版社、1986年。

『中國近代兵器工業』編審委員會『國近代兵器工業—清末至民國的兵器工業』、國防工業出版社、1998年。

中國第二歷史檔案館『西安事變檔案史料選編』檔案出版社、1986年。

中國史學會『辛亥革命』（中國近代史資料叢刊）第7輯、上海人民出版社、1981年。

『中華民國史資料叢稿·大記事』第11輯、中華書局、1978年。

中華民國開國五十年文獻編纂委員會『革命之倡導與發展—中國同盟會二』中華民國開國五十年文獻第一編第十二冊、正中書局印行、1964年。

中華民國開國五十年文獻編纂委員會『革命之倡導與發展—中國同盟會三』中華民國開國五十年文獻第一編第十三冊、正中書局印行、1964年。

中華民國開國五十年文獻編纂委員會『革命之倡導與發展—中國同盟會六』中華民國開國五十年文獻第一編第十六冊、正中書局印行、1964年。

『西安事變資料選編』第3輯、中國文史資料出版社、1987年。

『國聞周報』第12卷、13期、1937年。

中國近代史資料叢刊『辛亥革命』第2卷、上海人民出版社、1957年。

中國近代史資料叢刊『辛亥革命』第7卷、上海人民出版社、1957年。

中國第二歷史檔案館『馮玉祥日記』第2卷、江蘇古籍出版社、1992年。

遼寧社會科學院歷史研究所『東北義和團檔案史料』遼寧省檔案館、1981年。

遼寧省檔案館編『辛亥革命在遼寧檔案資料』、遼寧省檔案館、1981年。

遼寧省檔案館『奉系軍閥檔案彙編』第7卷（上）、江蘇古籍出版社、1990年。

遼寧省檔案館『張學良與東北易幟』、遼寧人民出版社、2008年。

遼寧省檔案館『中華民國資料叢稿—奉天軍閥密信』中華書局、1985年。

遼寧省檔案館『奉天交涉總局檔』。

遼寧省檔案館『奉天公報』第199卷、第5923號。

遼寧省檔案館『奉天公報』第200卷、第5970號。

海龍縣誌編集委員會『海龍縣誌』、兵事篇、1937年。

全国公共図書館古籍編輯出版委員会『北洋海軍史料彙編』（上、下）、中華全国図書館文献縮微複製中心、1994年。

卞孝萱、唐文權『辛亥人物碑伝集』團結出版社、1991年。

畢万聞「張学良，蒋介石和東北易幟」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年。

畢万聞『張学良文集』（上、下）新華出版社、1992年。

常城「略論張学良將軍」、『東北師大學報』、第6期、1986年。

陳景悦、董慧雲、張秀春『張学良与東北教育』香港同澤出版社、1993年。

董慧雲、張秀春『張学良与東北建設資料選』香港同澤出版社、1998年。

丁中江『北洋軍閥史話』第1集、春秋雜誌社、1978年。

丁中江『北洋軍閥史話』第4集、春秋雜誌社、1978年。

方正『張学良和東北軍（1901—1936）』中国文史出版社、1986年。

公展「東南風雲与全国大局」、『国聞周報』第2卷、第41期、1925年。

広玉、倪廉潔「張学良“東北易幟”辯析」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年。

郭正秋「東北地域国民党組織的建立与蒋張關係」『史学月刊』、第3期、2000年。

郭大名「先兄郭松齡伝略」、『伝記文学』、第四期、1962年。

郭任生『郭松齡事略』全国政協文史編委会、1961年。

郭俊勝『張学良与東北易幟』、遼寧人民出版社、2008年。

韓信夫「二次北伐与東北易幟」（下）、『東北地方歴史研究』、第2期、1990年；

黄彦『孫文選集』中冊、広東人民出版社、2006年。

荊有岩『張学良執政時期東北，華北財政狀況』遼寧省文史研究館与遼寧省遼寧省人民政府参事室（文史資料）、1982年。

姜鳴『中国近代海軍史事日志 1860—1911』生活・讀書・新知三連書店、1994年。

姜克夫、李侃「閻宝航」、『民国人物伝』第四卷、中華書局、1984年。

孔軍、張曦、李健平「試論張学良的軍人職責觀对其政治生涯的影響」、『中国近現代史及資料研究』世界知識出版社、2007年。

陸錦華「論東北易幟」、『張学良暨東北軍新論』、華文出版社、1993年。

来新夏『北洋軍閥』第1卷、上海人民出版社、1988年。

劉建忠、崔毅軍「試析馮玉祥与郭松齡反奉的失敗」、『河北建築科技学院學報』第22卷第一期、2005年。

龍国華「東北空軍的發軔和消亡」、『環球軍事』2009年、第24期。

錢進「張学良与東北易幟新釈」、『民国档案』、第4期、2000年。

蘇小東『中華民國海軍史事日志 1912.1—1949.9』九州図書館出版社、1999年。

陶菊隱『北洋軍閥統治時期史話』第六冊、生活・讀書・新知三連書店、1959年。

陶菊隱『北洋軍閥統治時期史話』第七冊、生活・讀書・新知三連書店、1959年。

田子渝、劉德軍『中国近代軍閥史詞典』档案出版社、1989年。

王維遠「簡論張学良抗日思想的形成」、『東北地方史研究』、第4期、1991年。

王夔生『六十年来中国与日本』、三連書店、第4卷、1979年。

王鴻賓、孫宝君、袁占先、徐徹、曹夫興『東北人物大辞典』遼寧古籍出版社、1996年。

武育文「郭松齡的歷史評價」、『近代中国人物』第3輯、重慶出版社、1986年。

武育文、潘喜庭「張学良与東北易幟」、『社会科学暨刊』、1979年、第1期。

楊志本『中華民國海軍史料』(上、下)、海洋出版社、1986年。

楊奎松『西安事变新探—張学良与中共關係之研究』、1995年。

楊天石、王学庄『拒俄運動 1901—1905』中国社会科学出版社、1979年。

楊茂元「回憶父親楊宇霆」楊宇霆紀念館、2001年。

姚東藩『郭松齡反奉見聞』中華書局、2008年。

朱漢国「東北“易幟”探析」、『江海學刊』、第1期、1986年。

朱信泉、姜獻閣『民国人物伝』中華民國、第12卷、2005年、444頁。

周毅「東北易幟—中国平和統一的創舉」、『東北易幟暨東北新建設國際學術檢討會論集』、香港同澤出版社、1998年。

章伯鋒『北洋軍閥 1912—1928』第5卷、武漢出版社、1989年。

張俠、楊志本、羅樹偉、王蘇波、張利民『清末海軍史料』(上、下)、海洋出版社、1982年。

張友坤、錢進『張学良年譜』(上、下)社会科学文献出版社、1996年。

張梅玲「張学良从東北易幟到西安事变的思想轉變」、『遼寧大學學報』、第5期、1988年。

張俠、孫宝銘、陳長河『北洋陸軍資料—1912—1916』天津人民出版社、1987年。

張之丙、張之宇『張学良口述歷史—訪談實錄』第1冊、当代中国出版社、2014年。

張之丙、張之宇『張学良口述歷史—訪談實錄』第4冊、当代中国出版社、2014年。

張之丙、張之宇『張学良口述歷史—訪談實錄』第5冊、当代中国出版社、2014年。

張之丙、張之宇『張学良口述歷史—訪談實錄』第6冊、当代中国出版社、2014年。

日本側

「JACAR(アジア資料センター)Ref. C03022778300、密大日記一張郭戦史送付の件」、大正 15 年 6 冊の内第 6 冊、防衛省防衛研究所。

「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03040969800、宣伝関係雑件／外国新聞論調／支那ノ部 第三卷(1-3-2-51_1_1_003)(外務省外交史料館)」(1 大正 14 年 12 月 24 日から大正 15 年 2 月 2 日)(時局時報送付ノ件 一、郭松齡ノ最後ニ就テ)。

「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B03050752100、江浙並奉直紛擾関係 松本記録 第四卷(1-6-1-85_004)(外務省外交史料館)」。

「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B02130770900、『国際時報』 第 3 卷第 13 号～第 24 号(情-19)(外務省外交史料館)」。

「昭和三年 7 月 18 日 田中外務大臣より在奉天林総領事宛(電報)南方に対し迎合的態度を執らず保境安民を主として中立を守るよう張学良に警告方訓令」『日本外交文書』昭和期 I 第一部第二卷、外務省、1990 年。

「昭和三年 7 月 20 日 在奉天林総領事より田中外務大臣宛(電報)国民政府との妥協による易幟の不可なる旨張学良に対する説得について」『日本外交文書』昭和期 I 第一部第二卷、外務省、1990 年。

「昭和三年 7 月 20 日 在奉天林総領事より田中外務大臣宛(電報)対南方妥協問題に関する張学良と村岡関東軍司令官の会談について」『日本外交文書』昭和期 I 第一部第二卷、外務省、1990 年。

「昭和三年 8 月 3 日 在奉天総領事より幣原外務大臣宛(電報)奉天白日旗掲揚に反対の旨張学良に申入れについて」『日本外交文書』昭和期 I 第一部第二卷、外務省、1990 年。

「昭和 3 年 10 月 23 日 在上海矢田総領事より幣原外務大臣宛(電報)易幟問題に干渉せざるようにとの王正廷の非公式申し入れについて」『日本外交文書』昭和期 I 第一部第二卷、外務省、1990 年。

「昭和三年 12 月 30 日 田中外務大臣より在奉天林総領事宛(電報)南北妥協に際して東三省における權益擁護、治安維持に関する日本側の決意張学良へ申し入れ方訓令」『日本外交文書』昭和期 I 第一部第二卷、外務省、1990 年。

河本大作「私が張作霖を殺した」、『「文藝春秋」にみる昭和史』第1巻、文藝春秋、1988年。

日本語訳は、丁秋潔、宋平編（鈴木博訳）『蒋介石書簡集 1912-1949』中、みすず書房、2000年。

「対華要求に関する外相訓令一大正三年十二月三日附機密號外一加藤大臣」、『日本外交年年表並主要文書 1840-1945』原書房（上巻）、1965年。

林久治郎『満州と奉天総領事—林久治郎遺稿』原書房、1978年。

南満州鉄道株式会社編『満洲事變と満鐵』（上）、東京：原書房、1974年。

西村成雄「張学良政権下の幣制改革」、『東洋史研究』第50巻第4号、1992年。

西村成雄「民族主義的地域政治の形成—張学良政権の三年」、『中国近代東北地域史研究』、1984年。

江口圭一「郭松齡事件と日本帝国主義」、『日本帝国主義史論』、青木書店、1975年。

小林和「張作霖軍閥の形成過程と日本の対応」、『日本外交史研究』（国際政治・第41号）1970年。

高文勝「満蒙危機と中国側の対応」、日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要—現代と文化』第114号、2006年11月。

関静雄「幣原外交と郭松齡事件」、『帝塚山大学教養学部紀要』54巻、1997年。

儀我 壮一郎「張作霖爆殺事件の真相」、『専修大学社会科学年報』第42号、2008年。

中国語文献（編著者名ピンイン順）

- 陳崇橋、胡玉海『張学良外伝』江西人民出版社、1988年。
- 陳崇橋、胡玉海、胡毓崢『從草莽英雄到大元帥—張作霖』遼寧人民出版社、1991年。
- 常城『張作霖』遼寧人民出版社、2000年。
- 大風『張学良的東北歲月—少帥傳奇生涯記實』光明日報出版社、1991年。
- 竇応泰『張学良遺稿—幽禁期間自述、日記和信函』作家出版社、2005年。
- 方慶英『対張学良評論—還他一个公道』香港同澤出版社、1996年。
- 傅虹霖（米），（王海晨、胥波）訳『張学良的政治生涯—一位民族英雄的悲劇』遼寧大学出版社、1988年。
- 高興亜『馮玉祥將軍』北京出版社、1982年。
- 郭俊勝『張学良史事箋証』遼寧人民出版社、2010年。
- 何柱国『張学良的往事和近事』岳麗出版社、1986年。
- 惠德安『張学良將軍秩事』遼寧人民出版社、1985年。
- 胡立人、王振華『中国近代海軍史』大連出版社、1990年。
- 劉恩名『張学良將軍』中国文聯出版社、1988年。
- 劉志江『乱世梟雄張作霖』新世界出版社、2013年。
- 李滔、陸洪洲『中国兵器工業史』兵器工業出版社、2003年。
- 李敖『張学良研究』台北李敖出版社、1988年。
- 李雲漢『西安事變始末之研究』台北近代中国出版社、1985年。
- 李占才『中国鉄道史 1876-1949』汕頭大学出版社、1994年。
- 孟凡『民族功臣張学良』遼寧人民出版社、1988年。
- 漠笛『張学良生涯論集』光明日報出版社、1991年。
- 聶茂、厲雷『蒋介石与張学良的恩怨情仇』東方出版社、2010年。
- 任松、武育文『郭松齡將軍』遼寧人民出版社、1985年。
- 司馬春秋『張学良伝記：少帥張学良的悲壯歲月』台北群論出版社、1987年。
- 司馬桑敦『張学良伝評』台北伝記文学出版社、1989年。
- 司馬桑敦『張学良評伝』星輝圖書公司出版社、1986年。
- 唐德剛、王書君著録『張学良世紀傳奇：口述實録』（上、下）、山東友誼出版社、2002年。
- 唐德剛『張学良口述歷史』山西人民出版社、2013年。
- 申伯純『西安事變記實』人民出版社、1979年。
- 孫景悦『張学良与遼寧研究』香港同澤出版社、1993年。
- 吳傑章、蘇小東、程志發『中国近代海軍史』解放軍出版社、1989年。
- 王益知『張学良外記』香港南粵出版社、1989年。

王海晨、胡玉海『世紀情懷-張學良全傳』(上) 人民出版社、2011年。

王貴忠『張學良與東北鐵道建設—二十世紀初葉東北鐵路實錄』香港同澤出版社、1996年。

文斐『北洋梟雄張作霖』中國文史出版社、2012年。

吳福章『西安事變親歷記』中國文史出版社、1986年。

武育文 王維遠 楊玉芝『張學良將軍傳略』遼寧大學出版社、1988年。

徐徹、徐忱『張學良』中國文史出版社、2011年。

徐徹、徐悅『張作霖』中國文史出版社、2012年。

徐有威、楊軍訊(薛龍著)『張作霖和王永江：北洋軍閥時代的奉天政府』中央編譯出版社、2011年。

応徳田 岳龍 王秦『張學良與西安事變』中華書局、1980年。

易頭石『“九一八”事變史』遼寧大學出版社、1981年。

楊中州『西安事變』上海人民出版社、1979年。

元坤『威震東北張作霖』中國廣播電視出版社、2011年。

遠方『張學良在一九三六一西安事變內幕記實』光明日報出版社、1991年。

鄭重、程世榮『西安事變』陝西人民出版社、1979年。

曾憲權訊(維·馬·普裏馬科夫著)『馮玉祥與國民軍』中國社會科學出版社、1982年。

章君毅『吳佩孚』上冊、新華出版社、1987年。

澤勒(訊) 端納(口述)『我在孫中山、張學良、蔣介石身近的日子』團結出版社、2011年。

張魁堂『張學良傳』東北出版社、1991年。

張學繼『張作霖幕府與幕僚』浙江文芸出版社、2011年。

張德良、周毅『東北軍史』遼寧大學出版社、1987年。

張秀章『蔣介石日記揭秘』(上、下) 團結出版社、2007年。

日本語文献（編著者名アイウエオ順）

- 伊東六十次郎『満洲問題の歴史』原書房、1983年。
- 伊地智 善継『孫文選集』第二巻、1987年。
- 伊藤 隆、高橋亀吉、荒畑寒村、有竹修二、武内文彬、片倉 衷、松本重治『語りづく昭和史—激動の半世紀』（1—6）朝日新聞社、1975年。
- 岩波新書編集部『日本の近現代史をどう見るか』岩波書店、2010年。
- 易 顕石『日本の大陸政策と中国東北』六興出版、1989年。
- 白井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川書店、1995年。
- 白井勝美『中国をめぐる近代日本の外交』東京：筑摩書房、1983年。
- 江夏由樹『近代中国東北地域史研究の新視角』東京：山川出版社、2005年。
- 大江 志乃夫『張作霖爆殺事件—昭和天皇の統帥』中公新書、1989年。
- 大江 志乃夫『天皇の軍隊』小学館、1982年。
- 緒方貞子『満州事変と政策の形成過程』東京：原書房、1966年。
- 岡部牧夫、荻野富士夫、吉田 裕『中国侵略の証言者たち—「認罪」の記録を読む』岩波新書、2010年。
- 松本一男『張学良と中国：西安事変立役者の運命』サイマル出版会、1991年。
- 松本一男『張学良—忘れられた貴公子』中公文庫、1991年。
- 加藤 康男『謎解き「張作霖爆殺事件」』PHP新書、2011年。
- 加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』岩波書店、2007年。
- 岸田五郎『張学良はなぜ西安事変に走ったか』中公新書、1995年。
- 貴志俊彦、松重充浩、松村史紀『二〇世紀満州歴史事典』吉川弘文館、2012年。
- 栗屋憲太郎『満州事変と二・二六』平凡社、1983年。
- 瀨瀨 厚『近代日本の政軍関係—軍人政治家田中義一の軌跡—』桜楓社、1987年。
- 瀨瀨 厚『侵略戦争』ちくま新書、1997年。
- 小林龍夫 島田俊彦『満州事変』みすず書房、1964年。
- 小林和夫『満州』お茶の水書房、1991年。
- 五味川純平『「神話」の崩壊—関東軍の野望と破綻』文藝春秋、1988年。
- 児島 襄『日中戦争—1925—1931』文藝春秋、1984年。
- 佐々木雄太『国際政治史』名古屋大学出版社、2011年。
- サンケイ新聞社『蒋介石秘録』（上、下）サンケイ出版社、1985年。
- 白井久也『明治国家と日清戦争』社会評論社、1997年。
- 島田俊彦『関東軍』中央公論者、1965年。
- 水野明『東北軍閥政権の研究：張作霖・張学良の対外抵抗と対内統一の軌跡』国書刊行会、1994年。

島田俊彦『関東軍』中公新書、1965年。
白雲荘主人『張作霖』中公新書、1990年。
渋谷由里『馬賊で見る『満州』—張作霖の歩んだ道』講談社、2004年。
仙田実、仙田典子『昭和の遺言：十五年戦争：兵士が語った戦争の真実』文芸社、2008年。
津田元徳『満洲事變秘史』大連：満洲文化協會、1934年。
戸部良一『日本陸軍と中国「支那通」に見る夢と礎』講談社、1999年。
田中義一伝記刊行会編『田中義一伝記』原書房、1981年。
成田龍一『大正デモクラシー』岩波新書、2007年。
西村成雄『張学良一日中の覇権と満州』岩波書店、1996年。
安富歩『満洲暴走 隠された構造 大豆・満鉄・総力戦』角川新書、2015年。
山田朗『軍備拡張近代史—日本軍の膨張と崩壊』吉川弘文館、1997年。
矢内原忠雄『満洲問題』岩波書店、1934年。
横山 宏章『中華民国』中華新書、1997年。
原田敬一『日清・日露戦争』岩波新書、2009年。
波多野 善大『中国近代軍閥の研究』東京：河出書房新社、1973年。
林久治郎『満州事変と奉天総領事』原書房、1978年。
平塚 証緒『満州事変：昭和三年の張作霖爆殺事件から満州建国』東京：新人物往来社、1989年。
服部龍二『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918—1931』有斐閣、2001年。
藤原 章『日本軍事史』上巻、日本評論者、1987年。
藤原鎌兄『革命揺籃期の北京—辛亥革命から山東出兵まで』社会思想社、1974年。